ご挨拶

鳥取県は「生涯現役」で元気！

今年は東京オリンピック・パラリンピックが開幕します。次の年には生涯スポーツの祭典・ワールドマスターズゲームがあります。3年後の2023年にはいよいよ全国健康福祉祭（ねんりんピック）が鳥取県で開かれます。国内外から相次いで、たくさんの方がおいでになります。子どもからお年寄りまで、みんなが支え合って暮らしている―そんな鳥取県の姿をご覧いただきましょう。そして、しっかりおもてなしをしましょう。

鳥取県には自慢の人材銀行・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」があります。60歳以上の元気な県民が資格や特技や技能などを登録され、その豊かな人生経験を活かして生涯学習や地域イベントなどでご活躍中です。全国でもあまり例のない人材銀行です。登録者は4千人を超えました。「あの人」「この人」顔なじみの方々ばかり。〝お宝人材〟がいっぱいです。

〝お宝人材〟の顔ぶれや活躍の様子は、シニアバンクのホームページやフェイスブックでご覧いただけますが、今年も冊子「生涯現役」を発行しました。バンク発足以来の活動の足跡を一覧表にし、登録者の2019年1年間の活動記録を日記風にまとめてみました。今の鳥取県のことがよくわかります。

鳥取県は全国に先駆けて高齢化と人口減少が進行中です。元気な高齢の方々が、それぞれの持ち味を生かし、地域の担い手となって、活性化のために、もうひとがんばりご活躍いただくことが期待されています。シニアバンク「生涯現役」を運営する鳥取県社会福祉協議会は、明るく元気な長寿社会を実現するため、その先頭に立ってがんばっています。

2020年1月吉日

社会福祉法人　鳥取県社会福祉協議会

会長　藤井　喜臣

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」の概要

鳥取県福祉保健部ささえあい福祉局長寿社会課

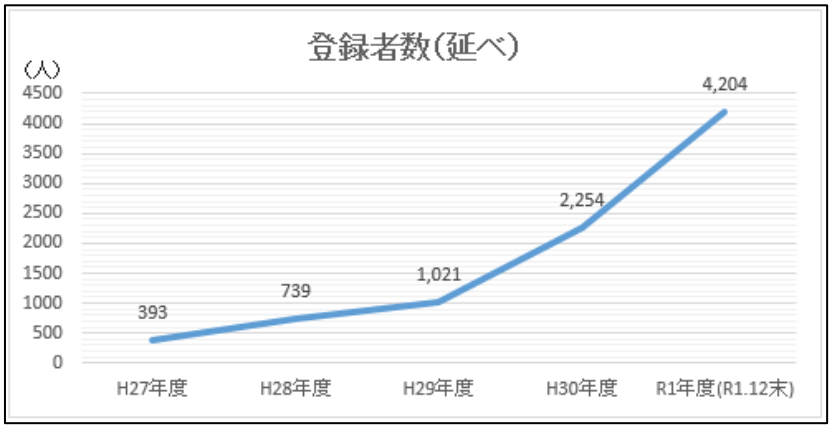
１　制度の目的

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」（以下、「シニアバンク」）は、高齢者の方の生きがい・元気づくりのため多様な活動を推進するとともに、過疎化・人口減少が進む中、高齢者の方が地域の担い手となることや、地域の活性化のために活躍していただくことが期待されていることから、高齢者の方の資格、特技、技能などを活かした活動を促進する環境・仕組みづくりを目的に、平成２７年７月に鳥取県が創設しました。

２　登録者の状況（令和元年１２月末時点）

（１）登録者数（延べ）　４，２０４人（１３５団体３，６５７人・個人５４７人）

（２）登録者数（延べ）の推移



（３）登録者（個人）平均年齢　７３．６歳

（４）登録者（個人）男女構成　男性：３９３人、女性：１５４人

（５）市町村別登録者数

	登録者数(個人)〔人〕	登録団体数〔件〕	登録者数(団体)〔人〕	合計〔人〕
【東部】	２４７	６６	１，４５６	１，７０３
鳥取市	２０５	５７	１，３９２	１，５９７
岩美町	９	７	５０	５９
若桜町	５			５
智頭町	８	１	６	１４
八頭町	２０	１	８	２８
【中部】	１１３	２７	１，７１３	１，８２６
倉吉市	４７	１８	１，６５０	１，６９７
三朝町	７	３	２０	２７
湯梨浜町	２４	１	８	３２
琴浦町	１９	４	３３	５２
北栄町	１６	１	２	１８
【西部】	１８７	４２	４８８	６７５
米子市	９４	３０	４０３	４９７
境港市	２６	６	３１	５７
日吉津村	７			７
大山町	２１	１	１２	３３
南部町	６	１	７	１３
伯耆町	１０	３	２６	３６
日南町	６			６
日野町	１３	１	９	２２
江府町	４			４
合計	５４７	１３５	３，６５７	４，２０４

３　活動の状況（令和元年１２月末時点）

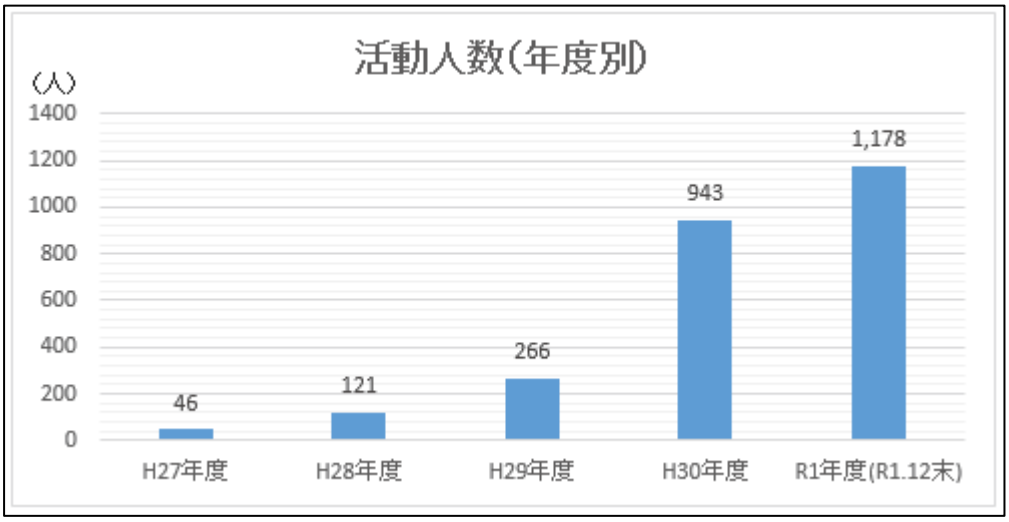
（１）活動人数（延べ）　２，５５４人

※今年度の活動人数　１，１７８人（平成３１年４月～令和元年１２月末）

（２）活動人数（年度別・延べ）の推移〔表〕

	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R1 年度(R1. 12 末)
活動人数（年度別）	46	121	266	943	1, 178
活動人数（延べ）	46	167	433	1, 376	2, 554

（３）活動人数（年度別）の推移〔グラフ〕



４　沿革

平成２７年　７月：シニアバンク創設
平成２７年　９月：シニアバンク登録開始
平成２８年　３月：シニアバンク・キックオフフェスタ開催（鳥取市、米子市）、
　　シニアバンク登録者初活動
平成２８年　９月：シニアバンクＰＲイベント開催（県民総合福祉大会との共催（鳥取市））
平成２９年　７月：第１回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（米子市）
平成３０年　２月：登録者数１，０００人
平成３０年　８月：第２回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（鳥取市）
平成３０年１０月：活動人数１，０００人
平成３０年１２月：登録者数２，０００人
令和　元年　５月：登録者数３，０００人
令和　元年　８月：登録者数４，０００人
　　活動人数２，０００人
令和　元年　９月：第３回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（倉吉市）

シニアバンク「生涯現役」登録者募集要項

◎　**登録できる方**

資格、技能、特技を有する県内在住の６０歳以上の方で、次のような場所で講師、指導者等として活動が可能な方

（例）公民館活動、高齢者大学、老人クラブ、社会福祉施設、放課後児童クラブ、学校支援ボランティア、児童・生徒の学習支援の場、その他県・市町村等が開催する催事など

◎　**登録する資格、技能、特技の例**

◆資格に係るもの

教員、保育士、保健師、栄養士、看護師、調理師、理学療法士、健康運動実践指導員、地域スポーツ指導員、審判員、つりインストラクター、シニアライフアドバイザー、通訳、ＰＣインストラクターなど

◆技能に係るもの

伝統工芸、大工、染色、織物、木工など

◆特技に係るもの

書道、絵画、歌唱、カラオケ、社交ダンス、生け花、茶道、手芸、楽器演奏、ステンドグラス製作、切り絵、ちぎり絵、版画、陶芸　俳句、短歌、ガーデニング、野菜栽培、着付けなど

※シニアバンクでは、上記以外にも様々な特技等をお持ちの方を募集しています！

◎　**登録の期間**

随時受付をしています。

登録の更新は１年ごとに行い、特に申し出のない場合は次年度も登録を継続します

シニアバンク活用の仕方

◎　**お問合せ先**

社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会　福祉人材部
とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」担当
電　話：０８５７－５９－６３３６　ＦＡＸ：０８５７－５９－６３４１
〒６８９－０２０１　鳥取市伏野１７２９番地５

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」登録者活躍の足跡

（2016年～2019年、敬称略）

	日程	活動場所	登録者	活動内容
2016年	3月	日吉津村・イオン日吉津店	新宮雄子（司会者）、港ベンチャーズ、近藤盛一（マジック）、近藤勢津子（腹話術）、合唱団Glanz、加藤哲英（鳥取県美術家協会長）、柴山抱海（鳥取県書道連合会長）、森山盛桜（鳥取県川柳作家協会長）、倉益敬（鳥取県歌人会長）、遠藤甫人（鳥取県俳句協会長）	シニアバンク・キックオフフェスタ
	3月	鳥取市・イオン鳥取北店	蔵本紀代子（司会者）、バードベンチャーズ、山下眞一郎（マジック）、河下哲志(トウフルート奏者)、鳥取市民合唱団、米澤高明（鳥取県美術家協会理事）、石山ヨシエ（朝日新聞鳥取版俳句選者）、森山盛桜（鳥取県川柳作家協会長）、北尾勲（鳥取県歌人会）	シニアバンク・キックオフフェスタ
	3月	琴浦町・社会福祉センター	近藤勢津子（腹話術）	介護予防教室
	4月	季刊誌「志あわせへ」	杉本雅美（鳥取県写真家連盟会長）	フロント写真（4回）
	6月	倉吉市・小鴨公民館	君野弘明（高齢者マラソン）	健康教室
	6月	江府町・防災情報センター	佐々木満（奥日野古道保存会長）	奥日野ガイド養成教室
	6月	境港市・境漁港ほか	石丸なつ子（鳥取県写真家連盟運営委員）	日野川源流写真教室
	7月	鳥取市・倉田公民館	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	鳥取県人の生き方教室
	7月	米子市・成実公民館	小西怜子(水彩画)	夏休み絵画教室
	7月	岩美町・小田公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	小田地区納涼祭
	7月	南部町・南部町公民館	倉益敬(鳥取県歌人会長)	夏休み短歌教室
	8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英（鳥取県美術家協会長）、小谷悦夫（チャーチル会米子幹事長）	夏休み親子写生教室
	8月	倉吉市・小鴨公民館	長谷川泰二（コンベンションビューロー前理事長）	男のクラブ研修会
	8月	琴浦町・古布庄公民館	大谷治(ステンドグラス工房)	ステンドグラス教室
	8月	岩美町・里久の里	畑井章子(洋服、きものリフォーマー)	手編み教室
	9月	米子市・老人ホーム福原荘	河下哲志(トウフルート奏者)	敬老会
	9月	鳥取市・とりぎん文化会館	松弘美会（民謡ショー）、煎茶道黄檗売茶流鳥取支部（お茶席）、鳥取姫柿愛好会（盆栽展示）、中部建築工務士会（山車展示）、加藤哲英（鳥取県美術家協会長）、米澤高明（鳥取県美術家協会理事）、福田典高（画家）	県民総合福祉大会
	9月	鳥取市・福祉人材研修センター	西田輝明・宍戸剛・岡本雄（関金竹細工クラブ）、濱幸子（日本絵手紙協会公認講師）、森文江（鳥取和紙ちぎり絵サークル代表）	センターイベント
	9月	大山町・だいせんデイ	中川正純（ハーモニカ奏者）	敬老会
	10月	鳥取市・NHK文化センター	北尾正幸（元新聞記者）	文章の書き方講座
	10月	米子市・宇田川公民館	加藤哲英（鳥取県美術家協会長）	似顔絵教室
	10月	鳥取市・NHK文化センター	近藤勢津子（腹話術）	腹話術講座
	10月	鳥取市・文化ホール	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	社会講座
	11月	鳥取市・県立図書館	鳥取ものづくり道場	親子ものづくり教室
	11月	日野町・たたらの楽校	石丸なつ子（鳥取県写真家連盟運営委員）	日野川源流写真教室
	11月	鳥取市・鹿野小学校	畑井章子(ワード・エクセル3級)	高齢者パソコン教室
	11月	岩美町・網代公民館	山﨑郁雄（日本医師会認定スポーツ医）	超高齢社会の生き方講座
	11月	鳥取市・県社会福祉協議会	鳥取流しびな真向会	健康・ストレッチ教室
	11月	倉吉市・上井公民館	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	母子会役員研修会
	12月	倉吉市・市立図書館	中部ものづくり道場	ものづくり教室
2017年	1月	倉吉市・小鴨公民館	岩室久美子（終活ライフプランナー）	人権学習会
	1月	米子市・日本海新聞	大原俊二（郷土史家）	私たちの大山さん講座
	1月	鳥取市・福部公民館	紙原四郎（切り絵作家）	切り絵教室
	1月	米子市・日本海新聞	大杖正彦（元札幌五輪日本代表選手）	私たちの大山さん講座
	1月	鳥取市・文化ホール	徳永耕一（八頭郡郷土文化研究会長）	歴史講座
	2月	米子市・日本海新聞	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	私たちの大山さん講座
	2月	米子市・日本海新聞	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	私たちの大山さん講座
	2月	米子市・米子コンベンション	大原俊二（郷土史家）	「日本遺産大山」出演
	2月	大山町・大山自然歴史館	矢田貝繁明（大山自然歴史館長）	「日本遺産大山」出演
	2月	鳥取市・文化ホール	中林保（歴史地理学者）	市民大学歴史講座
	3月	鳥取市・県立図書館	小山富見男（新県史編纂委員）、沖廣俊（いなば国府ガイドクラブ代表）、河根裕二（あおや郷土館長）	歴史大河ドラマ候補発表会
	3月	米子市・日本海新聞	川越博行（米子下町観光ガイド）	私たちの大山さん講座
	3月	岩美町・小田公民館	本田正法（パソコン講師）	高齢者パソコン教室
	3月	米子市・日本海新聞	竹内道夫（鳥取県近代文学史研究家）	私たちの大山さん講座
	3月	湯梨浜町・公民館泊分館	中部ものづくり道場	春休みものづくり体験教室
	4月	季刊誌「志あわせへ」	紙原四郎（切り絵作家）	フロント表紙（4回）
	4月	鳥取市・とりぎん文化会館	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	退職公務員研修会
	4月	日野町・間地峠	佐々木彬夫（観光ガイド）	奥日野歴史講座
	5月	鳥取市・面影公民館	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	教養講座開校式
	5月	日野町・鏡山城下町	杉本準一（郷土史家）	奥日野歴史講座
	5月	米子市・米子美術館	米子ちぎり絵水星会	山下清展ワークショップ
	5月	江府町・江府中学校	足立博明（パソコン教師）	高齢者パソコン教室
	5月	伯耆町など・日野3宿	佐々木彬夫（観光ガイド）	奥日野歴史講座
	5月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	5月	米子市・ワシントンホテル	港ベンチャーズ	金沢工大同窓会
	5月	鳥取市・市内	岡村洋次（尾崎放哉研究家）、石山ヨシエ（朝日新聞鳥取版俳句選者）、野田哲夫（鳥取県俳句協会長）、柴山抱海（鳥取県書道連合会長）	放哉句碑めぐり
	5月	鳥取市・とりぎん文化会館	田貝英雄（伯耆国たたら顕彰会長）	歴史大河ドラマ候補発表
	6月	湯梨浜町・ハワイ夢広場	玉木純一（レクリエーション・コーディネーター）	尚徳大学講座
	6月	伯耆町・二部宿	二部地区活性化推進機構	奥日野歴史講座
	6月	倉吉市・倉吉セントパレス	角秋勝治（郷土作家研究家）	青色申告会講演

6月	智頭町・社会福祉協議会	荻原恵子（フォークダンス指導者）	高齢者健康ダンス教室
6月	日野町・鵜の池周辺	恩田記子（調理師）	奥日野歴史講座
6月	鳥取市・県立図書館	中川政雄（鳥取ものづくり道場）	かんたんな工作教室
6月	大山町・名和保健センター	篠原正明（鍼灸師）	寿学級「体を学ぼう」
6月	境港市・境漁港ほか	石丸なつ子（鳥取県写真家連盟運営委員）	日野川源流写真教室
6月	鳥取市・福祉人材研修センター	倉吉ギターアンサンブル	アビリンピック鳥取県大会
7月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男（県史編さん委員）	占領期の鳥取を学ぶ会
7月	鳥取市・流しびなの館	鳥取ベンチャーズ	リサイタル
7月	倉吉市・倉吉未来中心	徳本義則（介護福祉士）、佐々木洋一（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
7月	米子市・城山、城下町ほか	安達佳恵（気功太極拳）、川越博行・岡田信行・岸本裕・前角達也・上田正規（米子下町ガイド）、春蘭会、舩原濤軒（書道家）、佐藤千秋（画家）	シニアバンク・フェスティバル
7月	岩美町・小田公民館	バードベンチャーズ	小田地区納涼祭
7月	南部町・公民館	倉益敬(鳥取県歌人会会長)	夏休み短歌教室
7月	境港市・夢みなとタワー	小谷悦治（チャーチル会米子幹事長）	夏休み絵画教室
7月	米子市・日本海新聞	根平雄一郎（郷土史家）	大山さん講座
8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英（鳥取県美術家協会長）	夏休み絵画教室
8月	鳥取市・東郷地区公民館	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	夏休み自然体験
8月	大山町・森の国	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	大山さん講座
8月	江府町・防災情報センター	森下哲也（薬草栽培）	明徳学園
8月	米子市・福原荘	吉島潤承（紙芝居）	教養講座
9月	鳥取市・文化ホール	野田修（鳥取家政学園理事長）	尚徳大学教養講座
9月	倉吉市・未来中心	澤田勝（サックス奏者）、福田典高（画家）、高塚俊蔵（切り絵作家）、森本せつ（ステンシルアート）、藤井正幸（マジック）、玉木正枝（レクリエーション）	県民総合福祉大会
9月	米子市・成実新山地区	南京玉すだれ山陰保存会	敬老会
9月	日南町・日南中学校	倉益敬(鳥取県歌人会長)	短歌教室
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	徳本義則（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・県立図書館	原田堅吉（鹿野城ガイド）、片山長生（教育カウンセラー）、四井幸子（碧川かた研究家）、田中精夫（郷土史研究家）、田村幹夫（郷土史研究家）、小山富見男（新県史編纂委員）	大河ドラマ選考会
9月	湯梨浜町・中央公民館	松本薫（小説家）	東伯郡公民館連合会研修会
9月	米子市・夜見公民館	大原俊二（郷土史家）	大山講演会
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	本城義照（尺八奏者）、澤田勝（サックス奏者）、河下哲志(トウフルート奏者)、清水増夫（映画上映）	福祉人材研修センターベント
9月	鳥取市・福部公民館	谷本由美子（太極拳）	太極拳教室
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	佐々木洋一（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・福部コミセン	岩室久美子（終活ライフプランナー）	人権啓発セミナー
9月	江府町・防災情報センター	政岡日枝子（川柳作家）	明徳学園
9月	湯梨浜町・公民館泊分館	紙原四郎（切り絵作家）	切り絵教室
9月	鳥取市・浜坂公民館	川上巧（ものづくり）	社会人教室
9月	大山町・大山寺周辺	竹内道夫（鳥取県近代文学史研究家）、森田尾山（書道家）	大山文学碑めぐり
10月	八頭町・安部公民館	山根教子（樹脂粘土人形作家）	ものづくり教室
10月	鳥取市・県立図書館	森本良和（映画監督）	鳥取藩と西郷どんシンポ
10月	江府町・防災情報センター	山本邦彦（三徳山三仏寺法嗣）	明徳学園
10月	鳥取市・文化ホール	有本喜美男（さじ民話会）	尚徳大学郷土学習講座
10月	琴浦町・古布庄公民館	桑原正（木工作業療法士）	大人のものづくり
10月	三朝町・福祉センター	西田輝明・山崎重三（関金竹細工クラブ）	福祉まつり
10月	江府町・防災情報センター	杉原幹雄(イラストレーター)、小田隆（郷土史家）	日野軍秋の陣ふいご祭
10月	鳥取市・松泉寺	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	気高郡曹洞宗研修会
10月	鳥取市・文化ホール	玉木純一（レクリエーション・コーディネーター）	尚徳大学
10月	鳥取市・モナーク	河下哲志(トウフルート奏者)	中国市議会議長会
10月	倉吉市・体育文化会館	青亀千弘・飯田啓子（看護師）	中部高齢者健康運動会
10月	大山町・大山寺周辺	千田明（大山の地蔵研究家）	大山さん講座・地蔵めぐり
10月	倉吉市・灘手小	澤田　勝（サックス奏者）	灘手こーまい秋まつり
10月	岩美町・あすなろ	清水増夫（映画上映）	高齢者施設映画上映会
11月	鳥取市・市民体育館	瀬川和義・薮田道男・山下眞里・（鳥取ものづくり道場）	労福協ものづくり教室
11月	鳥取市・歴史博物館	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）、松田章義（元児童福祉施設長）	占領期の鳥取を語る会
11月	日野町・たたら古道	佐々木彬夫（観光ガイド）、杉原幹雄(イラストレーター)	日野軍秋の陣
11月	日野町・明地峠	松本利秋（カメラマン）	日野のオシドリと雲海
11月	鳥取市・文化ホール	田中精夫（大河ドラマを推進する会代表）	市民大学歴史講座
11月	鳥取市・なごみ苑	清水増夫（映画上映）	高齢者施設映画上映会
11月	江府町・防災情報センター	多羅尾整治（古代史研究家）	明徳学園
11月	米子市・ふれあいの里	徳本義則（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
11月	江府町・道の駅奥大山	手島征夫（江府町文化協会長）	アラカシ群落を往く
11月	日南町・石見地区	温湯正人（ウォーキング指導者）	奥日野ロゲイニング
11月	日野町・後谷	長住武美（造園現代の名工）、佐々木彬夫（観光ガイド）	奥日野大人の遠足
11月	米子市・産業体育館	近藤盛一（マジック）、近藤勢津子（腹話術）、房安寿美枝（折り紙作家）	とっとり介護フェア
11月	米子市・文化ホール	森井偲訓（刀剣研究家）	大山さん講座
11月	湯梨浜町・公民館泊分館	藤井正幸（マジック）、森本せつ（ステンシルアート）	公民館まつり
11月	江府町・防災情報センター	倉益敬（鳥取県歌人会長）	明徳学園特別講座
12月	鳥取市・文化ホール	森本良和（映画監督）	市民大学歴史講座
12月	米子市・弓ヶ浜中学校	荒井玲子（看護師）	弓ヶ浜中学人権学習
12月	米子市・公民館宇田川分館	後藤俊夫（小説家）	老人大学
12月	三朝町・三喜苑	澤田　勝（サックス奏者）	クリスマス会
12月	鳥取市・市教委国府町分室	アール・ファイブ（ポップス・バンド）、胡桃の会（二胡）	クリスマスコンサート
12月	江府町・江府小学校	杉原幹雄(イラストレーター)	明徳学園交流学習

	12月	湯梨浜町・アロハホール	西村光司・石川達之・柳井沙羅（歌手）	ゆりはま歌のカコンサート
2018年	1月	智頭町・心和苑	清水増夫（映画上映）	高齢者施設映画上映会
	1月	江府町・江府小学校	古瀬美保子（合唱団Glanz代表）	明徳学園
	1月	倉吉市・河北小学校	伊藤美都夫（元県議会議長）	修学旅行事前学習
	1月	岩美町・駅前コミセン	片山長生（教育カウンセラー）	岩美町の大河ドラマ
	1月	鳥取市・文化ホール	橋谷田岩男（漆研究家）	歴史講座
	2月	鳥取市・ニューオータニ	小山富見男（県史編さん委員）	新年会
	2月	倉吉市・倉吉交流プラザ	淀江さんこ節保存会	ふるさと再発見講座
	2月	江府町・防災情報センター	安達佳恵（気功太極拳）	明徳学園
	2月	倉吉市・社会福祉協議会	鳥取県健康マージャン連盟	健康マージャン大会
	2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	北尾勲（鳥取県歌人会顧問）、田中道春（万葉集朗唱の会会長）	万葉茶会
	3月	倉吉市・小鴨公民館	脇坂幸司（講談）	シニアクラブ
	3月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男（県史編さん委員）	占領期の鳥取を学ぶ会
	3月	鳥取市・因幡万葉歴史館	小泉幸子（香道家）	香道体験講座
	3月	鳥取市・鳥取空港	中部ものづくり道場	空港ロード開通記念
	3月	鳥取市・因幡万葉歴史館	澤田勝（サックス奏者）	和歌うたコンサート
	3月	鳥取市・県立図書館	四井幸子（碧川かた研究家）	碧川かた研究会
	3月	琴浦町・琴浦町社協	玉木純一（レクリエーションCD）	介護ボランティア研修会
	3月	米子市・ANAホテル米子	石村隆男（コンベンション理事長）、川越博行（米子下町ガイド）	米子城フォーラム
	3月	倉吉市・未来中心	中部ものづくり道場	ワークショップ
	3月	鳥取市・米里公民館	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	教養講座
	4月	季刊誌「志あわせへ」	紙原四郎（切り絵作家）	フロント表紙（4回）
	4月	江府町・防災情報センター	木下登士彦（ひなの館ガイド）	ひな祭りコレクション
	4月	日野町・たたらの楽校	杉原幹雄（イラストレーター）	始業式記念講座
	4月	鳥取市・県立博物館	森本良和（映画監督）	明治維新シンポジウム
	4月	鳥取市・文化ホール	森本良和（映画監督）	郷土歴史講座
	4月	鳥取市・県民文化会館	小山富見男（県史編さん委員）	澤田美喜に学ぶ
	4月	日南町・御墓山	奥日野ガイド倶楽部	奥日野5山
	4月	鳥取市・県立図書館	片山長生（元高校教員）	三愛のクニヘ研究会
	5月	倉吉市・鳥取短大	高田典裕（接遇教育インストラクター）	社会人マナー講座
	5月	大山町・大山寺参道	千田明（大山の地蔵研究家）	大山地蔵フェア
	5月	大山町・大山寺豪円湯院	大原俊二（郷土史家）、伯耆伝承隊	豪円僧正を語る
	5月	米子市・春日公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
	5月	湯梨浜町・浅津ゲートボール場	玉木正枝（介護予防運動士）、飯田啓子（元看護師）	因伯シルバー大会
	5月	鳥取市・宝林堂	森田尾山（書家）	森田尾山書展
	5月	北栄町・レークサイド大栄	玉木正枝（介護予防運動士）、飯田啓子（元看護師）	因伯シルバー大会
	5月	鳥取市・久松公民館	廣澤孝彦（鳥取市観光大学講師）	鈴の音大使教育講習
	5月	日野町・古民家沙々木	坂上達也（クロマチックハーモニカ奏者）	古民家コンサート
	5月	若桜町・響きの森	星見清晴（鳥取県地学会会長）	ふるさと探訪会
	5月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	5月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	5月	岩美町・役場	玉木純一（レクリエーションCD）、山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
	5月	湯梨浜町・はわい夢広場	玉木純一（レクリエーションCD）	シニアスポーツを楽しもう
	5月	倉吉市・社会福祉協議会	鳥取県健康マージャン連盟	健康マージャン
	5月	鳥取市・県立図書館	北村隆雄（小鴨シニアクラブ）、吉島潤承（紙芝居）、田中精夫（郷土史	大河ドラマ候補発表会
	5月	倉吉市・未来中心	日本将棋連盟鳥取県キッズ	将棋大会
	5月	倉吉市・未来中心	稚久仙十郎（鳥取県囲碁連盟会長）	囲碁大会
	5月	鳥取市・福祉人材センター	徳本義則（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
	5月	鳥取市・市民会館	澤田勝（サックス奏者）	金婚式
	6月	鳥取市・文化センター	小山富見男（県史編さん委員）	郷土歴史講座
	6月	鳥取市・福祉人材センター	佐々木洋一（介護福祉士）	介護補助スタッフ講習
	6月	米子市・福米東公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
	6月	倉吉市・未来中心	石川達之（防災士、フォークシンガー）	職員研修会
	6月	米子市・福生西公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
	6月	米子市・和田公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
	6月	鳥取市・美吉町ふれあい会館	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	教養講座
	6月	鳥取市・とりぎん文化会館	みずばしょうコーラス、山の手コーラス	100曲マラソン
	6月	鳥取市・文化センター	四井幸子（碧川かた研究家）	郷土歴史講座
	6月	鳥取市・文化センター	ギターアンサンブル・アミーゴ	ギャラリーコンサート
	6月	伯耆町・八郷小学校	近藤勢津子（腹話術）	高齢者学級交流授業
	6月	日南町・花口	奥日野ガイド倶楽部	たたら古道を歩く
	6月	大山町・大山寺	鷲見寛幸（大山町教育長）、矢田貝繁明（大山自然歴史館長）	大山講座（大山の自然）
	6月	鳥取市・文化ホール	松弘美会	民謡ふるさと巡り
	6月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	6月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	6月	岩美町・役場	山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
	6月	鳥取市・福祉人材センター	岩室久美子（パソコン講師）	アビリンピック審査員
	6月	鳥取市・福祉人材センター	ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	アビリンピック・アトラクション
	7月	鳥取市・ひなの館	鳥取ベンチャーズ	リサイタル
	7月	米子市・福米東公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
	7月	鳥取市・文化ホール	近藤盛一（マジック）	健康講座
	7月	米子市・公会堂	ジョイフルプラザ	郷土・ダンス・合唱講座
	7月	鳥取市・散岐公民館	山根教子（樹脂粘土人形作家）	人形づくり教室
	7月	鳥取市・福部中央公民館	桂小文吾（落語家）	文化協会記念講演会
	7月	鳥取市・さざんか会館	牧野芳光（県文連文芸分野座長）、北尾勲（短歌）、岸本俊彦（俳句）、森山盛桜（川柳）、胡桃の会（二胡）	ごちゃまぜ講座
	7月	江府町・防災情報センター	倉益敬（鳥取県歌人会会長）	明徳学園
	7月	鳥取市・わらべ館	伯耆伝承隊	夏休み体験教室
	7月	鳥取市・とりぎん文化会館	箏・てまり会	結成25周年コンサート
	7月	日南町・阿毘縁	伯耆国たたら顕彰会	伯耆安綱ゆかりの地巡り
	7月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	7月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	7月	岩美町・役場	菊川貴裕（生きがいづくりアドバイザー）	高齢者学級
	7月	島根県・隠岐島	倉光信一郎（鳥取短大講師）	学校司書研修会
	7月	岩美町・役場	山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
	7月	大山町・保健福祉センター	劇団ふたり	ことぶき学級

7月	伯耆町・溝口公民館	森則俊（木彫作家）	夏休みものづくり教室
7月	鳥取市・大茅公民館	サーフライダーズ	納涼祭
7月	鳥取市・鳥取空港	鳥取ベンチャーズ、藤井正幸（マジック）、鳥取ものづくり道場	ツインポート・フェスタ
7月	鳥取市・文化センター	クインビー・ジャズ・オーケストラ	ギャラリーコンサート
7月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	手づくりまつり
7月	南部町・公民館	倉益敬(県歌人会会長)	夏休み短歌教室
8月	湯梨浜町・中央公民館	角秋勝治（郷土作家研究家）	歴史講座
8月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹（鳥取県前教育長）	万葉集講座
8月	琴浦町・古布庄公民館	西田輝明（関金竹細工クラブ）	大人のものづくり
8月	境港市・夢みなとタワー	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	大山の昆虫教室
8月	鳥取市・パレット	鳥取ものづくり道場	鳥取商工会議所事業
8月	南部町・公民館	倉益敬(県歌人会会長)	夏休み短歌教室
8月	鳥取市・文化センター	木谷清人（鳥取市文化財団理事長）	郷土歴史講座
8月	倉吉市・上灘公民館	岡村洋次（元新聞記者）、高橋孝之（映像ネットワーク会社社長）	市町村社協広報研修
8月	米子市・市内	米子美術家協会、米子工芸会	大山芸術祭
8月	鳥取市・文化ホール	鳥取ベンチャーズ、APON、アール・ファイブ、一音会、松弘美会、 みずばしょうコーラス、鳥取県大衆音楽協会、どじょっこの会、 美保踊りの会、花えみの会、鳥取ものづくり道場、陶の会、 いけばな小原流鳥取支部、廣澤孝彦（鳥取市観光大学講師）、 野田哲夫（俳句選者）、岡村洋次（放哉の会事務局長）	生涯現役まつり
8月	鳥取市・佐治人権センター	山口輝幸（竹細工）	夏休みものづくり教室
8月	米子市・真誠会	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
8月	米子市・崎津公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
8月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
8月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
8月	江府町・防災情報センター	鈴木稔（俳人協会）	明徳学園
8月	鳥取市・県立博物館	鳥取歴史振興会	「維新の魁」完成上映
8月	岩美町・役場	山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
8月	米子市・加茂川	米子観光まちづくり公社、春蘭会	大山講座・米子地蔵まつり
8月	米子市・中央隣保館	近藤勢津子（腹話術）	地蔵まつり
8月	倉吉市・関金温泉	中部ものづくり道場	たたら操業
8月	米子市・日野川ほか	石丸なつ子（植田正治写真美術館講師）	日野川源流写真教室
8月	鳥取市・吉成	中尾三郎(ビジネス書法士)	賞状筆耕
8月	米子市・コンベンション	田中みつとし(トランペット奏者)	県民総合福祉大会
9月	鳥取市・文化センター	片山長生（教育カウンセラー）	郷土歴史講座
9月	米子市・さなめホール	北村隆雄（小鴨シニアクラブ）、吉島潤承（紙芝居）、田中精夫（郷土史	大河ドラマ選考会
9月	鳥取市・モアスマイル富安	山下眞一郎（マジック）	敬老会
9月	鳥取市・文化センター	濱田英一（鳥取県地域社会研究会顧問）	郷土歴史講座
9月	米子市・福原荘	キタローズ（尺八楽団）	敬老会
9月	鳥取市・県福祉人材センター	鍛治木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	調理補助講習
9月	鳥取市・まさたみの里	山下眞一郎（マジック）	敬老会
9月	江府町・防災情報センター	政岡日枝子（川柳作家協会）	明徳学園
9月	鳥取市・因幡万葉歴史館	根鈴輝雄（倉吉博物館長）	万葉集講座
9月	鳥取市・風紋広場	バードベンチャーズ、西小路晴子（カラオケ講師）	西日本災害チャリティー
9月	鳥取市・用瀬町	橋谷田岩男（漆研究家）	八頭郷土文化研究会
9月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
9月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
9月	岩美町・役場	山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
9月	鳥取市・県福祉人材センター	徳本義則(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・因幡万葉歴史館	鳥取雅楽会、アールファイブ	雅楽舞楽の宴
10月	鳥取市・県福祉人材センター	徳本義則(介護福祉士)、佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
10月	鳥取市・文化センター	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	郷土歴史講座
10月	鳥取市・県福祉人材センター	佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
10月	鳥取市・河原あすなろ	鳥取コミュニティシネマ	高齢者映画上映会
10月	琴浦町・まなびタウン	石川達之（防災士、フォークシンガー）	方言ナイト
10月	米子市・真誠会	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	教養講座
10月	鳥取市・気高人権センター	花えみの会	人権文化祭
10月	鳥取市・公文書館	伊藤康（学芸員）	明治150年展
10月	鳥取市・佐治アストロパーク	田中みつとし(トランペッター)	星空コンサート
10月	鳥取市・玄忠寺	竹内道夫（文芸家）、佐藤翔風（詩吟）	荒木又右衛門祭
10月	鳥取市・文化センター	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	自然講座
10月	倉吉市・小鴨公民館	坂本寛豊（終活講師）	シニア研修講座
10月	鳥取市・文化センター	片山長生（教育カウンセラー）	郷土歴史講座
10月	湯梨浜町・羽合温泉羽衣	鍛治木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	羽衣天女伝説の夕べ
10月	伯耆町・畑池公民館	米子マジック同好会	敬老会
10月	鳥取市・県民ふれあい会館	民謡きくの会・虹の会	10周年記念
10月	鳥取市・有隣荘	中永広樹（県体協会長）	源氏物語講座
10月	米子市・ふれあいの里	鷲見寛幸（大山町教育長）	大山1300年講演会
10月	鳥取市・津ノ井小学校	小谷博徳（元高校教諭）	人権教育保護者研修会
10月	米子市・産業体育館	荒井玲子（看護師）	西部高齢者健康運動会
10月	米子市・コンベンション	遠藤甫人（鳥取県俳句協会長）、佐藤翔風（詩吟）、由木みのる（俳句 誌「城」花鳥抄選者）、中村襄介（ホトトギス同人）、鷲見寛幸（大山町教育	大山を詠む（俳句大会）
10月	米子市・コンベンション	森田尾山（書家）	大山さん文芸祭典
10月	米子市・コンベンション	淀江さんこ節保存会	食と農のフェスタ
10月	米子市・コンベンション	米子田植唄保存会	食と農のフェスタ
10月	日南町・阿毘縁地区	温湯正人（ロゲイニング指導）	にちなんロゲイニング
10月	琴浦町・河本家住宅	眞田廣幸（倉吉文化財協会長）	秋の公開イベント
10月	米子市・公会堂	伯耆国たたら顕彰会、石村隆男（コンベンションビューロ理事長）	全国たたらサミット
10月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
10月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
10月	米子市・皆生温泉	淀江さんこ節保存会、桂小文吾（落語家）	中四国リーダー研修会
10月	岩美町・役場	山下眞一郎（マジック）	高齢者学級
10月	岩美町・あすなろ	佐々木洋一（ハーモニカ）	高齢者学級
10月	琴浦町・河本家住宅	小谷惠造（河本家保存会長）	秋の公開イベント
10月	鳥取市・末恒公民館	田中久大（郷土誌すえつね編集委員長）	郷土誌発行記念講演会
10月	鳥取市・若葉台公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	文化祭
10月	米子市・中央隣保館	南京玉すだれ山陰保存会	文化祭
10月	鳥取市・豊実公民館	バードベンチャーズ	地区まつり

	10月	南部町・農業者トレセン	港ベンチャーズ、米子マジック同好会	ボランティアフェスティバル
	10月	鳥取市・県社会福祉協議会	牧野芳光（鳥取県川柳作家協会長）	介護川柳審査会
	11月	鳥取市・県立図書館	沖廣俊（いなば国府ガイドクラブ）	国府町歴史遺産再発見
	11月	米子市・ふれあいの里	田中文也（古代史研究家）	古代史講座
	11月	倉吉市・灘手小	淀江さんこ節保存会	灘手こーまい秋まつり
	11月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	11月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	11月	日野町・町内	伯耆国たたら顕彰会、梅林敏彦（農業）	平成のふいご祭り
	11月	鳥取市・なごみ苑	鳥取コミュニティシネマ	高齢者映画上映会
	11月	鳥取市・メモワールイナバ	澤田勝（サックス奏者）、山根澄子（大正琴）	終活フェスタ
	11月	鳥取市・文化センター	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	尚徳大学
	11月	鳥取市・万葉歴史館	甲斐清明(元高校教師)	万葉集講座
	11月	江府町・奥大山古道	佐々木満（奥日野古道保存会長）	奥大山ウォーク
	11月	倉吉市・倉吉交流プラザ	波田野頌二郎（河本緑石研究会長）	生涯学習講座
	11月	鳥取市・青谷支所	鳥取雅友会	青谷上寺地遺跡活用
	11月	日野郡・日南町	奥日野ガイド倶楽部、多田重美（大石見神社宮司）	奥日野神社めぐり
	11月	鳥取市・大茅公民館	桂小文吾(落語家)	公民館まつり
	11月	鳥取市・文化センター	田中精夫（大河ドラマを推進する会代表）	郷土歴史講座
	11月	倉吉市・鳥取短大	高田典裕（接遇教育インストラクター）	社会人マナー講座
	11月	鳥取市・やすらぎ	鳥取コミュニティシネマ	高齢者映画上映会
	11月	米子市・夜見公民館	吉島潤承（紙芝居）	さわやか人生大学
	11月	鳥取市・県社会福祉協議会	小谷明男（吉野そばの会）	そば打ち研修会
	11月	米子市・伯耆町・日野町	奥日野ガイド倶楽部、杉谷愛象、高橋竫夫（米子の宝88選委員会）	富次精斎を訪ねて
	11月	鳥取市・高齢者福祉センター	鳥取流しびな真向会、のばなの会	市民活動フェスタ
	11月	鳥取市・県民ふれあい会館	鳥取姫柿愛好会	姫柿盆栽展
	11月	倉吉市・鶴乃觜	まちゼミ・鶴乃觜	倉吉まちゼミ
	11月	倉吉市・倉吉ワイナリー	まちゼミ・倉吉ワイナリー	倉吉まちゼミ
	11月	鳥取市・産業体育館	鳥取県フォークダンス連盟	連盟10周年フェア
	11月	鳥取市・おおちだにアパート	小山富見男（県史編さん委員）	戦前の歴史地図研究
	11月	智頭町・町総合センター	田中みつとし（トランペッター）	ふれあいコンサート
	11月	鳥取市・文化センター	有本喜美男（さじ民話会）	郷土歴史講座
	11月	伯耆町・岸本公民館	劇団ふたり	高齢者学級
	11月	倉吉市・写真のカワラジョー	まちゼミ・写真のカワラジョー	倉吉まちゼミ
	12月	日南町・菅沢	古民家net	古民家deくつろいday
	12月	鳥取市・ホテルモナーク	山下眞一郎（マジック）	忘年会
	12月	鳥取市・県立博物館	田村昭夫（鳥取昆虫同好会長）	自然シンポジウム
	12月	倉吉市・伯耆しあわせの郷	山本福寿（智頭の山人塾長）	木育講座
	12月	倉吉市・未来中心	太一車歴史文化部会、林かおる（ピアニスト）	公民館まつり
	12月	鳥取市・神戸公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	冬の祭典
	12月	鳥取市・県立博物館	清水増夫（映画上映）	まわる映写機めぐる人生
	12月	日野町・黒坂	梅林敏彦（農業）、渡部敏樹（農業）	家庭菜園肥料づくり講座
	12月	鳥取市・湖山西公民館	山下眞一郎（マジック）	クリスマス会
	12月	米子市・米子観光案内所	桂小文吾（落語家）	いも煮寄席
	12月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	12月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	12月	鳥取市・市立図書館	有本喜美男（さじ民話会）、小林龍雄（鳥取県民話サークル会長）	民話を聞く会
	12月	米子市・日本海新聞西部本社	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	大山講座・大山さんの自然
	12月	鳥取市・イオン鳥取北店	本城義照（尺八）	年忘れコンサート
2019年	1月	北栄町・公民館由良分館	岩室久美子（終活ライフケアプランナー）	くらしの講座
	1月	米子市・米子高島屋	森田尾山（書家）、松原幹夫（写真家）	大山二人展
	1月	鳥取市・かわはら道の駅	山根教子（粘土細工作家）	粘土細工展
	1月	米子市・公会堂	国際メンタルセラピスト協会	童謡メンタルセラピー
	1月	鳥取市・県立図書館	油野利博（鳥取県体育協会名誉会長）	陸上競技を読む
	1月	境港市・夢みなとタワー	赤石有平（尺八奏者）	中海圏域和菓子まつり
	1月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	因幡・冬の手づくり教室
	1月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	1月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	1月	鳥取市・文化ホール	小山富見男（県史編さん委員）	郷土歴史講座
	1月	倉吉市・体育文化会館	玉木純一（レクリエーションCD）	福祉学習スキルアップ講座
	1月	北栄町・道の駅	田中みつとし（トランペッター）	ディナー・コンサート
	1月	米子市・コンベンションセンター	石村隆男（米子コンベンションセンター理事長）、長谷川泰二（同前理事長）、	岡本おさみトリビュートコンサート
	2月	倉吉市・未来中心	河下哲志(トウフルート奏者)、のばなの会	童謡メンタルセラピー
	2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	澤田勝（サックス奏者）、北尾勲（鳥取県歌人会顧問）、田中道春（万葉集朗唱の会会長）	万葉茶会
	2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	村上千砂(書家)	万葉かな書道教室
	2月	湯梨浜町・ゆるりん館	柳井沙羅（歌手）	ハートフルコンサート
	2月	倉吉市・未来中心	河合鎮徳（伯耆稲荷宮司）、村上俊夫(元日本海新聞論説委員長)、古川茂樹（中海テレビ放送顧問）	研修会・広報コンテスト
	2月	鳥取市・ワシントンホテル	石川達之（防災士、フォークシンガー）	モーニングセミナー
	2月	北栄町・中央公民館	岩室久美子（パソコン検定試験官）	高齢者パソコン教室
	2月	北栄町・中央公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	高齢者ニュースポーツ教室
	2月	湯梨浜町・中央公民館	杉原弘一郎(日本音楽熟成協会理事長)	女性研修会
	2月	湯梨浜町・ハワイアロハホール	のばなの会	いきいきサロン
	2月	鳥取市・若桜通り商店街など	岡村洋次（放哉の会）	街なか美術展
	2月	鳥取市・ワシントンホテル	石山雅章(地域プランナー)	モーニングセミナー
	3月	鳥取市・文化センター	河下哲志(トウフルート奏者)、のばなの会	童謡メンタルセラピー
	3月	岩美町・小田公民館	のばなの会	講演会
	3月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男（県史編さん委員）	占領期の鳥取を学ぶ会
	3月	鳥取市・布勢陸上競技場	鳥取ベンチャーズ	応援ボランティア
	3月	鳥取市・県民ふれあい会館	いけばな小原流、民踊きくの会、椋誠一郎（俳句）、荻原恵子（鳥取県フォーク	まなび・ふれあい交流会
	3月	岩美町・小田公民館	小谷博徳（日野町議会議長）	人権講演会
	3月	倉吉市・小鴨公民館	杉原幹雄（伯耆国たたら顕彰会）	シニアクラブ
	3月	鳥取市・倉田公民館	玉木純一（レクリエーションCD）	レクリエーション教室
	3月	鳥取市・白兎はまなす園	岸本美代子（美容ボランティア）	みだしなみ講座

日記掲載ページ
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

3月	倉吉市・倉吉交流プラザ	池本一郎（県歌人会顧問）、多田典子（羽合短歌会）、倉益敬（県歌人会長）	山上憶良賞表彰式	27
3月	北栄町・中央公民館	松本薫(作家)	豊田父子展記念講演会	28
3月	鳥取市・河原福祉センター	石川達之（防災士、フォークシンガー）	人権講演会	
3月	米子市・文化ホール	石村隆男（コンベンションビューロ理事長）	市民公開プログラム	
3月	鳥取市・とりぎん文化会館	鳥取東部美術家協会	協会展	29
3月	倉吉市・日本海新聞	中森清(上神焼)、高力弘(木工)	中部手仕事展	30
3月	智頭町・天木森林公園	山本福寿（智頭の山人塾長）	国際森林デー	
3月	鳥取市・鳥取城跡	鳥取歴史振興会	鳥取城フォーラム	
3月	鳥取市・NHK鳥取支局	歴史大河ドラマを推進する会、伯耆伝承隊	大河ドラマ化要請	31
3月	智頭町・総合センター	玉木純一（レクリエーションCD）	ふれあいサロン研修会	
3月	鳥取市・旧美歎水源地	澤田勝（サックス奏者）、井口勉(因幡の傘踊り)	旧美歎水源地桜まつり	32
4月	鳥取市・興禅寺	放哉の会	放哉忌のつどい	33
4月	鳥取市・きなんせ広場	鳥取ベンチャーズ、ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	鳥取桜まつり	34
4月	倉吉市・伯耆しあわせの郷	鳥取ものづくり道場、中部ものづくり道場、しだれ桜の里を育てる会、八東川清流クラブ	しだれ桜の里まつり	35
4月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子（書家）	実用ペン字教室	36
4月	大山町・仁王堂公園	仁王堂茶楽会、米子福生凧の会	花まつり	37
4月	鳥取市・県立図書館	四井幸子（碧川かた研究家）	研究会	
4月	智頭町・山郷公民館	田中みつとしとその仲間たち、山郷ミュージックビレッジ	ミュージックビレッジ	38
4月	鳥取市・鳥取敬愛高校	松浦ふさ代(チェロ演奏家)	ボヌッチ音楽祭	
4月	米子市・本の学校	同人誌米子文学	米子文学発表会	39
4月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子（書家）	実用ペン字教室	
4月	鳥取市・万葉歴史館	柴山抱海（鳥取県書道連合会長）	新元号「令和」揮ごう	40
4月	鳥取市・わらべ館	鳥取ものづくり道場、山根教子(粘土細工作家)	ものづくりひろば	41
4月	若桜町・駅前広場	ミンミンchieと森のくまさん	若桜桜まつり	42
4月	岩美町・網代漁港	県漁協網代港支部女性部	ワカメフェス	43
4月	鳥取市・鳥取駅	本城義照(尺八奏者)	えきなかコンサート	
4月	湯梨浜町・倭文神社	鳥取雅友会	改元宵宮	44
4月	鳥取市・鳥取城跡	久松山を考える会	新元号「令和」点灯	45
5月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子（書家）	実用ペン字教室	
5月	米子市・児童文化センター	米子マジック同好会	マジックフェスティバル	46
5月	鳥取市・鳥取城跡	久松山を考える会	鳥取城攻防戦	47
5月	鳥取市・とりぎん文化会館	塩宏（医師）	婦人部研修会	48
5月	米子市・美術館	安部朱美(人形作家)	創作人形展	49
5月	鳥取市・青谷上寺地遺跡	吉田幹男(古地図研究家)	ふるさと探訪	50
5月	倉吉市・未来中心	小鴨地区振興協議会	太一車セミナー	51
5月	鳥取市・市民会館	ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	うたごえコンサート	
5月	境港市・夢みなとタワー	港ベンチャーズ、因幡～ず、平家ベンチャーズ、ブルースネーク、ザ・ブルーバーズ	ベンチャーズカーニバル	52
5月	米子市・米子城跡と城下町	米子観光まちづくり公社	大山講座	53
5月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子（書家）	実用ペン字教室	
5月	岩美町・役場	岩室久美子（終活ライフケアプランナー）、山下眞一郎（マジック）、佐々木洋一（ハーモニカ）、中川信恵(民踊指導者)	高齢者大学	54
5月	琴浦町・社会福祉協議会	じぃ～じぃ～ず	デイサービス誕生会	55
5月	湯梨浜町・潮風の丘とまり	鳥取県グラウンド・ゴルフ協会	グラウンド・ゴルフ国際大会	56
5月	岩美町・浦富海岸など	いわみガイドクラブ、田後漁協婦人部	浦富海岸ジオウォーク	57
5月	米子市・児童文化センター	米子バラ会	春のバラ展	58
5月	境港市・境小学校	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	総合学習	59
6月	鳥取市・久松連山	久松山を考える会	鳥取城攻防マラソン大会	60
6月	鳥取市・文化ホール	箏・てまり会	箏曲演奏会	
6月	大山町・大山寺	伯耆・伝承隊	豪円和尚命日ボランティア	61
6月	伯耆町、日野町	石丸なつ子（サークルU）	日野川写真塾	62
6月	日野町・沙々樹	坂本信文(サックス奏者)	古民家コンサート	63
6月	鳥取市・県立図書館	歴史大河ドラマを推進する会	総会、候補発表会	64
6月	鳥取市・鹿野町公民館	どじょっこの会	敬老会	
6月	米子市・ふれあいの里	笑劇座	ファミリーフェスティバル	
6月	米子市・美術館	伯耆書院	山陰鉄道書道展	65
6月	鳥取市・鹿野町公民館	澤田勝(鳥取県健康マージャン連盟副会長)	健康マージャン	66
6月	鳥取市・さじアストロパーク	里山地域研究会	青空体験塾	67
6月	鳥取市・旧美歎水源地	美歎水源地保存会	ホタル・サックス観賞会	68
6月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹（県体協会長）	万葉集講座	69
6月	若桜町・平家落人の里	平家弘之（自治会長）、平家ベンチャーズ	平経盛祭り	70
6月	米子市・福生西公民館	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	隠岐騒動講演会	71
6月	江府町・鏡ヶ成	矢田貝繁明(大山自然歴史館長)	湿原自然観察会	72
6月	岩美町・道の駅	APON	コンサート	
6月	鳥取市・わらべ館	四井幸子（碧川かた研究家）	露風生誕130年コンサート	73
6月	鳥取市・県立博物館	鳥取歴史振興会	明治維新大激論	74
6月	鳥取市・福祉人材研修センター	APON	アトラクション	75
6月	岩美町・岩井温泉など	いわみガイドクラブ	ガイド養成講座	76
6月	鳥取市・大河ドラマを推進する会	田中精夫（郷土史家）、尾崎孝介(日本語講師)、笹間政典(通訳)、伯耆・伝承隊	紙芝居・豪円和尚翻訳	77
7月	佐用町・健康の里みかづき	メンタルセラピスト協会	童謡で元気になりましょう	
7月	八頭町・八東体育文化センター	桂小文吾（落語家）	講演と落語と踊り	78
7月	鳥取市・パレット	鳥取山草同好会	鳥取山野草展、苔玉講習会	79
7月	鳥取市・県立福祉研修センター	坂本昭文（元南部町長）	福祉研究学会	80
7月	鳥取市・流しびなの館	鳥取ベンチャーズ	リサイタル	81
7月	米子市・尚徳中学校	荒井玲子（看護師）	人権教育	
7月	境港市・老人福祉センター	渡部敏樹（農業）	中海の話	82
7月	八頭町・船岡公民館	桂小文吾（落語家）	講演と落語	
7月	八頭町・中央公民館	入江宜明（元わかさ生涯学習情報館長）	研修会	83
7月	鳥取市・あおや郷土館	清末忠人（自然に親しむ会会長）	清末コレクション展	84
7月	鳥取市・とりぎん文化会館	小原流鳥取支部	創立70周年記念花展	85
7月	境港市・夢みなとタワー	清末忠人（自然に親しむ会会長）	夏休みこども教室	86
7月	倉吉市・打吹回廊とその周辺	APON、因伯音.倉吉打吹太鼓、打吹童子ばやし	打吹回廊オープン	87
7月	鳥取市・浄宗寺	菊弘瀬恭子（箏・てまり会代表）	街角コンサート	88

7月	鳥取市・高住公民館	山下眞一郎、藤井正幸（マジック）	ふれあいデイサービス	89
7月	倉吉市・倉吉交流プラザ	真田広幸（倉吉文化財協会長）	文化財講演会	90
7月	北栄町・北条砂丘	中部ものづくり道場	砂鉄集め	91
7月	鳥取市・友和苑	原孝幸（安来節踊り師範）	夏の集い	92
7月	鳥取市・厚和寮	どじょっこの会	納涼祭	93
8月	琴浦町・旧以西小学校	じぃ～じぃ～ず	いさい夢まつり	
8月	鳥取市・荒木神社	佐藤翔風（詩吟）、本城義照（尺八奏者）	夏祭り	94
8月	南部町・天満庁舎	倉益敬（鳥取県歌人会会長）	短歌教室	95
8月	鳥取市・美保公民館	清末忠人（鳥取自然に親しむ会会長）	川の生き物教室	
8月	鳥取市・養源寺	平家六栄（紙芝居）	はだしのゲン	96
8月	境港市・老人福祉センター	佐々木邦広（元境港市教育長）	絵葉書に見る戦前の境港	97
8月	鳥取市・県民ふれあい会館	現代詩人協会	交流会	98
8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英（鳥取県美術家協会長）	夏休みこども教室	99
8月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	因幡のものづくり教室	100
8月	岩美町・役場	澤田廉路（鳥取県建築士会専務理事）	空き家利用シンポジウム	101
8月	鳥取市・県立博物館	有本喜美男（さじ民話会）、中嶋寿美子（民話の語り部）	鳥取県の民話を聞く会	102
8月	浜田市・市立中央図書館	倉光信一郎（鳥取短大講師）	研修会	
8月	米子市・加茂川	米子観光まちづくり公社、春蘭会	加茂川まつり	103
8月	倉吉市・関金町	中部ものづくり道場	たたらワークショップ	
8月	鳥取市・文化センター	河内おどり隊、因幡傘踊り保存会、勝部岩力踊り保存会、淀江さんこ節	とっとり手踊り・手笠踊り	104
8月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎（切り絵作家）	切り絵教室	105
9月	鳥取市・とりぎん文化会館	真田広幸（倉吉文化財協会長）	戦国時代フォーラム	106
9月	倉吉市・市立図書館	大河ドラマを推進する会	大河ドラマ選考会	107
9月	米子市・貴布禰神社	米子マジック同好会	車尾ふれあい祭	108
9月	米子市・夜見公民館	定岡敏行（境港楽習会代表）	国際教養講座	109
9月	米子市・市立図書館	佐々木満（元米子市立図書館長）	万葉集講座	
9月	倉吉市・倉吉交流プラザ	中永廣樹（前鳥取県教育長）	万葉集の言葉を味わう	
9月	日野町・日野郡神社めぐり	奥日野ガイド倶楽部	奥日野神社めぐり	
9月	境港市・老人福祉センター	山本美知枝（青い目の人形研究家）	境港楽習会	
9月	鳥取市・とりぎん文化会館	米子マジック同好会、どじょっこの会、美保踊りの会、のばなの会	県民総合福祉大会	110
9月	米子市・新山自治公民館	山田義則（防災士）	敬老会	111
9月	鳥取市・モアスマイル富安	原孝幸（安来節踊り師範）	敬老会	
9月	鳥取市・中郷公民館	小泉幸子（香道家）	体験講座	
9月	倉吉市・打吹回廊とその周辺	中部ものづくり道場、黒川哲夫（倉吉凧づくり）、玉木純一（レクリエーションCD）、小谷和上（仏師）、倉吉商工会議所、倉吉打吹太鼓、ブルースネイク、田中みつとし（トランペッター）、倉吉ギターアンサンブル、脇坂幸司（講談師）、太一車歴史文化部会、石川達之（防災士、フォークシンガー）、林かおる（ピアニスト）、赤瓦ジョニー、ブルーレイズ	生涯現役まつり	112～114
9月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎（切り絵作家）	切り絵教室	
9月	境港市・時の里	スマイルせつこ（腹話術）	敬老会	
9月	鳥取市・国府町	いなば国府ガイドクラブ、本城義照（尺八奏者）	日本遺産をめぐろう	115～116
9月	八頭町・郡家西小学校	桂小文吾（落語家）	講演と落語	
9月	倉吉市・未来中心	根鈴輝雄（倉吉博物館長）	彫刻めぐり	
9月	鳥取市・シニアステージ幸町	藤井正幸（マジック）	敬老会	
10月	大山町・福祉保健センター	桑原正（ペンションわくわく村）、遠藤道夫(からす天狗)、鷲見寛幸（大山町教育長）	大山講座「大山食のまつり」	117
10月	米子市・夜見公民館	大谷治（米子工芸会代表）	ステンドグラスづくり	
10月	湯梨浜町・水明荘	荒井玲子（看護師）	人権講座	
10月	境港市・老人福祉センター	竹内道夫（文芸史家）	文芸講座	118
10月	湯梨浜町・水明荘	鍛治木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	羽衣天女サミット	
10月	倉吉市・市内	根鈴輝雄（倉吉博物館長）	大江磐代ゆかりの地めぐり	119
10月	鳥取市・国府町	いなば国府ガイドクラブ	国指定文化財めぐり	120
10月	鳥取市・国府町	池本一郎、北尾勲（県歌人会顧問）、万葉集朗唱の会ほか	万葉フェスティバル	121
10月	大山町・大山寺	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	大山講座歴史ガイド	
10月	鳥取市・県立博物館	碧川かた研究会、APON	フォーラム	122
10月	鳥取市・青谷町	河根裕二、長谷川正昭（青谷ガイドネットワーク）	日本遺産をめぐろう	123～124
10月	鳥取市・美保南公民館	川上巧（いやし地蔵作家）	教養講座	
10月	倉吉市・八島農具興業	中部ものづくり道場	たたらワークショップ	
10月	米子市・心身障害者センター	笑劇座	秋まつり	125
10月	南部町・農業者トレセン	APON	ボランティアフェスティバル	
10月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎（切り絵作家）	切り絵教室	
11月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹（元県教育長）	万葉集講座	126
11月	鳥取市・福祉人材研修センター	八幡健一、松本俊行（東部ものづくり道場）、紙原四郎（切り絵作家）、陶	支え愛フェスタ	127
11月	日野町・役場周辺	伯耆国たたら顕彰会	ふいごまつり	128
11月	鳥取市・市民会館	鳥取県民踊指導者連盟	民踊のつどい	129
11月	鳥取市・大茅公民館	多賀利寛（鳥取天文協会）	星の話	130
11月	境港市・老人福祉センター	寺澤敬人（済生会常務）	島根半島の洞窟遺跡	131
11月	鳥取市・扇ノ山	いなば国府ガイドクラブ、いわみガイドクラブ	トレッキング	132
11月	倉吉市・社公民館	福井伸一郎（前倉吉市教育長）	研修会	133
11月	米子市・日野川河川敷	米子福生凧の会	凧揚げ大会	134
11月	鳥取市・県立福祉研修センター	村上俊夫(元日本海新聞論説委員長)、古川茂樹（中海テレビ放送顧問）	広報コンテスト	135
11月	鳥取市・湖山ツクイデイサービス	民謡弦声会	お楽しみ会	136
11月	倉吉市・市福祉センター	鳥取お手玉の会	お手玉遊びの会	137
11月	倉吉市・人形のたいら	人形のたいら	まちゼミ	138
11月	倉吉市・きたや寝具	きたや寝具	まちゼミ	139
11月	倉吉市・打吹回廊	打吹回廊・打吹天女	まちゼミ	140
11月	境港市・しおさい会館	小山富見男（県史編さん委員）	鳥取県の満蒙開拓の歴史	141
11月	鳥取市・文化センター	北村隆雄（太一車歴史文化部会長）	歴史講座	142
11月	鳥取市・湖山西公民館	平家裕一（公民館長）	スーパーカレッジ	143
11月	鳥取市・県民ふれあい会館	吉田幹男(古地図研究家)	伊福部昭の音楽	144
12月	米子市・米子高島屋	米子バラ会、森田尾山（書家）、安部朱美(人形作家)、入江淑元（画家）	バラのパレード	145
12月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	冬の手づくり教室	
12月	鳥取市・文化ホール	鳥取県能楽連合会	合同能楽祭	146
12月	米子市・奥日野	伯耆国たたら顕彰会、小谷博徳（日野町議会議長）、中尾慶治郎（祐生出会いの館副館長）	伯耆安綱ゆかりの地めぐり	147
12月	鳥取市・文化センター	稲垣晴雲（書家）	文化講座	148
12月	鳥取市・気高総合支所	濱田英一（鳥取県地域社会研究会顧問）	歴史講座	149

12月	米子市・日本海新聞西部本社	岸本俊彦（鳥取県俳句協会長）、遠藤甫人（鳥取県俳句協会副会長）、佐藤夫雨子（米子俳句作家協会長）、由木みのる（俳句誌「城」花鳥抄選者）、中村襄介（ホトトギス同人）	大山俳句表彰式	150
12月	米子市・日本海新聞西部本社	鷲見寛幸（大山町教育長）	大山講座	151
12月	米子市・日本海新聞西部本社	根平雄一郎（境港歴史研究会代表）	大山講座	152
12月	鳥取市・神戸公民館	アンサンブル済美	クリスマス会	153
12月	倉吉市・三朝町	伯耆国たたら顕彰会ほか	伯耆安綱ゆかりの地めぐり	154
12月	鳥取市・文化センター	内田克彦（大河ドラマを推進する会代表）	歴史講座	155
12月	鳥取市・県民ふれあい会館	クインビー・ジャズ・オーケストラ	演奏会	156
12月	米子市・県内	高橋亮（米子文学同人）	書籍「澤田家の人びと」出版	157

地域のオタスケに感謝！　　岩室久美子さん

2019年1月7日

北栄町の高齢者大学・シニアクラブ（道祖尾良子会長）は、中央公民館大栄分館で総合学習「暮らしの講座」を開き、レクリエーション介護士の岩室久美子さんから社会との向き合い方について学びました。

北栄町の高齢者大学は毎月、総合学習とコース別学習を開いており、生涯学習が盛んなまちです。終活ライフプランナーやパソコン検定公認試験官などの資格を持つ岩室さんは、総合学習で「暮らしの講座」、コース別学習で「パソコン」を担当する常任講師です。

今回の「暮らしの講座」のテーマは「地域のオタスケに感謝して」。70～80歳代を中心に約30人が参加して、地域のオタスケに気づくとともに、感謝の気持ちの届け方について一緒に考えました。

講座は小グループに分かれて、それぞれが体験や意見を発表し合う全員参加型で進み、「あなたの成長をオタスケしてくれた地域の方はだれ」「あなたや家族をオタスケしてくれている方はだれ」「感謝の気持ちをどう届けるか」などを話し合い、その内容を付せんに書き込みました。

「隣のおじさんから、いつも野菜をいただいている」「嫁いできて、当地の言葉や行事を教えていただいた」「近所の方に我が家のボヤを防いでいただいた」などの発表に続いて、付せんには「ありがとうの気持ちを言葉で伝えなければ」「私がうれしかったことは、ほかの人にもしてあげなくては」「相手を気遣うことを忘れないように」などの感想が並びました。

岩室さんは「年を取ると、自分と向き合うことが少なくなりがちです。『参加』『尊重』『守秘』の参加型学習で考え、学ぶことができ、脳トレにもなったのではないでしょうか」と総括し、講座を終えました。

感謝の言葉を伝えよう

岩室久美子さん

付せんの言葉を紹介する参加者

ザ・ダイセン２人展　　松原幹夫さん・森田尾山さん

2019年1月9日

大山のふもとで活躍する写真家・松原幹夫さんと書家・森田尾山さんのザ・ダイセン2人展が米子市の米子高島屋であり、開山1300年を経た「大山さん」の新たな船出を祝いました。

松原さんは日本写真協会員、森田さんは日展会友で、ともに麓人会のメンバー。麓人会は大山のふもとの画家や写真家などの美術家グループと短歌や俳句、小説などの文芸作家グループが一緒になってつくった〝異業種〟文化集団です。

松原さんと森田さんは、昨年の大山開山1300年を記念して大山の写真と書の連携を企画、準備してきました。大山ゆかりの俳句や川柳を森田さんが墨書し、そのイメージに合った四季折々の大山を松原さんが撮ったもので、昨年夏に31作品をまとめて写真集「大山燦歌」を出版しました。

ザ・ダイセン展は「大山燦歌」の全作品はじめ、森田さんらが大山寺周辺で発掘調査した句碑や歌碑（大山の文学碑めぐり）、農民俳人の故・美柑みつはるさん（元麓人会員）の遺作などを紹介し、多くのファンでにぎわいました。文学碑めぐりには、昨年秋に大山町民が大山博労座に建立した与謝野晶子の歌碑「大山寺　笹のいく葉の隠岐見えて　伯耆の海の美しきかな」も新たに加えられました。書は森田さんです。

さて、構想から足掛け3年の企画展。大山を取り込んだ写真撮影も大変だったようです。それぞれにお気に入りを聞きました。

松原さんは米子城山の夜桜越しに米子市街と月夜の大山を仰ぐ「花月優麗」を挙げました。ストロボを2回発光させて写したそうで、河本緑石の俳句「月の光に心すみ夜の風きけり」が添えられています。森田さんは米子市福市の安養寺鐘つき堂から見た夜明け前の大山「静寂の刻」です。これには宮本白土の俳句「君仰ぎ吾また仰ぐ沙羅の花」とあります。まるで平家物語の世界です。

今後の抱負について、森田さんは「写真や俳句などがコラボすることで新たな大山が見えてきました。その顕彰活動を中海圏域に広げて深掘りしてみたい」、松原さんは「サビ、キズ、ヨゴレをフォーカスし、心象風景を撮り続けていきます」と話していました。それぞれの新たな挑戦に期待しましょう。

森田尾山さん（左）と松原幹夫さん

花月優麗（写真集「大山燦歌」から）

松原さんの写真集「大山燦歌」

静寂の刻（写真集「大山燦歌」から）

う・ふ・ふ…の人形づくり　　山根教子さん

2019年1月13日

鳥取市河原町の「道の駅清流茶屋かわはら」で1月末まで、粘土細工作家・山根教子さんの「う・ふ・ふ展」が開かれています。この日は今年の干支のイノシシづくりの体験教室があり、お母さんたちでにぎわいました。

山根さんの「う・ふ・ふ展」は、道の駅清流茶屋の新年の恒例イベントです。山根さんが樹脂粘土でつくった愛らしい干支や縁起物の人形を展示即売するとともに、希望者を募って体験教室を開いています。

今年の体験教室には20人が参加し、絵の具で色付けした粘土を工夫してイノシシとウリ坊をつくりました。山根さんは「豚さんにならないように、口元には白いキバをつけ加え、背中にははさみでタテガミを入れ、ウリ坊にはしま模様を忘れないように」とアドバイス。それぞれオリジナルのかわいらしいイノシシの親子をつくり、「亥」文字の飾りをつけて置物に仕上げました。

展示会場にはイノシシの親子はじめ、十二支や七福神、招き猫、お地蔵さんなどの粘土細工が並び、道の駅に立ち寄ったお客さんは「どれもかわいくて、ほっこりします」と買い求めていました。山根さんの粘土細工教室は鳥取市の「わらべ館」や八頭郡内の公民館などでも開かれています。

山根教子さん

山根さんの指導で干支づくり
（道の駅かわはら）

七福神も人気です

イノシシの親子をつくりました

童謡で元気になれる！　　国際音楽メンタルセラピスト協会

2019年1月13日

「童謡を聴いて歌って元気になりましょう」というイベントが米子市の公会堂でありました。国際音楽メンタルセラピスト協会（会長・山西敏博公立鳥取環境大教授）が開いたもので、とうふちくわを楽器にするイワミノフ・アナミール・アゾースキー（河下哲志）さんと心と体の健康づくりをサポートする「のばなの会」が協力して、童謡の癒やしパワーをPRしました。このイベントは2月2日に倉吉市の倉吉未来中心、3月2日に鳥取市の文化センターでも開かれます。

鳥取環境大の山西教授（言語社会学、認知心理学）は、童謡の癒やしパワーに着目し、童謡を活用したメンタルセラピーの仕組みを考案。昨年、国際協会をつくるとともに、「童謡で絶対元気になれる！」という本（CD付）を出版し、被災地や介護施設などで童謡セラピーの普及を進めています。

今回の県内巡回イベントもその一環です。のばなの会の西田清美さん（介護士）が腹式呼吸法や体感運動を紹介し、イワミノフ・アナミール・アゾースキーさんが世界一柔らかくて食べられる楽器・トウフルートで「大山讃歌」などを皮切りに、鳥取県出身の音楽家・岡野貞一と田村虎蔵の童謡「桃太郎」「大黒様」「花咲爺」「金太郎」「一寸法師」をメドレーで演奏。松江市などから訪れた童謡ファンも一緒になって口ずさみました。

いよいよ童謡セラピーの体験です。参加者は2組に分かれ、山西会長のリードで相手を変えながら、「自己紹介」「今年の決意」「冬の思い出」「これからの人生の抱負」などを語り合い、「いいね」と気脈を通じあいました。〝心の触媒〟になったのが童謡で、「桃太郎」「一月一日」「冬の夜」「富士山」などの童謡を合唱した後とあって、参加者の気持ちはほぐれ、会話も弾み、だれも「元気をいただきました」と大喜びでした。

童謡の効果効能を提唱する山西俊博会長

童謡セラピーで「いいね」と気も晴れる

心身ほぐしてセラピー

韓国語版も出た「童謡で絶対元気になれる！」本

スポーツは文化です　　油野利博さん

2019年1月14日

鳥取県体育協会は創立100周年を記念して鳥取市の県立図書館で「陸上競技を読む！」展を開いています。県体協名誉会長の油野利博さんのコレクションで、オリンピックのポスターや陸上競技の関連書籍など約3千点が並び、NHK大河ドラマ「いだてん」のモデル・金栗四三や鳥取県初のマラソン大会などを紹介するコーナーも設けられ、にぎわっています。1月20日まで。

油野さんは石川県出身。東京教育大（筑波大）卒業後、鳥取大で教壇に立つかたわら、鳥取県陸上競技協会の審判部でスターターなどをしてきました。元鳥取市陸協会長。昨年まで7年間、県体協会長も務めました。学生時代から長距離ランナーとして活躍し、東京教育大では箱根駅伝で最終10区を走りました。

油野さんは中学時代に読んだ本で陸上競技のとりこになりました。それ以来、半世紀にわたって陸上競技の書籍やプログラム、ポスターなどを集め、その書籍は600冊余りにもなりました。

油野さんのお宝は、初めてのボーナスをはたいて買った「陸上競技とフットボール」というイギリスの古書（1887年発行）です。また、日本最初の五輪選手・金栗四三（1891～1983年）が1912年のストックホルム五輪に出場した際のパンフレットや1920年のアントワープ五輪でもらった参加証（ディプロマ）もそれぞれ古書店で入手し、本展の金栗コーナーを飾っています。

日本最初のマラソン大会は1909年(明治42年)の神戸―大阪間20㍄(約32km)レースです。これに智頭町の綾木(旧姓・金子)長之助が参加し、見事優勝を果たし、五輪出場が期待されたものの、なぜか綾木は走ることをやめました。鳥取県で初めてマラソン大会が開かれたのは、その翌年です。因伯時報社が主催し、コースは鳥取―河原間の往復でした。智頭宿の農業、江見治作さんらが活躍したそうです。

日本最初の駅伝大会は1917年（大正6年）の東京遷都50周年を記念した京都三条大橋―東京上野不忍池間でした。その翌年、日本マラソンの父・金栗らの提唱で箱根駅伝が始まっています。油野さんはマラソンや駅伝の新聞記事をたんねんにスクラップし、わかりやすく紹介しています。

「鳥取県体育スポーツ文献一覧」も油野さんの労作です。鳥取県ゆかりのスポーツ関連書籍を調べたもので、2100冊をリストアップしています。大学教員時代の調査研究の成果です。県体協（66団体）はこの夏を目途に100年史を出版予定です。

油野さんは1964年と2020年の東京五輪のポスターを前に、「スポーツの本質は楽しむことと体を鍛え、競うことです。それをかなえるのは人的、社会的基盤、平和であることが何より大切です。スポーツは文化そのものです」と話していました。

山下佐知子さんがバルセロナ五輪で使用した靴を紹介する油野利博さん

日本人が初めてオリンピックに参加したのは第５回大会（ストックホルム）。写真は陸上競技のパンフレット

東京五輪のポスター

日本初のマラソンや駅伝、鳥取県初のマラソンを報じる新聞のスクラップ

中海圏の和菓子食べ放題！　　赤石有平さん

2019年1月20日

境港市の夢みなとタワーで中海圏の和菓子食べ放題の和菓子祭があり、キタローロードで和菓子店を経営する赤石有平さんが実行委員長を務めるとともに、尺八の演奏で祭りを盛り上げました。延べ1，600人が来場し、会場は大盛況でした。

和菓子祭は和菓子文化を盛りあげようと、米子・境港・松江・安来市の和菓子店が集まり、年1～2回開いているもので、10回目になります。今回は境港市の妖怪饅頭総本店、あかいし家、米子市の丸京庵、もちっ子庵、安来市の瀬尻製パン、本舗瑞泉堂、松江市の三英堂、福田屋など14店の羊かん、大福、生菓子、どら焼き、饅頭、もち、だんごなどが並び、米子市のながた茶店が抹茶をサービスしました。

入場料は前売り600円(当日は800円)、45分間食べ放題。有名和菓子のバイキングとあって、来場者は回を追うごとに増えているといいます。

尺八の特技でシニアバンクに登録する赤石さんは、第4回から出店しており、今回も看板の人形焼き「絵画（でこ）まんじゅう」を出品しました。実行委員長やお店の切り盛りで大忙しの赤石さんでしたが、3回ステージに上がり、琴とコラボして尺八を演奏。「春の海」など4曲を披露し、和菓子の雰囲気に合わせた美しい音色を会場に届けていました。赤石さんは「みなさんが和菓子で笑顔になっていただけるのがうれしい。これからも和菓子祭を続けていきます」と元気でした。

赤石有平さん

琴と尺八のコラボ

人気の絵画（でこ）まんじゅう

大盛況のイベント会場

ものづくりは楽しいよ！　　鳥取ものづくり道場

2019年1月20日

因幡・冬の手づくり教室が鳥取市文化センターであり、幼稚園児から大人まで80人余りがものづくりに挑戦しました。鳥取ものづくり道場や鳥取大学、環境大学などでつくる実行委員会（作野友康委員長）が、子どもたちの考える力を養おうと開いたものです。

会場にはステンドグラス・ペンダント、ウオーキングライト、手づくりモータ、ピタゴラ装置、因州和紙折り紙、ソープカービングなど12のブースが設けられ、40人余りのスタッフが教室を運営しました。ものづくりの指導者養成も兼ねており、児童館や公民館などの職員も参加しました。

にぎわったのはステンドグラスのペンダントづくり。市内でガラス工房を経営する石井博文さんが指導しました。色とりどりの小さなステンドグラスをハンダでつないで、首からかけられるようにしたり、壁飾りをつくったり、それぞれ思い思いの飾り物に仕上げていきました。石井さんによると、ステンドグラスの作品づくりは近年、外国人旅行客に人気があるそうで、工房は体験ツアーでにぎわっているといいます。

NHKテレビでおなじみのピタゴラ装置も登場しました。ビー玉がジグザグスロープを駆け下りて、カタパルトに待機しているゴム飛行機を自動的に飛び立たせる〝からくり装置〟で、3人の小学生が手分けをしてつくりました。元鳥取三洋電機のエンジニア・鍋谷常善さんが手ほどきしましたが、「世はデジタルばやりながら、モノが動く原理原則をしっかり伝えたいですね。次回はラジオづくりに挑戦してもらおうかな」と元気でした。

小学2年生の孫連れでボートづくりに参加した市内の川上孝さんは、ゴムや風船の動力で動く木製や牛乳パック製のボートをつくり、「子供のころに戻ったようで楽しかった。いいおじいちゃんになれました」と喜んでいました。

ピタゴラ装置づくりを指導する鍋谷常善さん

にぎわうグラスペンダントづくり

ソープカービングは女の子に人気

鳥取初のマラソン大会　　小山富見男さん

2019年1月22日

鳥取市文化センターで市民大学「郷土の歴史」講座があり、鳥取地域史研究会の小山富見男会長が「明治・大正期の鳥取のマラソン」について話しました。約50人が受講し、日本や鳥取のマラソン大会のルーツを明治・大正の新聞記事で探りました。

「マラソン」と銘打った日本初の大会は、1909年(明治42年)の神戸大阪間20哩長距離大競走です。参加申込み約400人の中から書類審査、予選を勝ち抜いた上位20人で競い、見事優勝を果たしたのが、智頭町にゆかりのある綾木(旧姓金子)長之助でした。序盤7位と出遅れ、わらじの鼻緒が切れるトラブルに遭いながらも、最後は2位に約5分の大差をつけての圧勝だったといいます。

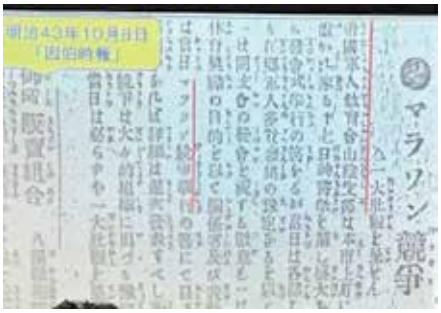
長之助は岡山県西粟倉村出身。大会後に智頭町の綾木家の婿養子となります。大会に優勝したことで、1912年のストックホルム五輪のマラソン代表候補に選ばれますが、家族の反対もあって出場を断念。その後、走ることを一切やめたそうです。小山さんは「ストックホルム五輪に出場した金栗四三に引けを取らない脚力の持ち主。五輪に出場していれば、すごい成績を残していたのでは」と残念がっていました。

神戸大阪間マラソン大会をきっかけにマラソンブームとなり、大会の翌年には鳥取でも初のマラソン大会「マラソン大競走会」(因伯時報社、帝国軍人教育会山陰支部主催)が開かれました。鳥取～河原間の往復のコースで裁判所～古海・味野～河原(折り返し)～円通寺・叶～鳥取中学校(現鳥取西高校)。75人が参加し、優勝は智頭町の江見治作、賞金は30円だったといいます。今の金額にすれば、10万円くらいになるそうです。

その後、鳥取では学生や小学生のマラソン大会などが相次いで開かれました。1919年(大正8年)には因美線の鳥取―用瀬間の開通を記念した「鳥取―用瀬間マラソン競走」があり、中原正久(東伯郡倉吉町)が優勝しました。小山さんによると、この大会では脱落者が多かったこともあって、体力、素質の向上のため食物の研究が必要であるとの記事があったことを明かしました。また、大会には学生の参加も期待されていましたが、学期試験と重なり、鳥取中学校のみの参加となったエピソードも報告しました。

小山さんは「当時の新聞記事だけではわからない部分も多い。情報提供をお待ちしています」と呼びかけていました。

綾木長之助



鳥取初のマラソン大会開催を報じる新聞記事

小山富見男さん

鳥取市民大学郷土の歴史講座

「楽しい！」を伝えるコツ　　玉木純一さん

2019年1月25日

鳥取県社会福祉協議会は倉吉市の倉吉体育文化会館で福祉学習指導者のスキルアップ講座を開き、福祉レク・ネットワーク代表の玉木純一さんから「楽しいを伝え、笑顔を引き出す」コツを学びました。

講座には県内の高校教師や保育士、児童指導員、介護士、公民館職員など約30人が参加し、体験を交えてレクリエーションの意義や進め方などを学びました。講師の玉木さんは元高校教師で県レクリエーション協会副会長。レクリエーションやコミュニケーションについて、年間160回ほど県内外で講演している第一人者で、高齢者向けの脳トレグッズ「色合わせドミノ」を開発し、話題を集めています。

講義のなかで玉木さんは、レクリエーションは「楽しさやふれあいを体験しながら、人間性豊かな人づくりや心身の健康づくり、いきいきとした地域づくりに役立つ」と説き、そのプログラムづくりや心構えを伝えました。基本になるのは、①話す力②聴く力③表現力④人間関係づくり⑤感じ取る力⑥相手の立場を考える力―などのコミュニケーション力だと強調しました。

レクリエーション体験もあり、玉木さんが子供のカードゲームをヒントに考案した「色合わせドミノ」も体験しました。9色で色分けした45個のパイを並べて、手持ちパイがなくなる早さを競うゲームで、駆け引きもでき、「楽しい」「面白い」「頭を使う」と好評だそうで、全国各地の高齢者施設や子ども会などから注文がきているといいます。玉木さんは「パイを混ぜるので手指を刺激し、場の状況を確認するので脳を刺激し、勝ち負けがあるのでやる気や意欲が高まります」と効用を解説していました。

「色合わせドミノ」のやり方を説明する玉木さん

玉木純一さん

福祉学習のスキルアップ講座

米子が育てた旅の詩人　　石村隆男さん・長谷川泰二さん・森田尾山さん

2019年1月27日

「襟裳岬」や「旅の宿」などの歌をつくった米子市出身の作詞家、故・岡本おさみさんをしのぶコンサートが開館20周年の米子コンベンションセンターであり、およそ1700人が歌と映像で旅の詩人・岡本さんの世界に浸りました。

岡本さん（1942～2015年）は米子東高から日本大学に進み、放送作家を経て作詞家となり、シンガーソングライターの吉田拓郎さんとのコンビで「襟裳岬」「旅の宿」「落陽」など数多くのヒット曲をつくりました。なかでも「襟裳岬」は森進一さんが歌って日本レコード大賞に輝きました。このほかテレビドラマの主題歌で大ヒットした岸田智史さんの「きみの朝」、森山良子さんの「歌ってよ夕陽の歌を」、ネーネーズの「黄金の花」なども岡本さんの作品です。

ただ、岡本さんが米子市出身であることや米子での暮らしが作品の原点になっていることを知る県民は多くありません。そこで親交があった米子コンベンションセンターの石村隆男理事長や前理事長の長谷川泰二さんらが中心になって、岡本さんの作品を歌い継ぐトリビュートコンサートを思い立ち、山陰放送などの協力もあって入場無料の記念事業が実現しました。

コンサートには岡本さんを慕うミュージシャンたちが集まりました。俳優の別所哲也さん、歌手で俳優の三浦祐太朗さん、ジャズボーカリストの森川七月さん、山陰少年少女合唱団リトルフェニックス、音楽監督の吉川忠英さん、映画監督の錦織良成さんなど。境港市出身の結城豊弘さんが演出しました。

ステージのスクリーンには大山、米子城跡、加茂川、地蔵、町家、がいな祭、皆生海岸…米子の春夏秋冬が映し出され、出演者は岡本さんのヒット曲を歌い継いでいきました。出演者によるトークショーもありました。このなかで吉川監督が「『旅の宿』は岡本さんの新婚旅行先、十和田湖畔の温泉宿で誕生したが、実は岡本さんは酒を飲まなかった」「岡本さんは尾崎豊の才能にほれて、追っかけをしていたが、20日旅して家には10日しかいない人だった。旅先でつくった歌詞は便せんにしたためて郵送していた」など、岡本さんの人となりやヒット曲の裏話を紹介していました。

裏話はもう一つ。このコンサートに際して、地元の書道家・森田尾山さんは大山桝水高原にある大江賢次さん(1905～1987年)の小説「絶唱」の碑文を拓本にして三浦さんに届けました。三浦さんの両親、三浦友和さんと山口百恵さんは映画「絶唱」の共演で親交が深まったといわれています。その映画監督は智頭町出身の西河克己さん(1918～2010年)でした。森田さんは岡本夫人と書道仲間。「襟裳岬」の歌詞を書にして日展会友となりました。こんな「顔が見える」人間関係が鳥取県の強みです。

岡本おさみさんとの思い出を語る
出演者のみなさん

三浦さん（左端）に「絶唱」の
拓本を届ける森田さん（右下）

岡本おさみトリビュート
コンサート

いや重(し)け吉事(よごと)

澤田勝さん・北尾勲さん・田中道春さん

2019年2月3日

「新(あらた)しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重(し)け吉事(よごと)」―奈良時代の因幡国司・大伴家持が因幡の旧正月に詠んだ祝い歌です。万葉集の最後を飾る歌にもなっています。その家持の生誕1300年を祝って、鳥取市の因幡万葉歴史館で記念事業が続いていますが、旧正月に近いこの日、万葉茶会があり、大勢のファンでにぎわいました。

茶会はボランティアグループ・吉事の会(井上好子代表、11人)が運営し、和やかな会場で万葉講座や短歌づくり講座、サックス演奏がありました。

サックス演奏は澤田勝さん。万葉集朗唱の会の田中道春会長のリードで家持の祝い歌斉唱。お茶席のお客さまも一緒になって「いやしけよごと」と声を張り上げ、オープニング。澤田さんお得意の演歌や歌謡曲が続き、「ふるさと」の斉唱で締めました。

万葉講座のテーマは「古代道路と家持、万葉歌」。同館学芸員の鎌沢圭伸さんが青谷上寺地遺跡やその近くの青谷横木遺跡から出土した古代道路(奈良時代～平安時代)について、「家持も通ったであろう道路には柳の街路樹が植えられていました。全国で初めての発見です」と報告。家持が越中国司時代に詠んだ「春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大道し思ほゆ」(万葉集巻19－4142)を紹介するとともに、「家持ゆかりの物証が新たに見つかり、古代史や和歌のファンに注目されています」と、こんごの観光客誘致に期待を寄せていました。

因幡の古代山陰道のルートには不明なところが多いといいます。青谷で見つかった道路は気多郡衙から伯耆国に至る一部と考えられていますが、因幡国庁と但馬国をつなぐ道路は十王峠・雨滝越えか海側か、いまだに謎とされています。因幡の古代史研究の課題です。

短歌づくり講座は家持大賞審査員の北尾勲さん(鳥取県歌人会顧問)が講師です。10人余りが参加して、お茶会や家持を題材に歌づくりに挑戦しました。

「万葉に思いめぐらすお茶会にサックスの友の人生想う」(大原勇さん)、「遠き日に国庁跡を散策す条理制を説く師の声若し」(横山綾子さん)、「お茶会に出されし菓子が春を呼ぶ雨降る中を万葉の庭」(斎藤邦子さん)―などの秀歌ができました。

北尾さんは「折を見て言葉を選び直したり、付け加えたりすると、好みの歌になります。歌づくりが楽しくなります。がんばってください」と励ましていました。

澤田さんの演奏で「ふるさと」を歌う
吉事の会のみなさん

北尾さんの歌づくり講座

にぎわう万葉茶会

柔らかい手首で筆づかい　　村上千砂さん

2019年2月10日

日本語の「書きことば」は万葉かなが源流といわれますが、その万葉かなを書く書道教室が鳥取市の因幡万葉歴史館であり、鳥取香瓔会代表の村上千砂さん(鳥取書道連盟副会長)が手ほどきしました。定員いっぱいの20人が参加しました。

古代の日本には、「話しことば」だけで文字はなかったといいます。奈良時代(710～784年)になって中国から漢字が入り、その「読み」で日本語を表すようになり、古事記や日本書記、万葉集はすべて漢字を使って書かれています。ただ、句読点がないため区切りが分からず、もっぱら五七調の和歌で使われたことから万葉かなと呼ばれました。平安時代(794～1185年)になると、万葉かなを崩してひらかな、カタカナが生まれ、使いやすくなりました。

さて、書道教室です。細筆の持ち方指導から始まり、手首を柔らかくするため、何度も丸模様やドジョウ絵、まの字やのの字書きの練習をしっかり行い、村上先生作のお手本を見ながら、万葉かな書道に挑戦しました。

題材は2つ。天武天皇の妃とされる額田王の「あ可ねさす　紫野ゆき　支免のゆき　能もりはみすや　きみ可そでふる」<あかねさす　紫野行き　標野(しめの)行き　野守(のもり)は見ずや　君が袖振る」>と大伴家持のいとこ大伴池主の「かすみ多徒　春の者しめを　希婦のこと　み無とおもへは　多のしとそ於もふ」<霞立つ　春の初めを　今日(けふ)のごと　見むと思へば　楽しとぞ思ふ>

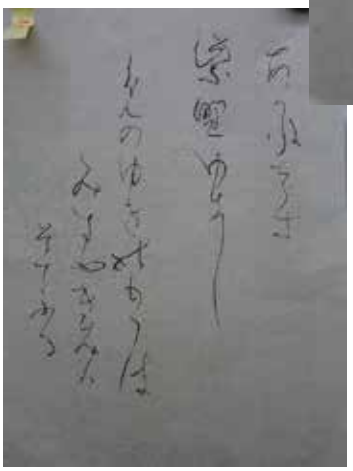
受講生は連綿と続く31文字に集中。柔らかい手首の筆づかいを心がけながら、お手本を参考に万葉歌人の作品を何度もなぞりました。

教室はわずか2時間でしたが、受講生全員、作品を提出できるまでになり、村上先生から「初めてのみなさんにもできました。感動しました」とねぎらいの言葉をもらいました。なかでも美保小学校2年生の大坪蛍香さんは、ひらかなの見本を見事に書き上げ、村上先生はじめ、大人の受講生から大きな拍手が贈られました。

村上千砂さん

満席の万葉かな書道教室

良くできました
「かすみ多徒…」



良くできました
「あかねさす…」

歌で地域を元気に　　柳井沙羅さん

2019年2月11日

JR松崎駅前、湯梨浜町の多世代交流センターゆるりん館で地域交流イベント「ハートフルコンサート in ゆるりん館」があり、地元のシャンソン歌手・柳井沙羅さんがゲスト出演しました。満員の70人が来場し、盛り上がりました。

ゆるりん館は民間のまちづくり会社(川田憲一社長)が昨年11月、地域のにぎわい拠点施設として整備したもので、日用品、惣菜、地場産品などを販売しているほか、地元食材を使ったレストランやパブリックビューイングなどで使用できるスペース、和室などを備えており、ヨガ教室やフォーラム、地域住民によるバザー「ゆるりん市」などさまざまなイベントを開いています。

今回のハートフルコンサートは、地元のハワイ温泉などの有志でつくるイベント集団 TEAM・OSEI が開いたもので、鳥取県にゆかりがあるプロ歌手の歌声で地域を盛りあげようという「地産地唱」運動として企画されました。今後は2カ月おきのペースで格安コンサートを開きたいとしています。

柳井さんはオリジナルの新曲「フンティのすすめ」をはじめ、「真っ赤な太陽」や「見上げてごらん夜の星を」など8曲を披露。パワフルな歌声と軽快なトークで、参加者を魅了。会場は一体となって盛り上がりました。「みなさんおひとりおひとりが輝く星です。自分を大切に、どんどん好きなことをして悔いのない人生をお送りください」と呼びかけていました。

参加者とふれあいながら歌う
柳井さん

柳井沙羅さん

多世代交流センター「ゆるりん館」

琴浦町社協に県社協会長賞　　河合鎮徳さん・村上俊夫さん・古川重樹さん

2019年2月12日

鳥取県社会福祉協議会（藤井喜臣会長）は倉吉市の倉吉未来中心で小地域福祉活動推進研修会を兼ねて県内市町村社協の広報誌コンテストを開き、琴浦町社協の「福祉だより」に県社協会長賞を贈りました。

県内社協は県民や住民に福祉活動の取り組み内容や情報を知ってもらうため、広報活動に力を入れているところですが、より分かりやすい、より見やすい、より親しみやすい広報誌づくりを目指して、県社協の音頭で初めてコンテストを開きました。

コンテストは社協関係者はじめ、民生・児童委員やボランティア、まちづくりなど地域活動に携わっている人が集まる研修会場で行い、事前審査で残った3つの広報誌を出席者の投票で最終審査しました。

事前審査は県社協広報アドバイザーの村上俊夫（元日本海新聞論説委員長）、古川重樹（元日本海テレビサービス社長）、勝原公一（元日本海新聞西部本社代表）の3氏が①地域密着力②人間力③未来力④企画構成力⑤表現力―の5項目で行い、智頭町社協の「志あわせ」、琴浦町社協の「福祉だより」、南部町社協の「社会福祉だより」を選びました。

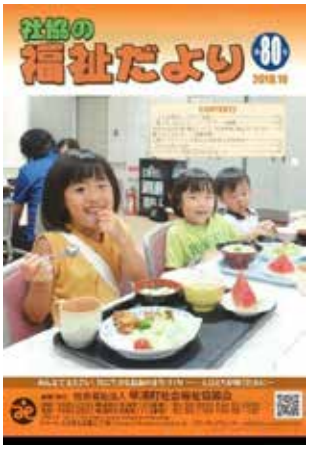
最終審査は3社協の編集スタッフが、それぞれの特徴や工夫しているところなどを発表しました。その結果、投票総数151票中、琴浦町社協が最多の58票を獲得し、県社協会長賞に決まりました。智頭町社協は審査委員長賞、南部町社協は審査員特別賞、毎月広報誌を発行している倉吉市社協と境港市社協には敢闘賞が贈られました。

琴浦町社協の「福祉だより」は、写真や文字のバランスが適切で、伝えたいことがよくわかり、読みやすい紙面づくりが評価されました。

研修会は琴浦町の伯耆稲荷神社・河合鎮徳（やすのり）宮司の講演「地域が今よりもっと元気になるために」がありました。河合宮司は教員時代、大山町香取分校で少年少女野球団を指導するなかで、地域が団結していった様子を実演交じりで紹介。「それぞれの地域には地域を元気にする起爆剤があります。それを探して納豆のように団結して粘ってやれば、うまくいくようになっと一です」と説きました。香取分校の野球団の話は、河合さんの友人、歌手・さだまさしさんの「吾亦紅」にあり、「小さいながらも我もまた紅なり」と歌っています。河合さんは講演のほかに、「いい日旅立ち」や「秋桜」などのフォークソングを披露しました

河合鎮徳さん

県内社協の広報誌コンテストで受賞したみなさんと主催者（後列左から２人目が古川重樹さん、その隣りが村上俊夫さん）



鳥取県社協会長賞に選ばれた琴浦町社協の広報誌

言葉の力で、元気に笑顔に　　石川達之さん

2019年2月14日

鳥取市倫理法人会(樹下良太郎会長)のモーニングセミナーが鳥取ワシントンホテルプラザであり、オフィスうたことば代表の石川達之さん(湯梨浜町)が「人を生かす言葉の力」について話し、20人余りが聴講しました。

石川さんは元消防官。現職のころから「歌う消防士」として知られ、方言ソングの「疑問」シリーズはじめ、「鳥取牛骨ラーメン応麺歌」「梨のうた」など240曲程度をつくって、山陰はもとより、全国各地で笑って泣ける歌入りの講演を続けています。近年は地震などの被災地支援、学校などでの心の健康講演会や人権講演会が増えているそうです。

この日のモーニングセミナーでは、事件事故による救急現場での体験をもとに、命の尊さや心の病気予防の大切さなどについて説きました。「人は死に直面して必死に生きようとする。その生命力はすごい」、「人の幸せはつかむものではなくて気づくもの」、「心の病気予防が健康の秘訣」、「何気ない言葉が人の命を奪ってしまうことがある。人を元気にしたり笑顔にするのも言葉。元気になる言葉遣いを」―など、事例を交えながら話を進め、笑いあり、涙あり、歌ありの感動講演でした。

「企業に倫理を　職場に心を　家庭に愛を」目指す倫理法人会は全国で6万5千社、鳥取県では約400社が加盟し、モーニングセミナーで異業種交流、勉強会などが行われています。

石川達之さん

鳥取市倫理法人会のモーニングセミナー

モーツアルトと幸せ運動　　杉原弘一郎さん

2019年2月20日

湯梨浜町高齢者クラブの東郷支部女性研修会が羽衣会館であり、日本音楽熟成協会理事長の杉原弘一郎さん(米子市文化財団理事長)が「健康生活にチャレンジしましょう」と呼びかけました。約80人が聴講しました。

日本音楽熟成協会は2003年夏に誕生しました。モーツアルトの音楽がヒトの右脳開発に有効と気づいた杉原さんが仲間とともに始めた活動です。モーツアルトの楽曲をバナナやトマトジュース、日本酒、ニワトリなどに聴かせたり、会社や工場の BGM で流したりすると、おいしくなったり、産卵率が向上したり、ミスやストレスなどが減ったりするそうで、鳥取県内300の事業所が活動に参加しているといいます。

杉原さんは熟成協会の現状を報告するとともに、右脳にはモーツアルトの楽曲にとどまらず、小川のせせらぎ、小鳥のさえずり、木々のささやきなどの自然の音に加え、4，000～8，000ヘルツの高音の演歌も良いそうで、「健康のために、大いに歌いましょう」とカラオケを勧めていました。

話は食べ物や体の健康へ。高齢になると、食べ過ぎに注意し、1食抜くのが消化や体に良いようです。杉原さんは朝 4 時に起きて 1 時間ほど自宅で運動するそうで、猫背にならないように、両手を真っすぐにして後ろ向きに200回ほど力強く振るそうです。その時の掛け声が「ついてる！　幸せ！」。参加者は早速、杉原さんの指導で「幸せ運動」を実習しましたが、会場は大声とともに元気になりました。

杉原さんによると、史上最強の食べ物は6片ニンニクとエゴマ油。ニンニクは2～3分ゆでるだけで、臭気が抜け、成分そのままの食べやすい健康食品になるといいます。また、玄米、大豆、小豆あん、熱かんの日本酒など体温を上げる食品がお勧めで、体温を36．5度以上に保つとがん予防になるらしいと話していました。

最後に杉原さんは、「牛乳を飲んで筋肉を強くするのは大切だが、隣の人に親切にすること」が長生きの秘訣と説き、「奥様にはありがとうを忘れないで。心の持ち方はいつも前向き」と強調していました。

「ついてる！幸せ！」の掛け声とともに…

杉原弘一郎さん

湯梨浜町高齢者クラブの女性研修会

心と体の健康講座　　のばなの会

2019年2月22日

湯梨浜町社会福祉協議会（山田一男会長）はハワイアロハホールで「ふれあい・いきいきサロン世話人交流研修会」を開き、県東部で活躍する認知症予防集団「のばなの会」から心と体の健康について学びました。

町社協によると、町内のサロンは71カ所あるそうで、若い人の参加が増えて多世代交流の場になっているといいます。研修会にはサロンの運営に励む地区長、公民館長、民生児童委員、福祉推進員、サロン世話人など53人が集まり、経験を交流しました。

ゲストに招かれたのは、老人会や介護施設などで慰問活動をしている「のばなの会」（荻原元春代表）。萩原代表は鳥取市面影 1 丁目のサロン活動「笹百合会」の活動を紹介。「家にこもらず、仲間を広げることで、話題や活動の輪が広がり、地域が元気になっていきます。他人の悪口は言わない、楽しくやるのがサロン活動の秘訣です」と報告していました。荻原代表はフォークソングクラブ TOTTORI の初代リーダー。得意のフォークソングも披露しました。

また、のばなの会のリフレクソロジスト（足裏マッサージ）で介護予防指導士の岩村啓朗さんが、イスに座ったままできる「寝たきりにならない、転ばない」ストレッチ体操を指導。「猫背を防ぎ、筋肉トレーニングで血流をよくすることが大切。若返ります」と励まし、ストレッチ体操のサロン活動への導入を勧めていました。

荻原元春さん

岩村哲朗さん

湯梨浜町の「ふれあい・いきいきサロン交流会」（ハワイアロハホール）

鳥取・街なか美術展　　岡村洋次さん

2019年2月23日

まちを歩けば、文化に出会う―。鳥取市の商店街で店先やウインドウに美術作品を展示し、まち歩きを楽しんでもらう街なか美術展が始まりました。この日は鳥取出身の孤高の自由律俳人・尾崎放哉の句碑の原書が展示され、買い物客を楽しませました。

尾崎放哉(1885～1926年)は日本を代表する俳人です。季語や形式にとらわれない自由律の名句を多く残しており、代表的な句に「咳をしても一人」、「入れものが無い両手で受ける」などがあります。

その顕彰運動は放哉の会(会長・柴山抱海鳥取県書道連合会長)が中心になって続いており、平成27年の放哉生誕130年には市内36カ所に119基の句碑を建立しました。日本を代表する書家たちが揮ごうした句碑で、その原書もこのほど掛け軸になりました。特定の俳人の句で100を超す句碑が市内あちこちに林立している風景は世界でも珍しく、鳥取市商店街振興組合連合会(渡辺博会長)は「鳥取の宝」を売り出さない手はないと、街なか美術展を思い立ちました。

美術展には鳥取本通、若桜街道、二階町、智頭街道、瓦町、太平線通り、新駅前地区―7つの商店街の56店が参加。それぞれのウインドウや店内に放哉の句の掛け軸をかけ、おひなさまなども飾って、買い物客や道ゆく人の目を楽しませました。放哉の会の事務局長・岡村洋次さんのガイドもあり、鳥取弁に彩られた放哉の句や日本最高峰の書道家たちの漢字や仮名文字の力作、筆づかいを解説していました。

おひなさまと放哉の書がウインドーを飾る

岡村洋次さん

店のなかにも放哉の書（こむわかさ）

奇跡の男に学ぼう　　石山雅章さん

2019年2月28日

鳥取市倫理法人会(樹下良太郎会長)の経営者モーニングセミナーが鳥取ワシントンホテルプラザであり、市内外から120人余りが参加して、中国の砂漠緑化に生涯をささげ、奇跡の男と呼ばれた鳥取大学名誉教授の遠山正瑛さん(故人)の偉業に学びました。鳥取市の地域プランナー・石山雅章さんが講話しました。

遠山さん（1906～2004年）は山梨県出身。京都大学卒業後、鳥取大学で砂地農業に取り組み、「不毛の砂漠に農作物はできない」という常識を破って、日本初のスプリンクラーを導入してメロンやイチゴ、ブドウ、ラッキョウなどを栽培し、日本の砂地農業、砂漠緑化の第一人者となりました。

退官後は中国の砂漠緑化に取り組みます。「砂漠緑化は食糧危機を防ぎ、世界平和への道になる」という信念のもと、「やればできる、やらなければできない」と訴え、黄河流域の緑化に乗り出しますが、失敗を重ねます。遠山さん84歳の時、中国も本気になり、内蒙古自治区のクブチ砂漠でポプラの木を植えることになりました。日本からはボランティアや資金が集まり、およそ10年間で300万本のポプラを植え、不毛の地に緑の農地や湖ができました。遠山さんは国連の「人類に対する思いやり市民賞」、アジアのノーベル賞といわれる「ラモン・マグサイサイ賞」などを受賞し、97歳で亡くなりました。

この中国の砂漠緑化運動に呼応して、倫理法人会も「地球倫理の森」づくりを始め、これまでに延べ2，500人の緑化隊を派遣し、約43万本のポプラを植林してきたといいます。遠山さん没後15年を記念して、遠山さんと交流があった石山さんから「不可能こそチャンス！　可能性は探し出すもの」という話を聞きました。

石山さんは自作のDVDで「奇跡の男」遠山さんの功績を報告するとともに、「世界は可能性に満ちている。それを見つけ出す努力さえすれば、必ず未来は開けてくる」「考えること、考えてよいと思ったら、やること。考えてもやらなければダメだ」など遠山さんの語録や生きざまを紹介しました。石山さんは「鳥取砂丘に遠山先生を顕彰したり、学ぶところがないのが残念です」と訴えていました。

石山雅章さん

「奇跡の男」故・遠山正瑛さん

遠山語録と中国沙漠開発日本協力隊

生涯現役でいられる幸せ　　のばなの会

2019年3月6日

岩美町小田地区の人権講演会が地区公民館であり、認知症予防集団・のばなの会（荻原元春代表）が講話と歌と体操で心と体の健康づくりを指導しました。地域の高齢者約30人が参加しました。

のばなの会は心と体の健康づくりを目指して、介護予防指導士や食生活改善推進員、ドッグトレーナーなどが4年前につくったもので、会員は現在15人。鳥取県内はもとより、岡山県や兵庫県などの老人施設や老人会、サロン、病院の緩和ケア病棟などを訪ねて活動しています。

この日は荻原代表が「高齢者の人権」について話すとともに、ギターとオカリナで懐かしの歌を指導。介護福祉士の西田清美さんが腹式呼吸法や介護予防体操を紹介しました。

荻原代表は認知症になった親の介護体験をもとに、「要介護者が出ると、共働きが普通の鳥取では家族の形が変わります。自分のことは自分でする、生涯現役でいられることは幸せなことです。子や孫は一生懸命生きている親やおじいさん・おばあさんの姿を見守っています」と紹介し、「高齢者は軽い体操やウォーキング、30分の昼寝、趣味や仲間づくりなどが大切です」と訴えていました。

西田さんは血流をよくする腹式呼吸法や肩こりを防ぐ軽い筋トレを指導し、「毎日続けることがコツです」と無理のない有酸素運動の効果を説明しました。参加者は気分がほぐれたところで、「上を向いて歩こう」「おぼろ月夜」などを合唱し、楽しいひと時を過ごしました。

荻原元春さん

腹式呼吸法を指導する西田清美さん

解明進む占領下の鳥取県　　小山富見男さんら

2019年3月9日

鳥取県公文書館と鳥取市歴史博物館は県民参加で「占領期の鳥取を学ぶ会」をつくり、歴史の空白がある太平洋戦争直後の鳥取県の解明を進めていますが、平成30年度の活動報告が市歴史博物館であり、1947年（昭和22年）に全国で初めて鳥取市で中学生の模擬選挙が行われたことなどが分かりました。鳥取県社会福祉協議会・とっとりいいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

「占領期の鳥取を学ぶ会」は平成29年7月に発足。県公文書館が入手した進駐軍の軍政隊レポートをもとに、県内の政治行政・公衆衛生・公共福祉・労働経済・教育などを調べています。レポートは英文で1946年8月～49年11月の3年4カ月分、約700ページに及び、県民がボランティアで翻訳しています。

事務局によると、平成30年度は10回開き、延べ130人余りで1947年5月～1948年2月の10か月分、約75ページを解読したといいます。

その主なトピックは、県の水産課長だった西尾愛治さんが初の民選知事になったこと、外地からの引き揚げに伴うヤミ市や列車内のヤミ取引の取り締まり、新制中学の発足と新しい教科書の配布状況、供出米の絶対確保運動、天皇行幸への対応―など。

そのうち、公民教育の一環として、軍政部の提案で鳥取市で「少年少女週間」（市長・議員の模擬選挙）があり、男女7人の市長候補による街頭演説が実施されたほか、市議36人も選出されたといいます。全国初の試みで、軍政部は高く評価したそうです。また、1947年11月27日の天皇行幸に備えて、奉迎場（公設グラウンド、現在・県立博物館敷地）の清掃活動に鳥取市内の小学生数百人が動員されましたが、軍政部は教育目的以外の児童の利用は不当として中止させたといいます。

日本海新聞によると、鳥取の天皇行幸では、お召列車が鳥取駅を発車した後、奉迎者が陸橋を一気に駆け下りたため、なだれ事故が発生し、33人の死傷者が出ていますが、事故の再発などが懸念され、1948年中の行幸は中止されたといいます。県史編さん委員の小山富見男さんは「近現代史の研究に新聞は欠かせません。軍政隊レポートと地元紙の併用で、占領期の鳥取を解明しなければ」と話していました。

活動報告会では神戸大学大学院教授（国際文化学）・長志珠絵さんの「占領期の地域史資料とGHQ」について講演があり、地方を見ている軍政部資料は地域史解明に欠かせないと指摘していました。

小山富見男さん

「占領期の鳥取を学ぶ会」の活動報告会場

鳥取県衛生部作成のネズミ駆除を呼びかけるポスター（昭和２３年頃）

ノリノリ…鳥取マラソン　　鳥取ベンチャーズ

2019年3月10日

鳥取マラソン2019が鳥取市の鳥取砂丘山陰海岸・因幡万葉の里マラソンコース(42．195km)であり、過去最多の3，717人が力走し、高山直哉選手(神奈川県・伊勢原市役所)が大会最高記録で優勝しました。沿道は盛り上がり、大会を支えるボランティアも過去最高の650人を超え、フィニッシュのコカ・コーラボトラーズジャパンスポーツパーク陸上競技場では、ベンチャーズサウンドや傘踊りが選手を激励しました。

日本海新聞によると、レースはマラソン初挑戦の高山選手(25)がスタート直後から抜け出して一人旅を続け、そのままゴールに飛び込んだといいます。曇天、小雨、最高気温13．5度の好コンデションに恵まれたこともあって、タイムは大会新記録の2時間22分23秒という立派なものでした。

陸上競技場ではゴール近くに応援ボランティアが陣取り、入れ代わり立ち代わりで歌と踊りと演奏を繰り広げ、ラストスパートの選手に声援を送りました。

出演したのは、シニアバンク登録のおやじバンド「鳥取ベンチャーズ」をはじめ、デュオ歌手「みほ・あいみ」、傘踊り「踊乱華(おどらんか)」、チアダンス「レインボーとっとり」、よさこい踊り「チーム満天星(どうだん)」―の5団体。

トップを切って鳥取ベンチャーズが「ベンチャーズメドレー」を演奏し始めると、先頭の高山選手が競技場に姿を見せるタイミングの良さ。鳥取ベンチャーズが「ドライビングギター」「星への旅路」「ダイヤモンドヘッド」など 8 曲を一気に演奏するうちに、上位選手たちが続々とゴールインしました。傘踊りの踊乱華は「きなんせ節」に加えて、24時間テレビでおなじみの「負けないで」を披露。選手たちも手を振って声援にこたえ、笑顔でノリノリでした。

鳥取ベンチャーズ代表の宮部兼寿さんは「全国からたくさんの方がおいでになり、鳥取に元気を運んできてくれるのに、知らん顔はできんでしょう。これからも応援演奏、続けさせていただきますよ」と元気でした。

鳥取ベンチャーズのテケテケ・サウンドで選手はラストスパート！

傘踊りで選手の健闘をたたえる踊乱華のみなさん

みんなで楽しく生涯学習　　いけばな小原流、民踊きくの会など

2019年3月10日

今年で12回目になる鳥取県立生涯学習センターの「まなび・ふれあい交流会」が3月8日から3日間、鳥取市の県民ふれあい会館であり、延べ2，600人が参加し、会場は大にぎわいでした。シニアバンク登録のみなさんも体験教室やステージ発表でイベントを盛り上げました。

まなび・ふれあい交流会は、生涯学習スクール「まなび」の講座や教室（手工芸、絵手紙、華道、書道、語学、ダンス、踊りなど）の学習成果の発表会です。47団体が参加しました。

体験教室もあり、シニアバンク登録のいけばな小原流や俳句教室（講師：椋誠一郎さん）など19のブースに、多いところで約70組の家族連れなどが体験に訪れました。このイベントをきっかけに「まなび」の教室に通う人も多く、生涯学習の輪が少しずつ広がっているようです。

ホールではステージ発表があり、オカリナや大正琴、ストリートダンスなど16団体が発表しました。シニアバンク登録の民踊きくの会は「かりゆし太鼓」など3曲を披露。また、荻原恵子さんが講師を務めるレッツフォークダンスは「ホラ・ベケ」（ルーマニア民謡）などを紹介。それぞれ曲や踊りに合わせた華やかな衣装で観客を魅了しました。

ロビー会場ではミニコンサートがあり、吟詠や朗読、楽器演奏など8団体が発表しました。シニアバンク登録の「のばなの会」は「みかんの花咲く丘」など4曲を手話と合唱で、ポップス尺八の TERU 功山（本城義照）さんは「ひこうき雲」など6曲をそれぞれ演奏しました。だれもがよく知っているポップスや歌謡曲などとあって、観客はくぎ付けでした。

TERU 功山（本城義照）さん

俳句教室の作品

レッツフォークダンス

参加者をお茶でおもてなし

民謡きくの会

にぎわう「まなび・ふれあい交流会」

やっぱり逆さが面白い　　小谷博徳さん

2019年3月10日

岩美町小田地区の給食ボランティア「小田かきつばたグループ」は、地区公民館に元高校教師で「世の中逆さが面白い」の著者、小谷博徳さん（日野町）を招いて人権講習会を開きました。小谷さんは母親の介護体験や赤の他人のみとり体験などを紹介し、自分のことより世のため人のために生きる〝逆さの生き方〟を勧めていました。

小谷さんは日野産業高校（現在・日野高校）の元教師。地元に伝わる荒神神楽を残すため郷土芸能部をつくり、やがて全国大会の常連校になりました。部活に励んだのは小・中学生のころに不登校だった子供たち。その体験を「世の中逆さが面白い」という本にしました。小谷さんはいま町議会議長、里山元気塾長、日野ボランティアネットワーク代表など公職多数。熱血人生を続けています。

この日、小谷さんは「人権とは分かっているが、ややこしい」というテーマで話しました。「人が人として生きる権利、それを侵せば人権侵害。男性が女性に声をかける。好かれていればよいが、嫌いならセクハラになる。むやみに異性に声をかけてはいけない世の中になりました」と前置き。建前が幅を利かす中で、本音と人情の大切さを説いていきました。

神楽指導の体験をもとに、「いじめられっ子や不登校、この子たちの人権は、だれが守るのでしょう。その灰色だった学校生活が神楽を練習することで一変しました。潜在能力が輝きだしたのです。みなさんは輝いていますか。伴侶選びに失敗したと反省していませんか」と問題提起するとともに、プラス思考への転換を勧めました。

母親の介護体験からは、優しくすることを学んだといいます。「下の世話は女性の聖域。おおむね長男の嫁さんが面倒を見ますが、プライドの高いお母さんは寄せつけません。紙パンツを勧めても、受けつけません。そのうち、失敗が重なります。家族はさじを投げ、お父さんが優しく接することになります。その後は『お父さんがいい』となりました」「介護にゴールはありませんが、ぬれていてもいなくても、１日最低４回、紙パンツを替えてあげることで、ストレスの少ない、寝たきりの生活をさせることができました」と。

刑期を終えて出所した身寄りのない赤の他人の身元引受人となり、みとったこともあるそうです。その人はすい臓がんで亡くなりますが、直前に病室に呼ばれ、「これで天国へ送ってほしい」と、まとまったお金を渡されたといいます。弁護士や病院などと協議し、葬儀代や医療費や寄付金に使わせていただいたそうで、みんなに感謝されながら見送ったといいます。いろいろな人生体験をもとに、小谷さんは「我欲を捨て、世のため、人のため、家族のため、自分のために生きれば、人生は開けてきます。考え方を逆さにして生きていきましょう」と強調していました。

小谷博徳さん

岩美町小田地区の人権講演会

伯耆国たたら物語　　杉原幹雄さん

2019年3月12日

近代稲作農業の父・中井太一郎の顕彰を進める倉吉市の小鴨シニアクラブ協議会は、小鴨公民館で「地域をおもしろく」講座を開き、「伯耆の国たたら顕彰会」の杉原幹雄さんから「太一車」の基礎になった奥日野と東伯耆のたたら物語を学びました。

杉原さんは明治期まで日本の鉄生産を担ってきた奥日野や中国山地のたたらの歴史を紹介するとともに、砂鉄や木材を大量に使うたたら製鉄の仕組みを解説しました。「伯耆国たたら顕彰会」のこれまでの調査で、日野郡など西伯耆で500カ所余りのたたら遺跡を確認しており、木炭を求めてたたら場がひんぱんに移動したこと、砂鉄採取のためのかんな流しで、あちこちの山が手作業で崩されたことも紹介しました。

それによると、江戸時代の日南地区ではかんな流しで新田の造成が進み、元禄のころ9，820石だったコメの生産量が、幕末には13，541石、1．4倍に増えたといわれています。また、たたら製鉄は土木や運送など多くの人手が必要で、かつての日野郡は住民の3人に2人まで、たたら関連で生計を立てていたそうです。

ただ、日本の近代国家建設に伴い、鉄づくりは鉄鉱石と石炭の洋式製鉄に移ります。奥日野の鉄づくりは日野町根雨の近藤家に集約され、近藤家は伯耆町二部に近代工場・福岡山鉄山を整備し、かつてない鉄生産量で日露戦争などを支えましたが、コストの安い八幡製鉄所の本格稼働で、大正10年についに工場を閉じました。地域経営の先頭を走ってきた近藤家は、鉄づくりをやめた後も農地造成、製炭、製薬(木酢液)などで地域を支えてきましたが、苦労の連続でした。

さて、奥日野の鉄づくりの歴史は、鳥取・島根県境の船通山を舞台にしたヤマタノオロチ神話を起源に、鎌倉時代の印賀鋼生産などへ発展していきますが、倉吉市関金町の小鴨川・矢送川流域も奈良時代から有数の鉄生産地だったことが知られ、小鴨氏など有力氏族のもとで多くの鋳物師集団がいたといいます。この鉄文化が稲扱き千歯などの農機具製造をもたらし、倉吉の千歯は幕末から大正期にかけて全国市場を席巻する勢いでした。その延長線上で誕生したのが中井太一郎考案の水田中耕除草機「太一車」です。稲作の雑草取り、腰を曲げての重労働から農家を解放し、増収をもたらしました。

杉原さんは「伯耆国のたたらの歴史や物語を生かして、太一郎の顕彰や大河ドラマ化の運動を進めていただければ、ありがたい」と、地域づくりの連携を呼びかけていました。

杉原幹雄さん

かんな流しで山を崩す。写真中央と左下に人影が見える（日南町阿毘縁の深坪）

伯耆安綱の伝承を伝える看板が設置された
（平成３１年３月１９日）

かんな流しが行われていた日南町深坪に看板が設置された
（平成３１年３月１９日）

お化粧でルンルン　　岸本美代子さん

2019年3月14日

鳥取市の障がい者支援施設・白兎はまなす園（杉岡淳一園長）で化粧と身だしなみ講習があり、シニアバンク登録の岸本美代子さんが「化粧をすれば、心も体も元気になり、表情が美しくなります」と、入所者に美しくなるコツを伝えました。

白兎はまなす園は心などに障がいがある人の入所・通所の授産施設で、菓子やケーキなどの製造販売や軽作業受託などを行っています。日ごろ社会との交流が少ないことから、入所者のマナー講習を開いており、今回は化粧と身だしなみをテーマに智頭町の家庭教育支援員で元美容師の岸本さんを講師に招きました。20～70代の8人が受講しました。

岸本さんは「朝、顔を洗って20分後、顔が突っ張るか、しっとりしているかチェックしましょう」、「顔のシワやシミは栄養や水分やコラーゲンなどに左右されるので、化粧品が必要になってきます」、「鏡で自分の好きな顔を覚えておきましょう」、「気分や筋肉が緩むと、すぐ二重あごになってしまいます。ペットボトルをくわえて持ち上げる練習をしましょう」など、化粧の前の心構えを説きました。

いよいよ実習です。受講者は化粧水、乳液、下地クリーム、パウダー、まゆ墨、アイシャドー、ほお紅、口紅の順に化粧していきます。岸本さんは一人ひとりをチェックしながら、「まゆ山は小鼻と黒目の延長線上がベストです」、「口紅の色は年相応のものを選びましょう」などとアドバイス。あちこちで「キレイキレイ」、「上手上手」と歓声が上がっていました。

化粧の後、受講者はブラッシングで髪を整え、美容院並みのマッサージ方法も学びました。「先生、楽しかったです。きょう一日、化粧したままで仕事をがんばります」。お礼と感謝の言葉が続きました。

乳液でお肌をしっとり

岸本美代子さん

きれいになりました

倉吉でよみがえる山上憶良　　池本一郎さん・多田典子さん・倉益敬さんなど

2019年3月16日

倉吉市教育委員会制定の山上憶良短歌賞の表彰式が倉吉市の伯耆国分寺跡近くの社公民館であり、鳥取県からは小学生の部で山本善太郎さん（倉吉市・上灘小学校6年）の「おやじギャグ　すべりすぎだよ　お父さん　すべったところが　でもおもしろい」が憶良賞に選ばれました。

山上憶良短歌賞は平成24年から始まり、今年で7回目です。「貧窮問答歌」で知られる万葉歌人の憶良が716年から4年間、伯耆国守でいたことや全国に倉吉市を知ってもらうために制定したものです。憶良の詠んだ「しろがねも　くがねも玉も　何せむに　まされる宝　子にしかめやも」にちなんで、「家族」をテーマに短歌を全国公募しています。

今回は47都道府県から5，518首（うち鳥取県2，425首）の応募があり、京都大学名誉教授で短歌結社「塔」の前主宰者・永田和宏さんはじめ、シニアバンク登録の池本一郎さん（鳥取県歌人会顧問）、多田典子さん（短歌結社「国民文学」）、倉益敬さん（鳥取県歌人会長）らが審査し、小学生・中学生・高校生・一般の4部門でそれぞれの憶良賞、入選、佳作を選びました。

小学生の部以外の憶良賞は次のみなさんです。

「母の日に　直接言えない　ありがとう　液晶画面の　味気ない文字」（東京都・学習院女子中等科1年、新谷敬さん）

「姉ちゃんに　最近彼氏が　できたらしい　野球のルールに　詳しくなった」（福岡県・城南高校2年、岩永凌佳さん）

「二人して　荷を解き入れし　新居には　互いの家族の　写真も飾る」（岡山県・石川眞一さん）

応募数や入選数などが多かった明倫小学校（倉吉市）、学習院女子中等科（東京都）、倉吉農業高校（鳥取県）には学校賞も贈られました。

表彰を前に永田さんの記念講演「大伴旅人と山上憶良―心の交友」があり、「歌の心をわかりあえる仲間がいるのは最高の喜び」と伝えていました。100人余りの短歌ファンが聴講しました。

第７回山上憶良短歌賞の受賞者と選者のみなさん

山上憶良短歌賞の選者のみなさん
（左から３人目が永田和宏さん）

伯耆国分寺跡の歴史公園には山上憶良の歌碑や歴代憶良賞の歌碑が並ぶ

山陰初の私立中学創設者　　松本薫さん

2019年3月16日

北栄町中央公民館で郷土史入門講座があり、作家の松本薫さんが「私立中学創設にかけた豊田太蔵の生涯」について講演しました。約30人が聴講しました。

松本さんは米子市の小説家です。「TATARA」や「天の蛍～十七夜物語～」など鳥取県ゆかりの人物や歴史をテーマにした小説を書いています。2017年に鳥取中央育英高等学校の創立110周年を記念して、創設者の豊田太蔵にスポットをあてた小説「ばんとう」を発表しました。「ばんとう」とは太蔵の雅号「晩登」（晩になって暮れても登る、「大器晩成」の意）のことです。

松本さんによると、太蔵が私立学校設立に向けた情熱の原点は、1872年(明治5年)に施行された「学制」にあるといいます。その学制の理念は「すべての人が教育を受けるべきである」というもので、太蔵があらゆる場面で語った教育理念と重なっているそうです。

その私立中学設立には約30年かかっており、長い苦難の道でした。設立に向けて資金集めのための会ができたものの、やがて会員の大半が離れていきます。当時の文部大臣に直談判しましたが、受け入れられません。私立小学校として認可を受けていた育英黌(1906年創立)の入学者も激減し、ついに休校を余儀なくされ、地元住民からは「教育狂」と陰口をたたかれるなど苦難は続きました。

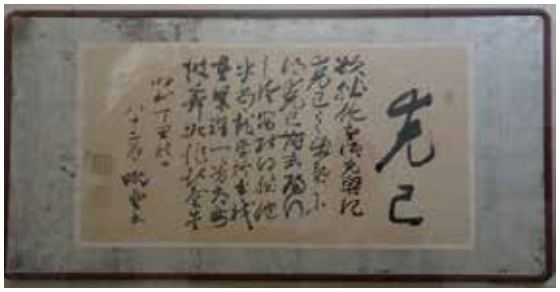
それでも太蔵は情熱を失うことなく、今度は鳥取市出身の奥田義人文部大臣に直談判しましたが、そこでも認可が下りず、次の一木喜徳郎文部大臣の時にやっと認可され、1914年(大正3年)に「鳥取県私立由良育英中学校」として開校します。山陰初の私立中学でした。

その育英中学校の講堂には、太蔵揮ごうの扁額「克己」が掲げられました。若者は大きな目標を持て、実行にあたっては強い意思を持ってすすめよとあり、生徒に熱い思いを投げかけています。

松本さんは「太蔵の思いは現代にも通じるものがある。こうした偉人が鳥取にいたことを誇りにし、後世に伝えていきましょう」と締めくくりました。

松本薫さん

小説「ばんとう」



私立育英中学講堂に掲げられていた
扁額「克己」（太蔵揮毫）

豊田太蔵

郷土史入門講座

美術館をつくろう！　　鳥取東部美術家協会

2019年3月24日

鳥取県東部の洋画家でつくる鳥取東部美術家協会(中尾廣太郎会長)の展覧会が鳥取市のとりぎん文化会館であり、たくさんの美術愛好者でにぎわいました。

東部美術家協会は平成28年春、若手養成と県都での公共美術館整備を目的に発足しました。会員の交流と作品発表の場である展覧会は3回目の開催です。ただ、65人で発足した会員は高齢化で徐々に減り、現在50人。今回は43人が出展しました。

懸案だった県立美術館は倉吉市への立地が決まってしまいましたが、中尾会長は「規模は小さくても、引き続き県都への美術館整備を求めるとともに、本県美術界発展のため、新しい県立美術館にも積極的に協力していきます。大切なのは子どもたちや未来のために、何をしなければならないかです」。息の長い活動をしていく覚悟です。

さて、展覧会です。実力者ぞろいとあって、見ごたえのある風景画、人物画、抽象画が並びました。

中尾会長は得意の人物画。ティーチャー・シリーズで背景に「とにかく生きねばならない」という詩人の言葉を添えています。八木俊實さんはスケッチ旅行をした「パリの街」、大塩忠雄さんはごつごつした画用紙を利用して、芦津渓谷の渓流を表現しました。西村貞子さんの「麒麟獅子」、野津清太郎さんの「祈り」は、それぞれ鮮やかな金色で主張し、抽象画では長あゆみさんが深い色を重ねて「巡る」、山根文子さんは黄色の「黄望」を発表しました。

鳥取東部美術家協会のみなさん

鳥取東部美術家協会展

元気です中部！　　中森清さん・高力弘さん

2019年3月25日

鳥取県中部の窯元、木工芸、竹製品、かすりなどの民芸品を一堂に集めて展示販売する「中部陶芸・民芸手しごと展」が倉吉市の日本海新聞中部本社であり、大勢のファンでにぎわいました。

鳥取県中部地震（2016年10月21日）の翌年から始まった「元気です中部！」の復興イベントで3回目です。今回は倉吉市と三朝町の7つの窯でつくる中部陶芸協会はじめ、倉吉絣保存会、倉吉はこた人形保存会など13の郷土民芸の出展がありました。

シニアバンク登録の上神焼の中森清さん（倉吉市）と木工の高力弘さん（琴浦町）も元気に出展しました。

中森さんは上神焼3代目。初代が昭和の初め、滋賀県・信楽から移り、日用雑器の窯を開いたのが始まりです。上神地区は陶土が豊富で、昔から素焼き、植木鉢、土管などが盛んにつくられていたところです。いまでは中森さんと上神焼上神山窯の山根芳子さんの2人が窯を守っています。

中森さんは古い伝統を受け継ぐとともに、新しい作品づくりに励んでおり、今回は150点ばかり出品しました。中部陶芸協会は手づくりの楽しさを広く知ってもらうため、希望者に窯を開放して陶芸教室を開いており、中森さんの窯でも近年、ツアー客が増えているそうです。上神焼の連絡先は☎0858－22－8389です。

高力さんは船上山のふもと、木地師の里近くで趣味の木工を楽しみ、板パズル、竹灯ろうづくりなどを子供たちに教えています。今回はバードカービングの力作も出品しました。ワークショップでは桜や梅、梨の枝を使った枝ボールペンづくりを指導しました。細い枝の真ん中に電気ドリルで穴をあける作業が難しいくらいで、だれでも簡単にオンリーワンのペンが作れるとあって、子どもも大人も大喜びでした。

中森清さん

高力弘さん

梅や桜の枝でボールペンづくり

にぎわう中部手しごと展

鳥取県の大河ドラマなう　　歴史大河ドラマを推進する会･伯耆伝承隊

2019年3月25日

鳥取県を舞台に！　歴史大河ドラマを推進する会（田中精夫･内田克彦共同代表）は鳥取市のNHK鳥取放送局を訪ね、比叡山･延暦寺、備前･金山寺、伯耆･大山寺の3山を復興した大山の名僧･豪円の大河ドラマ化を要請するとともに、鳥取県の偉人たちを啓発していくことを申し合わせました。

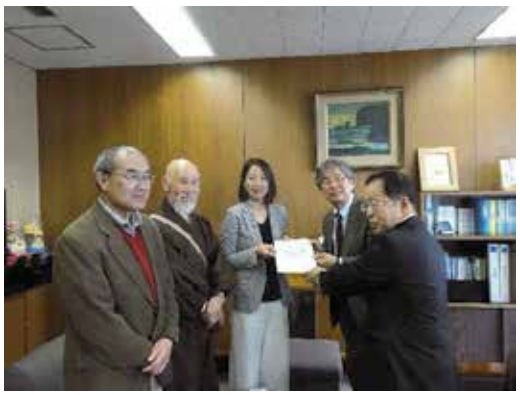
推進する会が選定した鳥取県の大河ドラマや朝ドラ候補は、①太平洋戦争をはさんで国際舞台で活躍した岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵･廉三と美喜②鳥取藩家老の娘で童謡「赤とんぼ」の作者、三木露風の母･碧川かた―。これに新たに大山の名僧･豪円が加わり3作品になったことで、改めてNHKにドラマ化の要請になったものです。

要請したのは田中、内田両代表と豪円を推挙している紙芝居グループ･伯耆伝承隊の吉島潤承副隊長と事務局の小椋弘美さん。小説「豪円和尚」（伯耆坊俊夫著）や豪円の歴史資料を鳥取放送局の熊埜御堂（くまのみどう）朋子局長に手渡すとともに、紙芝居「豪円和尚」の一節を披露。熊埜御堂局長はドラマ部に伝えると約束しました。

NHKの大河ドラマ候補は、安来市の山中鹿介など全国に40ほどあり、それぞれ官民挙げて誘致運動を展開中です。推進する会でも機運盛り上げのため、澤田節蔵･廉三と美喜の「三愛のクニへ」研究会、「赤とんぼの母」研究会をつくって、原作づくりや署名運動などに取り組んでいます。

その成果として、米子市の高橋亮さんが「米子文学」に「澤田家の人びと一二人の外交官とその妻たち」を発表するとともに、研究会代表の元高校教師･片山長生さんも脚本のベースになる小説を執筆中です。また、「赤とんぼの母」研究会も今秋、露風の生誕地･たつの市の市民劇を鳥の劇場（鳥取市鹿野町）に招いて合同公演する予定です。

伯耆伝承隊によると、豪円和尚の命日は6月5日。大山北壁を望む豪円山に豪円地蔵がまつられており、命日の日には毎年、大勢のボランティアが集まり、周辺の草刈りや清掃が続いています。また、シニアバンク登録者の協力で豪円和尚の紙芝居を英語や中国語や朝鮮語に翻訳し、大山周辺を訪れる外国人にも紹介することにしています。



NHK 鳥取放送局の熊埜御堂局長に鳥取を舞台にした大河ドラマを要望するみなさん

「三愛のクニへ」パンフレット

「大山の名僧豪円」パンフレット

「赤とんぼの母」パンフレット

山陰最古の水源地で桜まつり　　澤田勝さん･井口勉さん

2019年3月31日

鳥取市国府町、国の重要文化財･旧美歎水源地で桜まつりがあり、因幡の傘踊りやサックス演奏でイベントを盛り上げました。雪が舞うあいにくの天気でしたが、約100人が参加し、にぎわいました。

旧美歎水源地は1915年(大正4年)に山陰地方で初めて建設された近代水道施設です。それまでは、鳥取市民は袋川の水を飲料水にしてきましたが、安全で安心な飲料水が供給されるようになりました。この〝美歎の水〟は蒸気機関車や陸軍施設にも供給されるなど、鳥取市の発展に大きく貢献しました。

旧美歎水源地は1992年（平成4年）に廃止されますが、施設は当時のまま残っており、日本の近代水道施設の全体像を伝える貴重な施設として歴史的価値が認められ、2007年（平成19年）に国の重要文化財に指定されました。平成25年から5年をかけて保存修理が行われ、昨年から水源地の一般公開が行われています。保存修理1周年を記念して桜まつりが計画されました。

主催したのは美歎水源地保存会（澤田勝会長）。会長自ら得意のサックス演奏でおもてなし。名探偵コナンのメーンテーマや演歌「二輪草」など7曲を披露し、参加者は水源地に響くサックスの音色に聴き入っていました。地元に伝わる因幡の傘踊りもありました。荒天だったため、会場を屋内に移し、井口勉さんの音頭で「因幡大津絵」「おそ節」の2曲を手踊りで紹介しました。井口さんは安来節でも歌と三味線を披露しました。

桜まつりは水源地の原木しいたけ植菌体験･販売や施設ガイドツアーなどもあり、開花した桜とともに施設の歴史や魅力を知る機会となりました。

澤田勝さん

にぎわう桜まつり（屋内ステージ）

安来節保存会鳥取支部

旧美歎水源地（入口水道橋）

放哉をしのぶ　　放哉の会

2019年4月5日

「咳をしても一人」などの俳句で知られる鳥取市出身の俳人・尾崎放哉（1885～1926年）は4月7日が命日。その放哉忌を前に、尾崎家の墓がある興禅寺（鳥取市栗谷町）で「放哉をしのぶ会」がありました。

しのぶ会は「放哉の会」（柴山抱海会長）が開いたもので、2008年から毎年続いています。今年は俳句愛好者15人が参加。みんなで墓掃除をしたあと、僧侶でもある柴山会長が読経するなか、花と線香を手向け、放哉の冥福を祈りました。

献句会があり、1人3句ずつ詠み、以下の5句が好評でした。

桜どき寺の障子を開けておく

不器用に生きて僧衣の裾の砂

もう少し障子開けをく夕桜

花影を揺らし一鴉の飛び立てり

てふてふの見え隠れする放哉忌

「平成」最後の鳥取の桜は、雪の少ない暖冬で早咲きの気配でしたが、開花直前の寒気でスピードダウン。そのせいか、どこの花どころも歩調を合わせたように一斉に開花、満開になり、「春らんまん」を演出しました。今年の献句会は、満開の桜や新時代「令和」への期待や希望を反映した俳句が多く詠まれていました。

「放哉の会」の呼びかけで、鳥取市内には放哉の句碑119基が整備され、新たな観光コースになっていますが、柴山会長は「放哉をしのぶ俳句づくりや書づくり、句碑めぐりをさらに盛んにしていく」と決意を新たにしていました。

放哉の墓を掃除する参加者（興禅寺）

放哉忌の献句会

人も〝満開〟 鳥取の桜まつり　　ハッピー・ウクレレ・ハーモニー、鳥取ベンチャーズ

2019年4月7日

第30回「ふるさと鳥取桜まつり」が鳥取市の中心市街地、満開の袋川桜土手であり、大勢の花見客でにぎわいました。シニアバンクに登録の音楽バンドもがんばりました。

袋川の桜土手は、桜の大木200本ほどが1km 余りにわたってトンネルをつくり、鳥取城跡・久松公園、布勢運動公園などとともに鳥取を代表する桜の名所になっています。

実はこの桜土手、市民の熱い思いが詰まっています。大正時代には若桜橋～湯所橋で、市内の小学生が分担して桜の苗木360本を植え、自慢の桜土手をつくりました。ところが、鳥取大火（昭和27年）で大半の成木が焼けてしまい、これを見かねた鳥取大学卒業生の故・瀬川弥太郎さんが、昭和35年ごろから桜の苗木を送り続けて桜土手が復活しました。〝桜の恩人〟瀬川さんの顕彰碑は智頭橋の「きなんせ広場」そばにあります。

その志を継いで、市内の若者グループが始めたのが「ふるさと鳥取桜まつり」です。今年で30回になりました。市からの一部助成はあるものの、若者たちが実行委員会（岡本大明委員長）をつくり、協賛者を募り、資金集めする手づくりイベントを続けています。

まつりのメーン会場は「きなんせ広場」とその周辺です。今年のステージにはダンスとライブの16団体が集まりました。シニアバンクからは2団体が出演しました。鳥取ベンチャーズ（宮部兼寿代表）は「バッドマン」など20曲を元気よく演奏し、夜桜見物を盛り上げました。ハッピー・ウクレレ・ハーモニー（小幡潔代表）は「見上げてごらん夜の星を」「さくらさくら」などを歌い、演奏しました。

このほか、まつりでは自衛隊の活動パネル展、県内の学校で教壇に立つジャマイカの先生たちの国際交流、わらべ館の紙芝居などもありました。岡本委員長は「桜も古木になり、施肥や植え替えなどが課題になっています。官民連携して桜土手の景観を守り育てるまつりになるようがんばります」と抱負を語っていました。

にぎわう鳥取の桜土手

ハッピー・ウクレレ・ハーモニー

満開の桜土手、袋川には
カヌーが浮かぶ

しだれ桜の里で地域づくりを考える　　しだれ桜の里を育てる会･八東川清流クラブなど

2019年4月7日

倉吉市の伯耆しあわせの郷は日本最大級のしだれ桜の群植地として売り出し中ですが、しだれ桜の里まつりがあり、地域づくりの講演会や発表会などがありました。

多目的コミュニティー施設・伯耆しあわせの郷は平成5年の開館です。完成を祝って市内の篤志家からしだれ桜100本が贈られました。これを市民の宝として育てようと、平成26年に「しだれ桜の里を育てる会」ができ、補植やせん定、施肥などの育成作業を続けています。いまでは140本のしだれ桜が咲き誇り、日本最大級の群植地と自慢しています。

しだれ桜の里まつりは施設利用者が中心になって開きました。ペーパーグライダーやパステルアートなどのものづくり、リサイクル着物の即売、書道パフォーマンス、観桜茶会、苗木販売などがあり、桜見物の家族連れなどが楽しみました。シニアバンクからは鳥取・中部のものづくり道場が参加し、プロペラが回る原理や草木染などを手ほどきしました。

しだれ桜の里づくりを反映して、地域づくり団体の発表会もありました。発表したのは①万葉のふるさと国府創生会(上山忠久代表)②車尾まちづくり推進協議会(高野和男代表)③殿ダム水源地活性化推進連絡会(山崎豪太郎代表)④八東川清流クラブ(矢部博祥代表)⑤しだれ桜の里を育てる会(森和美代表)―の5団体。

このうち、八東川清流クラブの矢部代表は16年間の活動を振り返り、八東川のクリーンアップ大作戦は地元自治体や環境大学などと実行委員会をつくって取り組むまでになり、八東川が子どもたちの遊びや体験の場として復活してきたことを報告。今後はクラブ会員の若返りやプラスチックごみ対策が課題と話していました。

講演会もあり、隠岐島・焼火神社宮司の松浦道仁さんが、人口2，800人の西ノ島町にできたコミュニティー図書館「いかあ屋」が町民のたまり場になり、活気づいていることを報告しました。

活動発表する「しだれ桜の里を育てる会」

八東川清流クラブの矢部博祥代表

プロペラが回る原理を説明する早川元造さん

伯耆しあわせの郷はしだれ桜の里

手紙はひらかなで決まる　　西垣小夜子さん

2019年4月9日

鳥取市の勤労青少年ホームで春の教養講座が始まりました。実用ペン字教室はシニアバンク登録の西垣小夜子さん（日本教育書道研究会漢字師範）が「手紙が書けるまで」を指導しています。

教養講座は鳥取市教育福祉振興会が春夏秋冬の四半期ごと、3か月単位で開いており、材料費がいる華道や茶道を除いて受講料は無料です。35歳以下の働いている人ならだれでも参加でき、年間延べ300人が受講しているそうです。

今年の春は①骨盤メンテナンス②実用ペン字③リワインドセラピー④書道⑤華道⑥バランストレーニング⑦茶道―の7教室が開かれています。実用ペン字には15人が参加しました。3年前から鳥取市役所の文化交流課で働くドイツのアンドレコヴィッツ・マリーさんもいます。流ちょうな日本語で「日本語上手に書きたい」と張り切っています。

教室は鉛筆の持ち方と書く姿勢の指導から始まりました。「鉛筆の先が見えるように持ちましょう」「右胸の前で書きましょう」と西垣さん。次いでカタカナ、ひらかなの手本を見ながらポイント解説。「ほとんどの手紙の文字は漢字が3割、ひらかな7割。ひらかながきれいに書けると、美しい手紙になります」と、ひらかなの反復練習を勧めました。

西垣さんによると、ひらかなは漢字をもとにつくられており、「あ」は「安」、「い」は「以」、「う」は「宇」など、それぞれのルーツを知ることでバランスの良い字が書け、「う」「お」「な」「ふ」「む」などの点の位置は決まっているそうです。

今後は短い文章や封筒、はがきの書き方などを学びます。こんな教室を4回重ねて、6月には美しい手紙が書けるようになる運びです。

教養講座の問い合わせは勤労青少年ホーム（☎0857－24－1702）へ。

西垣小夜子さん

実用ペン字教室のみなさん

天狗のように羽ばたこう　　仁王堂茶楽会・米子福生凧の会

2019年4月14日

山陰道大山ICの近く、大山町宮内のカラス天狗像がある仁王堂公園で花の市があり、お茶会や凧（たこ）づくり、特産品販売などがありました。

地元住民などでつくる仁王堂活用プロジェクト(池田満正代表)が立ち上げたイベントで、仁王堂公園の桜のPRや施設利用を活発にするのが狙いです。シニアバンクから仁王堂茶楽会（横川佐津子代表）と米子福生凧の会（安井賢会長）が参加しました。

茶楽会の世話人・杉谷愛象さんによると、去年の2018年は豊臣秀吉の京都・醍醐の花見から420年、松平不昧公没200年に当たり、これを記念して仁王堂で流派、社中を越えてお茶会を開いたところ好評で、折々に「ぼてぼて茶会」を重ねてきたといいます。

この茶会が核になって活用プロジェクトに発展したもので、地元野菜や境港の海産物、伯耆町のそばなどが並び、公園の芝生広場では凧の会の指導で凧づくり、凧揚げが行われました。あいにくの花冷えの荒天でしたが、凧の会の星野章作さんらは大山下ろしの風を読みながら、畳よりも大きい大凧を元気よく揚げていました。凧づくりに参加した淀江小学校1年生の児童は、雨に負けないドラえもんの凧を完成させてごきげんでした。

仁王堂はかつて大山寺領の入り口に位置し、淀江港などに通じる坊領道のそばにあったといいます。その台地には現在、大山の守護神・カラス天狗の立像（台座を含めて高さ約11m、重さ約10t）が整備され、公園のシンボルになっています。大山町が平成9年、天空を自在に羽ばたくカラス天狗にあやかって、未来に羽ばたくまちづくりを目指してつくったものです。杉谷さんは「立派な公園を持つ私たちも羽ばたかなくては。これからも写真展や書道展など次々にイベントを展開していきますよ」と話していました。

大山を背に大凧揚げに挑戦する米子福生凧の会

カラス天狗像（仁王堂公園）

お茶を飲み、話も弾む仁王堂茶楽会

音楽が響くやまさと　　山郷ミュージックビレッジ･田中みつとしとその仲間たち

2019年4月20日

智頭町の志戸坂峠の近く、国道373号沿いの「R373やまさと」で山郷ミュージックビレッジの音楽ライブがあり、およそ50人が哀愁のトランペット奏者・田中みつとしさんとその仲間たちの演奏を楽しみました。

「R373やまさと」は平成24年に閉校になった旧山郷小学校を活用した複合施設。地区公民館や誘致企業のほか、地元住民による農家レストラン、菓子工房、木の工房などが入り、近く民宿も開業する運びです。智頭杉をふんだんに使った建物で、冷暖房完備の多目的ホールや図書室、会議室などを備えてコンサートや研修会などに貸し出しています。

山郷ミュージックビレッジは平成25年の誕生。世話人の葉狩健一さんによると、小学校の統廃合で沈むことなく、音楽が響くやまさとにしたくて仲間とともに結成したそうで、多目的ホールや近くのソバ店「みちくさの駅」などでジャズコンサートを重ねてきました。今回の音楽ライブは7回目。北栄町の道の駅などで活動しているトランペッターの田中みつとしさんとその仲間たちを招きました。

田中さんはトランペットの詩人といわれた故ニニ・ロッソの指導を受け、国内外で活躍。「にっぽんの詩」「漁火のトランペット」「そよかぜのトランペット」などのアルバムのほか、帰郷後は北栄町の町歌や音頭などをつくっています。

「R373やまさと」ではエレクトーンの干村ひろこさん(米子市)とともに、「慕情」「中国地方の子守歌」「砂に書いたラブレター」など、アンコール曲を含めて14曲を披露。テレビドラマの主題歌「野に咲く花のように」では仲間のひとり、大道具の隠樹肇さん(米子市)のリードで、会場はハミングで包まれました。葉狩さんは「見事な演奏で、みんなに喜んでいただき良かったです」と満足そうでした。

田中みつとしさんと干村ひろこさん

「音楽響くやまさとに」と語る
葉狩健一さん

トランペットとエレクトーンのデュオライブ
（R３７３やまさとのホール）

文章ある限り　　同人誌　米子文学

2019年4月23日

鳥取県西部の同人誌・米子文学(広沢虔一郎代表)は、米子市の本の学校で第75号作品の感想などを話し合う会を開きました。一般からの参加もあり、真剣で熱心な意見交換が続きました。

米子文学は昭和45年の発足、来年50周年になります。近年は年2回、同人誌を発行しており、平成30年春号が第75号になりました。その編集後記で、広沢代表は同人が年々減っていく現状を報告していますが、「お先真っ暗かというと必ずしもそうではない。ニュースやドラマはもちろん、今大流行の漫画本でさえも、みな文章のうえに立脚している。何も大騒ぎすることではない。自分の本当に言いたいことは、文章によらなければ、なかなか表現できないのである」と意気盛んです。

さて、第75号です。拝藤昇一さんは「米子駅と仲人売店」、広沢代表は「仏教の来た道」、南家久光さんは「石川ヤマト物語5」、高橋亮さんは「澤田家の人びと」の小説を寄せ、山根史郎さんは詩「印象」を発表しています。

このうち、高橋さんの「澤田家の人びと」は、400字原稿用紙に換算して364枚という大作です。岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三とその妻たちの物語です。鳥取県にゆかりある人物の歴史大河ドラマを推進する会が、その候補のひとつにしており、高橋さんも加わる「三愛のクニへ」研究会(片山長生さん主宰)の成果作品です。この大作を高橋さんはわずか5カ月で書き上げ、文献調査を重ねて作品発表しました。

節蔵・廉三は第一次世界大戦―満州事変―太平洋戦争の激動の時代に生きた外交官で、それぞれ国際政治の最前線で孤立化する日本、戦争へ突き進む日本、日本敗戦の悲劇、困難な国際社会への復帰などを体験し、見届けてきました。廉三の妻・美喜は終戦後、「混血孤児」救済に生涯を捧げました。

高橋さんはこうした「澤田家の人びと」の活躍を丹念に追い、ドキュメント風にまとめて作品にしました。近現代の世界史・日本史がよくわかり、2022年から高校教育に導入される「歴史総合」の副読本としても活用できそうで、今後の成り行きが注目されます。

米子文学はいつも同人を募集中です。小説、詩、エッセイ、評論などを発表したいと考えている人は、事務局(電話090－3889-7324)へ。

高橋亮さん

作品内容について語り合う
米子文学同人のみなさん

米子文学第７５号

広々とした豊かな世界を願う　　柴山抱海さん

2019年4月27日

奈良時代の因幡国司で万葉集の編集者とされる大伴家持を顕彰している因幡万葉歴史館（鳥取市国府町）で、鳥取県書道連合会長の柴山抱海さんが新元号「令和」を揮毫（ごう）しました。新元号が万葉集から採用されたのを祝って、万葉歴史館では「令和」特別展を開催中で、柴山さんの作品も展示しています。

柴山さんの揮毫は公開で行われ、およそ50人が見守りました。会場には万葉集の最後を飾る家持の祝い歌「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」のBGMが流れ、新時代への期待感がいっぱいです。

柴山さんは青谷町でつくられた手すき和紙（縦135cm、横163cm）2枚に、大筆を使って楷書で「令」「和」と揮毫しました。落款（かん）が入るまでわずか2分。迫真の一筆書きでした。

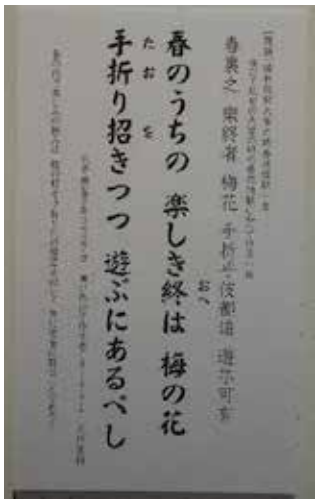
「広々とした心で、新時代が豊かな世界になるよう願って書きました」と柴山さん。揮毫のニュースを新聞で知り、倉吉市から駆け付けた京都大学名誉教授（東洋史学）の永田英正・迪子さん夫妻は「力強い筆さばきを見て元気をいただきました。新しい時代が始まるんだという気持ちになりました」と感謝、感激の様子でした。

柴山さんの作品は漫画家・里中満智子さんのイラスト「言霊の人・大伴家持」とともに、「令和」特別展で展示されています。その特別展では「令和」が万葉集のどこから採用されたのか、どのような意味なのか、だれの作品かなどを解説すると同時に、「令和」出典のもとになった「梅花の宴」に寄せて、家持の歌も紹介しています。

「春のうちの楽しき終（おへ）は梅の花　手折り招きつつ遊ぶにあるべし」（万葉集巻19、春のうちで楽しみの極みは梅の花を手折り、花の精霊を招いて、ともに遊宴にひたること）。酒好きだった父親・旅人の気持ちがわかる家持32歳の作品です。

学芸員の鎌澤圭伸さんによると、万葉集が新元号に採用されて以降、万葉歴史館を訪れる人は、これまでの2倍になったそうです。

柴山抱海さん



新元号「令和」出展のもとになった
「梅花の宴」に寄せた大伴家持の一首

揮毫の後、関係者みんなで記念撮影

作ってみよう！　　鳥取ものづくり道場･山根教子さん

2019年4月27日

鳥取市のわらべ館に木工や粘土や手芸などに挑戦する「ものづくりひろば」ができ、500人余りの親子連れがものづくりを楽しみました。

わらべ館のゴールデンウイーク恒例イベントで、今年で6回目です。子どもたちにものづくりの楽しさを体験してもらうとともに、県東部のクラフト作家交流の場になっています。

今回は①ビーズの指輪や腕輪づくり②ガラス片を使ったコースターづくり③ティッシュペーパーのランプシェードづくり④針金の動植物づくり―など12のコーナーができました。シニアバンク登録の鳥取ものづくり道場（瀬川和義代表）は6人で4つのコーナーを受け持ち、「う･ふ･ふ工房」の山根教子さんは粘土細工を担当しました。

鳥取ものづくり道場の竹笛づくりは、大北正昭さん（鳥取大学名誉教授）らが真竹を使ってウグイスの鳴き声が出せるよう指導しました。小学3年生の男の子は、歌口のある竹の接続に苦労しましたが、よい音色の竹笛が作れて満足そうでした。

いつも粘土細工でかわいい人形を作る山根教子さんは、この日はおはじきやボタンでカタツムリをつくり、リースに乗せる飾り物づくりを指導しました。アイスキャンディーの人気商品を模したキーホルダーが夏向きとあって、よく売れていました。

紙店のスタッフはティッシュペーパーと風船を使ってランプシェードづくりを勧めていました。ティッシュペーパーは1箱の半分程度を使いますが、でん粉のりで溶かしながら風船に張っていくと、和紙で作ったような球形ができます。これにひもや和紙の切り抜きを張り付けると、見事なランプシェードの出来上がりです。来場者の注目を集めていました。

女の子は光り物に熱中するなど、会場のあちこちで親子合作のほほえましい光景が見られました。

竹笛づくり

アイスのキーホルダーづくり

ランプシェードづくり

がんばれ若桜鉄道！　　ミンミンｃｈｉｅと森のくまさん

2019年4月28日

若桜町の若桜鉄道・若桜駅で、蒸気機関車（SL）をピンク色に塗り替えて「春色まつり」があり、キャラクターショーやステージショー、若桜名物のグルメテント、打ち上げ花火などでにぎわいました。

若桜鉄道のSLが期間限定でピンク色になるのは2016年からで4回目。鉄道や地域の活性化、話題づくりが狙いで、平井伸治知事も応援に駆け付けました。今年も全国から大勢の鉄道ファンや家族連れが訪れ、ポケモンのキャラクターとともに春色のSLを記念撮影していました。

若桜鉄道では観光列車に転用できるよう、列車を次々に更新、グレードアップしており、2018年のブルーの「昭和」号に次いで、この3月には柿色の「八頭」号を導入。「隼」号もラッピングをリニューアルしました。2020年春には新しく「若桜」号も入ってきます。

これらの列車で「春色まつり」にやってきたみなさんは、ピンクのSLへ、アンパンマンショーへ、ピンクのたい焼きや豚肉、ジビエなどが並ぶ名物グルメテントへと急ぎ、若桜駅は人であふれました。

ステージにはシニアバンク登録の「ミンミンchieと森のくまさん」バンドも出演しました。八頭町の薬剤師・西村知英子さんと石川昌則・平田達也さん（いずれも鳥取市）の3人組です。西村さんは若桜鉄道の応援ソングをつくっており、これまでに「若桜めぐり」「こころのふる里昭和」「カーネギーホーム丹比」「柿色列車八頭号」など7曲を発表しています。いずれも、ほっこりとさせるフォークソングで、ミンミン（三弦ギター）という和製楽器と澄んだ歌声で会場に幸せな気分を届けました。

ミンミン chie と森のくまさん

ピンクの SL とポケモンのキャラクター
とともに記念撮影

柿色の「八頭」号

網代の資産は海　　鳥取県漁協網代港支部女性部

2019年4月28日

岩美町の網代港で板わかめの復活を目指した「ワカメフェス」が開かれ、世界最大の板わかめづくりや地元魚介類の6次産業化イベント、山陰海岸ジオパークのPRなどがありました。シニアバンク登録の鳥取県漁協網代港支部の女性部もがんばりました。

「ワカメフェス」は地域おこし協力隊の提案で誕生しました。かつて網代の特産品だった板わかめ。その生産者が1軒だけになってしまったため、有志でワカメ部（則定希部長）をつくり、復活・再生させる旗を揚げました。これに呼応したのが県漁協網代港支部や地元自治会など。世界最大の板わかめをつくることになり、「ワカメフェス」実行委員会（清水博委員長）を結成するとともに、イベント費用30万円をクラウドファンディング（インターネット活用による資金調達）で集めました。

イベントの開会式で清水委員長は「網代の資産は海。獲れたものを加工して売る。本来の生業を活発にしていきましょう」と呼びかけました。板わかめ復活の〝のろし〟は網代港全体に広がり、イベント会場には地元産の魚介類や野菜、山菜、それらの加工品などが並び、大勢の人でにぎわいました。そして約30kgのワカメを使って、畳4枚分の板わかめを仕上げました。

ところで、網代港には県漁協網代港支部の女性部（下根鈴江部長）が運営する漁村カフェ「なだばた」があります。平成29年春にできました。地元魚介類をよく知るお母さんたちが、安くておいしい定食などでおもてなしをしています。港町なので井戸端ならぬ灘端。みんなが寄ってきてカニ丼のころには連日、行列ができる人気店で、6次産業化の気風あふれるところです。

「ワカメフェス」でも下根部長など6人がワカメしゃぶしゃぶを無料でふるまうとともに、ワカメご飯やワカメパン、ハタハタフライなどを販売し、イベントを元気づけました。「なだばた」のメニューに板わかめが登場する日も近そうです。

世界最大の板わかめづくりを見学

ワカメしゃぶしゃぶを振る舞う
県漁協網代港支部女性部のみなさん

大にぎわいの板わかめフェス

御代替わりは雅楽でお祝い　　鳥取雅友会

2019年4月30日

平成最後の夜、湯梨浜町の東郷湖近くにある伯耆一ノ宮・倭文神社（米原尊仁宮司）で、御代替わりを祝う雅楽の奉納があり、平和だった平成に感謝するとともに、新時代の繁栄を願いました。およそ200人が見守りました。

倭文神社は5月1日が例大祭です。今年は平成から令和への御代替わりとあって、宵宮で雅楽を奉納することにしました。雅楽は日本古来の音楽と中国などから伝わった音楽が融合して平安時代にできた古の音楽で、世界最古のオーケストラといわれています。貴族などが一子相伝で守り伝え、皇室の行事に欠かせないものとなっており、ユネスコの無形文化遺産にもなっています。

雅楽を奉納したのはシニアバンクに登録する鳥取雅友会（森川道弘代表）の15人です。10月の新天皇即位礼でも演奏される「太平楽」や「傾盃楽」「環城楽」、森川代表が竜頭をかぶって舞う舞楽「陵王」の4曲を厳かに優しく奏でました。演奏の合間には三谷広大副代表が雅楽に使う打楽器・弦楽器・管楽器を一つひとつ紹介するなど、雅楽の魅力を報告しました。三谷副代表は「御代替わりに、しかも一ノ宮さんに雅楽を奉納でき、光栄です」と感激の様子でした。

倭文神社は安産の神様として有名ですが、社伝によると、大国主命の娘・下照姫命が出雲から海路やってきて、安産指導や農業開発、医薬普及に努めたといいます。その墓とみられていた塚から一ノ宮大明神と刻まれた銅経筒や金銅観音菩薩立像などが見つかり、経塚は国の史跡に、出土品は国宝に指定されています。

鳥取雅友会のみなさん

国宝「銅経筒」のレプリカ

舞楽「陵王」も奉納

新時代「令和」に願いを込めて　　久松山を考える会

2019年4月30日

平成から令和へ―新時代への願いを込めて全国各地で祝賀ムードが高まるなか、鳥取市の久松山・鳥取城跡で祝賀イベントがあり、「令和」の電飾（イルミネーション）や尺八演奏などで盛り上がりました。

新元号イベントは久松山を考える会（亀屋至郎会長）や住みよい久松地区をつくる会、久松地区公民館が開いたもので、およそ50人が集まりました。

久松山は豊臣秀吉による鳥取城攻めなどがあった歴史の舞台で、自然豊かで鳥取市民のシンボルになっています。久松山を考える会は平成6年の発足。久松山の魅力を発信するため、さまざまな活動をしており、久松山や鳥取城跡での文字電飾、城山マラソン大会、歴史探訪などを行っています。

お盆や年末年始の恒例行事となっている電飾は、東日本大震災への鎮魂の思いを込めて始めたそうで、久松山頂や鳥取城跡二ノ丸の石垣に「大文字」や「絆」などの文字を点灯させています。LED電球を巻きつけた縦7．5m×横4mのネットを石垣に垂らし点灯する方法で、今回は「令和」の文字を浮かび上がらせました。

とはいえ、大きな文字をネット上にかたどるのは容易ではありません。試行錯誤を繰り返した末、メンバーが考えた方法や手順で手際よく「令和」の文字を作成しました。

久松山を考える会のメンバーでもある尺八奏者・本城義照さんの演奏もあり、「荒城の月」「ふるさと」が鳥取城跡に響き渡りました。そしてカウントダウン。令和へと時代が変わる瞬間、「令和」の文字が点灯し、参加者から大きな歓声があがりました。

亀屋会長は「平成は災害やスポーツなど、喜怒哀楽さまざまな思いが交錯する時代でした。令和は明るくすばらしい時代になるように願っています」と新時代に期待を寄せていました。

みなさんで記念撮影

石垣に浮かび上がった令和の文字

ネットを石垣に垂らすみなさん

マジックは驚きと拍手が励みです　　米子マジック同好会

2019年5月3日

米子市の児童文化センターで米子マジック同好会（田中孝允会長）のスペシャルマジックショーがあり、延べ200人の親子が驚きの声を挙げました。

児童文化センター「春の子ども大会」の恒例イベント。米子マジック同好会は7回目の出演です。今年はゲストも加えて13人がステージに立ちました。同好会は2008年の発足。毎月、加茂公民館で定例会を重ねて、福祉施設や公民館、幼稚園、小学校などを訪ねています。

この日は全員が勢ぞろい。日ごろの練習の成果を発表しあう場でもあります。「すごいと思ったら拍手を。マジックはみなさんの拍手が励みです」。そんなお願いをして、1人5分の演技が続きました。

マジカル谷さんは水を新聞紙に流し込んで、赤い水に変え、それが赤いスカーフや赤い傘になり、会場から「エー」「オー」の驚きの声が続きました。マジカル咲子さんはレインボーパラソルを次々に作り出してステージを飾りました。田中会長は光る球を宙に浮かせたり、風船を光らせたりして、子どもたちは大はしゃぎです。

ゲストは同好会の講師でもあるマジカル江島さん、安来節の踊りの師範でもあるジミー柴田さん、腹話術のスマイルせつこさん。マジカル江島さんはティッシュペーパーを使ったマジックを親子に手ほどきしましたが、「マジックで一番大切なのは練習です」と励ましていました。

米子マジック同好会のみなさん

田中会長の光のマジック

チャボも飛び出す
ジミー柴田さんのマジック

花を次々に繰り出す
マジカル咲子さん

接近戦だった鳥取城攻防戦　　久松山を考える会

2019年5月5日

鳥取市の歴史博物館「やまびこ館」は久松山と太閤ケ平で歴史ツアー・山城合戦イベントを開きました。戦国時代にあった鳥取城攻防戦を再現するもので、およそ20人が参加しました。久松山を考える会（亀屋至郎会長）などが協力しました。

鳥取城攻防戦は1580年と81年の2回あり、天下統一を目指す織田軍の羽柴（豊臣）秀吉が総大将になって、毛利軍の鳥取城を攻めました。2回目の攻城戦では、毛利軍は吉川経家が籠城し、織田軍は圧倒的な兵力で包囲し、兵糧攻めを行いました。この間、およそ4カ月。城内は悲惨な飢餓状態に陥り、経家の自刃で攻城戦を終えました。鳥取の「渇（かつ）え殺し」として有名です。

この戦で秀吉の本陣になったのが、久松山から1．5km離れた太閤ケ平です。久松山頂とほぼ同じ高さにあり、ここを拠点に鳥取城を囲む山々の尾根に無数の曲輪を配置し、本陣の前線には空堀などを造って総延長700mを超す防衛ラインを設け、籠城の毛利軍を圧迫しました。その前線から鳥取城本丸までは、わずか500mほどの近さだったといいます。太閤ケ平と呼ばれる本陣は50m四方の広さで、土を3～5m掻（か）き上げて防御壁にしています。日本最大級の土の陣城とされ、織田信長着陣に備えて造られたといわれており、鳥取城とともに国の史跡になっています。

さて、山城合戦イベントは太閤ケ平から太鼓やほら貝などを打ち鳴らし、久松山頂からドラム缶をたたいて聞こえるかどうかを試すもので、いずれの試みも大成功でした。とくに太鼓の響きはよく通りました。鳥取城攻防戦では織田軍の昼夜を問わない、歌舞音曲の心理戦が繰り返されたことでしょう。また、青翔開智中学・高校の池田夏暉教諭が野球で鍛えた大声を張り上げたところ、太閤ケ平―久松山頂で通じましたので、本物の攻城戦も大層にぎやかなものだったかもしれません。

このイベントを支えたのが久松山を考える会のみなさんです。亀屋会長はじめ、奥田博昭副会長、木村昭彦事務局長、岡素直理事の4人が太閤ケ平の蜂の巣を事前に退治するなど安全確保に努めました。また、鳥取市教育委員会文化財課の細田隆博専門員が鳥取城攻防戦をガイドしましたが、細田専門員は「但馬の天空の城・竹田城が映画のロケで有名になり、大勢の人が押しかけているように、太閤ケ平もテレビドラマなどで広く知られるところとなれば、たくさんの歴史ファンが殺到することでしょう。現地は粘土質の赤土なので、保存が心配です」と懸念尽きない様子でした。

久松山を考える会のみなさん

久松山の鳥取城本丸に向けて
ほら貝を吹き、歓声を上げる

兜をかぶって太鼓を打ち鳴らすと…

太閤ヶ平に向けていざ出陣！

夫婦円満が健康寿命を延ばす　　塩宏さん

2019年5月11日

鳥取県漁協女性部連絡協議会(下根鈴江会長)の研修会が鳥取市のとりぎん文化会館であり、鳥取赤十字病院健診部医師の塩宏さんが、「健康に生きていくために」と題し、講演しました。約30人が聴講し、塩さんの軽妙なトークに笑いが絶えませんでした。

塩さんによると、鳥取県は全国平均に比べて、塩分の摂取量や飲酒・喫煙率が高く、逆に野菜の摂取量や1日の歩数は少ないそうで、そのことが男子の糖尿病死亡率全国1位、がん死亡率全国3位につながっているとそうです。健康で長生きするためには、普段の食生活や運動など生活習慣を見直すことが大切と指摘しました。

食べものについては、和食が一番栄養バランスがよく、魚介類や納豆、海藻など低カロリーで低脂肪の食材が健康に良いそうです。また、運動は足を丈夫にすることが大事で、スクワットやウオーキングを無理のない程度に毎日続け、貯金ならぬ〝貯筋〟をしましょうと呼びかけました。

こうした生活習慣を見直し、続けていくためには、ともに支え合うパートナーとして、夫婦円満であることが一番大事だと強調。そのためにも、互いに相手のことを思いやり、感謝の気持ちを忘れず、協力し合あって、健康で長生きしましょうと締めくくりました。

塩宏さん

鳥取県漁協女性部連絡協議会研修会

不思議なご縁に感激　　安部朱美さん

2019年5月11日

テレビ番組「なんでも鑑定団」でおなじみの世界のおもちゃコレクター・北原照久さんのコレクション展と米子市在住の人形作家・安部朱美さん(シニアバンク登録)の創作人形展が米子市の美術館であり、安部さんはギャラリートークで、大勢のファンに人形づくりの熱い思いを語りかけました。

安部さんは南部町生まれ。30歳すぎから粘土で創作人形を作り始め、2007年の人形の寺で知られる宝鏡寺門跡(京都市上京区)の公募展に「かあちゃん読んで」を出品し大賞を受賞。この作品が国民読書年のポスターに起用されて一躍有名になり、「昭和の家族～きずな」の全国巡回展を行いました。いらい国内外で活躍中です。

今回の創作人形展には34作品、約210体の人形を展示しました。「昭和の子ども」をテーマにした「秘密基地」と「こたつでカルタ」の新作と大山開山1300年祭を記念した「御幸行列」も並びました。どれもこれも表情細やかで、身の回り品も小道具も微に入り細に入り、工夫に富んでいます。会場のあちこちで、鑑賞者からため息がもれます。

ギャラリートークで安部さんは「テーマを決めたら、その背景を調べ、知識をためてから作り始めます。作品の一つひとつは、たくさんの人の協力があってできています」と感謝を忘れません。おばあちゃんの居眠りがほほえましい「こたつでカルタ」は、日南町のご婦人から届いたかすりを使ってできました。がき大将も泣き虫も、大きい子も小さい子も、みんなが一緒になって遊ぶ「秘密基地」は、「子や孫が自然の中で我慢する心や生きる力を養ってほしいという願いを込めて作った」そうです。

安部さんは「御幸行列をつくらせていただき、不思議なご縁をいただきました。大山さんのおかげです」と告白しました。去年の大山開山1300年祭のレセプションに招かれ、内親王の真子さまから「昭和の家族」をご覧になったと声をかけられたこと、同席の奈良・春日大社の宮司のおばさんが、全国デビューのきっかけになった宝鏡寺門跡と知り、重なる不思議に感激していますと打ち明けました。

安部さんの創作意欲は、ますます高まっています。

安部朱美さん

こたつでカルタ

大山の御幸行列（正面）

「二十四の瞳」の作品を紹介する安部さん

かあちゃん読んで（写真）

鳥取若桜会のふるさと探訪　　吉田幹男さん

2019年5月12日

八頭郡若桜町の出身者と、そのゆかりの人でつくる鳥取若桜会（村江清志会長）は鳥取市青谷町で「ふるさと探訪」を行い、全国の考古学ファンから注目される青谷上寺地遺跡などを訪ねました。古地図コレクターの吉田幹男さん（若桜会顧問）がガイドしました。

鳥取若桜会は鳥取市やその周辺で暮らす町出身者でつくっているもので、70年近く続いており、会員は約150人います。毎年、会員の交流を兼ねて「ふるさと」探訪を行っており、今年は20人余りが和紙の里・青谷町を訪ね、妙好人・因幡の源左の菩提寺・願正寺や青谷和紙工房、青谷上寺地遺跡展示館やその遺跡発掘現場などを回りました。

関心を集めたのが「地下の弥生博物館」といわれる青谷上寺地遺跡です。およそ2，000年前の地下から人骨や脳、精巧な木製の容器や木製祭祀具、鉄器や青銅器などが次々に出土し、その1，353点がこのほど国の重要文化財に指定されました。日本海を舞台にした交易とものづくりの拠点だったことが明らかになり、大量の人骨を活用したDNA調査などで日本人のルーツ探しも始まっています。

青谷上寺地遺跡発見のきっかけになったのが、山陰自動車道の建設・整備です。近くの横木遺跡や善田傍示ケ崎遺跡からは古代山陰道が出現し、大量に出土した板のなかから国宝高松塚古墳に次ぐ国内2例目の女子群像絵図が見つかり、道路わきには柳の街路樹があったこともわかりました。柳の街路樹発掘は国内初めてで、話題の尽きない遺跡群です。鳥取県埋蔵文化財センター青谷調査室の大野哲二係長によると、引き続き海に面したエリアの発掘を行い、どのような施設を持った港湾遺跡だったかを明らかにしたいといいます。

鳥取若桜会は埋文センターや遺跡展示館で予備知識を仕入れた後、古代山陰道の発掘現場を訪ねました。吉田さんは古代山陰道が9mもの幅員があり、真っすぐつくられていたことを説明するとともに、青谷周辺の古代道は入り海の関係で横木から山すそをう回し、上寺地を通った後、山越えで伯耆の国へ抜けていたのではないかとみています。「当時の幹線道は納税のための道で、一般人は歩けなかったらしい」と解説していました。

新しくできた山陰道は古代山陰道とほぼ並行して走っており、この日はちょうど青谷IC―鳥取西ICの開通日。鳥取若桜会も早速、新しい山陰道を利用して帰路につきました。

古代山陰道を説明する吉田幹男さん（青谷町善田）

青谷上寺地遺跡の発掘現場を見学する鳥取若桜会のみなさん

国の重要文化財になった青谷上寺地遺跡の出土品

因幡の源左像（願正寺）

アフリカ大陸でも活躍する太一車　　小鴨地区振興協議会

2019年5月15日

鳥取県男女共同参画センター「よりん彩」の活動支援事業「太一車が支えるアフリカ農業から男女共同参画を考える」セミナーが倉吉市の倉吉未来中心であり、アフリカで太一車を使って稲作指導をしてきたJICA青年海外協力隊員の体験談を聞き、太一車を開発した郷土の中井太一郎の偉業を改めて確認するとともに、顕彰運動の大切さを学びました。

中井太一郎（1830～1913年）は久米郡小鴨村（倉吉市）生まれ。幕末から明治時代にかけて農業振興に一生を捧げた人で、日本で初めて「田植え定規」を考案し、全国に「正常植え」を普及して歩くとともに、中耕除草器・太一車を開発して雑草取りの重労働から農家を解放し、米づくりの生産性向上に大きな足跡を残しました。日本の美しい田園風景をつくった男といわれています。

アフリカ農業の体験を語ったのは、広島大学大学院生の田口大志さんです。2015年から2年間、ウガンダ共和国の県職員として稲作農家の支援などをしてきました。

田口さんによると、ウガンダの人口は3500万人ほどですが、2050年には4倍の1億2千万人になる見込みで、食糧増産が課題です。主食はヒエやキビなどの雑穀。米づくりは湿地で天水を利用して行われているそうです。アフリカの米づくりの先進地・マダカスカルでは除草に太一車を使っており、ウガンダでも普及に向けて、道具の現地生産が課題になっているといいます。田口さんは近く、ウガンダを再訪して、その後の経過を確認する予定です。

セミナーには県職員や農業、地域づくりの関係者など各界から約40人が参加しました。JICA鳥取デスクの森木由加里さんによると、西アフリカのブルキナファンでも米の需要が急増しており、青年海外協力隊員が除草器の指導や試作に励んでいるといいます。アルミ製の軽量除草器を生産している太昭農工機(米子市)の松下愛治営業部長によると、国内のメーカーは3社ほどあるそうで、無農薬や減農薬の米づくりの普及で太一車の出荷量は維持されているそうです。

セミナーを運営した倉吉市小鴨地区振興協議会・太一車歴史文化部会長の北村隆雄さんは「郷土の偉人が開発したものが、世界の食糧増産に欠かせないものになっていることがよくわかりました。国際貢献する太一車は日本を元気にします。自信をもってNHKの大河ドラマに推挙したい」と話していました。

北村隆雄さん

田口大志さん

中井太一郎と中耕除草器

太昭農工機製の除草器
（紹介するのは松下営業部長）

若いもんには負けん！　　港ベンチャーズほか

2019年5月19日

第18回ベンチャーズファンカーニバルが境港市の SANKO 夢みなとタワーであり、県内外からベンチャーズバンドが集まり、延べ400人が心ゆくまで〝テケテケ〟を楽しみました。

日本にエレキブームを起こしたベンチャーズを愛する人たちのコンサート。その輪を広げるため、2002年から毎年続いています。主催者・港ベンチャーズの遠藤辰雄代表によると、最初は6バンドからのスタートだったそうです。近年は20バンド近くが参加し、超過密の運営を強いられているといいます。

今回は山陰両県はじめ、兵庫・岡山・京都から13バンドが出演。それぞれ30分ずつバンドの技量やチームワークを披露しました。参加バンドが減ったといえ、朝10時から夕方6時まで、延々8時間。頭に白いものが目立つ来場者は、会場に用意されたバザーで飲食しながら、青春サウンドに浸っていました。

港ベンチャーズなどシニアバンクに登録する団体も多く出演しました。因幡～ずの兄弟バンド・平家ベンチャーズは、全国平家会を応援するバンドで毎年、八頭郡若桜町落折である経盛祭を〝テケテケ〟サウンドで盛り上げています。山口亨代表は「若いもんには負けん！」とドラムをたたいていました。

カーニバルはベンチャーズばかりではありません。フォーク、ポップス、グループサウンドなど懐かしの音楽もあり、シニアには楽しいひと時です。ショウケンやスパイダースなどの楽曲に会場は盛り上がりました。

圧巻だったのは琴浦町のブルースネークと共演した豊岡市の寺内組。ギタリスト・寺内たけしばりの演奏で「ノーエ節」や「運命」、風の音をエレキで表現する「ブルースター」など高度な技を披露していました。

港ベンチャーズの遠藤辰雄代表

港ベンチャーズ

にぎわうベンチャーズカーニバル

米子歴史ウォーク　　米子観光まちづくり公社

2019年5月19日

大山開山1300年祭の関連イベント、国史跡米子城と城下町を歩く米子歴史ウオークがあり、市内外から220人が参加し、米子城の珍しい遺構や城下町の町割りなどを学びました。米子観光まちづくり公社（川越博行理事長）のみなさんがガイドしました。米子城魅せる！プロジェクト実行委員会・新日本海新聞社主催、とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

米子市の旧市街地は、大きな震災や戦災を免れて戦国時代からの町割りが残っており、町全体が〝歴史博物館〟そのものです。米子城の外堀だった加茂川沿いには、庶民の信仰を集めた地蔵群が数多く残っており、平成29年に大山の地蔵信仰とともに日本遺産になりました。

その米子城では昨年、竪堀、のぼり石垣などの珍しい遺構も見つかり、官民一体となって米子城とその周辺の歴史や文化遺産を売り出す活動が活発になっています。米子城やまち歩きガイドを企画・運営している米子観光まちづくり公社によると、昨年は約400件、約4，000人を案内したそうです。

今回の歴史ウオークでは、川越理事長など8人が米子城と城下町の2コースに分かれてガイドしました。米子城コースを案内した安井利郎さんは、かつて米子城の本丸があった湊山の頂上を目指しながら、約400年前の築城当時のまま現存する石垣を中心に、米子城の歴史について解説。「のぼり石垣は、海から侵入する敵に備えた防御で、秀吉の朝鮮出兵の際に築かれた倭城に見られた手法。米子城を築城した吉川広家は朝鮮出兵しており、その手法を持ち帰ったのでしょう」と解説していました。

参加者は城の頂上から見渡す米子市街地や大山、日本海、中海など360度の大パノラマに疲れを癒やし、下山後は米子市美術館の「北原照久コレクション展」や山陰歴史博物館の企画展「米子城にまつわる人々」にも立ち寄り、米子のまちを満喫しました。

かつて天守閣のあった頂上から
見渡せる米子市街地

米子城の石垣について
解説する安井さん

登り石垣

いわみセンスアップ大学　　岩室久美子さん・中川信江さんなど

2019年5月22日

岩美町中央公民館の令和元年度の高齢者大学「センスアップ大学」が開講。90人が12月まで学習や仲間づくりに励みます。

開講式は中央公民館が建設中とあって町役場であり、シニアバンク登録の終活ライフケアプランナーの岩室久美子さんが「人生100年ほがらかに軽やかに」と題して記念講演し、シニアがすてきに暮らすための作法を説きました。講演の前には手遊びも楽しみました。

岩室さんは健康寿命を延ばすポイントは①社会参加②食③身体活動―の3つあるとし、公民館活動やボランティアなどに参加して仲間づくりを楽しむとともに、食事は栄養バランスを考え、ひとりだから茶漬けでよいとか、きのうの残りでよいなど個食や欠食に陥らないように、運動もいきなりプレーではなく、筋肉を育てながら行いましょうと注意しました。

また、すてきに暮らすために自助・共助・公助に関心を寄せ、やりたいことや目標を設けて実行することを提案。例えば、7月から朝のラジオ体操を始める▽8月には暑中見舞いを書き、浴衣を着て出かける▽9月には地域の行事に積極的に参加し、健康診断を受ける―など月別メニューをつくれば、脳は活性化すると勧めました。

センスアップ大学にはクラブ活動もあり、今年は軽スポーツ、カラオケなど7つのクラブが活動を開始しました。このうち、シニアバンク登録の山下眞一郎さんが手品、中川信江さんが民踊、佐々木洋一さんがハーモニカを指導しています。山下さんは「ステージ芸を伝えたい」、中川さんは「長崎盆踊りや里の秋などを踊れるように」、佐々木さんは「郷土の音楽家が作った大黒様や金太郎、ふるさとなどに励みたい」。それぞれ指導方針を掲げ、12月の成果発表会を目指します。

民踊クラブのスタートをのぞきました。クラブ員は13人。手始めに橋幸夫さんが歌う「2020音頭（来たれ！希望の新時代）」に合わせて輪踊り。「世界はますますグローバル」「今こそ互いにリスペクト」などの名調子に乗って、元気よく踊りました。クラブ長の向家君子さんは「みんなで楽しく踊っていきます」と張り切っていました。

輪になって踊る
民踊クラブのみなさん

岩室久美子さん

いわみセンスアップ大学
恒例の銭太鼓体操

お誕生会おめでとう　　じぃ～じぃ～ず

2019年5月24日

琴浦町社会福祉協議会（川上強志会長）のデイサービスでお誕生会があり、5月が誕生月の4人をフォークグループ・じぃ～じぃ～ず（福島国宏代表）が歌とおしゃべりでお祝いしました。

じぃ～じぃ～ずは4人組。全員60歳以上で年齢合計272歳。琴浦町・伯耆稲荷神社の河合鎮徳宮司にギターを習っているみなさんで、2年前に結成しました。発足のころは女性ボーカルもいて、じぃ～ばぁ～ずと呼んでいたそうです。練習は週に一度。とくに第1土曜日、旧安田保育所（琴浦町）である300円のカレーサービスの時は、外さず練習しているといいます。

さて、お誕生会は川上会長のプレゼント贈呈を皮切りに始まりました。デイサービスに通う30人が、じぃ～じぃ～ずの「知床旅情」「神田川」「ふるさと」「古城」などに合わせて口ずさみました。

「亀の甲より年の功」と言うように、じぃ～じぃ～ずの得意技は話術やダジャレです。河合さんが曲の合間に解説を加えます。「早春賦」と「知床旅情」、「月の砂漠」と「ブルーシャトー」それぞれよく似ています。パクったのはだれでしょう。ウサギを追ったり、コブナを釣ったりする「ふるさと」の風景は長野県ですが、作曲したのは鳥取県の岡野貞一さん。4分の3拍子で賛美歌のエキスが加えられています―など話題が尽きません。

デイサービス職員の好演出もあって、1時間のお誕生会がアッという間に終わりました。

じぃ～じぃ～ず

みんなで「ふるさと」を合唱

お誕生日会で記念品を贈る
川上会長

世界の国から湯梨浜へ　　鳥取県グラウンド・ゴルフ協会

2019年5月25日

グラウンド・ゴルフ発祥地の湯梨浜町「潮風の丘とまり」で国際大会YURIHAMA2019があり、日本を含む9カ国から約320人が集い、交流を深めました。鳥取県や湯梨浜町のグラウンド・ゴルフ協会が大会運営に協力しました。「潮風の丘とまり」では東京五輪の翌年に世界の生涯スポーツの祭典「ワールドマスターズゲームズ2021関西」のグラウンド・ゴルフ競技が開かれることになっており、その準備が着々と進んでいます。

湯梨浜町の前身、旧泊村でグラウンド・ゴルフが誕生したのは1982年、37年前のことです。ルールが簡単で、子どもから大人までだれもが楽しめる生涯スポーツとして普及し、国内の愛好者は300万人を数える国民スポーツになっています。海外への普及も進み、2014年から国際大会YURIHAMAが開かれています。

今年の国際大会YURIHAMAには、過去最多の317人が参加し、2日間にわたって1人32ホールを回り、総打数を競いました。グラウンド・ゴルフの鳥取県協会（宮脇武由会長）や湯梨浜町協会（灘岡興二会長）、鳥取県国際交流財団などが大会運営に協力しました。宮脇会長によると、マスターズ関西グラウンド・ゴルフ競技の参加選手はおよそ800人、そのプレ大会も今秋、「潮風の丘とまり」で開かれるそうです。県中部の温泉地を中心に宿泊施設は整っているものの、選手の輸送体制やゲームの進行・待機の日程調整、おもてなしなどの課題は多く、協議進行中といいます。

国際大会YURIHAMAでは、今年も湯梨浜文化大学の茶道教室のみなさんが着物姿で抹茶の無料サービスに努めました。講師の桜井宗益さんは「プレーの合間に、お茶を楽しんでいただければ」と話し、参加選手と一緒に記念撮影に収まるなど大忙しでした。

多言語が通じるグラウンド・ゴルフ（潮風の丘とまり）

グラウンド・ゴルフ協会の宮脇さん（鳥取県会長、左）と灘岡さん（湯梨浜町会長）

抹茶サービスのみなさんはポーランド選手と記念撮影

浦富海岸はきれいで美しい　　いわみガイドクラブ･田後漁協婦人部

2019年5月25日

岩美町で浦富海岸ジオウオークがあり、県内外から集まった300人余りが青空のもと、透きとおった海と美しい島々を眺めながら元気に歩きました。ガイドしたのはいわみガイドクラブ（油浅郁夫代表）、ゴールで漁師鍋をふるまったのは田後漁協婦人部（山根みち子部長）のみなさんでした。

京丹後市から鳥取市の西端まで東西約120㎞の山陰海岸が世界ジオパークになったのは平成22年。その代表的な見どころ、浦富海岸で毎年、ジオウオークが行われています。今年で10回目。中国5県はじめ、福井県などから326人が参加し、それぞれの脚力に合わせて岸辺や渚の遊歩道を歩きました。

いわみガイドクラブは12人がそれぞれのパーティーの道案内をするとともに、景観ポイントに待ち構えて説明しました。

鴨ケ磯～城原海岸を歩くジオパークコースは片村文系（ふみつぐ）さんと井上慎一さんが案内しました。道すがら井上さんは、ジオパークは4年ごとに地域の活用実績などの審査があり、認定更新されていることを解説しました。片村さんは網代と田後の境にある水尻洞門について、地元では「日が暮れるまで見ていても飽きないから日暮らし洞門と呼んでいます」と解説していました。

鴨ケ磯の酒宴洞門では岸憲一さんが、城原海岸では油浅代表が定点ガイド。油浅代表は「浦富海岸は岸と島々が近く、奇岩や洞門、松などの景観に恵まれているのが特徴です」と紹介していました。広島市から夫婦で参加したというご婦人は「民泊で食べた魚がおいしかったし、海はきれいで景色は美しいし、来てよかったです」と喜んでいました。

ゴールの田後港では田後漁協婦人部の13人が漁師鍋でお出迎え。旬のモサエビにホタルイカ、シマメイカやワカメなどが入ったみそ仕立ての汁をふるまったほか、地元の踊りのグループ・さくらんぼ（松本真紀子代表）は山陰海岸ジオパークの応援歌「潮騒ろまん」や「きなんせ節」などで、参加者の元気にエールを送りました。

水尻洞門について解説するガイドクラブの片村さん（写真中央）

田後漁協婦人部のみなさん

鴨ケ磯にあるロシア軍将校の遺体漂着記念碑

浦富海岸の景観を代表する菜種五島

大山仰ぐ米子のバラ道場　　米子バラ会

2019年5月26日

中海圏のバラの愛好者でつくる米子バラ会（小林徳成会長）の「春のバラ展」が米子市の児童文化センターでありました。バラ展は毎年春と秋の2回、25年間続いており、いつも多くのファンでにぎわっています。

春のバラ展には会員が丹精込めて育てた50品種200点が集まりました。ピンクの大輪の「ピエール・ドゥ・ロンサール」、ビロードのような深い光沢の「黒真珠」など、それぞれが容姿、花柄、色、香りを競っていました。

指導しているのは小林会長ご夫妻。その道場になっているのが、米子市の青木団地近くの高台にある小林バラ園です。小林会長は元淀江産業技術高校の校長、生物の先生です。退職後、趣味を生かして8年がかりで約20aのバラ園をつくりました。伯耆富士・大山を正面に仰ぐ絶景のロケーション。およそ100品種のバラが育ち、年中無料開放しています。

5月はバラの最盛期です。バラ園には来場者が絶えず、色とりどりの花や大山をバックにカメラやスマホを向けています。会長夫人の美智子さんによると、見どころは令和の新時代を映して、バラ園の入り口にオレンジの「プリンセスミチコ」、バラ園の中ほどにピンクの「プリンセスマサコ」を飾ったそうです。

このバラ園が道場になるのは、バラの休眠期の9月と冬場です。小林会長によると、バラは春から夏にかけて3回、10月末にもう1回、合わせて4回咲かせることができるそうで、休眠期のせん定や施肥、接ぎ木などの作業がポイントになるといいます。「百聞は一見に如かず」。会員はバラ園でバラづくりの基本を学び、切磋琢磨しています。

小林徳成・美智子さんご夫妻

にぎわう春の米子バラ展
（米子市児童文化センター）

花が咲き誇る小林バラ園
（正面に大山）

山陰最大の戦災　　根平雄一郎さん

2019年5月29日

境港市の境小学校（築谷直人校長）は6年生の総合学習に境港歴史研究会の根平雄一郎会長（元境港市教育長）を招き、山陰最大の戦災とされる旧日本軍徴用船・玉栄丸（たまえまる）の爆発事件について学びました。6年生は広島市の修学旅行から帰ったばかりで、地元でもあった戦争の大被害に驚くとともに、改めて復興や平和に努めてきた先人に感謝しました。

玉栄丸の爆発事件は、太平洋戦争末期の1945年（昭和20年）4月23日にありました。境町の大正町岸壁で荷揚げ作業中、積んでいた火薬が4度にわたって爆発し、その爆風と火災で120人が死亡、309人が重軽傷を負い、倒壊焼失家屋は431戸、町の3分の1が壊滅しました。

今から74年前、境小学校区であった事件です。当時、境国民学校と呼んでいた学校は臨時罹（り）災者収容所になりました。

郷土史を研究する根平さんは、残された写真40枚をもとに、爆発事件の謎を追い続けてきました。戦後71年の2016年になって、やっと爆発前の玉栄丸の船体写真を手に入れ、新鳥取県史に掲載しました。また、爆発の原因は①ウインチ（巻き上げ機械）の摩擦②兵隊のたばこ③朝鮮人スパイ説―などが取りざたされ、長く「悲しい謎」とされてきましたが、2007年に関係者の証言で「兵隊のたばこ」が原因だったことが分かりました。さらに犠牲者は120人まで確認できたものの、玉栄丸には徴用朝鮮人の乗組員もいたので、犠牲者はもっといたはずといいます。

根平さんはプロジェクターで、爆風と火災で壊滅した境町や爆発でできた境港駅近くの大穴などの写真を示すとともに、自警団で駆けつけて亡くなった遺族の証言を紹介しました。子どもたちは地元のこととあって、「あ、あそこだ」などと食い入るように映像を見、録音に聞き入っていました。

ほとんどの子どもたちにとって、玉栄丸の爆発事件は初耳でした。「境港も広島のようなことがあったとは知らなかった。きょう学んだことはお父さん、お母さんにも伝えます」など、授業の感想を話していました。

根平雄一郎さん

授業風景

爆発でできた直径５０ｍの大穴
（写真後方は境港駅の倉庫）

今の境港（玉栄丸の爆発は巡視船がいるあたりで起こったという）

鳥取城山を走ろう、歩こう　　久松山を考える会

2019年6月2日

文字電飾や歴史探訪などで鳥取市のシンボル・久松山の魅力を伝えている久松山を考える会（亀屋至郎会長）は、久松連山（久松山・雁金山・本陣山）を舞台に鳥取城攻防懐古登山マラソン大会を開きました。約70人が参加し、初夏のさわやかな風を受けながら、ウオーキングやマラソンで気持ちのよい汗を流しました。

大会は地元のランニングチーム仲間の家族が亡くなったことへの追悼がきっかけで始まりました。今年で25回になります。鳥取城をめぐる山々は歴史の舞台になっており、史跡であることを広く知ってもらうことも目的です。大会が始まったころは10人だった参加者も、近年は100人前後となり、リピーターも多く、6月の恒例行事となっています。

コースは①アドベンチャーコース（11．9km）②二峰コース（10km）③ウオーキングコース（9．5km）―の3つ。参加者は久松会館を発着点に、1～2時間かけて久松連山を走ったり、歩いたり。山道で道に迷う参加者もいましたが、全員無事完走・完歩。それぞれのコース優勝者にはトロフィー、上位入賞者には表彰状が贈られました。

亀屋会長は「毎年参加している方もあり、とても楽しみにしていただいています。今後も大会を続け、久松山のよさを発信していきます」と話していました。

参加者と久松山を考える会のみなさんで記念撮影（会のみなさんは緑色ベストを着用）

入賞のみなさん

昨年復元した擬宝珠橋の前を駆け抜ける参加者

豪円さんのおかげです　　伯耆伝承隊

2019年6月5日

6月5日は大山寺中興の祖・豪円和尚の命日です。大山北壁を望む豪円山の山頂に豪円地蔵がまつられており、伯耆伝承隊やボランティアのみなさんが地蔵の周りや参道の草刈りをし、お経をあげて遺徳をしのびました。

豪円和尚（1536～1611年）は汗入郡寺内村（米子市淀江町）生まれ、戦国時代や江戸時代初期に活躍した天台宗の僧侶です。戦火で焼失した比叡山延暦寺や備前金山寺、伯耆大山寺を復興し、天台宗の高僧・権僧正になりました。

とくに大山寺は平安時代から鎌倉時代にかけて寺領6万石、160の院房と3千人の僧兵を抱える大勢力でしたが、院内の抗争が絶えず、江戸時代の初めには米子城と知行地をめぐって争い、消滅寸前でした。これを救ったのが豪円和尚です。院内行政を一つにまとめ、徳川幕府から3千石安どの朱印状を得て命脈を保ちました。

豪円和尚は金山寺で生涯を閉じますが、その御影の地蔵が呼瀧山（後に豪円山）の山頂に設けられ、参道には天台宗総本山から派遣の後継座主8代の世代墓がまつられています。

草刈りボランティアは山頂と参道でありました。今年で11回目。伯耆伝承隊の副隊長・吉島潤承さん（圓流院前館長）の呼びかけで、立正佼成会米子支部（玉川紘代支部長）や大山スキー場のみなさんなど40人余りが参加しました。豪円地蔵の周りはササや雑草で覆われて近づけない状態でしたが、一帯はすっかりきれいに。地蔵のコケも取り除かれ、野の花も飾られ、全員で般若心経を唱えて、お参りしました。田辺正人さん（日南町）は「毎年5回程度、大山のあちこちを歩かせていただいているので、お礼に初めて参加しました。気持ちがいいですね」と話していました。参加者は大山寺の豪円湯院で汗を流し、「豪円和尚」の紙芝居を楽しみました。

伯耆伝承隊は紙芝居などで豪円和尚の活躍の生涯を紹介していますが、広く県内外にPRするため、鳥取県を舞台にしたNHK大河ドラマの候補作として手を挙げています。吉島副隊長は「大山さんは鳥取県民の心のふるさと。豪円さんのおかげです。ありがとうございます」と何度も頭を下げていました。

紙芝居で豪円和尚の活躍の生涯を紹介する吉島潤承さん

豪円地蔵を磨き上げるボランティアのみなさん

手分けをして世代墓周辺や参道もクリーンアップ

きれいになった豪円地蔵

日野川の良さ伝えよう　　石丸なつ子さん

2019年6月8日

日野川の源流と流域を守る会（松村順史会長）は伯耆町と日野町で写真塾を開きました。日野川やその流域の魅力を発信する人づくりがねらいで、石丸なつ子さん（鳥取県写真家連盟運営委員）が指導しました。鳥取県社会福祉協議会・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

日野川の写真塾は開講4年になります。最下流の境港や日野川河口から年々さかのぼり、今年は伯耆町・間賀の滝、日野町・滝山公園の龍王滝を訪ねました。曇天、雨のあいにくの天候でしたが、米子市内などから8人が参加しました。

間賀の滝は鎌倉山のふもと、蛸舞神事の奇祭で知られる福岡上代神社から1kmほど入ったところにあり、「知る人ぞ知る」秘境です。源流と流域を守る会の会員、安達住建（安達哲也社長）の所有地で、大小15の滝や遊歩道、山荘、茶室、バンガローなどが整備されています。江戸時代はたたら製鉄が行われていたといいます。参加者は安達社長のガイドで滝めぐりを楽しみましたが、圧倒される水量の滝や人工池に咲くスイレン、遊歩道を歩く沢ガニなどにカメラを向けていました。

ツツジが終わった滝山公園は緑を増して杉並木が見事です。参加者はその枝に着生し、白い花を咲かせているセッコクを見つけて、望遠レンズで収めていましたが、鉢植えなどに利用される珍しい花だそうです。石段を登りきると瀧山神社。その境内奥には怪談話が伝わる龍王滝があります。絶景ポイントは落石注意で立ち入りできなかったものの、高さ70mの大滝は迫力がありました。

石丸さんは「曇りで陰影がつかない時は、写真は撮りやすいけれど、平面的になってしまいます。色の強弱をどうつけるか。写真の中に何かを加えるなど、切り取り方を工夫してください。人間の目は左右に2つあるように、写真は横の構図が基本です」などとアドバイスしていました。

石丸なつ子さん

滝山公園の杉並木で写真撮影

間賀の滝めぐり

龍王瀧

古民家で音楽って、おしゃれ　　坂本信文さん

2019年6月8日

日野町の古民家・沙々樹（ささき）でアルトサックスの演奏会があり、およそ40人が甘く切ないサックスの音色を楽しみました。鳥取県社会福祉協議会・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

古民家・沙々樹は江戸時代末期に建てられた庄屋の家で築190年になります。松江藩の参勤交代、出雲大社や大山寺への参詣、牛馬や和鉄の運搬などに利用された出雲街道のそばにあり、間地峠の整備などに功績があった庄屋さんと伝わっています。

現在は国の有形文化財として登録され、奥日野ガイド倶楽部の事務所や文化交流体験の施設として利用されています。古民家コンサートもそのプログラムのひとつで、今回で13回目になります。

今回は米子高専OBで50年近いサックス歴の坂本信文さん(米子市車尾)を招きました。坂本さんは横浜市の電機メーカーに勤務していたころも、都市対抗野球やライブハウスなどで音楽活動を続け、帰郷後も公民館や介護施設などでサックスを吹いています。

坂本さんの演奏曲目は、アンコールを含めて17曲に及びました。前半は洋楽。サックスを始めるきっかけになったという「ダニーボーイ」「闘牛士のマンボ」は熟練の技でした。後半は「つぐない」「夜霧よ今夜もありがとう」「川の流れのように」などが続き、「歌のない歌謡曲」状態。坂本さんは演奏曲目ごとにエピソードも紹介するサービスを欠かしません。「梅沢冨美男さんの『夢芝居』は味わい深いです」「米津玄師さんの『Lemon』は孫に聞かせてやろうと思って練習中です」などと進行し、聴く人を引き込みます。年配のご婦人が目立つ客席は、足でリズムを刻んだり、肩を揺らしたりしながら、楽しいひと時を過ごしました。

土間や囲炉裏のある演奏会場には、昔懐かしい糸車や米升、古いトランクなども並べられ、おしゃれな古民家コンサートの演出が見事でした。

坂本信文さん

古民家・沙々樹でサックスコンサート

鳥取県の偉人を掘り起こそう　　歴史大河ドラマを推進する会

2019年6月9日

鳥取県ゆかりの人を主人公にした歴史大河ドラマを推進する会（田中精夫・内田克彦共同代表）は、鳥取市の県立図書館で総会を開き、「とっとり県民の日」の記念事業として9月7日に倉吉市で新たな大河ドラマ候補の選考会を開くことを決めました。

新たな大河ドラマ候補は、①亀井茲矩と王舎城の夢②近代稲作の父・中井太一郎③芋代官・井戸平左衛門の謎―の3つです。田中精夫さん、北村隆雄さん（小鴨地区振興協議会・太一車歴史文化部会長）、根平雄一郎さん（境港歴史研究会長）が、それぞれの概要を報告しました。亀井茲矩は3回目、中井太一郎は2回目の挑戦です。

このうち、初登場の井戸平左衛門（1672～1733年）は還暦を過ぎて石見銀山の代官になった人です。在任わずか1年4カ月という短い間に、薩摩から種芋を取り寄せて栽培を奨励し、大凶作の時には代官所の蔵を開いて農民を救いました。青木昆陽が幕府に薩摩芋の栽培を進言する数年前のことです。

井戸代官は備中笠岡で謎の死を遂げますが、石見から砂地の弓ヶ浜に薩摩芋が入ってきたのは、それから50年後のことです。天保の申年がしん（1836年）では全国でたくさんの人が餓死しましたが、弓ヶ浜は薩摩芋のおかげで難を逃れました。これに感謝する芋代官碑は島根県内に約500基、鳥取県内に12基（境港市7、米子市4、鳥取市青谷町1）あるそうです。そして粘り強く、進取の気性に富む「浜の芋太」が誕生しました。

報告を聞いた鳥取地域史研究会長の小山冨見男さん（新県史編纂委員）は、「浜の芋太」が鳥取県の北米移住をリードしてきた歴史を紹介するとともに、島根県と連携して井戸代官のドラマ化を進めてはどうかと提案しました。また、中井太一郎は稲の正条植えで日本の美しい田園風景をつくり、太一車の開発で雑草取りの重労働から農家を解放しましたが、これを全国各地に普及して回ったのは70歳を過ぎてからでした。小山さんは「井戸代官も太一郎も、現代の高齢社会に生きる我々の手本となるもの。偉人を次々に発掘して、学んでいきましょう」と講評しました。

歴史大河ドラマを推進する会はこれまでに、①岩美町出身の外交官兄弟、澤田節三・廉三とその妻・美喜の「三愛のクニへ」②赤とんぼの母・碧川かたの生涯③比叡山延暦寺や大山寺などを復興した豪円和尚―の3つを大河ドラマや朝ドラ候補に選び、NHKなどに放送実現を働きかけるとともに、それぞれの人物像などの調査研究を進めています。

田中精夫さん

根平雄一郎さん

境港市渡町の芋代官碑

北村隆雄さん

「三愛のクニへ」の原作試作本

山陰の鉄道唱歌を書く　　伯耆書院

2019年6月11日

鳥取県西部の書道愛好者が集まる伯耆書院(森田尾山主宰)は、米子市美術館で「山陰本線の鉄道唱歌」書道展を開きました。米子は山陰鉄道の発祥地で、鉄道のまちとあって、鉄道ファンでにぎわいました。

山陰本線(京都駅～下関市・幡生駅、673．8km)は、1933年(昭和8年)に全通しました。JR在来線のなかでは目下、日本最長です。鳥取県内の鉄道は1902年(明治35年)に境駅―米子駅―御来屋駅間で開通したのが始まりです。京都駅―出雲今市駅ができたのは1912年(明治45年)、山陰の近代化が始まりました。

鉄道唱歌もできました。明治44年に「山陰鉄道唱歌」、翌年に「汽車旅行山陰唱歌」、鉄道延伸に伴って昭和4年に「新鉄道唱歌」。作曲は童謡の「金太郎」や「大黒様」などをつくった岩美町出身の田村虎蔵です。意気揚々としたメロディーです。

伯耆書院の79人は一人一作、好みの唱歌を選んで、だれもが読めるように調和体書(漢字かな交じり)で仕上げました。作品は京都駅から終点に向かって順に展示されました。

「ここは因幡の岩美驛　岩井温泉ほど近し」「南へ行けば三佛寺　投入堂のたくみあり」「天神川の川上の倉吉町は工業地　飛白(かすり)に名ある織物や生糸の産も數多し」「由良や八橋や赤碕や　左に見ゆる船上山　君を奉じて長年が　たてこもれしは此山ぞ」「此處(ここ)は伯耆の米子町　商業日々に栄行きて」―などの書が並び、展示作品をたどれば、往時の産業や観光地、まちのにぎわいがしのばれ、まるで鉄道の旅をしているようです。

会場にはJR西日本や祐生出会いの館、撮り鉄マニアなどの協力でSLのプレートや写真、駅弁の折り紙、ポスターなども並び、鉄道OBやその家族は懐かしそうに見入っていました。

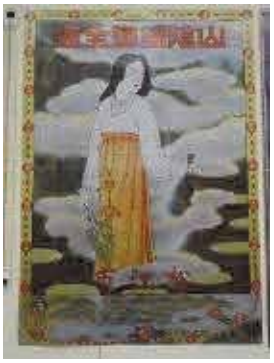
主宰の森田さんによると、伯耆書院は毎年テーマを設けて書道展(西伯耆の碑、大山の文学碑など)をしており、書と社会のつながりを大切に、だれにもわかる作品づくりに努めているそうです。サッカーの地元チーム・ガイナーレを応援する書道展なども長く続いています。

森田尾山さんと作品

尾崎聰砂さんの作品

米子は鉄道のまち、お客さまも次々と

大前誠さんの作品



山陰鉄道が京都－出雲今市間で開通した時のポスター
(明治４５年、祐生出会いの館提供)

自分に厳しく、人に優しく　　澤田勝さん

2019年6月13日

鳥取市の鹿野町公民館(村上光重館長)は健康マージャン教室を開講。８月８日まで5回にわたって教室を開き、健康マージャンの普及と仲間づくりに乗り出しました。鳥取県健康マージャン連盟副会長の澤田勝さんが健康マージャンの心得を手ほどきしました。

健康マージャンは「お金をかけない、お酒を飲まない、タバコを吸わない」がモットーです。競技相手に注目しながら、指先を動かし、頭脳を使うので、高齢者の仲間づくり・健康づくり・認知症予防に効果があるといわれています。

健康マージャンは高齢者のスポーツ・文化の交流大会(ねんりんピック)の正式種目になっており、平成１９年の茨城大会から始まりました。鳥取県でも平成２８年から因伯シルバー大会に導入され、ねんりんピックの県予選を行っていますが、普及はこれからといったところです。

鹿野町公民館は団塊世代の高齢者に麻雀の経験者が多いことから、澤田副会長を招いて健康マージャン教室を始めることにしました。集まったのは９人。公民館職員が欠席者の穴を埋めて、２卓でスタートしました。

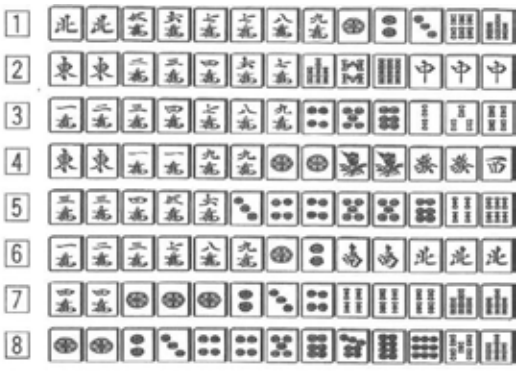
澤田副会長は場決め、親決め、牌の混ぜ方や並べ方など競技マナーを説明し、「健康マージャンは自分に厳しく、人に優しくを心がけて対局しましょう」と注意しました。参加者は「１０年ぶりだわ」という人、「初めての麻雀」という女性、いろいろでしたが、澤田副会長や村上館長の指導で対局を楽しんでいました。仲良くご夫婦で参加した砂川眞一さん・のりみさんは、ルールブックを購入しての参加で、やる気満々でした。

ねんりんピックは観客を含めて延べ４０～５０万人が参加するビッグイベントで、鳥取県では２０２３年に開催することが決まっています。

※鳥取県社会福祉協議会は希望する団体に麻雀牌や麻雀卓をセットで貸し出しています　お問い合わせは☎0857－59－6332。

麻雀を手ほどきする澤田勝さん

健康マージャン教室
（鹿野町公民館）



【問題】あなたは現在、東場の西家です。それぞれの手牌はロンアガリできますか。できる場合は役の名前をお答えください。

ヒトは「星くず」でできている　　里山地域研究会

2019年6月15日

三朝町の青空体験塾（吉田定夫塾長）はバス遠足で鳥取市さじアストロパークに出かけ、プラネタリウムなどで「星取県」を学びました。

青空体験塾はNPO法人・里山地域研究会（田栗泰典理事長）が開設しているもので、8年目になります。地域の子どもたちの育成がねらいで、田植えや稲刈り、植樹やシイタケ栽培など里山の魅力を伝えています。毎年6月にはバス遠足をしており、「星取県」として売り出し中の郷土・鳥取県を知るため、さじアストロパークに出かけました。

さじアストロパークは今年開設25周年。国内トップクラスの美しい星空と大きな望遠鏡（103cm反射望遠鏡）を備える国内有数の公開天文台です。プラネタリウムや望遠鏡付き宿泊施設などがあり、楽しみながら星や宇宙のことを学べるとあって、教育旅行の拠点になっています。

この日訪れたのは塾生29人と父兄、研究会メンバー46人。プラネタリウムでオリジナル番組の「星取絶景」を観賞し、大きな反射望遠鏡を見学しました。

「星取絶景」はさじアストロパークが撮りためた天体写真を使って、宇宙の秘密に迫るもので、星の誕生から消滅までを解説しています。

それによると、宇宙ができたのは138億年前、太陽や地球が誕生したのは46億年前です。星は数千年～数百億年、光り続けて一生を終えますが、星の最期に炭素や酸素、窒素などが宇宙にばらまかれて、太陽や地球が生まれたそうです。つまり私たちの体は星をつくっていた材料、「星くず」でできているというわけです。

これから星の学習が始まるという4年生は、「難しかったけれど、面白かった。これからは星空を見るようにします」と話していました。さじアストロパークによると、夏の夜空は木星や土星がよく見える好季節だそうです。

佐治アストロパークの
大型望遠鏡を体験する子どもたち

みささ青空体験塾のみなさん

佐治アストロパークのプラネタリウム室

旧美歎水源地、売り出し中！　　美歎水源地保存会

2019年6月15日

鳥取市の旧美歎水源地は山陰最古の近代水道施設で国の重要文化財になっていますが、ホタルの里としても有名です。そこで地元住民でつくる美歎水源地保存会（澤田勝会長）はホタル観Show&サックス観Showのイベントを開きました。ホタル観賞は大雨で中止になりましたが、サックスショーは盛り上がりました。

美歎水源地は鳥取市が1915年（大正4年）に山陰で最初に建設した近代水道施設です。鳥取市街地の市民はそれまで鳥取城の外堀・袋川の水を飲んでいました。貯水ダムの強化やろ過池の増設などを重ね、1978年（昭和53年）に休止するまで60年間、市民の水がめでした。施設はそっくり残り、歴史的な価値が認められて国の重要文化財に指定され、2018年（平成30年）から一般公開されています。

管理運営しているのが美歎水源地保存会のみなさんです。春は桜まつり、初夏はホタル祭り、夏休みは水遊び、秋はウオーキングなどを計画し、市民憩いの場づくりを進めています。ホタルは美歎水源地の駐車場そば、美歎川で群生、乱舞しており、交通便もいいことから、毎晩のように市民や旅館宿泊者でにぎわっています。

ホタル観Show&サックス観Showの当日は、あいにく大雨注意報下でホタル観賞は中止になりましたが、ガイダンス施設では澤田会長自らのサックス演奏があり、およそ50人が「二輪草」「ふたり酒」「ダイアナ」「恋するフォーチュンクッキー」など13曲を楽しみました。途中、いなば国府ガイドクラブの田中道春さんのリードで大伴家持の「祝い歌」や「ふるさと」を合唱し、元気いっぱい、盛り上がりました。

澤田さんは「桜まつりは雪、ホタル祭りは大雨で外のイベントが中止になってしまいましたが、水の施設なので仕方のないこと。あきらめずに市民の宝を磨き、PRしていきます」と話していました。

澤田勝さん

雨にも負けずにサックスコンサート

旧美歎水源地と美歎川

千年の時を超えて通じる心　　中永廣樹さん

2019年6月16日

鳥取市の因幡万葉歴史館の万葉集講座が始まりました。講座は昨年の大伴家持・生誕1300年を記念して始まったもので、元鳥取県教育長の中永廣樹さんの講演「大伴旅人の名歌鑑賞」で開講しました。令和の由来となった万葉集への関心が高まるなか、約50人の参加者で会場は満席になりました。

大伴旅人は万葉集を編集したとされる因幡国司・大伴家持の父親です。旅人が太宰府の長官時代に催した「梅花の宴」の序文が元号・令和に使われましたが、その宴には伯耆国司だった山上憶良なども参加していたと伝えられています。因幡万葉歴史館には「梅花の宴」にまつわるエピソードなどが紹介され、改元以来、万葉集ファンでにぎわっています。

中永さんは源氏物語の研究者ですが、万葉集にも精通しており、万葉集に収録された大伴旅人の作品約60首のなかから、とくに名歌とされる12首について解説しました。旅人は藤原氏との政争に巻き込まれながらも、重要な任務を全うしていきますが、そんななかで詠まれた歌には、人間味があるものが多いと中永さんは言います。

「験（しるし）なきものを思はずは一坏（ひとつき）の濁れる酒を飲むべくあるらし」

くよくよ悩むよりは、酒を飲んで忘れてしまおうと詠んだもので、現代にも相通じるものがあると紹介しました。

「橘の花散る里のほととぎす片恋しつつ鳴く日しそ多き」

「人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり」

これらの歌は、旅人が大宰府に左遷された折、連れていった妻が亡くなってしまい、その時の心情を詠んだものです。「亡くなった伴侶を思う気持ちは昔も今も同じ。女々しさも感じますが、現代の男性にも通じるところです」と解説し、参加者もうなずいていました。

万葉集には旅人や家持、憶良などの有名歌人のほか、農民など庶民の作品も含めて約4500首が収められています。中永さんは「万葉集は勅撰和歌集ではないものの、長く読み継がれ、研究されてきました。1300年後の今日でも共感できるものがあるからです。それが万葉集の価値です」と結びました。

次回は11月、中永さんが憶良について話します。講座は来年2月まで続きます。

中永廣樹さん

熱心に聞き入る受講者のみなさん

にぎわった「落人の里」　　平家弘之さん・平家ベンチャーズ

2019年6月16日

平家落人の里として知られる若桜町落折で平経盛祭りがあり、ふだん静かな山郷に人があふれ、テケテケ・サウンドが響きました。

平経盛(1124～1185年)は平安時代の武将です。平清盛の異母弟で、源平合戦の壇ノ浦の戦いで敗れ、入水したとされていますが、配下の20人余りとともに落折に落ち延び、再興の機会をうかがっていたと伝えられています。落折集落は現在12戸、すべて平家姓です。

経盛ゆかりの古文書や甲冑などがあったそうですが、江戸時代の火災などで、ほとんどが失われたといいます。落人伝説を伝えるものは、集落内にある宝篋印塔の墓。墓地にはその位を示すようにイチイの大木もそびえていました。また、集落から林道を400mほど登ったところに、経盛たちが隠れ住んでいたと伝わる広い洞窟もあります。その一帯は巨岩が幾重にも重なりあい、隠棲地の雰囲気が漂います。この日も町内外から多くの観光客が訪れ、杉林の中の洞窟とその大きさに驚いていました。

さて、平経盛祭りです。経盛の命日は6月18日。いつも命日に近い日曜日に開いており、落折自治会は名物のイワナやそばなどを即売するとともに、平家ベンチャーズを招いて、「落人の里」の元気を売り出しました。自治会長の平家弘之さんによると、いつもは30人ほどが暮らす集落ながら、この日だけは落折出身者を含めて130人ほどがお参りするそうで、「祭りを通じて一門の伝統を守り続けていく」と気持ちを新たにしていました。

平家ベンチャーズは平家一門という山口亨代表がリーダー。鳥取市の佐々木若菜さんをボーカルに加えて、ベンチャーズ・メドレーはじめ、テレビの「水戸黄門」や「大岡越前」のテーマ曲などを演奏し、「落人の里」を応援しました。

平家ベンチャーズ

平経盛の墓
（手を合わせる右端が平家弘之さん）

平経盛主従が隠棲したと伝わる洞窟

隠岐はかつて鳥取県だった　　根平雄一郎さん

2019年6月19日

米子市の福生西公民館で、ふれあい学級の歴史講座があり、境港歴史研究会代表の根平雄一郎さんが明治維新前後の鳥取藩について語り、隠岐は一時、鳥取県だったことを紹介しました。

根平さんは維新前後、中海圏であった2つの事件を紹介しました。1つは1868年（慶応4年）2月にあった「山陰道鎮撫使事件」です（明治の改元は慶応4年9月）。

新政府軍と旧幕府軍は1月3日、鳥羽・伏見で戦いますが、新政府軍は京都の背後を固めるため、西園寺公望を主将にする鎮撫使を山陰に派遣します。案内役を務めたのが日御碕神社（境港市渡町）の宮司・門脇重綾です。門脇は伯耆の松下村塾といわれた景山塾（主宰者・景山粛）の門下生で、郷土の忠臣・名和長年の事績「名和氏紀事」をまとめた人です。

鎮撫使に対し徳川の親藩・松江藩は旗色を明らかにせず、不届きの処罰を受けることになりました。松江藩は家老・大橋筑後の切腹で幕引きを図ることになり、大橋は常福寺（安来市）に赴き、白装束に着かえましたが、そこへ「切腹無用」の太政官通達が届き、一命をとりとめました。門脇のとりなしと伝えられています。

もう1つの事件は慶応4年3月にあった隠岐騒動です。松江藩預かりとなっていた隠岐島で、尊王攘夷派の志士に率いられた島民3千人が武装蜂起し、松江藩の郡代を退去させ、80日間住民自治を行った事件です。パリコミューン（フランス革命）の3年前、世界初の住民自治でした。

この事件は太政官から隠岐支配の内示を受けた松江藩が藩兵を派遣し、鎮圧しましたが、島民側に同情する薩摩・長州・鳥取藩が仲介します。この時、鎮撫、調停で活躍したのが景山龍造です。景山粛の長男で医者、藩校・尚徳館の教授などを務めた人で、東京府知事になった松田道之や因幡二十二士事件のリーダー・河田佐久馬などを教えています。門脇重綾とはともに勉学した仲でした。景山の働きもあって、隠岐は明治元年11月に鳥取藩の管理下に置かれました。

鳥取藩は明治4年の廃藩置県で隠岐も含めて鳥取県になりました。明治維新に功績にあった鳥取県でしたが、明治9年に鳥取県は島根県に併合されてしまいます。そして5年後の明治14年9月12日に再置されました。波乱万丈の明治時代でした。ちなみに廃藩置県で306あった道府県は中央集権化で漸減し、今の47都道府県になったのは明治21年でした。

根平さんは初代県知事・山田信道の「脱却依頼心始為自治民」の言葉を紹介するとともに、「人口減少、超高齢化社会の日本で、果たして今の都道府県でやれるのでしょうか」と問題提起していました。廃県置州（道州制）や地方創生が問われています。

根平雄一郎さん

門脇重綾

脱却依頼心始自治民
（山田信道筆）

戻ってきた湿原の植物たち　　矢田貝繁明さん

2019年6月22日

南大山・鏡ヶ成湿原の再生を進める大山隠岐国立公園鏡ヶ成保全再生活用協議会は初の自然観察会を開き、30人が参加しました。大山自然歴史館の矢田貝繁明館長の案内で湿原をめぐり、ボランティア活動によって保全再生が成果を挙げつつあることを学びました。

江府町にある鏡ヶ成は烏ケ山・象山・擬宝珠山に囲まれた盆地状の高原です。春は新緑、夏はキャンプや森林浴、秋は紅葉、冬はスキー・スノーボードが楽しめるところで、一帯は国民休暇村（約130ha）になっています。その拠点が宿泊施設「休暇村奥大山」です。

この高原は烏ケ山や象山の雨水が集まり、貴重な山地湿原だったそうですが、戦前は軍馬の養成で乾地化が進み、戦後は農業や生活の変化で牧草やカヤなどが使われなくなって草原化、湿原エリアが縮小しました。いま湿原が残っているのは「休暇村奥大山」本館裏の周辺です。

「手を加えないのが自然保護」という考えのもと、湿原の保全活動は細々としたものでしたが、3年ほど前からササやツゲなどを草刈りし、土のうで地下水位を上げ、木道を整備し、湿原植物の自然再生を目的に野焼きなどを続けてきました。2019年春には環境省、鳥取県、江府町、鳥取大学、休暇村協会、サントリーホールディングスなど産官学の10団体で鏡ヶ成保全再生活用協議会も発足し、協働で保全再生に乗り出しました。そのかいあって、木道のそばでバイケイソウやトモエソウなどの湿原植物が復活してきました。

自然観察会はあいにくの小雨でしたが、矢田貝館長は30分で巡れるコースを90分以上かけて熱心にガイドしました。湿原植物の説明はもちろんですが、鏡ヶ成であった第8回国立公園大会（1966年）で「自然保護憲章」が制定されたことや、モリアオガエルとイモリの話、チシマザサの新芽で笛づくりの実演、湿原の茂みで見られるカッコーの托卵など、多彩な解説で参加者を喜ばせました。

矢田貝さんは「手をかければ、自然はちゃんとこたえてくれます」と、湿原保全ボランティアへの参加を呼びかけていました。

矢田貝繁明さん

鏡ヶ成湿原を巡るみなさん

「自然保護憲章発祥の地」の記念碑
（元鳥取県知事・西尾邑次書）

「赤とんぼ」親子を語る　　四井幸子さん

2019年6月23日

童謡「赤とんぼ」をつくった三木露風の生誕130年を記念して、鳥取市のわらべ館は露風誕生日の6月23日、記念コンサートを開きました。赤とんぼの母・碧川かたの生涯をNHK朝の連続テレビ小説の候補に推す四井幸子さん（岩美町）もゲスト出演し、「赤とんぼ」親子のエピソードを紹介しました。

三木露風（1889～1964年）は兵庫県たつの市で生まれました。母親は鳥取藩家老の和田邦之助の娘・かた。かたは龍野の名家に嫁ぎ、2人の男の子をもうけますが、身持ちの悪い亭主のせいで離婚します。露風はこのときの心境を「われ七つ　因幡に去（い）ぬのおん母を　又かえりくる人と思いし」と、詠っています。

かたは自立のため、看護婦（看護師）になり、再婚します。5人の子どもにも恵まれ、働きながら、子育てしながら女性参政権運動などに取り組みます。一方、露風は詩作の才を発揮し、大正時代の詩壇で北原白秋とともに「白露時代」を築きました。大正10年、露風は「赤とんぼ」を発表します。作曲は山田耕筰です。

夕焼け小焼けの赤とんぼ　負われてみたのは　いつの日か
山の畑の桑の実を　小籠につんだは　まぼろしか
十五で姐やは嫁に行き　お里のたよりも　絶えはてた
夕焼け小焼けの赤とんぼ　とまっているよ　竿の先

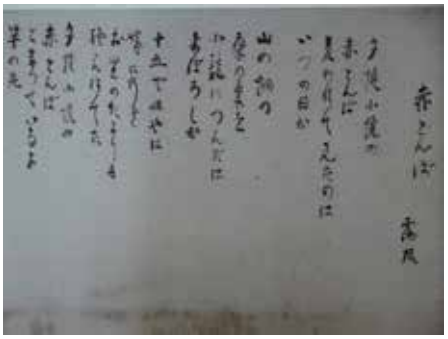
昭和33年に音楽の教科書に採用され、国民が最も愛する童謡、日本の歌の代表格になりました。

「赤とんぼ」親子の心情をしのび、四井さんの熱の入った解説が続きます。露風はだれに負われたかったのでしょう。嫁に行ったのはだれだったのでしょう。竿の先に止まっているのは、とんぼだけだったのでしょうか―。

記念コンサートは露風自筆の「赤とんぼ」の歌詞や耕筰自筆の「赤とんぼ」の楽譜などが並ぶ会場でありました。わらべ館の童謡・唱歌専門員の平緒佐和さんと濱崎希さんがピアノと歌で露風の作品を紹介し、来場者とともに「赤とんぼ」を合唱しました。露風にとって最高の誕生日プレゼントになったことでしょう。

四井幸子さん

三木露風生誕１３０年記念コンサート



三木露風自筆の「赤とんぼ」
（鳥取県立博物館蔵）

朝ドラを目指す「赤とんぼの母」の
パンフレット

三木露風

ただものじゃない鳥取藩　　鳥取歴史振興会

2019年6月23日

鳥取歴史振興会（森本良和会長）はNHK大河ドラマ「西郷どん」の時代考証をした志學館大学の原口泉教授をゲストに招いて、鳥取市の県立博物館で薩長因備シンポジウムを開きました。明治維新の立役者が「薩長土肥」ではなく「薩長因備」だったことを改めて示し、幕末維新史を塗り替えたいとしています。

原口教授は平成31年2月のNHKの人気番組・歴史秘話ヒストリアで「明治維新は薩長因備の力によるもの」と断言し、全国の歴史研究家から注目されました。

その根拠になったのが鳥取市歴史博物館が所蔵する西郷隆盛の手紙です。手紙は鳥取藩の家老・荒尾駿河へ渡ることを想定して岡山藩家老・土倉修理之介に出されたものです。「鳥取藩は真に勤皇に尽くすものか、はたまた、ただ朝廷の動きを見ているだけなのか」という内容で、鳥羽・伏見の戦いの10日前でした。鳥取藩への気遣いとどう喝は奏功し、戦いが始まると、鳥取・岡山藩は薩長の戦列に加わっていました。しかも加担したのは両藩だけでした。鳥取・岡山両藩主は将軍・徳川慶喜の実の兄弟。この身内割れの姿は他藩の動向を左右しました。

原口教授は「薩長因備の真実」について基調講演し、西郷たちが鳥取藩の動向に気をもんだわけを解説しました。将軍の兄であることに加えて、全国12番目の大藩で大兵力があり、薩摩・肥前藩と同様、当時の鳥取藩は反射炉を備えて大砲をつくる技術や軍事力があったことなどをあげました。鳥羽・伏見の戦いでは、鳥取藩は淀千両松の戦いで長州勢の先頭に立って、大砲を撃ち続けたといいます。

原口教授によると、戦の初めのころ、大藩のほとんどは薩長と幕府の私戦と模様ながめをし、肥前が戦列に加わったのは江戸城の無血開城後、上野戦争からだったといいます。

明治維新をリードした薩摩藩について、原口教授は興味深い話を紹介しました。それによると、薩摩藩は琉球などを窓口に東シナ海経済圏を確立し、日本海経済圏と連携することで富を蓄えたといいます。黒色火薬は木炭、硫黄、硝石を混合して作りますが、硫黄は薩摩硫黄島、硝石は越中・五箇山（加賀藩）が主産地です。その交易には北前船が使われたといいます。薩摩藩は広島藩とも深くつながり、大崎下島（呉市）の御手洗港を拠点にしたといいます。広島藩や日本海諸藩との人や経済のネットワークが薩摩藩の力の源だったようです。

鳥取歴史振興会長の
森本良和さん

原口泉さん

歴史ファンが集まった
薩長因備シンポジウム

鳥取城跡の擬宝珠橋を渡る
鳥取藩第１３番隊の山国隊
（平成３１年３月）

大受けでした　　APON

2019年6月27日

鳥取県障がい者技能競技大会（アビリンピック鳥取大会）が鳥取市の県立福祉人材研修センターであり、パソコンのデータ入力やフラワーアレンジメントなどを競いました。アトラクションで岩美町の音楽ユニット・APON（アポン）が出演し、癒やしの音楽で競技者の健闘をたたえました。

アビリンピック鳥取大会（鳥取労働局、鳥取県など主催）は、障がい者の職業技能の向上や就業機会の拡大を目的に開かれており、上位入賞者は全国大会に進みます。鳥取大会には県内の特別支援学校や作業所などから68人が参加し、パソコンによる文書修正、あて名のシール貼り、花束や飾り花づくりなど7種目を競いました。全国大会は11月に愛知県常滑市の中部国際空港セントレアで開かれます。

競技終了後、審査時間を利用して競技者慰労のアトラクションがあり、3人組の音楽ユニット・APONが出演。とうふるーと、フルート、歌、オカリナ、ギターで「アメージンググレース」「竹田の子守歌」「コンドルは飛んでいく」など多彩な音楽を披露しました。豆腐ちくわの楽器を初めて見る人が多く、客席は大喜び。APONも即興で替え歌でこたえ、楽しいコンサートになりました。圧巻だったのはクラシック・オムニバスです。クラシック曲の代表的な旋律をメドレー演奏するもので、運動会などでおなじみの「クシコス・ポスト」など7曲を歌入りで紹介しました。

APONはとうふるート奏者のイワミノフ・アナミール・アゾ―スキー（河下哲志）さん、ボーカリストの谷口尚美さんとオカリナ奏者の岸本みゆうさんでつくる「ぽんかん。」が合体したもので、平成30年に鳥取市であった「生涯現役まつり」で誕生しました。岩美町の道の駅「きなんせ岩美」で毎月、定期演奏会を開いているほか、イベントなどにも出演し、地域活性化に励んでいます。

APON のみなさん

とうふるーとづくりを指導する
河下哲志さん

アビリンピックの開会式

フラワーアレンジメントに挑戦

岩美は見どころいっぱい　　いわみガイドクラブ

2019年6月29日

岩美町観光協会は岩美町の岩美鉱山と岩井温泉で山陰海岸ジオパークのガイド養成講座を開き、いわみガイドクラブ（油浅郁夫代表）が受講生を案内しました。山陰海岸ジオパークには「浦富海岸」などの海辺ばかりではなく、山間部も含まれており、その魅力の多さを学びました。

山陰海岸が世界ジオパークになったのは2010年（平成22年）。それ以来、ガイド養成が続いています。講座はジオパークの概要、マナー接遇、救急救命、現地研修などが4日間あり、すべて受講すれば、ジオパーク推進協議会からガイドとして認定されます。今年は10人が受講しています。

いわみガイドクラブは山辺の現地研修を担当し、油浅代表と片村文系さんの2人が「岩美鉱山と岩井温泉の歴史・文化」をガイドしました。

岩美（荒金）鉱山は1889年（明治22年）に発見され、銅山開発が進みました。大正時代の機械化や岩井軌道の敷設で大いに栄えましたが、戦時中の1943年（昭和18年）の鳥取大震災で、鉱山労働者や荒金住民の65人が犠牲となり、品質低下したこともあって、1971年（昭和46年）に閉山しました。震災犠牲者のうち、朝鮮労働者など20人余りが埋もれたままで、現地には供養塔が設けられています。

廃鉱になった岩美鉱山では酸性水や重金属の鉱害を防ぐため、鳥取県と岩美町鉱害防止協会で抗廃水の中和処理事業が続いており、いまでは小田川にサケが戻ってくるまでになったといいます。

続日本記には「文武天皇2年（698年）因幡国より銅鉱献ず」とあり、岩美鉱山は日本最古の銅山のひとつとされています。近くの法正寺村や銀山村からも後世、金銀銅が採掘されています。荒金の行者山は因幡を代表する山岳信仰遺跡になっており、修験者が銅山を見出したのかもしれません。

ロマンをかき立てるのは、岩井温泉はずれにある岩井廃寺跡の「鬼の椀」です（国の史跡）。長径約3.6m、短径約2．3m、厚さ1m余りの巨石で、中央には大きな穴がうがたれ、白鳳期の三重塔の心礎だったとみられています。山陰最古の岩井温泉は開湯1200年とされていますが、白鳳期に温泉が開かれていたとすれば、その歴史は1300年前にさかのぼります。ちょうど修験者が銅山を見つけたころです。鉱山ブームで沸いていたのかもしれません。

油浅代表は「岩美鉱山や岩井温泉は山ひとつ隔てて隣り合わせ。熱水鉱床のおかげで金銀銅や温泉に恵まれました。岩井温泉界隈はどこを掘っても、いまでも温泉が出てきます」と説明していました。熱水鉱床は地下の割れ目に熱水が入り、その熱水中に溶け込んださまざまな成分が沈澱してできた鉱脈鉱床です。まさにジオからの贈り物です。

元岩井小学校をガイドする
油浅代表（中央）

岩井廃寺の塔礎石「鬼の椀」見学

岩井温泉基因絵図
（東源寺）

岩美鉱山の全盛期

外国の人にも豪円さん　　笹間政典さん・尾崎孝介さん・田中精夫さん

2019年6月30日

比叡山延暦寺や大山寺などを再建した豪円和尚の功績を広く知ってもらうため、伯耆・伝承隊は紙芝居で普及活動を展開中ですが、鳥取県社会福祉協議会のとっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」の協力で紙芝居を英語・中国語・韓国語に翻訳し、外国人観光客にも豪円和尚や大山の歴史をPRしていくことになりました。

豪円和尚（1536～1611年）は今の米子市の出身で、戦国時代から江戸時代にかけて活躍しました。織田信長に焼かれた延暦寺はじめ、備前金山寺、伯耆大山寺を再建・復興したほか、豊臣秀吉の備中松山城の水攻めでは雨ごい、米子城や松江城の築城の際には祈祷するなど〝時の人〟でした。

その一代記を伯耆・伝承隊は紙芝居にし、小学校や公民館などで上演を続けており、鳥取県のNHK大河ドラマ候補のひとつにもなっています。この紙芝居をシニアバンクに登録する笹間政典さん（日野町）、尾崎孝介さん（鳥取市気高町）、田中精夫さん（鳥取市佐治町）が、それぞれ英語・中国語・韓国語に翻訳しました。境港にやってくるクルーズ船の観光客などに披露し、大山の歴史や日本文化を伝えることにしています。

紙芝居の翻訳では、それぞれご苦労がありました。笹間さんによると、例えば織田信長や豊臣秀吉といっても、外国の人はほとんどわかりません。そこで「最強の戦国大名」「信長の一番の家来」などと説明を付け加え、石高も「1 石は人間ひとりが一年間生活していけるだけの米の量」と解説して翻訳を進めたといいます。

80歳近い尾崎さんは中国で整体師の資格取得のかたわら、日本語講師をしながら中国語を習得。今でも鳥取大学の中国人留学生と交流を続けています。「中国は広いので、私の翻訳でうまく伝わるかどうか」と心配されていましたが、流ちょうな発音は健在です。韓国通の田中さんは鳥取大学の留学生・李善郷さん相手に翻訳文を読み合せ。「しっかり通じます」と OK をいただきました。

伯耆・伝承隊事務局の小椋弘美さんによると、紙芝居はいつものように吉島潤承さん（大山圓流院前館長）による迫力ある読み聞かせのスタイルを守り、翻訳文はスクリーンに表示して上演するといいます。クルーズ船や旅館・ホテルなどでの出張上演に期待がかかります。

笹間政典さん

尾崎孝介さん

田中精夫さん

豪円和尚絵本

鏡の前でワッハッハッハ！　　桂小文吾さん

2019年7月5日

八頭町老人クラブ連合会の八東支部（山本設男支部長）は八東体育文化センターで高齢者福祉大会を開き、山陰の噺家・桂小文吾さん（米子市）の講演と落語と踊りを楽しみました。桂さんは秋までに旧船岡町や旧郡家町の老人クラブも巡回することにしています。

桂さんの講演は、お得意の「笑いは人生の宝」です。ストレスがたまると、交感神経を刺激して頭の中が真っ白になったり、ケンカ早くなってしまいがちですが、笑うと快楽物質が出てきて、気分が落ち着くそうです。自宅でできる効果的な笑い方を指南しました。

その方法は鼻から息を吸って口から吐き出す腹式呼吸です。毎朝、鏡の前で深呼吸して、大きな声で「ワッハッハッハ！」と5回ほど繰り返せば、楽しくなり、元気になるといいます。名づけて「笑福式呼吸」。ダジャレの連発で、会場は大喜びでした。

落語もダジャレで絶好調です。奥方と女中さんが煮豆を競ってつまみ食いし、食いつくしてしまう小話ですが、お茶を飲んだり、料理を食べる小文吾さんの仕草が自然で、観客はプロの技に感心しきりでした。

技といえば、日本舞踊でも見せました。氷川きよしの「勝負の花道」を扇子1本で舞いましたが、福祉笑劇団のオーナー座長とあって、わざと扇子を落として笑いを取るサービスも忘れません。キレッキレの舞い姿を披露しました。

アトラクションでは八東小学校の児童が校歌や手話入りの「ふるさと」などを歌い上げ、シニアのみなさんに元気を届けました。

見えを切る桂小文吾さん

ダジャレも絶好調の桂小文吾さん

手話を交えて「ふるさと」を披露する
八東小学校の児童たち

一緒に楽しみませんか　　鳥取山草同好会

2019年7月6日

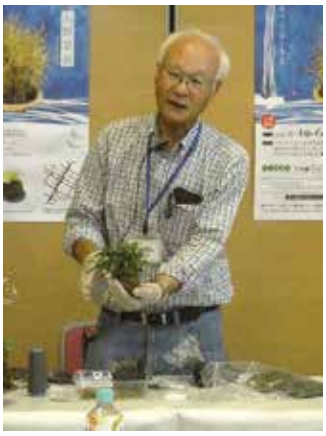
鳥取山草同好会（田中則夫会長）の納涼山野草展が鳥取市のパレットとっとりであり、たくさんの市民でにぎわいました。最終日には苔玉づくりの講習会もありました。

山野草を楽しむ鳥取山草同好会は昭和53年にできました。41年の歴史を誇ります。現在、会員は27人。毎月の定例会で山野草の栽培方法を勉強したり、増やした苗の分譲などを行っているほか、芽吹きの春・緑増す夏・紅葉の秋には展示会を開いています。

田中会長によると、団塊の世代を境に山や川で遊んだ人が減り、それに連れて山野草への関心が薄れ、各地の山野草会は会員の高齢化もあって消えつつあるそうです。鳥取山草同好会もかつては40人ほどの会員がいたといいます。いま同好の仲間を募っています。ご連絡は田中会長（携帯電話090－9418－9877）へ。

さて、今回の納涼山野草展には12人が自慢の100鉢を出展しました。いずれも家庭の庭で大切に育てられたものです。トクダアシやフウチソウなどにピンクの小花、カキランやクサレダマなどに黄色い小花がそれぞれ混ざり込み、涼しさを感じさせてくれる作品ばかりです。草も花も主張しあわず、引き立てあっているのが印象的です。田中会長は「山野草もいけばなと同じで、展示盆も含めて調和が最も大切です」と解説していました。

苔玉づくり講習会も盛況でした。定員20人のところへ24人が参加し、田中会長の指導と同好会員のお手伝いで1時間で仕上げました。田中会長によると、ほとんどの材料は「100円ショップ」でそろえられ、苔は雑木林の倒木や道路べりの日陰などから手に入るそうです。肝心なのは苔玉管理。水浸しは厳禁で、風通しの良い湿度がある場所が最適といいます。緑増す苔玉は涼を呼びます。お庭にひとついかがですか。



鳥取山草同好会の田中会長

苔玉づくり講習会

鳥取山草同好会の納涼山野草展

だれもが暮らしやすい地域に　　坂本昭文さん

2019年7月6日

鳥取県福祉研究学会（会長・山田修平藤田学院理事長）の総会が鳥取市の県立福祉人材研修センターであり、元南部町長で若者支援拠点「いくらの郷」所長の坂本昭文さんが、だれもが暮らしやすい地域づくりの実践研究を発表しました。

福祉研究学会は毎年２月、高齢者福祉（施設と在宅）▽児童福祉▽障がい者福祉▽地域福祉―の５分野で実践研究を発表し、優秀な研究に県知事賞（最優秀賞）と学会奨励賞（優秀賞）を贈っています。総会では受賞研究の内容発表が恒例になっており、約１００人が聴講しました。

前年度の県知事賞を受賞したのは、ニートや引きこもりの若者の支援を行っている南部町の「いくらの郷」です。近年、ニートや引きこもりなどは地域課題になっていますが、南部町では町内の社会福祉法人（町社会福祉協議会、伯耆の国、祥和会）はじめ、行政、医療法人などが連携して支援し、だれもが暮らしやすい地域づくりを目指しています。その成果が表れていることが先駆的な取り組みとして評価されました。

坂本さんによると、「いくらの郷」を訪れる若者は所内にある加工所での活動や共同作業を通じて、地域の人と交流し、コミュニケーションをとっていますが、人間関係を大事にすることが円滑な社会復帰につながっているといいます。

ただ、課題も見えてきました。坂本さんは「引きこもりを恥ずかしくないとする社会的認知が必要。引きこもりだけでなく、さまざまな課題を抱える若者もいるので、制度に捉われず、各分野の関係者が密に連携をとることが大事」と訴えていました。

鳥取県福祉研究学会総会

坂本昭文さん

２月の研究発表会での受賞者記念撮影
（前列左から６人目が坂本さん）

ライブ１０５回を超えました　　鳥取ベンチャーズ

2019年7月7日

鳥取ベンチャーズのリサイタルが鳥取市の用瀬流しびなの館であり、満席の会場は懐かしのベンチャーズ・サウンドで大盛り上がりでした。

鳥取ベンチャーズは2010年の発足で9年目になります。毎年リサイタルを開き、鳥取市の桜まつりやマラソン大会、生涯現役まつりなどに出演しているほか、県東部の納涼祭や公民館などで演奏しています。ライブ件数は通算で105回を超えたそうです。

今のメンバーはリーダーの宮部兼壽さん（ドラム）、細田佳宏さん（リードギター）、中島康博さん（サイドギター）、西川嘉則さん（ベースギター）、土居孝さん（マネジャー）の5人です。メンバーの交代はあるものの、年々技量アップし、ベンチャーズのコピーバンドのなかでは高い評価を集めています。

この日のリサイタルにも県内はもとより、岡山・姫路・神戸・愛媛などからファンや仲間が駆けつけ、定員100人の会場は立ち見もでて超満員。演奏曲目はアンコールを含めて30曲を超え、2時間余りにわたって熱演が続きました。

なかでも、リードギターの細田さんは「ブルドッグ」などで繊細なテクニックを披露し、ドラムの宮部さんは「キャラバン」などで力演。ステージ横では観客の女性が元気よくステップを踏むなど、客席も一体となってリサイタルを盛り上げました。

鳥取ベンチャーズの出前演奏依頼の連絡先は、宮部さんへ（携帯電話090－7136－7720）。

鳥取ベンチャーズ

満席のリサイタル
（用瀬流しびなの館）

豊かな中海に再生しよう　　渡部敏樹さん

2019年7月11日

「境港市のことをもっと知ろう」という境港楽習会（定岡敏行代表）が始まりました。昨年に次ぐもので、開講日のこの日は市老人福祉センターでNPO法人自然再生センター副理事長の渡部敏樹さんが「中海の四季」について語りました。境港楽は毎月1回、11月まで5回あります。

渡部さんは1942年（昭和17年）旧渡村生まれ。地元の高校を卒業後、地元の金融機関に勤め、退職後は地元で無農薬の農場を経営するかたわら、中海の海藻を回収して農場の土づくりに活用しています。また、かつての弓浜部の特産品・伯州綿の復活を目指して、そのトップとしてがんばっています。生まれてからずっと、中海を見続けてきました。

渡部さんによると、中海は昭和30年代半ばごろまで四季があり、豊かな海だったといいます。

春は潮干狩りができ、5月になると農家は肥料にする海藻を一斉に刈り取りました。夏は海水浴ができ、ニガシオによる魚の収穫でにぎわったといいます。ニガシオとは水温低下で海が青白くなり、魚が浮いたり、岸辺に寄ってくる現象で、住民は総出で正月料理に欠かせないゴズとりに励んだそうです。秋はゴズ釣りの最盛期。夜には舟にガス灯をともして、ヤスやタモで魚とりしたといいます。冬の凍てつく日は甲イカ拾いで海岸はにぎわいました。中海は年中、みんなが集まってくるところでした。

そんな豊かな中海から四季が消えていったのは、昭和35年ごろだったといいます。社会生活の変化や化学肥料、農薬などで中海の汚濁は進み、1968年（昭和43年）からは中海干拓が始まりました。中浦水門が完成したのは昭和49年。このころになると、中海の浅場はほとんど消えました。その後、干拓地は次々に完成していきましたが、農業事情の変化や環境悪化が問題になり、2002年（平成14年）には「昭和の国引き」と呼ばれた中海・宍道湖の淡水化事業が中止になりました。中浦水門が平成21年に撤去されると、海藻が発生する海になりました。

中海再生に向けて、干拓に伴ってできた海底のくぼ地修復と放っておくと腐敗する海藻の処理が課題になりました。島根大学を拠点に産官学民で自然再生センターができ、くぼ地の埋め戻し、海藻の回収と利用の取り組み、学校での環境学習などが行われています。調べによると、くぼ地は中海全体で800万㎡（3，100万㎥）、東京ドームの25杯分もあるそうです。これをならす土砂が確保できず、火力発電所の石炭ガラで代用実験しているそうです。再生へ挑戦が続きます。

渡部さんは「一度壊れた自然を元に戻すのは難しいことです。でも、あきらめてはいません」と話していました。

渡部敏樹さん

中海にかつてあった海水浴場

海藻の生態系影響調査

海藻を入れた芋畑

世直し餃子に生きる義民の心　　入江宣明さん

2019年7月12日

八頭郡の退職公務員連盟（岡森裕会長）は八頭町中央公民館で研修会を開き、わかさ生涯学習情報館の元館長・入江宣明さんから江戸時代の鳥取藩最大の百姓一揆とされる「元文一揆・勘右衛門騒動」を聞きました。

元文一揆は今から280年前、元文4年（1739年）の旧暦2月、今の暦では桜の咲くころ、3月29日から4月5日にかけて発生しました。凶作続きで飢えた百姓が各地で騒動を起こしながら移動し、最終的には因幡、伯耆の百姓5万人が安長、古海の千代川河原に集まり、藩と交渉しました。しかし、百姓の要求は取り上げられず、首謀者は処罰され、藩側の役人も罷免されて決着しました。

入江さんによると、江戸時代に鳥取藩で発生した一揆は44件（因幡13・伯耆30・因伯1、八頭郡誌）あったそうで、藩全域に広がったのは、この元文一揆だけだったといいます。原因は豊凶にかかわらず年貢を一定にし、大庄屋に徴収を請け負わせる「請免制」にこだわり、破免など時局に合わせた救済に乗り出さなかったからだとされています。

元文一揆の翌年には匿名で「因伯民乱太平記」という本が出され、そのてんまつを記しています。それによると、西御門に集まった百姓たちは若桜宿、船岡村、用瀬宿などの大庄屋の家を打ち壊しながら移動し、炊き出しや米などを供出した者には乱暴しなかったといいます。一揆の後は首謀者の勘右衛門とその弟、武源治など20人ほどが死罪さらし首になったそうです。その「斬刑地蔵」が千代川に沿って走る鳥取環状道路のそばにまつられています。

勘右衛門は東村（今の八頭町東地区）の人です。八東川のたびたびの氾濫（はんらん）を見かねて、私財を投じて石組み堤防を約600m築き、土手には飢饉に備えて「ニラ」を植えました。近くには地元住民によって勘右衛門の顕彰碑が建てられています。

一方、「ニラ」は地元の勘右衛門土手ニラ保存会が守り続け、10aほどの畑でも栽培されています。平成22年からは鳥取県の農商工連携事業で倉吉市の焼き肉・ラーメン店と組んで「世直し餃子」として商品化され、イベントなどでも売り出し、「おいしい」と好評です。

入江宣明さん

東村勘右衛門の顕彰碑

八東川の徳丸どんどから望む
「勘右衛門土手」

八頭地区退職公務員連盟の研修会

７０年のコレクション展　　清末忠人さん

2019年7月13日

鳥取市のあおや郷土館で「清末忠人のコレクション展」が始まりました。小学校の先生や博物館の学芸員など、およそ70年間の調査・研究活動を通じて集めた植物・昆虫などの標本や鳥のはく製などで、夏休みの期間中、8月25日まで開かれています。入場無料。

清末さんは昭和6年、鳥取市に生まれました。鳥取大学を卒業後、内地留学を経て県立博物館の学芸員になり、県教育研修センター所長、小学校校長などを歴任しました。この間、「ふるさとの生物」「鳥取砂丘の生き物たち」「山陰自然歳時記（1～6巻）」など多くの著書を出版し、平成16年に瑞宝双光章を受章しました。いま鳥取生物友の会会長、鳥取自然に親しむ会会長などを元気に務めています。

コレクション展の入り口に、清末さんが生物や自然のとりこになったわけが書かれています。それによると、清末さんは小学6年生の時、鳥取大震災があり、ろっ骨を4本折る大けがをし、死線をさまよいましたが、奇跡的に助かったそうです。身動きできない、その時に見たアリや虫たちの生命力、植物の生きる力に魅せられ、すべてはここから始まったといいます。〝自然大好き歴〟70年余りといったところです。

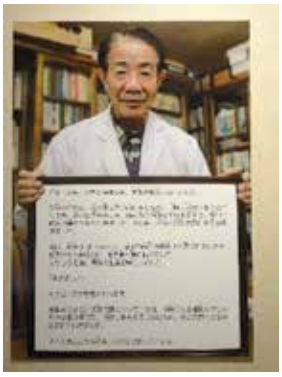
コレクション展には清末さんが海外も含めて県内外で集めた植物、貝、化石、昆虫などの標本、鳥や獣のはく製など約千点が並びました。開幕日には清末さんのギャラリートークがあり、50人を超す人が詰めかけました。圧巻は60体の鳥のはく製と17箱もある昆虫標本です。

清末さんによると、獣や鳥をはく製にするには、図体の大小にかかわらず、一体2カ月ほどかかるそうで、内臓・肉・骨すべてを取り出して皮だけにし、防腐処理した木くずと針金で成形し、仕上げるといいます。素材になったのは県庁の窓などにぶつかって死んだ鳥たちで、クマタカは八頭郡の高圧線で感電死したものをはく製にしたそうです。

珍しいものでは、南方の貝のケースに「ペガサスノツバサ」が収められています。秋の星座ペガサスは天空を駆ける馬で白い羽をつけていますが、その羽に似ているところから命名されたそうです。「星取県」にはほしい逸品です。

化石のケースにも貴重なものが収められています。「火山豆灰の化石」。大山の火山灰に雨粒が丸められ、豆のようになって化石化しているもので、米子城山にはたくさんあるそうです。いま米子城では遺跡の発掘作業が続いており、簡単に見つけることができるかもしれません。

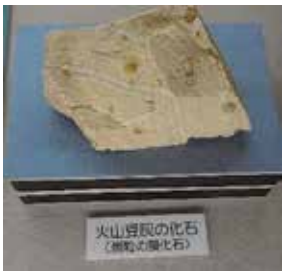
このほかにも、コレクション展には珍品、宝物がたくさんあります。会場に足を運んで、見てください。清末さんは「私のコレクションは県立博物館に寄贈するつもり」だそうです。



清末忠人さん

カタツムリについて
解説する清末さん
（写真中央）

鳥や小動物の
はく製がいっぱい
（清末コレクション展）



雨粒が岩にからまった
火山豆灰化石

清雅爽風　　小原流鳥取支部

2019年7月15日

いけばなの小原流鳥取支部（田村慶子支部長）は、鳥取市のとりぎん文化会館で創立70周年の記念花展を開きました。テーマは「清雅爽風」。自然豊かな、涼やかないけばなが会場を埋め、大勢の人でにぎわいました。

小原流鳥取支部は昭和25年に発足し、会員はおよそ300人、県東部の各地で小原流のいけばなを普及、指導しています。今回の記念花展には盛り花や瓶花など約150点の作品が並びました。アジサイ、スイレン、ホテイアオイ、ダリア、ランなどの夏の花や草、木の枝をふんだんに使い、それぞれの作者が自然でさわやかな夏を表現しました。

「水　ひかる」ゾーンでは水盤の水がしっかり光るように盛り花を工夫し、「花　うるわし」ゾーンでは田村支部長の紅葉を中心に夏の花が美しさを競い、「風　さそう」ゾーンでは夏の木々と緑で風を感じさせるなど、自由自在の作風を披露しました。

小原流5世家元の小原宏貴さんも大栄スイカを2つ乗せた創作いけばなを特別出品。来場者を驚かしました。小原家元によると、自然豊かな鳥取の夏をスイカに託して表現したといいます。いけばなは「花の美しさ」を通じて、自然や命の大切さ、和む心を育むそうですが、遊び心も育ててくれるようです。

開会式では平井伸治県知事も招かれてテープカットしました。あいさつで平井知事は、新元号「令和」出典のもとになった大宰府での「梅花の宴」に伯耆国司だった山上憶良も出席して「春さればまづ咲く宿の梅の花　独り見つつや春日暮らさむ」と詠んでいることを報告し、鳥取の人も昔から自然や花を愛でてきたと紹介するとともに、「スイカのいけばなでスイカ―ッとなります」とサービスしていました。

いけばな小原流展開幕

花うるわし

大栄スイカが乗ったいけばな
（小原宏貴家元作）

風さそう

フリースペースは南方の観葉・
果肉植物などで飾り付け

発見！南の海の生き物たち　　清末忠人さん

2019年7月20日

境港市の夢みなとタワーで「南海の楽園　タヒチの海の水族館」が開かれていますが、これに合わせて夏休みこども教室があり、自然に親しむ会の清末忠人会長が海の生き物についてガイドしました。参加した親子はメモを取りながら熱心に聞き入っていました。新日本海新聞社、鳥取県社会福祉協議会・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催

水族館のない鳥取県でも海の生き物に親しんでもらおうと、2年に1度移動水族館が開かれています。今回のテーマは「タヒチの海の生き物」です。南国の海に生息する色鮮やかな魚やウミガメ、サメなど多様な生き物が展示され、清末さんは生き物の特徴や名前の由来などを解説しました。

「クマノミの体はイソギンチャクが嫌がる〝ヌルヌル〟に覆われているので、イゾギンチャクのなかに入っても食べられずに、外敵から身を隠すことができます」「ナマコは汚れた砂をエサと一緒に食べて、きれいな砂を吐き出すので、〝海のそうじ屋さん〟と呼ばれています」「テッポウウオは水面から鉄砲のように水を飛ばして、木の葉などにいる虫を落とすことから、その名が付きました」ーなど、どれも個性的な生き物ばかりです。

興味津々の子どもたちからは、たくさんの質問が飛び交い、清末さんが一つひとつ丁寧に答えていきます。海の生き物が大好きだという米子市の坂東真宙くん（淀江小学校5年）は「南国の海の生き物について、たくさん知ることができて楽しかった。夏休みの宿題に生かしたい」と満足そうでした。

清末さんは「ふだん見られない生き物ばかりで、たくさん発見があったはず。夏休みの宿題で、その発見をしっかりまとめてみましょう」と子どもたちに呼びかけていました。

子どもたちにオオシャコガイの説明をする清末さん

清末忠人さん

にぎわうタヒチの海の水族館

元気な風が吹いてきた　　倉吉打吹太鼓、因伯音、APON、打吹童子ばやし

2019年7月20日

倉吉市の中心市街地にランドマークとなる複合施設「打吹回廊」が完成、大勢の市民が参加して盛大にオープンしました。周辺は歩行者天国になり、中部和太鼓ネットワークも「どどんがドン」で協賛、夜遅くまでにぎわいました。シニアバンクも多くの登録団体が出演して、倉吉の新名所誕生を祝いました。

「打吹回廊」は芝生産とゴルフ場などを経営するチュウブ（本店・琴浦町、太田英二会長）がレストラン跡地に建設しました。ステージ付きの芝生広場を取り囲むように展望塔・交流棟・飲食棟を回廊で結び、市民や観光客が買い物や食事やイベントなどを楽しめるようになっています。高さ15mの展望塔からは打吹天女伝説の打吹山や赤瓦の町並みが一望にでき、ちびっ子の遊具も整備され、人気を集めそうです。

「打吹回廊」は倉吉打吹太鼓（内海洋介代表）の元気な響きで幕開けしました。鳥取県・平井伸治知事、倉吉市・石田耕太郎市長などのあいさつ、マグロ解体ショー、音楽ステージなどがあり、三朝温泉の津軽三味線グループ・因伯音（山内謙一代表）や岩美町のトウフルートとオカリナのAPON（河下哲志代表）などが出演し、「よさこいソーラン」や「クシコス・ポスト」など元気な音楽で船出を祝いました。

この日はちょうど倉吉銀座商店街（小林健治理事長）の土曜夜市。「打吹回廊」周辺は歩行者天国になり、中部和太鼓ネットワーク（村田速実代表）の白鳳太鼓、彩七、三徳山行者太鼓えん太、海響太鼓、倉吉打吹太鼓、和太鼓LEGEN童、打吹童子ばやしの7団体が競演太鼓「どどんがドン」を初めて企画。ストリートダンス・チームも加わって、いつもの土曜夜市を上回るにぎわいになりました。

鳥取県中部地震（2016年10月21日）から3年。倉吉市は市民が結束して、「復興」から「福高」へ歩みを強めていますが、打吹山のふもとには白壁土蔵群・赤瓦や円形劇場に次いで、新たに「打吹回廊」が加わりました。さらに近くでは倉吉市役所分庁舎が整備中で、県立美術館の計画も進行中です。小林理事長は「懸案の空き店舗を埋め、人波でにぎわう街づくりを進めたい」と意気込んでいます。

鳥取県と鳥取県社会福祉協議会も来る9月22日、「打吹回廊」とその周辺で「生涯現役まつり」を実施する予定です。ご期待ください。

倉吉打吹太鼓

APON

倉吉にオープンした
「打吹回廊」

因伯音

とっとり中部和太鼓ネットワークの
村田速実代表

音楽は世界共通言語　　菊弘瀬恭子さん

2019年7月21日

鳥取市の中心市街地、花見橋そばの浄宗寺（片上義明住職）で、ぶらり街角コンサートがあり、箏とヴィオラ、和洋の弦楽器による夏の音楽を楽しみました。

浄宗寺のぶらり街角コンサートは夏の恒例行事で5年目になります。だれもが気軽に立ち寄れる寺づくりがねらいで、市民から好評です。

今年は鳥取市文化賞を受賞した箏・てまり会の菊弘瀬恭子代表とお嬢さんの久美子さん、同市出身のヴィオラ奏者・棚橋恭子さんの3人による演奏があり、およそ60人が楽しみました。棚橋さんは愛知県立芸術大学音楽学部を卒業後、東京などでオーケストラや室内楽、レコーディングなどの演奏活動を続けており、菊弘瀬親子とは20年来の音楽仲間です。

菊弘瀬親子が箏と17弦、棚橋さんがヴィオラを独奏した後、アンコールを含めて「浜辺の歌」「二つの田園詩」など4曲をコラボしました。「二つの田園詩」は箏と尺八の合奏曲ですが、尺八のパートを棚橋さんがヴィオラで見事にカバーし、観客を魅了しました。「夏は来ぬ」では客席の合唱もあり、楽しいひと時を過ごしました。

片上住職は「箏とヴィオラの楽譜は違うものですが、和と洋の弦楽器がよく合って楽しいコンサートになりました。音楽は世界共通言語だと、改めてよくわかりました」と感激していました。

箏とヴィオラのコンサート
（左から棚橋恭子さん、菊弘瀬恭子さん、菊弘瀬久美子さん）

街角コンサート（浄宗寺）

手品はコミュニケーション　　山下眞一郎さん･藤井正幸さん

2019年7月24日

鳥取市社会福祉協議会は湖山池近くの高住公民館で「ふれあいデイサービス」を開きました。市民の健康づくりの一環で、お年寄り22人が熱中症について学びました。レクリエーションもあり、シニアバンクの山下眞一郎さんと藤井正幸さんのマジックも楽しみました。

健康指導したのは看護師の伊藤秀子さん。高齢になると、暑さを感じにくい▽体に熱がたまりやすい―など体の調整機能が下がり、熱中症になりやすいので、日ごろから①バランスの良い食事②運動で汗をかく習慣づくり―が大切と説明しました。

熱中症の初期症状は大量の汗やめまい、たちくらみ、筋肉のこむら返り。さらに進むと頭痛、吐き気や嘔吐、意識障害、けいれん、高体温などになるので、すぐに医療機関へ行きましょうと注意し、風通しの良い日陰や水分、塩分の補給など応急処置の手順を説明しました。

マジックは山下さんと藤井さんの〝豪華〟競演です。山下さんは紙を燃やしてクモの糸をつくり、それをうちわであおいで花吹雪にする手品を披露し、大きな拍手をもらいました。

藤井さんは赤いスカーフのなかからいきなり本物のハトを取り出して驚きのスタート。客席と軽妙なやり取りをしながら、千円札から花を取り出したり、得意のロープ芸などを次々と披露。腕の組み替えでは種明かしのおまけつき。「マジックは人と人をつなぐコミュニケーションの道具。是非、ご家庭でもやってみてください」と、マジックのススメを説いていました。

山下眞一郎さん

藤井正幸さん

腕の組み替えもマジックになる

山陰最古の大御堂廃寺　　真田広幸さん

2019年7月27日

倉吉市の中心市街地、県立美術館の建設予定地に隣接する国史跡・大御堂廃寺跡の保存活用策が課題になっていますが、倉吉市文化財協会（真田広幸会長）は倉吉交流プラザに古代寺院研究家の花谷浩さん（出雲弥生の森博物館長）を招き、大御堂廃寺の価値などについて学びました。

大御堂廃寺は元興和紡績の跡地の一角、倉吉未来中心や県立美術館建設予定地の市営ラグビー場の隣りにあります。平成8年から5年間にわたる発掘調査で、7世紀中ごろに建てられた山陰最古級の古代寺院で、大規模な僧坊や木樋などの上水道施設を備えた寺院だったことが分かり、平成13年に国の史跡になりました。

寺域は東西約135m、南北推定220m。芝生が張られ、スポーツやイベント広場などに利用されています。出土品は鬼瓦や墨書した瓦、獣頭やさじなどの銅製品、木製祭祀具など貴重なものが多く、倉吉博物館で保存、展示しています。

市営ラグビー場への県立美術館の立地（2024年開館予定）が決まったことで、大御堂廃寺跡の保存活用策が急浮上してきました。中部地区の官民は美術館の立地は地域活性化の好機ととらえ、交通アクセスや盛り上げなどの検討を進めているところですが、廃寺跡を含めた周辺環境の整備も大きなテーマです。

そこで倉吉文化財協会は講演会を開いたもので、市民の関心の高さを映して会場は満席、60人を超えるにぎわいでした。

花谷館長は仏教伝来後の東アジア情勢や国内外の政治状況をひも解きながら、古代寺院建設の波が山陰へやってきたいきさつを解説しました。このなかで花谷館長は「百済からの仏教伝来の見返りに日本は軍隊や馬などの軍事力を提供した」と指摘し、仏教による国づくりの足跡を紹介しました。

大御堂廃寺は伯耆国久米郡の「郡寺」で、向山のふもとにある三明寺古墳被葬者の権力を引き継ぐモニュメントとして建てられたといいます。ちょうど新羅が朝鮮半島を統一したころです。山陰最古の瓦ぶき寺院で、伽藍は藤原京の時代（694～710年）に完成し、10世紀後半まで寺は維持されたそうです。だれの氏寺かは不明ですが、花谷館長は「重要な廃寺なので、斎尾廃寺（琴浦町）や吉備などとの関係を調べて再評価してはどうか」と提案しました。

万葉歌人・山上憶良が伯耆国守として倉吉にいたのは716年から4年間です。国府川のそば、不入岡の国庁で大御堂廃寺の伽藍をながめていたかもしれません。「しろがねも　くがねも玉も　何せむにまされる宝　子にしかめやも」という憶良の歌碑が、奇しくも市営ラグビー場そばの児童公園にあります。朝鮮半島からの帰化人で、鉄づくりの技術や絹織物を伝えたとされる勝氏をまつる神社も近くにあります。大御堂廃寺界隈は古代ロマンあふれるところです。

真田広幸さん

満席の文化財講演会

大御堂廃寺跡
（右奥が市営ラグビー場）

砂鉄集めてマイ包丁づくり　　中部ものづくり道場

2019年7月27日

とっとり中部ものづくり道場（岡本尚機代表）のミニたたらワークショップが始まりました。昨年に続く試みで、この日は天神川河口で砂鉄を集め、８月に関金町のキャンプ場でたたら操業、１０月に倉吉市の八島農具興業で包丁づくりをします。

砂鉄集めには親子連れなど１４人が参加しました。天神川左岸の波打ち際で黒砂を集めて北条オートキャンプ場に持ち帰り、かんな流しを体験しました。かんな流しと言っても、樹脂製の樋の裏に磁石を張り付けて黒砂を水で流すやり方で、石原永伯さんが考案しました。昨年は木製の樋で効率が上がらなかったため改善工夫したそうで、今年は砂鉄の選別が円滑に進みました。８月のたたら操業までには20kgの砂鉄を集めるといいます。

黒砂集めでは、岡田寿博さんが杉の枝に磁石をはめ込んだローラーを披露しました。黒砂は帯状に薄く広がっているため、スコップなどが使えないための工夫です。成果が上がりました。岡田さんは「日本刀が作れる和鋼は鉄の王者。和鋼づくりの技術を守り、伝えなければなりません」と真剣でした。

岡本代表と陰山喜代美さんの指導で塩づくりしました。10ℓの海水を5時間ほど煮詰めて300g の天然塩をつくろうというもので、カセット・ガスボンベ5本を使いました。カルシウム、カリウム、マグネシウムなどミネラル豊富で、コクのあるおいしい塩ができ、参加者はバーベキューで味わいました。

鳥取市から参加の福田征四郎さんは「70歳近いですが、マイ包丁をつくるなんて初めての体験。ワクワクドキドキしています」と楽しそうでした。

黒砂集め（天神川河口）

樋の裏に磁石を張って砂鉄採り

塩づくりもしました

こんな包丁をつくります

ご長寿に乾杯！　　原孝幸さん

2019年7月28日

鳥取市の介護付き有料老人ホーム・吉方温泉友和苑（槇村直美苑長）で納涼祭があり、安来節踊り師範の原孝幸さんが汗だくになって多芸披露、利用者に元気を届けました。

原さんは同市美萩野で暮らしていますが、長崎県出身です。芸事が好きで、松江市に単身赴任中、安来節の踊りをマスターしました。9年前からは三味線に夢中です。

この日も尺八、三味線、カラオケなどで「リンゴ追分」「貝殻節」「河内音頭」「関の五本松」などを次々に披露。地元の人でもあまり歌わない「賀露の舟唄」もアカペラで紹介しました。

見せ場は「ドジョウすくい」です。原さんによると、一文銭の鼻当てや豆絞りのほおかぶりはお面のようなもので、これをつけないとアガッてしまい、うまく踊れないそうです。そして踊る前に客席をめぐって握手するのも、いつもの習わしで、会場はおのずと一体となって「あら、えっサッサー」と盛り上がり、原さんのドジョウを追う腰つき、びくにドジョウを収めるニンマリ顔が一段とさえます。この日はびくから「ご長寿に乾杯！」という巻紙も取り出し、大受けでした。

原さんの芸は30分余り。あっという間でしたが、「納涼祭を盛り上げていただき、感謝です」（槇村苑長）と、みなさん大喜びでした。

原孝幸さん

原さんの尺八に合わせて貝殻節を歌いました

傘踊りもありました

笑っていただくだけで幸せ　　どじょっこの会

2019年7月31日

鳥取市伏野の障害者福祉センター・厚和寮（生駒哲一寮長）で夏祭りがあり、シニアバンク登録のどじょっこの会（福田英明代表）が夫婦どじょうすくいなどお笑い芸を披露し、盛り上がりました。

厚和寮は病気や事故などで体が不自由になった人の更生、リハビリ施設です。宿泊、通所合わせて約60人が利用しており、およそ30人のスタッフが機能回復訓練や入浴などの生活支援をしています。かつては車いすの運動会や夜の納涼祭などもあったそうですが、利用者の高齢化もあって昼間で屋内の夏祭りを行っています。

今年はどじょっこの会が演芸のゲストに招かれました。福田代表と高村かつ子さんの2人で、南京玉すだれやどじょうすくいを演じましたが、「私たちの芸は笑っていただくためのもの」（福田代表）というわけで、「アッさて、アッさて」「アラ、えっサッサー」の掛け声を除けば、ほとんどが創作。笑いの連続でした。

夫婦どじょうすくいは、どじょう獲りをめぐって2人でじゃれ合い、どじょう鍋をいっぱいにしていく創作劇ですが、ど派手な化粧とウナギのようなぬいぐるみで大暴れ。最後は高村さんが客席に分け入って、「お元気で」と一人ひとりと握手し、喜ばれました。

どじょっこの会は6人のメンバーで10年ほど活動していますが、近年は介護施設や公民館などを年間50カ所くらい訪問しているそうです。

職員も参加して花すだれ（厚和寮）

どじょっこの会の夫婦どじょうすくい

カニすだれも登場

勝負の神様の夏まつり　　佐藤翔風さん・本城義照さん

2019年8月3日

鳥取市の若桜橋のたもと、荒木又右衛門をまつる荒木神社（清末忠人宮司）で夏まつりがあり、竹刀を供養する火炉祭をはじめ、奉納の演武や演芸などがあり、にぎわいました。

荒木又右衛門（1599～1638年）は江戸時代の剣豪で、伊賀上野であだ討ち（鍵屋の辻の決闘）の後、鳥取藩に迎えられますが、わずか2週間ほどで謎の死を遂げました。命日は旧暦の8月28日です。文書が残っていないため、死因は亡命説、毒殺説、自決説などいろいろあり、不明ですが、その屋敷跡に荒木神社ができ、勝負の神様としてまつられています。

荒木神社では毎年8月の第1土曜日に例祭があり、日ごろの稽古で使った竹刀を燃やして供養する火炉祭などを行っています。今年は尚徳練武館で学ぶ松浦大和君（城北小学校）が「竹刀に感謝して供養します」と述べ、次々に解体した竹刀を火にくべていきました。

神社境内では奉納の剣道やなぎなたの演武のほかに、佐藤翔風さんが指導する鳥取湖陵高校吟詠剣詩舞部や日本吟翔会のみなさんが吟詠し、剣舞などを披露しました。

演芸もありました。尺八奏者の本城義照（TERU功山）さんが献奏に続いて、ヒット曲の「青い珊瑚礁」「風雪流れ旅」「浪花節だよ人生は」などを魂を込めて演奏すると、会場から手拍子や掛け声が起こり、夏まつりがパワーアップ。シンガーソングライターの安来のおじも登場して、出雲弁で鳥取を紹介する「鳥取なう」を披露し、大いに盛り上がりました。清末宮司によると、戦前は勝負の神様にあやかって、おみこしなどが練り歩き、地域挙げて武運長久を願ったそうです。

「川中島」を吟じ、舞う
鳥取湖陵高校のみなさん

荒木神社の夏まつり

本城義照さん

竹刀を燃やして供養

成功体験で好きになる　　倉益敬さん

2019年8月5日

南部町教育委員会の恒例の夏休みこども短歌教室が町の公民館であり、今年も鳥取県歌人会会長の倉益敬さんから楽しみながら短歌をつくる「カンタンタンカ」の極意を学びました。

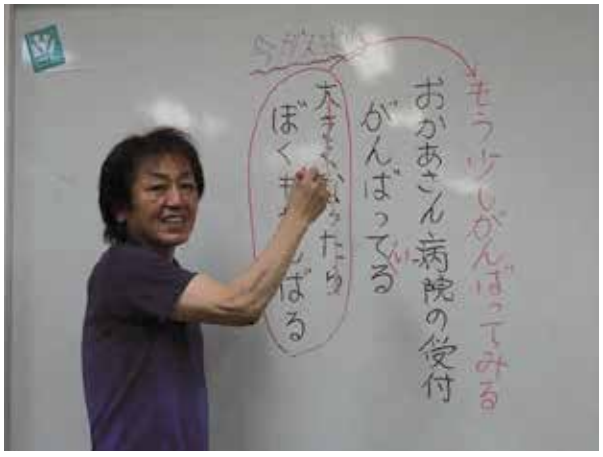
参加したのは会見小学校5年生の潮祐輝君と内藤真護君の2人。潮君は3年続けての参加、内藤君は初参加です。

潮君は昨年、大伴家持大賞に「けんだまで新しいわざ出来るまでなぞときみたいに楽しい時間」を応募し、見事入選に輝きました。やはり昨年、姉の潮帆乃香さんの歌「この夏におばあちゃんの文鳥のピーちゃん消えたかごを残して」も山上憶良短歌賞で入選し、姉弟そろって結果を出しました。今年は姉が南部中学校へ進み、潮君は友達を誘っての参加です。

昨年の公募コンテストでは、2年生ながら大伴家持大賞と米子市短歌祭に入選した山根りほさんもいましたが、残念ながら鳥取市への引っ越しで今年は不参加です。その山根さんから倉益さんにお礼の手紙が届きました。「短歌の面白さを友達にも広げていきたいです」。

倉益さんは「成功体験があると、やる気が出てきて、どんどん好きになるんです。近年は横並び意識が横行して、一人で挑戦させない親が増えています。スポーツも団体競技が人気です。文芸や芸術に親しむ子どもが減ってきたのが、とても残念です」と。

さて短歌教室です。倉益さんの指導法は、ふだんの暮らしや会話に出てくる言葉を書き留め、それを五七五七七の31文字でつないでいくやり方で、自己紹介でも特技でも趣味でも、何でもすぐに歌になってしまいます。初参加の内藤君もあっという間に4つほど歌をつくり、山上憶良短歌賞や鳥取県民短歌大会などに応募することにしました。結果が楽しみです。



倉益敬さん

会話の中に歌づくりのヒントがある

わしゃあ、負けんぞぅ！　　平家六栄さん

2019年8月6日

広島「原爆の日」、鳥取市の養源寺（山名立洋住職）で平家六栄（むつたか）さんによる紙芝居「はだしのゲン」があり、参加した市民は改めて原爆の悲惨さを学び、不戦の思いを強くしました。

平家さんは鳥取市民劇場創設のメンバーで、若いころから朗読に親しんできました。80歳を超えた今でも、わらべ館などで紙芝居のボランティアをしています。

山名住職は「お寺は昔から芸能、文化、盆踊りの発祥地。だれもが気軽に立ち寄り、楽しむところ」がモットーで、しばしば人形劇やコンサートなどを開いています。「最近は面白いこと、楽しいことしか見たがらないし、聞きたがらない。そんな風潮が気になっている」そうで、先日は自らもパネラーとなって、オウム真理教をテーマに「カルトは不滅か」のトークライブをやったばかりです。今回は古くからの知人、平家さんに頼んで紙芝居「はだしのゲン」を上演してもらいました。

「はだしのゲン」は中沢啓治さん（故人）原作。自らの広島での被爆体験をもとにした漫画で、戦中戦後の〝生き地獄〟のような時代を必死に生き抜いた主人公中岡ゲンを描いています。週刊少年ジャンプに連載され、単行本（10巻）になっています。

国内外で反響が大きく、実写・アニメ映画やテレビドラマ、絵本などになり、漫画は20を超す多言語に翻訳され、世界中に紹介されています。一時、過激な表現や刺激的な描写などが問題になり、図書館などで見られなくなる騒ぎもありました。

紙芝居は全5巻に短縮されていますが、それでも全部見るのに90分かかります。効果音が入って放送劇のように工夫され、平家さんはテープや画面を入れ替える作業でしたが、客席の雰囲気を見ながらの進行ぶりでした。第3巻で広島に原爆が投下されます。昭和20年8月6日午前8時15分。

広島市のホームページによると、原爆は地上約600m の上空で閃光を放ってさく裂し、灼熱の火球をつくり、その中心温度は摂氏100万度を超え、1秒後には最大直径280m の大きさになり、地表温度は3，000～4，000度に達したといいます。爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方へ放射され、空気が膨張して超高圧の爆風となり、大きな被害をもたらしました。そして放射能障害が人々を長期にわたって苦しめました。被爆74年の今年、原爆死没者は31万9186人になったといいます。

その後のゲンたちは被爆孤児の差別を受けながら、必死に生き抜きます。生まれたばかりの妹のためにミルク代を稼ぎますが、間に合わず、母親に抱かれたまま妹は逝ってしまいます。〝生き地獄〟が連続しますが、父親の遺言を思い起こします。「麦になれ。踏まれても踏まれても芽を出す麦になれ」。「わしゃあ、負けんぞぅ！」とゲン。客席から大きな拍手が起こりました。

紙芝居があった養源寺の檀徒会館

平家六栄さん

広島の空に火球が上がり、灼熱地獄が広がる

絵はがきに見る戦前の境港　　佐々木邦広さん

2019年8月8日

令和元年2回目の境港楽習会（定岡敏行代表）が境港市の老人福祉センターであり、絵はがき収集家の佐々木邦広さん（元境港市教育長）が「写真絵はがきで見る戦前の境港」について話し、受講者は境港の失われた風景と発展する姿に感慨ひとしおでした。

境港は島根半島を防波堤にする天然の良港です。江戸時代は山陰を代表する北前船の寄港地として栄え、日野の鉄や弓浜の木綿などを積み出し、上方から日用雑貨品、北海道から昆布やニシンなどが入ってきました。

その北前船の寄港地（鳥取市、新温泉町、浜田市など）は日本遺産になりましたが、残念ながら境港市は認定されずにいます。佐々木さんによると、昭和10年（1935年）の境町大火と山陰最大の戦災といわれる昭和20年（1945年）の玉栄丸爆発事故で町の大半が焼失し、絵馬などが奉納された餘子神社や大湊神社も焼け落ちて、北前船の物証が何一つ残っていないため、認定されなかったそうです。このことが佐々木さんを絵はがき集めに駆り立てました。

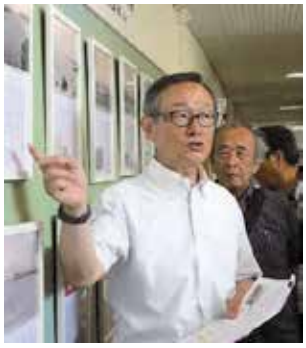
佐々木さんが集めた戦前の境港の絵はがきは、およそ150枚です。境港市史などをもとに写真を調べ、その3分の1をパネル化しました。ほとんどがモノクロで、色あせた小さな写真ばかりですが、佐々木さんは「30分ほどにらめっこしていると、写真の字も読めてくる」そうで、説明文づくりが大変だったようです。

佐々木さんによると、境港で絵はがきが発行されるようになったのは日露戦争のころから。軍事郵便がきっかけになったといいます。明治39年（1906年）に舞鶴―境港を結ぶ阪鶴丸が就航すると、山陰の観光が注目され、明治45年（1912年）の山陰本線・京都―出雲今市間の開通で絵はがきニーズは高まったといいます。

コレクションの中には境港修築の歴史を切り取った絵はがきもあります。島根半島から弓ヶ浜を撮ったもので、入港しようとしている帆船が写っています。明治末から大正半ばごろの写真で、このころは防波堤がなく、台場の先に砂浜が突き出しています。境港は港口に土砂がたまるのが弱点で、1500㌧を超える船は美保関に入るしかなかったといいます。

悲願の防波堤は大正11年（1922年）に着工し、昭和5年（1930年）に完成します。実現の裏には台湾で金山王になった木村久太郎の多大な寄付があったといいます。木村の父・又平も明治の初め、私財を投じて防砂堤建設を進めた人で、親子2代にわたる港づくりが今でも語り草になっています。

鳥取県は明治初めの府県統廃合で廃止―再置の混乱を経験しましたが、再置の際、米子・境の住民から「会見郡は島根県に入れてほしい」という運動がおこりました。その一因には遅々として進まない境港口の防砂問題があったといわれています。



佐々木邦広さん（左）

戦前の境港駅

境の鉄問屋の引き札

出船入船が手を合わせた境港餘子神社

水木しげるさんの曽祖父が
経営した店の引き札

小粒でもピリリ　　鳥取県現代詩人協会

2019年8月10日

鳥取県現代詩人協会（池澤眞一会長）の総会と詩の朗読会が鳥取市の県民ふれあい会館であり、小所帯でも積極的に活動していくことを誓い合いました。

県現代詩人協会は国民文化祭鳥取大会を控えた1999年（平成11年）に32人で発足しました。それから21年。いま会員は創設メンバーの11人を含めて26人。相変わらずの小所帯で、会員の高齢化もあって存続の危機感がいっぱいでしたが、総会出席率は70%を超えました。

事務局の手皮小四郎さんは「都会の総会参加率はわずかだが、鳥取県の参加率はおそらく全国一。数が問題ではない」と元気に提案し、理事を増員して事業活動を盛んにすることを決めました。

「小さくてもピリリ」の心意気です。あれこれ参加の機会に恵まれた鳥取県は、積極的な生き方が似合います。しかも詩作の舞台にふさわしいところです。

さて、詩の朗読会です。今回は鳥取大学学芸部員2人も参加して17人が作品を披露しました。このうち、米寿の渡部兼直さん（米子市）は「いい喫茶店と悪い喫茶店」を紹介しました。悪い方は

大声で演説する人　自分の部屋と喫茶店の区別のつかない人　キイキイ子どもが叫んでも平気な母親　課長を囲んで大声でへつらひ　大声でアイソウ笑ひする人　大画面テレヴィ大音声　トンタレ跳んだりはねたり　タバコの吸へない喫茶店

だそうです。トンタレとはタレント。わからないように逆さにしたのだそうで、これも詩作のテクニックと説明していました。で、いい方は。

静かに心休まる喫茶店　渋いマスタアのゐる喫茶店　タバコの吸へる喫茶店　座布団出してくれる喫茶店　まづしい学生　厚い辞書を引き　ノオトにメモをとってゐる喫茶店

総会のアトラクションには、シニアバンク登録の二胡のグループ・胡桃の会（尾崎八慧子代表）が招かれ、沖縄民謡の「童神」などを情感豊かに演奏し、鳥取県の詩人たちを励ましました。

鳥取県現代詩人協会の交流会に参加したみなさん

友情出演した二胡「胡桃」のみなさん

わくわくする絵を描こう　　加藤哲英さん

2019年8月10日

境港市の夢みなとタワーで開かれた「南海の楽園　タヒチの海の水族館」に合わせて夏休みこども絵画教室があり、鳥取県美術家協会の加藤哲英会長が指導しました。家族4組10人が参加し、夏の思い出を絵にしました。新日本海新聞社、鳥取県社会福祉協議会・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

水族館のテーマは「タヒチの海の生き物」。南国の海に生息する色鮮やかな魚やウミガメ、サメなどたくさんの生き物のなかから、子どもたちは描きたい生き物を決めて挑戦しました。

加藤さんは「好きな生き物を大きく、その周りに他の生き物や岩などを付け足していくと、絵がにぎやかになります。見る人が楽しく、わくわくするような絵を描きましょう」と呼びかけ、子どもたちは下描きに取り掛かりました。

大胆な下描きができても、いざ色付けに入るとうまくできず、子どもたちは困り顔。そこで加藤さんは、絵の具の使い方や色の混ぜ方、水の付け足し方など、細かいところまで、子どもたち一人ひとりにやさしく指導しました。

色付けに試行錯誤しながら、約2時間をかけて完成。堂々としたウミガメを描いた境港市の弓ヶ浜小学校4年の渡部祥加さんは「美術の先生が丁寧に教えてくれて描きやすかった。ウミガメの模様を丁寧に描くのをがんばりました」と満足そうでした。

子どもたちに優しく指導する加藤さん

加藤哲英さん

熱心に絵を描く子どもたち

手づくりまつり　　鳥取ものづくり道場

2019年8月10日

新因幡の手づくりまつりが鳥取市の文化センターであり、およそ300人の親子が夏休みのものづくりを楽しみました。

鳥取ものづくり道場、鳥取大学、鳥取環境大学などでつくる手づくりまつり実行委員会（土井康作委員長）が昨年に次いで開きました。子どもたちがものづくり体験することで、考える力や手を動かす力を育てようというものです。

小学生の親子が羊毛フェルト、こけし、光の万華鏡、ウグイス笛など20のブースに分かれて製作に励みました。このうち、女の子に人気の羊毛フェルトのケーキづくりは小嶋由子さんが指導しました。フェルトを丸め、針で固めてケーキをつくり、ペットボトルのふたを布で覆って土台にし、ビーズなどを飾って仕上げる作業で、どの子も1時間足らずで、おいしそうなケーキを次々に完成させました。

飾り物といえば、こけしづくりもありました。梨の木工房（鳥取市福部町）の薮田道男さんはロクロを持ち込み、こけし削りや色付けを実演しました。「最近、工房にはロクロ体験にやってくる外国人が多いんです。日本の子どもたちにも教えなければと思い、ロクロ実演をしました。きれいな線が一瞬にして入る姿に、みんなびっくりしています」。

「ポッポー」の汽車笛づくりを指導した八幡健一さんは、瞬間接着剤の扱い方やサンドペーパーの使い方をわかりやすく、優しく手ほどきし、人気を集めていました。

にぎわった新因幡の手づくりまつり

ロクロの実演をする薮田道男さん

羊毛フェルトのカップケーキづくり

おいしそうなフェルトの
カップケーキができたよ

空き家活用とまちづくり　　澤田廉路さん

2019年8月17日

空き家利活用シンポジウムが岩美町役場であり、漁師町の自治会長や元地域おこし協力隊の若者が空き家の利活用とまちづくりについて大いに語り合いました。シニアバンク登録の澤田廉路さん（鳥取県建築士会専務理事）が司会進行しました。

とっとり空き家利活用推進協議会（壹岐昇一会長、県宅地建物取引業協会・県建築士会・県司法書士会・県土地家屋調査士会で構成）が主催しました。シンポジウムは昨年から年2回開いており、智頭町、倉吉市に次いでの開催です。岩美町は2016年の「住みたい田舎ランキング調査」（宝島社）で全国1位になっており、関心も高く、会場は町民や自治体関係者などで埋まりました。

ところで、県の調べによると、県内の総住宅数は256，900戸、空き家は39，400戸、空き家率は15．3%です（平成30年10月現在）。一方、県人口は漸減傾向ですが、県内移住者数は近年増えており、平成29年度は過去最多の2，127人ありました。県は引き続き、住宅や子育て支援などの移住対策に力を入れることにしています。

ちなみに岩美町の空き家は約400戸。そのうち空き家バンクに94軒が登録しており、65軒で所有者と利用者のマッチングが成立しています。全国1位のアンケート調査を反映して、契約率は7割と好調です。

さて、シンポジウムです。兵庫県篠山市を舞台に古民家の宿や篠山城下町ホテルなどで地域再生事業を進めているノオト代表理事・金野幸雄さんが基調講演したあと、田後自治会長の山本達雄さん、網代自治会長の清水博さん、元地域おこし協力隊員の田中泰子さんと岩田薫さんらが加わって、地域で空き家を生かす方法やまちづくりについて話し合いました。

このなかで、金野さんは「空き家の所有者にまちづくりのために家を提供するという気持ちになっていただくことが大切。地域社会を壊すことに家が使われるんじゃないかというのが、所有者の一番の心配事。この懸念を払うのは話し合いにつきる」とアドバイスしました。

また、網代自治会の清水会長は地域おこし協力隊などの発意で実現した網代港の「わかめフェス」を紹介。「向こう1軒、両隣は空き家」の地域ながら、よそ者の目や意見や若者の行動力を受け入れる空気がまだまだ残っており、地域のお母さんたちが経営する漁村カフェ「なだばた」も立派な生業復活、空き家対策につながっていると報告しました。

澤田廉路さん

地元パネラーのみなさん

漁村カフェ「なだばた」

鳥取県の民話を聞く会　　有本喜美男さん･中嶋須美子さんなど

2019年8月18日

鳥取市の県立博物館で鳥取県の民話を聞く会があり、５人の語り部が佐治谷話など因幡地方に伝わる昔語りを方言豊かに紹介しました。

県立博物館の民話を聞く会は、お盆と年の暮れの年2回、復元民家のいろり端、むしろの上で開いています。今回は40人ほどの観客が詰めかけ、熱心に耳を傾けました。

演題と語り部は①兵円山のあまんじゃく（植木瑞恵さん）②青木の局（桝田美穂子さん）③椀貸し岩（木下伸子さん）④蚊帳（かや）はぐり（有本喜美男さん）⑤小豆とぎとぎ（中嶋須美子さん）―。

それぞれ、かすりの着物や作務衣姿で、歯切れよく民話を語りましたが、「わったいな」「ださあな」「ごうがわいて」「くじくった」など因幡言葉を次々に連発。客席も「くすくす笑い」でこたえ、楽しいお盆のひと時になりました。

このうち、「兵円山のあまんじゃく」は鳥取市河原町の西郷地区に伝わる民話です。千代川の由来のほか、面影山や大路山ができたいきさつを語るスケールの大きな話で、話の展開に合わせて客席から「へエー」「ホウ」と驚きの声が上がっていました。

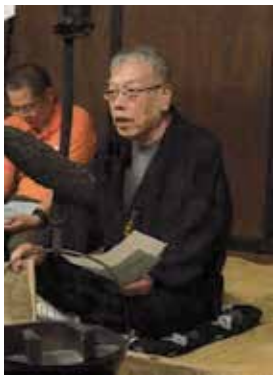
また、「蚊帳はぐり」は佐治谷話78話のひとつで、お嫁さんの里に手伝いに出かけた佐治の男の失敗談です。古典落語にもなっている話ですが、有本さんは「知ったかぶりをしないで、素直に教えを受けないと失敗するという教訓話。佐治谷話には古老や先人の教えがいっぱい詰まっています」と紹介していました。

語り部のみなさんは、それぞれ話の後に「とっちんぽん」「そればっちり、こんごうさん」「むかしこっぽり、ごんぼの葉」など、おまじないのような言葉を発して締めましたが、「意味不明ながら、これも昔からの言い伝え」ということでした。

植木瑞恵さん

桝田美穂子さん

木下伸子さん



有本喜美男さん

中嶋須美子さん

米子に息づく地蔵信仰

米子観光まちづくり公社・春蘭会

2019年8月23日

米子市の加茂川まつりが地蔵盆の日にあり、これに合わせて大山講座・米子の地蔵さんめぐりも開かれました。約20人が参加し、米子観光まちづくり公社（川越博行理事長）のガイドで加茂川周辺の地蔵をめぐり、米子の風習や歴史を学びました。新日本海新聞社など主催、とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」共催。

加茂川沿いには26体の地蔵があります。江戸時代に橋のたもとに設けられたもので、子どもたちの無事故を願った子安地蔵、水難に遭わないよう安全を願った川守り地蔵などのほか、近年では市民の幸せを願う咲（わら）い地蔵なども設置されています。大山の地蔵信仰が平成28年に日本遺産に認定された際、米子の地蔵信仰の物語も遺産のひとつになっています。

米子市周辺では、これらの地蔵に札打ちをする習慣があります。ガイドの冨田彰さんによると、身内に不幸があった時、亡くなった人の霊をお地蔵さんに守っていただくよう、7日ごとにお地蔵さんをめぐって白い札を貼り、最後の49日目には赤札を打って回るといいます。山陰では米子から出雲にかけてある風習で、全国的にも珍しいそうです。

地蔵盆は子どもの安全と健やかな成長を願うお祭りです。江戸時代中期から続く米子の伝統行事で、この日も子どもから大人まで多くの市民が、それぞれの願いをこめながらお地蔵さんをめぐっていました。

米子観光まちづくり公社の冨田彰さんは、「米子に息づく地蔵信仰の歴史や風習を知らない人も増えていますが、たくさんの人に伝えていきたいですね」と意気込んでいました。加茂川まつりのクライマックスには、春蘭会（山岡福美子代表）のみなさんが「米子が大好き」という加茂川音頭を披露し、まつりに華を添えました。

説明に熱心に耳を傾ける参加者のみなさん

冨田彰さん

川守り地蔵

手踊り・手笠踊り盛んで　　勝部岩力おどり保存会・河内おどり隊・因幡の傘踊り保存会など

2019年8月25日

とっとり手踊り・手笠踊りの集いが鳥取市の文化センターであり、県東部の8つの郷土芸能保存会が伝承の技を披露し、およそ350人が観賞しました。

この集いは同市河内の河内おどり隊（竹内健代表）が、「地元の伝統の踊りを保存しよう」と続けているもので、趣旨に賛同する仲間たちと市内の安蔵スキー場で開いてきました。今年で10回目。節目を記念して今年は会場を文化センターに移し、フォーラムも開きました。

フォーラムは淀江さんこ節保存会の奥田晃己さんと県文化財課の原島知子さんが「伝統の文化を育む」をテーマに語り合いました。このなかで、奥田さんは東日本大震災（平成23年）の半年後にあった東北の郷土芸能祭の体験談を語りました。「人も道具も流されて沈んでいたところでしたが、7千人のお客さまのど真ん中で淀江さんこ節を踊ったところ、大いに盛り上がっていただきました。芸能は楽しくないと続けられません」と紹介するとともに、芸能の目標は楽しみを受け入れる社会づくりと訴えました。

踊りの集いには①勝部岩力おどり保存会②東郷芸能保存会③別府義士踊り保存会④宮下手笠踊り保存会⑤河内おどり隊⑥西谷手笠踊り保存会⑦智頭はねそ踊り保存会⑧国府因幡の傘踊り保存会美歎支部―の8団体が出演。「安来節」や「貝殻節」「因幡大津絵」などに合わせて、それぞれの地区に伝わる手踊り・手笠踊りを披露しました。ほとんどがお盆や雨乞いなどで踊られてきたものです。

このうち、因幡の傘踊り保存会は25年前の因幡万葉歴史館開館の際に踊った「手ぬぐい踊り」を復活させ、「関の五本松」に乗せて披露しました。また、池田光政が鳥取城を修復した際、青谷町の勝部谷から板状の安山岩を切り出していますが、その時に歌われた労働歌「石切り唄」がもとになった勝部岩力おどり（県指定無形文化財）も紹介されました。

主催者・河内おどり隊の竹内祇明副代表は「日本遺産になった麒麟獅子舞の文化圏（但馬や因幡）では、手踊り・手笠踊りも盛んで集落ごとに伝承されています。昔から強いつながりがあったことがうかがえます」と話していました。

勝部岩力おどり

宮ノ下の手笠踊り

手ぬぐい踊り
（国府因幡の傘踊り保存会）

奥田晃己さん
（淀江さんこ節保存会）

旅に出さないで！　　紙原四郎さん

2019年8月27日

倉吉市の成徳公民館・趣味の講座のひとつ、切り絵アート教室が開講しました。講師は紙原四郎さん（鳥取市）。受講生は11人。年末の公民館祭に向けて作品づくりが始まりました。

講師の紙原さんは切り絵歴46年の大ベテランです。鳥取県の四季折々の風景や産物などを描き、切り絵にして、県教育委員会の「生涯学習とっとり」や県社会福祉協議会の「志あわせへ」の表紙を飾っています。今年5月には鳥取市・智頭街道に仲間とともにワークショップを設け、切り絵教室「紙切虫」を開いています。

紙原さんによると、切り絵はパズルのようなもので、切り抜くのに時間がかかるものの達成感が楽しく、出来栄えを想像しながら切り進めていくのでボケ防止にもなるとおススメです。

成徳公民館の教室は10月まで開き、切り絵の基本を学ぶとともに、はがき大から四つ切大の作品を仕上げる予定です。目標は来年の干支「ネズミ」づくり。カッターナイフで円を切り抜く基本技から始まりました。「絵は99．9%、曲線でできている」という紙原さんの指導の下、受講生はカッターや紙を動かしながら、いろいろな円形を切り抜いていきました。

いよいよ作品づくりです。紙原さんが用意した金魚やアサガオ、月とウサギなどの原画を選び、作者名を入れる位置を決め、切り抜いていきました。「面積の小さいところから切り抜く」「線が細いススキや金魚のひれは外から内へナイフを入れる」「肩の力を抜いて」などのアドバイスを受け、真剣な作業が続きました。

およそ1時間。仕上げの色紙を裏当てし、切り抜いてきた原画紙を取り除くと、色鮮やかな作品が次々に誕生。そのたびに「スゴイ」「きれい」「どこに飾ろうかしら」などと歓声が上がっていました。なかにはウサギの足と月の接点を切り離してしまう人もいましたが、紙原さんは「（作品の主人公を）旅に出さないよう気をつけましょう」と、切り絵の醍醐味をジョークで伝えていました。

いいのができました

紙原四郎さん

切り絵アート教室（成徳公民館）

山城ブームになりそう　　眞田廣幸さん

2019年9月1日

戦国時代の山城合戦「3つの籠城戦を読み解く」というフォーラムが鳥取市のとりぎん文化会館であり、歴史ファン400人が詰めかけました。鳥取県埋蔵文化財センターの主催。このフォーラムを皮切りに県内各地で山城見学会や中世城館展などが開かれることになっており、山城ブームがやってきそうです。

県内の城跡で国史跡になっているのは鳥取城、米子城、若桜鬼ケ城の3カ所ですが、ほかにも史跡候補になる重要遺跡はたくさんあります。文化財保護法の改正で、文化財を地域づくりやまちづくりに活用できるようになり、それらの遺跡の再評価と保護・活用が課題になっています。

そこで県埋文センターでは、因幡で天神山城、鵯尾（ひよどりお）城、狗尸那（くしな）城、荒神山城など、伯耆で羽衣石城、十万寺城、馬ノ山、岩倉城などを順次調査し、現地見学会などを開くことにしています。

ところで中世の因幡、伯耆は山名氏の分国でした。応仁の乱の後は西の出雲・尼子氏、東の但馬・山名氏に挟まれて親交、抗争の歴史を重ね、戦国時代は中国地方の雄・毛利氏、天下統一を目指す織田氏の支配、侵攻の境目になり、各地に特徴的な山城がつくられたといいます。

フォーラムは伊藤正義さん（元文化庁主任文化財調査官）の特別講演があり、秋本哲治さん（安芸高田市教育委員会）、髙尾茂男さん（八雲立つ風土記の丘）、眞田廣幸さん（倉吉文化財協会長）がそれぞれ安芸郡山城、出雲月山富田城、因幡鳥取城の籠城戦・攻城戦について概要や背景などを解説しました。

このうち眞田さんは、秀吉の因幡侵攻の前、毛利方の武田高信（鳥取城主）と南条宗勝（羽衣石城主）が相次いで「不慮の死」を遂げたことが鳥取城落城のキーポイントだったと指摘しました。宗勝の後を継いだ息子の元続らは秀吉方に寝返り、鳥取城救援に来た毛利・吉川氏に抵抗し、鳥取城への兵糧入れを阻んだといいます。鳥取城の籠城戦は4カ月でしたが、1カ月もたたないうちに、城内に逃げ込んだ農民たちの餓死が始まったそうです。

眞田廣幸さん

にぎわった山城フォーラム

太閤ヶ平から久松山を望む

老農・中井太一郎も選ばれる　　大河ドラマを推進する会

2019年9月7日

日本の美しい田園風景をつくった倉吉市小鴨の中井太一郎も大河ドラマ候補に―。鳥取県を舞台にした歴史大河ドラマを推進する会は、倉吉市の市立図書館で3回目の選考会を開き、明治時代に「田植え定規」や除草器「太一車」を開発し、日本の米づくりで活躍した老農・中井太一郎を大河ドラマ候補に選びました。

鳥取県の大河ドラマ候補は①岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三とその妻・美喜②赤とんぼの母・碧川かた③比叡山や大山寺などを復興した豪円和尚―に次いで4件目です。推進する会は先に選んだ物語を含め、NHKなどにドラマ化実現を働きかけるとともに、パンフレットなどを作成して「郷土の偉人」として顕彰活動を展開しています。

選考会は3年目で、今年は①いも代官・井戸平左衛門正朋（発表者・根平雄一郎さん）②亀井玆矩と王舎城の夢（田中精夫さん）③稲作技術の進歩に尽くした老農・中井太一郎（北村隆雄さん）―の3つの物語について発表があり、来場者の投票で老農・中井太一郎を選びました。

中井太一郎（（1830～1913年）は幕末の大飢饉を体験し、食糧増産に一生を捧げた人です。50歳の時、米の収量増には強い苗づくりが欠かせないと、「田植え定規」を開発。苗代の幅を拡大するなど工夫し、米の生産性向上をもたらす「正常植え」の普及で全国行脚しました。太一郎の70～80歳代は、その行脚の日々で、日本各地に美しい田んぼの風景が広がっていったといいます。

また、米づくり農家にとって炎天下での雑草取りは過酷な作業です。この重労働から米づくり農家を解放したのが、太一郎が開発した回転式除草器「太一車」（明治25年特許取得）。腰を曲げることなく、雑草を取りながら田んぼを起こせるすぐれもの。農薬や農機具の開発で、今ではほとんど姿を消しましたが、かつては米づくり農家になくてはならない農具でした。近年は無農薬・減農薬の米づくりやアフリカなどで活躍中です。

倉吉市小鴨地区は太一郎の生誕地です。数年前から地区挙げて太一郎の顕彰に乗り出しており、地元産米を活用して五平餅風の「太一のき餅」をつくったり、ミュージカル劇団をつくって「太一車の里」などを上演しています。太一車歴史文化部会長も務める北村さんは「太一車は食糧不足のアフリカなどで引っ張りだこです。日本を元気にする話です。太一郎は鳥取県の誇りです。大河ドラマになって、もっともっと知ってもらわなければ」と話していました。

選考会では郷土史家・小山冨見男さんの講演「鳥取県再置と『とっとり県民の日』」もありました。このなかで小山さんは「大河ドラマ候補を民主的に選ぶ〝鳥取方式〟は、NHKに注目されるはず」と高く評価していました。

根平雄一郎さん

太一車

大河ドラマ候補に選ばれて、
喜びの北村隆雄さん

田中精夫さん

発表資料
（近代稲作の父・中井太一郎）

神社を舞台にマジックショー　　米子マジック同好会

2019年9月7日

米子市車尾の貴布禰（きふね）神社で、ふれあい祭りがあり、米子マジック同好会の田中孝允会長と西村信行さんがマジックショーで祭りを盛り上げました。車尾まちづくり推進会議（高野和男会長）の主催。

貴布禰神社は後醍醐天皇が隠岐へ流される折、鞍（くら）を敷いて休まれたことから鞍敷大明神と呼ばれ、住民の心のよりどころになっていました。しかし、度重なる干ばつや日野川の氾濫に苦しめられたため、江戸時代に京都から雨乞いや雨止みの守護神・貴船の神を勧請し、貴布禰神社に改められたといいます。鳥取県最古の狛犬がある神社としても有名で、由緒ある神社の一つです。

車尾まちづくり推進会議は地元の神社を知ってもらい、愛着を持ってもらおうと、4年前から住民のふれあい祭りを開いています。地元企業の協力もあって、参道には屋台がずらりと並び、ステージではフラダンスやカラオケ大会、地元高校生による吹奏楽などが繰り広げられ、今年も約1000人の住民でにぎわいました。

人気を集めたのがマジックショーです。西村さん（ハッピー西村）は紙に描いたスプーンを一瞬で曲げたり、紙を巻いたビール瓶を割り、そのなかから祝い旗を出したりと、子どもたちを巻き込んでマジックを披露し、大受けでした。田中会長（コーイン田中）は、袋から国旗やハトを出したり、手のなかから花かざりをシャワーのように出したりと、鮮やかなマジックで見る人を魅了しました。2人は「これからもっと技を磨いて、多くのみなさんに楽しんでもらえるマジックをしたい」と意欲的でした。

ハッピー西村さん

コーイン田中さん

にぎわう車尾ふれあい祭り

北米移住は弓浜から始まった　　定岡敏行さん

2019年9月9日

米子市の夜見公民館さわやか人生大学は、境港楽習会代表の定岡敏行さんを招いて国際理解講座を開き、鳥取県人の北米移住は弓浜から始まったことを学びました。

それによると、それは上道村（境港市上道町）から始まったといいます。先導したのは小学校教員をしていた足立儀代松。1892年（明治25年）に職を辞して渡米したのがきっかけで、「カナダの実情を視察し、広大な国土と天与の資源が豊富なことを知り、日本人が発展すべき地だと確信して多くの青年に海外への雄飛を説いた」（境港市史）といいます。

これに応じたのは14人。親兄弟の賛成が得られず、密航するかのように故郷を離れ、神戸港からカナダへ渡ったそうです。これを皮切りに毎年のように渡米団が編成されました。大正時代には鳥取県人のカナダ在留者は524人にのぼり、そのほとんどが弓浜半島の出身者でした。

弓浜部から海外移住が多かったのは、貧困からの脱出だったといいます。自然の川がない弓浜半島ではサツマイモがつくられていましたが、江戸時代の半ばに農業用水路の米川が開削されると、戸数は5倍余りも増え、米や綿づくりが盛んになりました。ただ、明治時代になると外国から安い綿が入るようになり、養蚕業に転換したものの、生糸輸出の不振もあって、地域経済は混迷しました。

この経済的な背景に加えて、浜ならではの進取の気風と精神的風土も見逃せません。境港は北前船などの交易港として開け、新しい知識や情報に触れる機会が多いうえに、農産物の作付け転換などに機敏に対応しなければならない土地柄だったことも、海外雄飛を促したようです。今の中学校に当たる弓浜高等小学校の教師たちは「長男は日本佐衛門として日本にとどまり、次男以下は世界佐衛門として海外へ雄飛せよ」と教えていたといいます。

海外雄飛の人々を待ち受けていたのは、カナダではサケ漁や山林労働、南カリフォルニアではオレンジなどの収穫でした。異国の地でのゼロからの出発は困難を極めましたが、「浜のいも太」の粘りと勤勉性で北米社会に地歩を築いていきました。鳥取大火（昭和27年）の際には、多額の救援金を送ってきた人もいました。もちろん夢が果たせず、異国の土になった人も多くいました。

日米開戦の時は敵性外国人として収容所に入れられて財産没収。2世は「2つの祖国」などで揺れました。戦後も再びゼロからの出発でしたが、1988年の「市民の自由法」（日系アメリカ人補償法）で、アメリカは国家として謝罪し、損害賠償をしています。定岡さんは「グローバル化する世界には戦火ではなく、協調と連帯がますます重要になっています」と訴えていました。

定岡敏行さん

足立儀代松

山林労働に従事する日本人移民者

大正期の鳥取県人カナダ在留者数

鳥取県		西伯郡	
鳥取市	2	上道村	197
岩美郡	5	余子村	73
八頭郡	1	富益村	48
気高郡	1	中浜村	22
東伯郡	55	崎津村	21
西伯郡	441	和田村	20
日野郡	19	賀茂村	12
計	524	境 町	12
		夜見村	10
		法勝寺村	6
		大篠津村	5
		外江村	4
		米子町	3
		大高村	2
		淀 村	1
		彦名村	1
		計	437

鳥取県人カナダ在留者数
（大正期）

さわやか人生大学
（夜見公民館）

「生涯現役」は芸達者ぞろい　　のばなの会、どじょっこの会、美保踊りの会、米子マジック同好会

2019年9月18日

県民総合福祉大会が鳥取市のとりぎん文化会館であり、鳥取県や鳥取県社会福祉協議会などが福祉の推進で活躍した406人と19団体（組）を表彰しました。智頭町の中原集落が「支え愛マップ」を活用したまちづくりの成果を発表したほか、シニアバンクからは4団体がマジックや踊りなどを披露し、大会を盛り上げました。

大会には県内の民生委員や福祉施設職員、ボランティアなど1500人が参加し、仲間の受賞をお祝いするとともに、テレビでおなじみの公立諏訪東京理科大学の篠原菊紀教授から脳の鍛え方を学びました。

シニアバンク「生涯現役」のメンバーもお昼時、ホワイエに仮設ステージを設けてパフォーマンスしました。出場したのは福祉・児童施設などの慰問活動を重ねる①のばなの会②どじょっこの会③美保踊りの会④米子マジック同好会―の4団体。

のばなの会は荻原元春さんのギターと西田清美さんの軽体操や手話で、聴衆を巻き込んで「高原列車は行く」「この街で」などを披露しました。どじょっこの会はいつもながらのコミカルな夫婦どじょうすくいを演じ、会場の笑いを誘っていました。美保踊りの会は「ひょうたん音頭」と「きよしのソーラン節」を元気に舞い、観衆の輪が大きく膨らみました。

最後に登場したのが米子マジック同好会の松浦孝保さんと近藤盛一さん。松浦さんはスカーフ芸、近藤さんはロープ芸、それぞれお得意のマジックを紹介。近藤さんは「福祉大会のお土産にしてください」と、ティッシュペーパーが消えたり、元に戻ったりするマジックを繰り返し、種明かしのサービスも忘れませんでした。「シニアバンクは芸達者ぞろい」と拍手が続きました。

米子マジック同好会

のばなの会

どじょっこの会

美保踊りの会

県民総合福祉大会

初の総理大臣表彰　　山田義則さん

2019年9月20日

鳥取市若葉台南6丁目の自主防災会（山田義則会長、220世帯）は長年の防災活動が認められ、防災功労者（団体）表彰を受けました。表彰式は首相官邸であり、安倍首相から賞状などが贈られました。鳥取県の防災功労表彰は6件目、住民の自主防災会の受賞は初めてです。

新興住宅地・若葉台南6丁目の自主防災会は、平成2年から毎年2回、消防防災訓練を続けており、炊き出しや避難訓練のほか、住民の参加率を高めるため、親子対抗のバケツリレーや町内消火栓をめぐるスタンプラリーなどを行っています。併せて「ささえ愛マップ」をつくり、町内の要支援者の見守りも続けています。

山田会長によると、今年春、一人暮らしの要支援者宅の電灯がついていないことから民生委員と一緒に訪ねたところ、その人がトイレに倒れており、救出できたそうで、日ごろの訓練や声掛けの大切さを思い知らされたといいます。県消防防災課は「自分たちのまちは自分たちで守る。南6丁目の受賞を励みに、県内の自主防災会みなさんの活動が活発になるよう期待しています」と話していました。

ところで、山田会長は元国鉄職員で防災士。地震や風水害が続く中にあって、県派遣の災害ボランティアで、なくてはならない顔になっています。シニアバンクには得意の津軽三味線で登録されています。9月1日には米子市新山の敬老会に招かれ、三味線にとどまらず、トランペット、キーボード、アルトリコーダーで「島人の宝」「リンゴ追分」「靴がなる」など8曲を演奏。伯備線を走る往年のSL3重連の動画も写し、参加者は「懐かしい」と大喜びでした。

山田義則さん

敬老会でリコーダーを披露する山田さん

トランペットも演奏できます

倉吉・打吹山下で生涯現役まつり

2019年9月22日

鳥取県の人材銀行・とっとりいきいきシニアバンクの「生涯現役まつり」が倉吉市に新しくできた「打吹回廊」とその周辺であり、大勢の市民が音楽祭やものづくり、まち歩きなどを楽しみました。鳥取県と鳥取県社会福祉協議会の主催。

「生涯現役まつり」はシニアバンク発足4周年を祝って開いたもので、台風接近による風雨を避けて「打吹回廊」の1階と2階のホールで行いました。開会式で県社協の藤井喜臣会長と県長寿社会課の吉野知子課長があいさつ。シニアバンクの登録者が4千人を超え、〝お宝人材〟として県内各地で活躍されていると報告するとともに、「70～80歳代が人生の働き盛り。さらに県民の登録を進め、活用の輪を広げましょう」と呼びかけました。生涯現役まつりのあらましをレポートします。

倉吉に新しい風が吹き始めた

◆シニアはじける音楽祭

県中部で活躍する音楽グループ7団体と倉吉市小鴨のまちづくり団体が出演したほか、地元の倉吉銀座商店街も登場して3年前の鳥取県中部地震からの復興が、「福高」の取り組みになっていることを報告しました。打吹まつりの元運営部会長・竹尾征二さんの総合司会で進みました。

まつりは倉吉打吹太鼓の「彩り」で華やかに開幕しました。ブルースネイク（琴浦町）がエレキで神奈川県民謡「ノーエ節」やベートーベンの「運命」などを連発し、哀愁のトランペッター・田中みつとしさん（北栄町）がしっとりと名曲を続けました。倉吉ギターアンサンブルの4人も多彩な音楽を届け、熟練シニアの腕がさえました。

午後はギターを抱えて全国を講演して回る方言シンガーの石川達之さん（湯梨浜町）が出演。人気の中部のおばちゃんシリーズは、消費税増税前とあって、「大売り出し編」を演奏しました。林かおるさんは高田拓人さんとデュオを組んで、ピアノとバイオリンでジャズを披露。林さんとゆかりのある葉加瀬太郎のヒット曲「情熱大陸」も届けました。

ところで、シニアバンクは60歳になると、だれでも登録できます。また、団体の場合も60歳以上の人がいれば登録でき、老・壮・青助け合って活動できる仕組みになっています。浅田倫宏さんと岡嘉之さんの〝120歳オーバー〟の2人がつくる赤瓦ジョニーも出演し、島倉千代子の「愛のさざなみ」を見事にカバー、大受けでした。県中部や米子市の音楽仲間でつくるバンド、ブルー・レイズ（丸田克孝代表）は演歌で盛り上がりました。

倉吉打吹太鼓のみなさん

竹尾征二さん

バンド歴47年のブルースネイク

哀愁のトランペッター田中みつとしさん

倉吉ギターアンサンブル

石川達之さん

かおる・拓人デュオ

赤瓦ジョニー

ブルー・レイズ

音楽祭のなかほどで、鳥取県のNHK大河ドラマ候補に選ばれた倉吉市出身の明治時代の老農・中井太一郎物語の紹介がありました。太一郎は「田植え定規」や「太一車」を開発して、日本に美しい田園風景を広げるとともに、米づくり農家をつらい雑草取りから解放した人です。

この郷土の偉人を脇坂幸司さんは講談で、太一郎の生誕地・小鴨地区のみなさんは演劇でそれぞれ紹介しました。演劇はプチ・カナール合唱団（青木千秋代表）がアメリカ民謡を替え歌にして、郷土には三太郎（浦島太郎・金太郎・桃太郎）に負けない太一郎がいることを歌と踊りで表現しました。ホールは出演者の応援団が押しかけ、観客であふれました。

新たなランドマーク「打吹回廊」が誕生して、倉吉銀座商店街（小林健治理事長）も勢いづいてきました。井上裕貴専務によると、中部地震いらい若者が中心になって結束が強まり、春・夏・秋まつりが盛り上がり、組合員は地震前を上回る63店に増えて経済産業省のはばたく商店街に選ばれ、白壁土蔵と災害復興が縁になって倉敷市の商店街と姉妹縁組を結ぶことになったといいます。この10月の秋まつり（福高祭）で調印式を行う運びで、新たな挑戦、まちづくりが始まりそうです。期待しましょう。

中井太一郎物語を語る脇坂幸司さん

小鴨ミュージカルのみなさん

フワフワの芝生で世界を体験

◆遊ぼう、つくろう夢のまち

子どものものづくり体験もありました。指導したのは倉吉名物の凧をつくる黒川哲夫さん、レクリエーション協会の玉木純一さん、中部ものづくり道場の賀戸哲也さんら。バルーンアートや凧づくり、ステンドグラスの「光の箱」、紙コップを使った動くおもちゃ「トコトコ」などを親子でつくりました。

家族みんなで参加した長井海人君（成徳小2年）は「トコトコづくりは紙コップにゴムを通すところが難しかったが、教えてもらいながら楽しくできました」と満足そう。凧づくりでは、「倉吉凧」に好きな絵を描き入れ、さっそく打吹回廊の芝生の中庭を駆け回り、凧揚げを楽しんでいました。この芝生はラグビーワールドカップの会場に使われているもので、フワフワにして根が強いそうです。試しにいちど寝転んでみてはどうでしょう。

紙コップのトコトコができたよ

僕の私の凧が出来たよ～

かさ袋に空気を吹き込むと…

倉吉の温故知新も楽し

◆仏師と歩く「福の神」めぐり

「打吹回廊」のそばには倉吉自慢の白壁土蔵群があります。かつて倉吉が鳥取県を代表する米どころ、酒どころ、木綿や生糸の繊維産業が盛んだった名残です。倉吉千歯や太一車の鉄の加工技術は全国に名をはせました。

その土蔵群のあちこちに木彫りの「福の神」が置かれています。約40体。倉吉観光マイス協会の案内と仏師・小谷和上さんのガイドで、「打吹回廊」2階にある豊饒打吹天女像を皮切りに、そのいくつかをめぐりました。

まずは倉吉名物のたい焼き店から。白いたい焼きをほおばりながら、小谷仏師の自己紹介を聞きました。仏師であると同時に尺八を吹く虚無僧、赤瓦路地のマンホールのふたを倉吉千歯でデザインした人です。

古い街並みを歩きながら、マイス協会のガイドさんは「昔の商家はつつましく見える2階建ての住居を建てました。天井は低く、物置のように見えますが、中に入れば、吹き抜けのようになっており、奥にはしっかりとした居住空間が広がっています」。町家文化の豊かさを紹介していました。

倉吉には一時、3人の仏師が暮らし、「福の神」が多くつくられました。その3人の作品がそろって並んでいるのが豊田家住宅。ここで小谷仏師はそれぞれの作風や特徴を紹介し、「三面大黒天は仏様でもあり、武士でもあった。だから鎧をまとっています。ユーモアは大切だが、基本は守らなければなりません」などと解説していました。

コース沿道には土産物店や立ち寄り先が多く、およそ1．5kmを1時間半かけてゆっくり回りましたが、参加者からは「また来て歩いてみたい」と好評でした。

4年後にねんりんピック鳥取大会

◆倉吉博物館でシニア作品展

倉吉博物館で9月28日まで県内高齢者の美術展「シニア作品展」がありました。日本画、洋画、彫刻・工芸、書、写真の5部門に66点の出品があり、日本画は柿本實さん（琴浦町）、洋画は福田隆さん（鳥取市）、彫刻・工芸は安田わか江さん（鳥取市）、書は植木桂芳さん（日野町）、写真は上田福美雄さん（倉吉市）が県知事賞に選ばれました。これら優秀作品は令和2年の「ねんりんピック岐阜大会」に出品される予定です。ねんりんピック鳥取大会は2023年に開かれます。

打吹回廊内にある豊穣打吹天女像（小谷和上さん作）を解説する小谷和上さんと参加者のみなさん

弁財天や大黒さんなど３体がある豊田家住宅

日本遺産めぐりは面白い　　いなば国府ガイドクラブ・本城義照さん

2019年9月28日

「麒麟獅子舞」文化圏の物語が日本遺産になったのを記念して、とっとりいきいきシニアバンクを運営する鳥取県社会福祉協議会は、鳥取市国府町で日本遺産めぐりの体験会を開きました。シニアガイドの発掘やスキルアップがねらいで、万葉の里の長い歴史と魅力を学びました。この体験会は10月26日にも青谷町で開きます。

国府町の日本遺産めぐりは、「因幡万葉の里で『令和』を学び、幽玄の灯籠会に麒麟獅子が舞う」がテーマでした。地元をはじめ、松江市などから20人が参加し、いなば国府ガイドクラブ（沖廣俊代表）の案内で、宇倍神社―因幡国庁跡―大伴家持歌碑―因幡万葉歴史館―交流サロン一の宮―池田家墓所をめぐりました。

七五三や結婚式などでにぎわう因幡国一の宮・宇倍神社では、祢宜の金田祐季さん（神道青年全国協議会長）が神社の故事来歴を紹介しました。創建は大化の改新があったころ（648年）。祭神は武内宿祢命。景行・成務・仲哀・応神・仁徳の5代の天皇に仕え、日本の統一に励んだ日本初の「大臣」です。その肖像は社殿とともに何度も紙幣になり、おカネにゆかりがある神社、商売繁盛の神様として多くの人が参詣しています。

麒麟獅子舞は初代鳥取藩主・池田光仲が樗谿に鳥取東照宮を建て（1650年）、その祭礼の行列に登場させたのが始まりと伝えられています。神楽獅子の頭を中国の想像上の動物、麒麟に変えたわけですが、麒麟は優れた政治を行う時に現れるという中国の故事に倣ったものです。光仲は藩政統治の決意を表し、家康のひ孫、徳川直系であることを周知する目的で麒麟獅子舞を導入したとみられています。

この麒麟獅子舞は因幡や但馬を中心に広がり、今でも多くの神社の祭礼で舞われていますが、宇倍神社のものが最古とされています。金田祢宜によると、かつて中近東にいた百獣の王・ライオンが欧州では権威の象徴になり、アジアではデフォルメ化されて悪霊を払う獅子になったそうで、麒麟獅子の正体はライオンということです。

因幡国一の宮・宇倍神社

お金になった宇倍神社
（明治時代）

灯籠会で舞う麒麟獅子舞
（宇倍神社）

因幡国庁跡と大伴家持歌碑はガイドクラブの田中道春さん（万葉集朗唱の会代表）が案内しました。それによると、国の史跡公園になっている国庁跡は7千㎡しか残っていないものの、実物は5倍近い広さ（約3.2ha）があったそうで、因幡三山に囲まれて景観がよく、交通の要衝だったといいます。近くには銅などの鉱山もあり、徴税や輸送に便利な場所として、いまの国府町に国衙が設けられたのかもしれません。

因幡万葉歴史館では因幡国守・大伴家持が編纂したとされる万葉集が新元号「令和」の出典根拠になっていることを学びました。

田中道春さん

因幡国庁跡から面影山を望む

万葉歴史館で万葉の里の歴史を学ぶ

元号は「大化」が最初です。それ以降、元号は247番目の「平成」まで漢籍から採用されてきましたが、248番目の「令和」は日本最古の歌集・万葉集から採用されました。万葉集巻五の「梅花の歌三十二首、并せて序」の序文、「初春の令月にして、気淑（よ）く風和ぐ」の一節から「令」と「和」の2字がとられたものです。

「梅花の歌三十二首、并せて序」は家持の父・旅人が太宰府長官だった時、九州の官人たちを邸宅に招いて梅の花見をし、そこで詠まれた歌の数々です。当時筑前国守だった山上憶良（元伯耆国守）の歌もあります。

学芸員の鎌澤圭伸さんによると、梅見の宴は家持13歳の時で、同席していた可能性があるそうで、家持は越中国守時代に「春のうちの楽しき終（おへ）は梅の花　手折り招（を）きつつ遊ぶにあるべし」（春のうちで楽しみの極みは、梅の枝を手折って花の精霊を招いて、ともに遊宴にひたること）と詠んでおり、家持の歌づくり、万葉集づくりに大きな影響を及ぼしたとみています。

家持を顕彰する因幡万葉歴史館は、「令和」の時代になって、多くの万葉集ファンでにぎわっています。

体験会の最後は池田家墓所（国史跡）の灯籠会です。墓所には初代光仲から11代慶栄（よしたか）までの歴代藩主とその妻子などがまつられており、78基の墓碑と260を超える灯籠が並んでいます。墓碑は亀をかたどった亀趺（きふ）と呼ばれる台石に円頭扁平な墓標が立っているのが特徴で、かつては墓碑前に廟門や回廊が建ち並んで壮観だったといいます。

この墓所を管理するガイドクラブの沖代表が案内しました。墓碑は用瀬町産の花こう岩でできていること、亀趺それぞれの顔立ちが違うこと、紀州徳川家や加賀前田家などから輿入れした夫人墓の家紋が実家のものである理由などについて、わかりやすく、楽しく解説しました。

日が暮れると、いよいよ灯籠会です。灯籠や園路にろうそくの灯が入ると、幽玄の世界が広がります。広場のステージでは奉納芸能が繰り広げられ、TERU 功山（本城義照）さんが魂を込めて尺八演奏したほか、鳥取荒神神楽団の「福まき」や宇倍神社の幸せを呼ぶ麒麟獅子舞があり、池田家16代当主の池田百合子さんも見守りました。池田家墓所では灯籠会に続いて、紅葉の季節にライトアップ、写真コンクールなどを予定しており、「修復整備が進む墓所に、たくさんの人が来てほしい」と期待しています。

体験会に参加した「もちがせ流しびなの館」の木下登士彦さんは、自ら麒麟獅子舞をしていることもあって、「ライオンが獅子舞のルーツだったとは。いい勉強になりました。多彩な日本遺産めぐり、楽しかったです」と話していました。

TERU 功山さん

池田家墓所を案内する沖廣俊さん（左端）

池田家初代藩主・池田光仲の墓

池田家墓所の灯籠会

大山の食と薬草と木工体験　　鷲見寛幸さん・遠藤道夫さん・桑原正さんなど

2019年10月5日

大山講座の「大山を食べよう」が大山町の福祉保健センターだいせんであり、親子約50人が大山おこわのおにぎりづくりや青竹のコップづくりに挑戦しました。新日本海新聞社、伯耆国「大山開山1300年」祭実行委員会の主催、鳥取県社会福祉協議会共催。

この体験講座は大山の魅力を知り、語り伝えようと開かれたもので、県西部の幼児や小学生とその親などが参加しました。遠藤道夫さん（農事組合からす天狗）が企画したもので、参加者は大山ならではの食器づくりを楽しみ、大山の山野草、伝統食を味わいました。

食器は桑原正さん（ペンションわくわく村オーナー）の指導で青竹のコップやマグカップをつくりました。ふれあい茶論・弥生の風（横川佐津子代表）は大山の僧兵や博労が食べたという伝統食・大山おこわを作り、その作り方やおにぎりづくりを手ほどきしました。鷲見寛幸さん（大山町教育長）は山野草や薬草について話し、お茶にして飲みました。

鷲見さんによると、大山に自生する薬草は50種類ほどあるそうです。「食べて飲んで体に良いもの」「お風呂に入れると体に良いもの」「毒のあるもの」など、昔の人の経験や知恵で選別されてきたといいます。そのいくつかを紹介しましょう。

まず毒からいくと、しびれるのがエゴノキ、キンポウゲは腹痛をもたらし、かぶれるのがウルシ。洗濯ネットに入れてお風呂に入れると、柿の葉でお肌ツルツル、夏ミカンの皮やヨモギで血行促進、アトピーにはドクダミやクロモジなどがいいそうです。

次に食べて飲んで、体を元気にしてくれるのは、健胃にタンポポやヨモギやクロモジ、下痢止めにはゲンノショウコ、高血圧予防にはドクダミ、糖尿病予防にカキドオシ、疲労回復にウコギ、のどの薬にオオバコ、解熱にクズ、元気が出るのはヤマノイモやマタタビ―など。

クロモジは木の皮の模様が文字のように見えることからついた名で、2mほどの低木。さわやかな香りがするのが特長で、米子市周辺でもよく見られるといいます。タンスに入れると、芳香剤や防虫剤になるそうです。ドクダミは薬草の王様。いろいろな効能があることから、十薬とも呼ぶそうです。おなかがピーゴロくれば、ゲンノショウコを煎じて飲むと、「現に証拠ある」効能が現れるといいます。マタタビの葉や枝はネコに人気で、近所中のネコちゃんたちが「ごろにゃん」と集まってくるそうです。

鷲見寛幸さん

青竹のコップづくりを指導する桑原正さん

大山のそばも豆腐もおにぎりも、みんなおいしいよ

「飲んでみよう」大山の薬草茶

水木ロードに星の歌を流そう　　竹内道夫さん

2019年10月10日

境港再発見講座「境港楽」は市老人福祉センターであり、鳥取県の文芸史家・竹内道夫さんが境港市出身の文学者、杉谷代水や由木康の功績を語り、彼らがつくった星の歌を水木しげるロードで流してはどうかと提案しました。

杉谷代水（だいすい、本名虎蔵、1874～1915年）は児童文学の先駆者。テレビアニメなどでおなじみの「母をたずねて三千里」を翻訳したほか、唱歌の代表作「星の界（よ）」を作詞しました。「星の界」の一番はこうです。

月なきみ空に　きらめく光　ああその星影　希望のすがた　人智は果てなし　無窮（むきゅう）の遠（おち）にいざその星影　きわめも行かん

星空のように、人智は無限、ますます学ぼうといったところでしょうか。アメリカの賛美歌に詩を付けたもので、明治43年の発表作です。小学校の音楽教科書に載っています。

由木康（こう、1896～1985年）は牧師で賛美歌の翻訳、哲学者パスカルの研究に生涯を捧げた人です。その代表作がクリスマス・ソング「きよしこの夜」。「きよしこの夜　星はひかり…」。オーストリアでつくられた讃美歌を翻訳したものです。こちらも音楽や英語の教科書に使われ、広く歌われています。

竹内さんは「杉谷代水とタカラヅカ」の講演のなかで2人を紹介しました。

それによると、杉谷は文武両道に優れ、東京専門学校（現在・早稲田大学）に進んだものの、病気のため中退。恩師の坪内逍遥の紹介で出版社に入り、「国語読本」を編集。その大半がその後つくられた国定教科書に採用されるなど画期的なものだったといいます。また、言文一致唱歌を提唱した同郷の作曲家・田村虎蔵の勧めで、「星の界」など70近い唱歌も作詞しました。坪内に刺激されて脚本や狂言なども執筆し、その内容が阪急グループの総帥・小林一三の目に留まり、宝塚少女歌劇誕生につながったそうです。

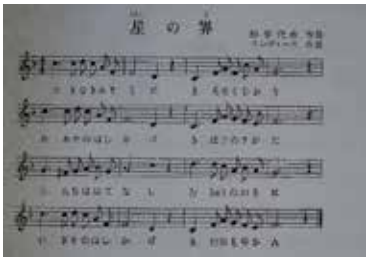
多芸多才の杉谷でしたが、名を高めたのは翻訳だったといいます。「母をたずねて三千里」はじめ、「ギリシャ神話」「アラビアンナイト」などを刊行し、外国文学の紹介、普及に貢献しました。また、共著には文章や手紙の書き方を指南する「作文講和及文範」「書翰文講和及文範」という隠れたベストセラーがあります。

竹内さんは「杉谷は多岐にわたって活動したため、印象が薄いが、日本の近代文学の草創期をつくったひとり。出身地はもっと顕彰活動をしてほしい。きよしこの夜とともに杉谷の歌も水木ロードで流してはどうか。境港がもっと元気になる」と訴えていました。夜の水木ロードになじみの星の歌が流れれば、〝星取県〟の国際化戦略に弾みがつきそうです。

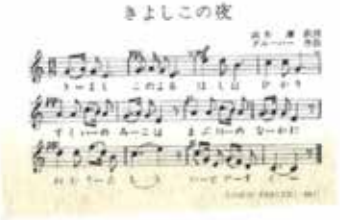
竹内道夫さん

杉谷代水
（境港市の誇る先人たちから）

由木康
（境港市の誇る先人たちから）



星の界



きよしこの夜

倉吉は天皇家ゆかりの地　　根鈴輝雄さん

2019年10月14日

令和天皇の御即位を記念して倉吉博物館は「光格天皇の事績と、その生母大江磐代君展」（10月22日～11月4日）を開きますが、それを前に大江磐代君ゆかりの地めぐりがあり、根鈴輝雄さん（倉吉博物館長）の案内で約50人が打吹山のふもとの大江神社などを訪ねました。

大江磐代君（1744～1812年）は天皇の母となった倉吉の女性です。令和天皇の7代前、江戸時代末期の第119代光格天皇の生母です。

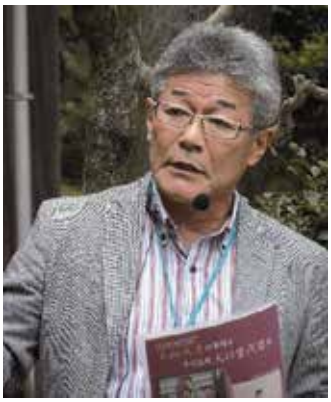
伝記によると、磐代君（幼名つる）は倉吉の田町（現在の湊町）生まれ。父は鳥取藩の侍・岩室常右衛門、母はりん。つる9歳の時、父親に連れられて京都に上り、礼儀作法などを学びます。縁あって宮中の女官に仕え、その働きぶりが認められて閑院宮家に入り、側室となって5人の王子をもうけました。その第1子が後の光格天皇です。光格天皇は「新嘗祭」を再興したほか、朝廷の権威回復に努め、その志は孫の孝明天皇やひ孫の明治天皇に受け継がれ、明治維新につながっていったといいます。

身分制度が厳しかった昔のことです。磐代君が光格天皇の生母だと系図に載ったのは、磐代君没後65年、明治10年のことでした。母親のりんに至っては、家柄・身分などは不明のままです。田町で焼き餅を売って生計を立てていたとか、鉄問屋の娘だったともいわれています。一説には、その鉄問屋は松江城主・堀尾吉晴の末裔で、琴浦町の大庄屋・河本家や倉吉淀屋（大阪淀屋）などと親しい関係があったとも伝わっています。

さて、磐代君ゆかりの地めぐりは、大正天皇が皇太子時代に宿泊された飛龍閣―磐代君をまつる大江神社―賀茂神社―磐代君の生誕地・湊町公園－母りんの墓所・大岳院を回りました。

根鈴さんによると、打吹公園は東京・日比谷公園に次いで、全国2番目にできた風格のある都市公園だったそうです。かつての倉吉は財力があり、山陰を代表する産業都市でした。

ゆかりの地めぐりのこの日は、ちょうど大江神社の月例祭（大正2年4月14日創建）が執り行われ、吉田武章宮司が神事で出迎えました。「磐代君は倉吉の誇りです。倉吉は天皇家とゆかりがあります。胸を張っていきましょう」と話していました。



根鈴輝雄さん

大江神社

大江磐代君の母・りんの墓
（大岳院）

大江磐代君の生誕地
（倉吉市湊町）

万葉の里には文化財がいっぱい　　いなば国府ガイドクラブ

2019年10月15日

鳥取市国府町・万葉の里の観光地を案内する、いなば国府ガイドクラブ（沖廣俊代表）は、町内にある国指定の文化財をめぐる体験・研修ツアーを行い、ふるさとの魅力を再認識しました。

国府町は因幡国庁があったところ。国守の大伴家持が1300年ほど前、万葉集の巻末を飾る「新しき年のはじめの初春の　今日降る雪のいや重（し）け吉（よ）事」という歌を詠んだことで有名です。その万葉集が新元号「令和」出典のもとになり、いなば万葉の里は観光客が急増、ガイドクラブも大忙しです。

そこでガイドの研修を兼ねて文化財めぐりの運びになったものです。沖代表が「万葉の里には鉄道も高速道路もないが、文化財だけはいっぱいある」と言うように、町内には遺跡や史跡を中心に国・県・市指定の文化財が38カ所（点）もあります。

そのうち、ツアーは①伊福吉部徳足比売墓跡②学行院にある木造薬師如来・両脇侍座像・木造吉祥天立像③栃本廃寺跡④因幡国庁跡⑤梶山古墳⑥鳥取藩主池田家墓所⑦旧美歎水源地水道施設⑧林田家住宅―8カ所の国指定文化財を1日かけて回りました。

真っ先に訪れたのが宮ノ下小学校の裏山にある伊福吉部徳足比売墓跡です。標高およそ100m。ロープを頼りに急斜面を登らなければならない険しいところでしたが、この墓跡を見れば、万葉の里の物語がよくわかります。山道は苦手という人は因幡万葉歴史館で解説を聞きましょう。

伊福吉部氏は古代の豪族です。渡来人だったといわれ、宇倍神社を管理したり、銅鉱などを朝廷に献上しています。娘の徳足比売は文武天皇に采女（女官）として仕えましたが、大和で亡くなり、火葬にされて国元に送られ、埋葬されました。その墓です。青銅の骨蔵器のふたには108文字が刻まれており、従七位の高い身分だったそうです。出脇典子さんがガイドしました。沖代表によると、この墓跡や改装墓―伊福吉部氏墓地―宇倍神社は真西一直線上に並んでいるそうです。

徳足比売が火葬にされたのは710年のこと。家持が因幡国守として赴任してくる50年ほど前の出来事です。魚などの彩色壁画や8角形の古墳で知られる梶山古墳。ガイドの木村肇さんによると、伊福吉部氏の第26代都牟自臣が被葬者ではないかとみています。7世紀は伊福吉部氏の黄金時代だったそうです。

殿ダムの上流、大茅地区には栃本廃寺があります。7世紀末～10世紀初めにあった寺院らしく、だれが創建したのかは不明ですが、塔の心礎2基が露出しており、米子市の上淀廃寺のように2つの塔が並立する豪勢な寺院だったようです。周辺には銅山などがあり、ここも伊福吉部氏一族が関係していたのかもしれません。山田順二さんがガイドしました。

伊福吉部徳足比売の墓跡をガイドする
出脇典子さん

梶山古墳を案内する木村肇さん

栃本廃寺は茅葺きの塔だった？

明治維新の原動力になった薩摩藩と
鳥取藩の関係を説く沖廣俊さん
（池田家墓所）

因幡万葉湖（殿ダム）で
記念撮影するみなさん

万葉の里に「令和」の風が吹く　　万葉集朗唱の会・池本一郎さん・北尾勲さんほか

2019年10月20日

鳥取市国府町の因幡万葉歴史館で万葉フェスティバルがあり、万葉衣装を着飾ったみなさんが万葉集の朗唱や曲水の宴などを楽しみました。前日には大伴家持大賞の表彰式もあり、万葉の里は新時代「令和」で勢いづいています。

因幡万葉歴史館ができたのは平成6年（1994年）。日本最古の歌集・万葉集を編集したとされる因幡国守・大伴家持を顕彰するために設けたものです。家持は因幡国庁の旧正月の宴で「新しき年のはじめの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」と詠み、万葉集の最後の歌に収めました。その歌碑も設けられ、国府町は地域をあげて「万葉のふるさと」として売り出しています。

歴史館開館とともに始めたのが、和歌・短歌ファンを対象にした大伴家持大賞の公募。25回目の今年は全国から4，072首が集まり、児童生徒の部は「6年間使った赤いランドセル　今年寄付したネパールの子に」（鳥取市・田中優衣菜さん）、一般は「赤丸に『父』と書かれたカレンダー　娘を訪ねた雪の山形」（沖縄県・森山高史さん）が大賞に選ばれました。

県歌人会顧問の北尾勲さんや池本一郎さんらが審査し、表彰式で「これからも社会性のある歌づくりを」「涙なしには詠めないいい歌です」とそれぞれ講評し、励ましました。

今年22回目の万葉フェスティバルは、万葉集の朗唱がメーンイベント。町内の保育園児や小中学生、大人も全員が色鮮やかな万葉衣装を着飾ってステージに登壇。およそ200人が3時間にわたって万葉集（4，516首）のうちの家持の歌（473首）を詠みつなぎました。歌に合わせて踊ったり、オリジナル曲に乗せて朗詠したり、歌の背景を解説したり、それぞれ創意工夫しながらリレーしました。

国府文化協会のみなさんは、鳥取市少年少女合唱団指揮者の尾崎直美さん作曲の「万葉抒情」で2首を披露しました。「五七五七七の31文字、どんな歌にも合わせられます」と尾崎さん。町内の公民館職員グループも、澤田勝さん（サックス奏者）作曲のメロディーをハーモニカで演奏し、6首を詠みあげました。フィナーレは万葉集朗唱の会の田中道春会長らのリードで、万葉集最後の歌「祝い歌」（新井満さん作曲）を参加者全員で朗唱しました。

田中会長はあいさつで「新元号が万葉集から採用され、万葉集が身近になりました。万葉のふるさと国府には多くのファンが訪れ、ますます盛り上がっています。しっかりおもてなしをしていきます」と。万葉の里に令和の追い風が吹いています。

池本一郎さん

曲水の宴でできた歌を講評する
北尾勲さん（右端）

上の句を歌いつなぐ曲水の宴
（万葉歴史館の庭で）

万葉集朗唱の会の
田中道春さん（左から２人目）

ちびっ子たちも家持の歌を朗唱

背負ったのは、お母さん　　碧川かた研究会・ＡＰＯＮ

2019年10月25日

童謡「赤とんぼ」をつくった三木露風の母・碧川かたの生涯をNHK朝の連続テレビ小説でドラマ化してもらおうと活動している碧川かた研究会（四井幸子さん主宰）は、鳥取市の県立博物館で「赤とんぼの歌を読み解く」という討論会を開き、「背負ったのはお母さん、多くの人がそうイメージしている」とまとめました。

碧川かた（1872～1962年）は鳥取藩家老の娘です。兵庫県・龍野の三木家に嫁いだものの、亭主の放蕩で離縁され、その後、看護師になり、米子市出身の新聞記者・碧川企救男と再婚。子育てのかたわら、婦人参政権獲得運動などの先駆者になります。かたは2度の結婚で5人の子どもをつくりましたが、最初の子が童謡「赤とんぼ」の作詞者・三木露風です。

露風（1889～1964年）は詩作の才に恵まれ、大正時代の詩壇で北原白秋とともに「白露時代」を築きました。幼くして母親と離別した体験をもとに大正10年、「赤とんぼ」を作詞、友人の山田耕筰が曲をつけました。昭和33年に音楽の教科書に採用されると、国民が愛する童謡のひとつになりました。

夕焼小焼の赤とんぼ　負われて見たのは　いつの日か
山の畑の桑の実を　小籠につんだは　まぼろしか
十五で姐やは嫁に行き　お里のたよりも　絶えはてた
夕焼小焼の赤とんぼ　とまっているよ　竿の先

（県立博物館にある露風自筆の「赤とんぼ」から）

問題は歌詞のなかに出てくる「負われて見たのは」の一節です。負ったのはお母さんか、子守りの姐やか。文学者や童謡研究家などを巻き込んで長く論争が続いています。ここはドラマのシナリオづくりに重要なシーンとあって、碧川かた研究会も「赤とんぼ」の歌の真相解明に乗り出しました。

討論会に招いたのは東京都・三鷹市の文学者で「三木露風の歩み」の編著者・福嶋朝治さん、長崎県・南島原市の童謡唱歌研究家の飯田清親さん、兵庫県・たつの市の露風旧居宅に住む湯口壽夫さん。福嶋さんは詩のなかに登場しないお母さんが背負ったと考えるのは不自然、湯口さんは三木家が姐やを雇った形跡はなく、嫁に行ったのはお母さんの再婚のこと―などと白熱の議論が進みました。最後に福嶋さんが谷村新司のヒット作「いい日旅立ち」の一節「母の背中で聞いた歌を道連れに」を引き、「歌は受け取る人の心の問題。日本人の多くは母の背中で赤とんぼを見たとイメージしており、その心地よさが愛唱歌になったと考えたい」と議論を収めました。

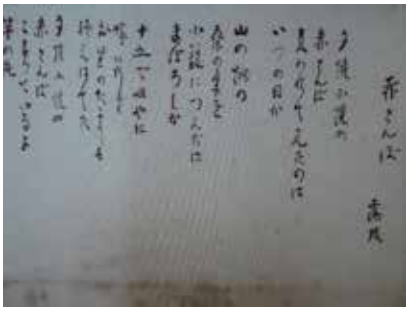
討論会の前には岩美町の音楽グループ・APONが歌とフルートで「赤とんぼ」を演奏し、研究会の活動にエールを送りました。11月9日、10日には鹿野町でたつの市の市民劇「赤とんぼよ　永遠に」の上演（14場）があります。

「露風を背負ったのはだれか」について話し合う
（右から福嶋さん・飯田さん・湯口さん）

碧川かたさん

司会したのは碧川かた研究会の
内田さん（左）と佐々木さん

三木露風



露風直筆の「赤とんぼ」
（県立博物館蔵）

弥生の王国・青谷はすごい　　河根裕二さん・長谷川正昭さん

2019年10月26日

「麒麟獅子舞」文化圏が日本遺産になったのを記念して、鳥取県社会福祉協議会は鳥取市青谷町で日本遺産めぐりをしました。観光ガイドの発掘、養成がねらいで、国府町に次いで2回目の開催です。参加者は北前船の跡地や青谷上寺地遺跡、山陰海岸ジオパークなどを回り、青谷の魅力を満喫しました。

参加したのは17人。青谷ガイドネットワークの河根裕二さん（青谷郷土館・青谷上寺地遺跡展示館の前館長）と長谷川正昭さん（勝部地域まちづくり協議会長）がガイドしました。青谷上寺地遺跡整備室の出前講座もありました。

鳥取県の海女漁の発祥地・夏泊漁港からスタートしました。戦国時代から江戸時代の初めにかけて千代川左岸を治めた亀井茲矩が朝鮮出兵の際、九州筑前・梶免村助右衛門という漁師を連れ帰り、その妻が海女漁を伝えたのが始まりといわれています。最盛期の1950年代には30人ほどの海女さんがいたそうで、「しぼりワカメ」が有名でした。2013年に組合が解散するまで、海女漁はおよそ400年間続きました。

NHKのテレビドラマ「あまちゃん」がきっかけになって、復活話が持ち上がりましたが、残念ながら先行きしませんでした。いまでは青谷郷土館の大型写真で、その勇姿にふれるしかありません。

夏泊漁港は長尾鼻の一角にあります。北西の風をさえぎる岩場にできた良港です。長尾鼻はかつて中国山地にあった火山から溶岩が流れ下ってできた台地です。固い安山岩でできており、板状の割れ目（板状節理）が発達しているのが特徴です。その割れ目から水がしみ出ており、水に恵まれたところです。そんな地質が青谷の歴史やジオパークの基盤をつくりました。

青谷は勝部川と日置川の2つの谷からなっています。その合流点から日本海までの川沿いに芦崎集落があり、江戸時代には船主の商家や鳥取藩の米蔵などが建ち並び、松田屋吉右衛門らが上方と青屋木綿などを取引していたといいます。芦崎夏泊両浦湊絵図や芦崎・湊神社への寄進物などが決め手になって、北前船ネットワークの日本遺産に認定されました。亀井公の朱印船貿易もここを拠点にしていたようです。

夏泊漁港の地形や海女漁をガイドする河根裕二さん（左端）

長尾鼻の板状節理を説明する河根裕二さん

夏泊では海女漁が４００年続いていた（青谷郷土館）

北前船跡地として認定された芦崎・湊神社

港湾集落といえば、そのルーツは青谷の入り海・潟湖を利用した青谷上寺地遺跡です。今からおよそ2千年ほど前、弥生時代から古墳時代にかけてあった遺跡で、日本海を通じて朝鮮半島や九州、北陸などと交易していたことが分かっています。

これまでの発掘調査で、ヒトの脳をはじめ、ヒトや動物の骨、卜骨、精巧な木製品、木造構造物、土器、農工具、鉄器、玉、中国の貨幣、琴など多種多様なものが出土。その保存状態の良さから「弥生の地下博物館」と呼ばれ、2008年に国史跡になり、2019年には出土品の1353点が国の重要文化財に指定されるなど、名実ともに日本の〝お宝遺跡〟になっています。

発掘調査は現在も続いています。港はどこにあったのか、どのような建物があったのか、住居はどこにあったのか—などを探しています。遺跡内からは低地盤を克服する工夫を施した道路が見つかり、近くの青谷横木遺跡からは古代山陰道と見られる道路跡や柳の街路樹跡、国内2例目の女人群像の板絵など貴重な発見が相次いでいます。港の物流に欠かせない、それらの古代道が低湿地でどうつながり、山越えしていたのか、関心を集めています。

一方、遺跡から出土した人骨群のDNA調査も進んでおり、これまでのところ青谷上寺地で暮らしていたのは、ほとんどが渡来人で、しかも多種族、いまの都会のように無縁の人々が行き交っていたということもわかってきました。それらの人々は、どこから集まって来たのでしょう。こちらの調査も続いており、全国の古代史ファンが注目するところになっています。

青谷上寺地遺跡整備室で殺傷痕のある人骨や卜骨などを見学するとともに、出前講座「遺跡のいま、これから」を聞きました。それによると、令和元年度中に遺跡活用の基本計画をまとめるといいます。出土品を真似て生産道具をつくり、ものづくりや田畑体験などができるようにするほか、弥生王国アカデミーなどをつくって研究、学習のサポート体制を整えたい考えです。どのような施設ができるかは、もう少し先になりそうです。

勝部谷のジオスポットなども訪ねました。溶岩台地から流れ落ちる、3つの滝がある不動滝めぐりは不通個所があって入れなかったものの、巨大な岩窟がある「子守神社」や急こう配の石段が特徴の「建山神社」は、それぞれ謎めいていて参加者を圧倒しました。

スサノオノミコトをまつる建山神社は、創建608年という古い神社です。ここには鷲峰山と大山との背比べ伝説があり、背比べに負けた大山が腹いせに鷲峰山の頭を杓子ですくい取り、その土が落ちて建山と北栄町の袖振山をつくったという話です。かつて中国山地にあった火山が爆発し、溶岩になって流れ下り、大山より低い山になってしまったという話が形を変えて伝わっているのかもしれません。

ガイドの長谷川さんによると、勝部地域は百済から渡来した勝部（すぐるべ）一族の里です。313年に青谷海岸にたどり着き、当時の原住民と争いながら徐々に支配力を広げたそうで、青谷上寺地とも関係があったのではないかと推理しています。「勝」は朝鮮語で村主（すぐり）と読み、鉄や絹織物などの生産に秀でていたということです。倉吉市には勝神社があり、大御堂廃寺ともつながりがあったともいわれています。果たして青谷とも関係はあったのでしょうか。

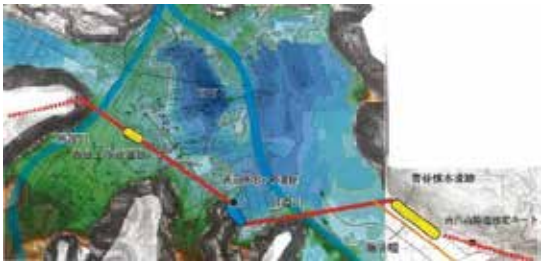
青谷の日本遺産めぐりは、地質と歴史が存分に楽しめる内容でした。参加者は「青谷は奥深いところ。知らないことばかりで刺激的でした」と喜んでいました。

子守神社をガイドする
長谷川正昭さん

急な階段と石工・川六作の
狛犬が出迎える建山神社

青谷上寺地遺跡から出土した
ヒトや動物の骨の数々

国指定の重要文化財になった
青谷上寺地遺跡出土品の数々



青谷平野の古代山陰道と古環境復元図
（鳥取県埋蔵文化財センター作成）

青谷の日本遺産めぐりに参加したみなさん
（弥勒寺で）

米子や伯耆の芸達者たち　　笑劇座

2019年10月27日

米子市の心身障害者福祉センターでセンター祭りがあり、落語家・桂小文吾さんが率いる笑劇座が出演し、来場者でいっぱいの会場は終始笑いに包まれました。

センター祭りは今年で19回目。障がい者のことをもっと知ってもらい、地域との交流を深めようと2年に一度開いています。利用者がつくった陶芸や七宝焼などが並び、人形劇やカラオケ大会などがありました。恒例となっているのが桂小文吾さんの落語ですが、今回は小文吾さんが座長を務めるシニア劇団「笑劇座」の新作披露がありました。

笑劇座は小文吾さんの呼びかけで5年前に結成されたもので、米子市や伯耆町などから10人の芸達者が集まっています。脚本、演出はすべて小文吾さんが手がけ、近年は米子市文化ホールなどの大舞台でも披露するほどの腕前です。

今回上演したのは時代劇「茶屋　大丈夫か？」。人をだましつつ、人助けをする人情噺（ばなし）です。

茶屋に奉公する主人公は言葉遣いが悪く、接客がまともにできず、女将さんたちを困らせます。そこへ地主が現れると事情が一変します。借金の肩代わりに地主が茶屋の娘に無理やり結婚を迫ると、自分が娘のいいなずけだと追い返します。娘の父親が地主に殺されていたことがわかると、そのかたき討ちとばかりに地主を追い払う活躍です。めでたし、めでたしとなるところですが、実はいいなずけの話も、父親が殺されたという話もすべてうそでした。父親の件は“うそも方便”と許されるものの、娘との結婚話は、“うそから出たまこと”とはいかず、丁重に断られてしまいました。3枚目は3枚目というオチがついて、会場からどっと笑いが起こりました。

お披露目が終わったばかりの小文吾さんには、もう次の脚本が出来上がっているそうで、「どんどん新しい芝居をつくっていきますよ」と、張り切っていました。

主人公を演じる桂小文吾さん（左端）

にぎわうセンター祭り

笑劇座のみなさん

人生歌人、山上憶良　　中永廣樹さん

2019年11月2日

鳥取市の因幡万葉歴史館の万葉集講座があり、元県教育長の中永廣樹さんが「山上憶良の名歌」について話しました。中永さんの万葉歌人講座は大伴家持、大伴旅人に次いで3人目です。憶良は庶民や人間を詠んだ人生歌人で、現代人にも通じる心の持ち主だったようです。

憶良（660－733年）は家持の父・旅人とほぼ同年代で、家持とは60歳ほど離れています。憶良が筑前国守時代、その上司に太宰府長官の旅人がおり、ともに筑前歌壇をつくって歌づくりを楽しみました。その時の梅花の宴の様子が万葉集に収められ、新元号「令和」の由来になりました。家持の歌づくりは、旅人や憶良から大きな影響を受けました。

中永さんは万葉集研究家・中西進さんの著書「憶良の生涯」を紹介しました。それによると、憶良は白村江の戦で敗れた百済からの亡命者です。漢籍に優れ、遣唐使に書記官として派遣された際、唐の律令や建築技術書などをいろいろ読み下し、平城京遷都で実績を残したようです。これが評価されたのか、ついに貴族の仲間入りを果たし、57歳で伯耆国守となりました。

時代がずれていたとはいえ、因幡には家持、伯耆には憶良、万葉歌人を代表する2人が鳥取県にいたことになります。しかも家持は759年の旧正月に因幡国庁で「祝い歌」をつくり、万葉集の巻末に収めています。憶良に伯耆国守時代の歌が残っていないのは残念ですが、石見国には宮廷歌人・柿本人麻呂もいたので、山陰は「万葉のふるさと」と言ってよさそうです。

さて、憶良の歌です。中永さんは有名な「貧窮問答歌」を例に、長歌とそのエッセンスを歌った反歌を説明しました。貧しい人とさらに貧しい人の問答で、写実的な表現で貧しい暮らしと税の厳しい取り立てから、逃げ出したくても逃げられないと訴えています。その反歌が「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」です。山陰や九州で見聞した農民の姿を歌っているのかもしれません。憶良晩年の73歳の作です。ひとこと言っておかねばの心境だったのかもしれません。

中永さんは憶良の「男子名を古日といふに恋ふる歌」という長歌も紹介しました。子に先立たれた親心を歌ったもので、その反歌が「若ければ道行き知らじ賂（まひ）はせむしたへの使ひ負（お）いて通らせ」。あの子は若いから黄泉の国への行き方を知らいない。礼をはずむから背負ってやってくれないか―。

中永さんは併せて室生犀星の詩「靴下」も紹介しました。その一部です。「毛糸にて編める靴下をはかせ　好めるおもちゃをも入れ　あみがさ、わらぢのたぐいをもをさめ　石をもてひつぎを打ち　かくて野に出でゆかしめぬ」。1300年の昔も今も、変わらない親心を説きました。

中永廣樹さん

「梅花の宴」の再現ジオラマ
（古都太宰府保存会所有）

盛況の万葉集講座

シニアもがんばりました　　八幡健一さん･松本俊行さん･紙原四郎さん･陶の会

2019年11月2日

鳥取県社会福祉協議会は鳥取市伏野の県立福祉人材研修センターで「みんなで支え愛フェスタ」を開き、大勢の市民でにぎわいました。「生涯現役」のシニアバンクもものづくりの指導などで参加し、イベントを支えました。

支え愛フェスタは福祉の情報発信・交流拠点の研修センターを広く利用してもらうため毎年開いているもので、非常食の試食会や働く車の乗車体験会、フードドライブの募集や子供服のリユース、保育園児の絵画展や「かにっこ館」の出前展示、赤い羽根募金のPRなど多彩なイベントがありました。

シニアバンクは汽車笛、ガラス工芸、切り絵のワークショップを担当しました。指導したのは鳥取ものづくり道場の八幡健一さんと松本俊行さん、それに切り絵作家の紙原四郎さん。どのコーナーも親子連れでにぎわいました。

紙原さんは県社協の季刊誌「志あわせへ」の表紙を飾る実力者。初心者でもすぐに切り抜けるよう、ブタや月に浮かぶウサギなどを用意し、手ほどきしました。八幡さんの汽車笛もキッドを組み立て、ボンドでくっつけ、サンドペーパーで磨くだけ。子どもたちはすぐに仕上げて、「ポッポー」と鳴らして、ご機嫌でした。松本さんのガラスコップを使った光る置きものづくりは、女の子たちに人気。コップに貝殻やおはじきなどを張り付け、持ち帰りました。

研修センターの工作室を利用して趣味の陶芸を楽しむ陶の会「湖山窯」（逢坂豪代表、17人）は、みんなでつくった湯飲みやコーヒーカップ、皿など150点ばかりを100円～500円で展示即売。来場者に喜ばれました。会員の本田正法さんは「活動は月2回。会費は月千円。粘土も釉薬も豊富にそろえており、あれこれつくれます。楽しいですよ。いつでもどうぞ」と仲間を募っていました。

「仕上げはサンドペーパーで磨いて」
汽車笛つくり（左端が八幡健一さん）

ガラス工芸に挑戦する親子
（指導しているのは松本俊行さん）

「切り絵は細かいところから抜きましょう」
と紙原四郎さん

「これ、お買い得です」。
陶の会の展示即売会

鉄づくりを科学しよう　　伯耆国たたら顕彰会

2019年11月3日

たたらの里・奥日野の「ふいご祭り」が日野町の役場前広場であり、およそ200人がミニたたら操業や鍛冶屋体験、県史跡「都合山たたら」講座などを楽しみました。新たに「鉄づくりを科学する」子どもワークショップも始まり、たたらの顕彰活動が広がりを見せてきました。

奥日野のたたら製鉄は大正時代に姿を消しましたが、それまでは旧暦の11月8日に鞴（ふいご）祭りが盛大に行われていました。鍛冶屋、刀工、鋳物師など鉄にかかわる人たちのお祭りです。鉄の精錬や加工に欠かせない送風機・ふいごに感謝しました。かつての奥日野は住民の3人に1人が米や木炭の供給、鉄の運搬など、何らかの形でたたら製鉄に携わっており、地域社会は鉄づくりの盛衰とともに浮き沈みしてきました。

「ふいご祭り」は奥日野たたらの里づくりプロジェクト実行委員会（委員長・田貝英雄伯耆国たたら顕彰会長）が取り組んでいるものです。今年で6年になりました。小説「TATARA」の発行、地元や米子市などでのミニたたら操業の実演、たたら古道ウオーク、日本刀の始祖とされる伯耆安綱の伝承の地めぐりなど多彩な啓発事業を展開中です。このほど日野・日南町境の「都合山たたら跡」が鳥取県初のたたら史跡になり、その保存・活用策として10月19日にはボランティアで小さなキャビン（小屋）も建設しました。

さらに新たに始めたのが「鉄づくりを科学する」子どもワークショップです。人類の進歩に火や鉄が果たした役割、かつての日本の鉄づくりがたたら製鉄に頼ったこと、鉄のおかげで日本の近代化が進んだこと、鉄の惑星・地球と未来の予測などを冊子（A4判16ページ）にまとめ、年内には日野郡内の学校や図書館、希望者に配布することにしています。

ワークショップはその体験の場です。「ふいご祭り」に参加した親子は、石を使って大根やネギ切りに挑戦して鉄がなかった時代を体験したり、火起こしに挑戦したり、ロウソクの原理を学んだりしました。今後のワークショップは炭づくりや砂鉄集め、たたら操業体験、暮らしの場での鉄利用調査、現代のエネルギーや電子技術の勉強などを予定しています。

ワークショップを担当する杉原幹雄さんは「地球は鉄の惑星。体中に酸素が運ばれるのは血液に含まれる鉄分のおかげ。これらの体験が子どもたちにとって、科学や歴史への興味につながり、親子が一緒になって身近な暮らしを科学するキッカケになれば・・・」と、期待しています。

杉原幹雄さん

都合山に整備したキャビン

石やカネや包丁を使って
切れ味を確かめる

火起こしもなかなか大変

たたら「科学の旅」の表紙

踊りの輪を広げよう　　鳥取県民踊指導者連盟

2019年11月4日

次代へ伝えよう、ふる里のおどり―。鳥取県民踊指導者連盟（宮﨑恵子会長）は鳥取市民会館で「民踊のつどい」を開き、およそ800人が全国の民謡、民舞を存分に楽しみました。

県民踊連盟は52年の活動歴があり、現在30団体215人が郷土鳥取県はじめ、全国の民踊を伝えています。今年のつどいには27団体170人が参加し、「ふるさとの民踊をたずねて」「つなごう郷土の踊り」「さあにぎやかに北から南へ」の3部に分かれて全21曲踊りました。

オープニングはベテラン指導者による「さんさ時雨」（宮城県）です。祝い唄にふさわしい留めそで姿で「ハア、メデタイ、メデタイ」でスタート。次いで火謡会（下田武司会長）の生歌生演奏で「花笠音頭」（山形県）、「安来節・女踊り」（島根県）が続きました。

戦後流行した「ドンパン節」の元唄になった「雫石のどどさい節」（岩手県）では、満員の客席は手拍子とおはやしの「ドンドンサイサイ」で大盛り上がり。仕草がこっけいな「吉四六音頭」（大分県）も会場の笑いを誘っていました。

2部は子どもたちの出番です。琴浦町の逢束盆踊り保存会はサイコロとばくの丁半踊りを披露し、岩美町の岩井ゆかむり保存会（小椋民子会長）と子ども教室のみなさんは、ひしゃくを手にお湯掛け踊りを紹介しました。国府町の宮ノ下小学校は地元に伝わる「因幡大津絵」を男傘で元気に舞いました。それぞれ客席から大きな声援をもらいました。

3部はソーラン節を皮切りに北から南へ、威勢の良い大漁節が続きました。フィナーレは貝殻節が流れる中、出演者全員が赤、青のはっぴ姿で登壇し、客席に感謝のお礼。華やかに、にぎやかに幕を閉じました。

宮﨑会長は「踊りの輪をさらに広げて、全国に伝わる民踊を次世代へつないでいきましょう。鳥取県の踊りも24曲、全国のみなさんが踊ってくれています」と話していました。

オープニングは「さんさ時雨」

宮﨑恵子会長

コミカルな大分県の「吉四六音頭」
（宝木一二三会、鹿野町民踊クラブ、喜志和会）

民踊のつどいは満席のにぎわい

宮ノ下小学校・因幡の傘踊りクラブの「因幡大津絵」

宇宙は不思議がいっぱい　　多賀利寛さん

2019年11月10日

鳥取市国府町の大茅地区公民館は文化祭「おおかやまつり」を開き、鳥取天文協会の多賀利寛さんを講師に招いて星取県・鳥取県のことや宇宙の話を聞きました。近くの殿ダム周辺が星空観察の好適地とあって、住民の関心は高く、熱心に学びました。

多賀さんは鳥取市生まれの68歳。小学生のころからホウキ星に興味を持ち、今日まで星空を観察してきました。23歳の時に鳥取天文研究会をつくり、さじアストロパークや国府町中央公民館の天文台建設に携わったほか、鳥取市子ども科学館や県立博物館の天文講師、星取県の推進役などで活躍中です。鳥取天文協会前会長。長年の天文活動の功績が認められ、東亜天文学会が火星と木星の間にある小惑星（18524番）に「tagatoshihiro」と名付けて顕彰しています。星に個人名がついているのは、極めて珍しいそうです。

多賀さんは「天空への招待」と題して、月や太陽や太陽系の話のほかに、星取県の試みを紹介しました。

それによると、直径換算で太陽は地球の109倍、月は地球の4分の1の大きさで、それぞれの公転で皆既日食・月食などの天体ショーが起こっていることを説明しました。また、日の出は太陽が頭を出したところ、月の出は月の半分が見えた時点を指すことも紹介しました。太陽の中心核は1600万度で燃えており、表面温度は6千度、黒点は4千度ほど。ただ、吹きだしているコロナはなぜか100万度もあるそうで、その理由はいまだに未解明といいます。また、黒点は氷河期が少ないものとされているものの、温暖化が懸念される近年は黒点が少ないそうで、これも原因不明といいます。

月はアメリカがアポロ計画で持ち帰った石によって、地球より早く誕生したものとわかりました。そのアポロ計画が中止になって40年余り。いまだにねつ造説が取りざたされるところです。多賀さんは「アポロ計画はソ連との冷戦のなかで進められたこと。相手がいなくなり、費用対効果の問題もあって中止された。中国との宇宙開発競争で再開されるかもしれないが、今度は火星移住計画が浮上しそう」と教えてくれました。多賀さんによると、火星には海がないものの、水の存在が確認されており、太陽の寿命説もあって、アメリカなどでは宇宙移住するなら火星という研究が進んでいるそうです。

月といえば、日本なら「ウサギのもちつき」という見え方ですが、アラビアでは「ライオン」、ヨーロッパでは「本を読むおばあさん」や「カニ」などに見えたりするそうです。星座名は中近東の羊飼いが命名したのが始まりで、ギリシャやローマなどに伝わって、広まったといいます。不思議がいっぱいの宇宙の話ですから、多賀さんの話は尽きることがありませんでした。

多賀利寛さん

「天空への招待」講演会
（おおかやまつり）

日本での満月の見え方

津波警報１ｍは即避難　　寺澤敬人さん

2019年11月14日

令和元年の境港楽の最終講座が境港市の市老人福祉センターであり、鳥取県済生会の常務理事・寺澤敬人さんが古代遺跡と津波について語り、「砂州に暮らす市民は津波警報1mなら、すぐに避難してほしい」と呼びかけました。

寺澤さんは元市役所職員。地元に伝わる「国引き神話」などの故事を地域おこしに活用する研究を進めてきました。その一つが島根半島の洞窟遺跡群です。紀元前5千年前の縄文時代から古墳時代にかけて、長く住居などに使われたという洞窟です。そんな洞窟が境水道をはさんで、境港市街地の対岸、松江市美保関町の4カ所にあります。

日本列島とユーラシア大陸がつながっていたころ、その縄文人たちの祖先は大陸からやってきました。3～4万年前の旧石器時代です。1969年（昭和44年）には境港市・外江海岸の工事現場で旧石器時代の人骨が見つかり、大きな話題になりました。残念ながら、その骨は行方不明となり、「幻の夜見ヶ浜人」と呼ばれていますが、いまなお骨の行方を探している人もいます。境水道周辺は古代ロマンの宝庫です。

さて、寺澤さんは東日本大震災で東北の縄文遺跡などが津波被害を免れたことをヒントに、日本海の津波の歴史と島根半島の洞窟遺跡群との関係を調べました。

それによると、日本海最大の津波は江戸時代末期の1833年にありました。庄内沖地震で、庄内や能登などでそれぞれ50人ほどの溺死者が出ています。島根半島では日本海側の七類で家が流されたりしていますが、洞窟遺跡群に被害はなく、対岸の境港では境水道そばにあった余子神社の境内が水につかった程度だったといいます。島根半島が防波堤になったということでしょう。

寺澤さんは「海辺の縄文遺跡が消滅することなく、今日まで続いている意味は大きい。歴史に学べば、日本海で大きな津波の心配はないということです」と説明しました。ただ、米子市や日吉津村も含めて、境港市は砂州の上にできた町です。ほとんどが海抜5m以下です。津波・洪水対策は一瞬たりとも気が抜けません。

境港市の場合、津波発生源を佐渡島沖、鳥取県沖のいずれかを想定して、ハザードマップを作成し、緊急避難場所・ビルなどを決めています。津波到達の予想時間は佐渡島沖で約3時間（津波高3．7m）、鳥取県沖で約40分（2．4m）です。

寺澤さんは死に至る津波高があることも紹介しました。「津波は水だけではなく、地上にある全てのものを巻き込みながらやってきます。体にいろんなものが突き刺さり、50cmといえども危険です。津波警報1mなら、何はともあれ、すぐに避難しなければなりません」と訴えていました。

寺澤敬人さん

サルガ鼻洞窟遺跡
（松江市美保関町森山）

島根半島の洞窟遺跡群、①サルガ鼻灯台遺跡②サルガ鼻遺跡③権現山遺跡④小浜遺跡
（島根大学の調査図から）

秋の扇ノ山をトレッキング　　いなば国府ガイドクラブ･いわみガイドクラブ

2019年11月16日

鳥取市の扇ノ山でブナ林を歩く会があり、いなば国府ガイドクラブ（沖廣俊代表）が秋深まる扇ノ山をガイドしました。25人が参加しました。

扇ノ山（1310m）は鳥取県と兵庫県の県境にあり、登山道がいろいろ整備されています。鳥取県側からは比較的緩やかな斜面で登りやすく、登山客には人気の登山コースです。今回は大石登山口から天神池までの約5．6kmの道のりを沖代表が案内しました。いわみガイドクラブの福原陽一郎さん（山陰海岸ジオパーク解説員）が扇ノ山の地形や植物について解説しました。

それによると、山頂付近には噴火口の跡があり、そこが雨滝や鳥取市内を流れる袋川の源流です。その源流に沿って見事な杉林やブナ林が広がっています。ブナの木は枝ぶりと同じくらい根を張り、間伐をしないと根が重なり合って育たないそうです。

また、ブナ林には木の幹が U 字に曲がっているものが多く見られます。雪の重みで下向きに曲がった幹が、重みに耐えて再び伸びていった名残だそうで、自然のなかで力強く生きるブナの木を目の当たりにして、参加者は一様に驚いていました。

この日は小雨が降り続くなかでのトレッキングでしたが、お昼は用意されたお弁当やチーズケーキ、コーヒーなどで疲れを癒やした後、農業用水として人工的に作られた天神池に向かいました。いつもは車では立ち寄れない場所とあって、参加者は興味津々。紅葉シーズンが終わっていたのは残念でしたが、期待にたがわず、水をたたえた美しい池と景観が参加者を出迎えてくれました。この池は、蒲生峠近くの棚田100選・横尾の棚田の水源となっているということです。

参加した男性は、「扇ノ山には何度か来たことがあるが、今まで見たことのない景色を見ることができて、参加してよかった」と満足そうでした。

いなば国府ガイドクラブでは、扇ノ山トレッキングのほか、令和のふるさと国府周辺をめぐるガイドツアーなどを随時行っています。

福原陽一郎さん

ブナ林の中を歩く参加者のみなさん

天神池で記念撮影

「令和」と鳥取　　福井伸一郎さん

2019年11月16日

伯耆国府があった倉吉市の社公民館で鳥取県肢体不自由児者父母の大会があり、山上憶良の会の福井伸一郎会長が記念講演しました。福井さんは家族思いだった憶良のことや鳥取県と新元号「令和」のゆかりを紹介し、「歌のくにとっとり、いや重け吉事」とことほぎました。およそ100人が聴講しました。

万葉歌人のひとり、山上憶良が伯耆国守でいたのは716年から4年間ほどです。憶良はその後、首皇子（聖武天皇）の教育係を経て、726年に筑前国守になります。上司の大宰府長官は大伴旅人（家持の父）。旅人らとともに歌づくりに励み、大宰府で「梅花の宴」などを楽しみました。その時の歌や序文が万葉集に載り、ここから新元号「令和」が採用されました。

福井さんによると、文学博士で日本学士院恩賜賞受賞の小島憲之さん（八頭郡郡家町出身）の調査研究で、「梅花の宴」の序文を作成したのは憶良だとわかり、万葉集の編集者で因幡国守だった家持も含めて、鳥取県と「令和」の深いつながりを改めて思い知ったといいます。

憶良といえば、家族や子どもを思う歌が有名です。

「瓜食（は）めば　子ども思ほゆ　栗食めば　まして偲（しぬ）はゆ　いづくより　来たりしものそ　まなかにもとなかりて　安眠（やすい）しなさぬ」（瓜を食べれば、子どものことが思われる。栗を食べれば、ましてしのばれる。どこから来たのか、その面影がちらついて安眠できない）。そのエキスを歌った反歌が

「銀（しろかね）も　金（くがね）も玉も　何せむに　優れる宝　子にしかめやも」

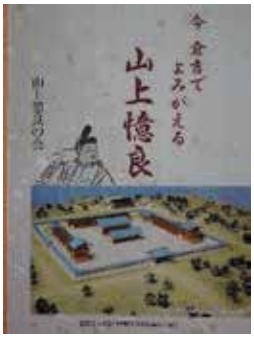
いつの世も子どもを思う心は尊いものです。

福井さんによると、この「子らを思う歌」は筑前国の視察中に歌われたものらしく、残念ながら憶良が伯耆国守時代の歌は残っていないそうです。「続日本紀」には713年に伯耆国から皇室に瓜が献上された記録が残っており、「憶良も食べているはずなのに」と福井さんは残念がります。

そこで福井さんたちは憶良の足跡を残そうと、平成22年に憶良の会をつくり、倉吉市教育委員会は平成24年から憶良短歌賞を始めました。宮中歌会始選者の永田和宏さんらを選者にして、「家族」をテーマに全国公募を続けており、毎年5千首を超える歌が集まっています。憶良賞は憶良の歌碑のそばで顕彰しています。その中のいくつか。

母の日にお店に行って買ってきた　コーヒー茶碗まだ箱の中（小学5年生）▽家帰り校歌練習していると父母が一緒に歌い始める（中学3年生）▽十六の年が過ぎ去りふと思う　母の寝顔を見たことがあるか（高校3年生）▽空っぽの弁当箱が置いてある　　子は忘れたか今朝の口論（北栄町女性）

福井伸一郎さん



山上憶良記念集
（令和元年１０月出版）

山上憶良の歌碑と顕彰碑
（倉吉市国府）

鳥取県肢体不自由児者父母の大会
（社公民館）

大凧・連凧、青空に舞う　　米子福生凧の会

2019年11月17日

米子福生大凧揚げ大会が米子市の日野川運動公園（河川敷）であり、ちびっ子からお年寄りまで300人余りが大凧、連凧揚げに挑戦しました。

米子福生凧の会（安井賢会長、35人）などでつくる実行委員会の主催。福生公民館の記念事業に大凧づくりを思い立ち、地域内の日野川河川敷という地の利を得て、平成20年から始めた大会です。今回で12回目になりました。

今年は企業凧が10個、福生東小学校や自治会など団体凧が12個、合わせて22個の大凧・連凧が勢ぞろいしました。

この日は快晴ながら、微風の悪コンディション。なかなか凧が揚がらず、関係者をやきもきさせましたが、風を待って連凧（100枚）が3本揚がるのを合図に、自治会などの2畳凧、凧の大きさを競う企業凧が続きました。

太鼓をたたいて景気づけるのは安井会長。「遊び心が凧揚げの原動力。風に向かって走らないと、凧は揚がりません。凧はバランスが大事。作るときから全て体験学習です」。米子福生凧の会は夏休みなどに学校に出かけて凧づくりを指導しているほか、企業や団体の凧づくり、凧揚げを支援しています。「ダラズをもっとつくって、大凧揚げが続くよう、がんばりたい」と安井会長は続けました。

メーンイベントは40畳の大凧揚げです。縦9m、横7．5m、重さ90kg。尾の長さは100m。風速15mないと揚がらないそうですが、この日は10m前後。およそ50人が力を合わせて、小走りに引っ張り揚げると、上空70mまで舞い上がり、マンタのようにゆらゆらと、どっしりと泳ぎ、会場から大きな拍手が起こりました。

大凧づくりを指導する星野章作さんによると、空っ風が吹く関東には100畳を超す大凧があるものの、風が舞う山陰は40畳でも揚げるのが難しいそうです。

適地が限られる大凧揚げ。夏の花火大会に匹敵する初冬のイベントとして続いてほしいものです。

「揚がれ、揚がれ、もっと揚がれ」。太鼓を打ち鳴らす安井会長

大空を舞う４０畳の大凧

スタンバイする畳１０畳の大凧

連凧揚がったゾ～

境港市社協の「こだま」に栄冠　　村上俊夫さん・古川重樹さん

2019年11月19日

鳥取県社会福祉協議会（藤井喜臣会長）は鳥取市の県立福祉人材研修センターで県内市町村社協の広報誌コンテストを開き、投票で境港市社協発行の「こだま」に県社協会長賞を贈りました。

コンテストは昨年度に続いて2回目です。より分かりやすい、より見やすい、より親しみやすい広報誌づくりを目指して県社協の音頭で始まったものです。今年は14社協が参加。それぞれの自信作や自慢作を審査（事前審査、投票）しました。

事前審査したのは県社協広報アドバイザーの村上俊夫さん（元日本海新聞論説委員長）、古川重樹さん（元日本海テレビサービス社長）、勝原公一さん（元日本海新聞西部本社代表）の3氏。地域密着力や人間力、企画構成力などを審査し、境港市社協の「こだま」、琴浦町社協の「社協だより」、伯耆町社協の「ふくしの宅配便」の3誌を選びました。

最終審査は3誌の編集スタッフが、それぞれの特徴や工夫しているところなどを発表し、県社協の理事、評議員など30人による投票で決めました。県社協会長賞は全世帯に向けて毎月発行している境港市社協の「こだま」、審査委員長賞は高齢者も読みやすい琴浦町社協の「社協だより」に決まりました。琴浦町社協は2年続けての入選です。

審査員を代表して村上さんが「いずれも社協の活動を一生懸命伝え、住民とともに住みよい地域づくりを進めている姿がよく伝わってきます。これからもわかりやすい表現で、社協が何をしているのか、伝えていきましょう」と講評しました。

審査員の村上俊夫さん

県社協広報コンテストで
入選したみなさん

県社協広報コンテストで入選した３誌
（左から琴浦町、境港市、伯耆町）

民謡と踊りで盛り上げます　　民謡弦声会

2019年11月19日

鳥取市のデイサービス事業所「ツクイ鳥取湖山」で11周年記念祭があり、民謡弦声会（川本英善会長）がゲスト出演しました。利用者など約30人が楽しみました。

民謡弦声会は昭和54年に川本会長が立ち上げ、鳥取に伝わる民謡を次世代に残していこうと、各地のイベントや福祉施設などで演奏しています。

この日は川本さんと原孝幸さんが、尺八や三味線を演奏し、貝がら節や賀露船曳唄、津軽三味線、東京音頭など、鳥取県をはじめ全国各地の民謡を11曲披露しました。

川本さんは20歳半ばで民謡の世界に入り、31歳から三味線を弾くようになりました。当時鳥取県内には津軽三味線の奏者が川本さん一人しかおらず、全国各地の舞台や稽古場に出入りしながら技を磨いたそうで、その腕前は「三味線の川本」と呼ばれるまでになったといいます。三味線に留まらず、トークも芸達者で、笑い声が絶えませんでした。

原さんは15年ほど前に民謡弦声会からの誘いをきっかけに民謡の世界に入り、三味線や尺八に取り組みました。以前から安来節保存会の師範として各地で活動しており、民謡と併せて安来節を披露することが恒例となっています。この日も踊りを披露し、利用者に大うけでした。

参加者はなつかしい民謡の響きに、自然と口ずさみながら、手拍子を合わせて楽しいひと時を過ごしました。川本さんは「みなさんの歌声や拍手で元気をもらいました。またお会いする日までお互い元気で過ごしましょう」と締めくくりました。

川本英善さん

原孝幸さん

ツクイ鳥取湖山の１１周年祭

お手玉遊びを楽しもう　　とっとりのお手玉の会

2019年11月20日

とっとりのお手玉の会（福田環会長）は倉吉市の倉吉福祉センターで「わらべ歌とお手玉遊びの会」を開き、元鳥取短期大学教授の酒井董美さんが講演しました。親子連れなど約40人が参加し、お手玉とわらべ歌について学びました。

とっとりのお手玉の会は「日本のお手玉の会」の地方支部第1号、25年前に発足しました。福田さんがテレビでお手玉大会のことを知り、保育園などで普及活動に乗り出したのが始まりです。お手玉の講習会を開いたり、学校や児童館などで出前講座を行い、手軽に遊べるお手玉の継承活動を続けています。

酒井さんは民俗学が専門で、山陰各地に伝わる民話やわらべ歌を研究しており、山陰のわらべ歌研究の第一人者です。「鳥取のわらべ歌とお手玉歌のこと」について講演しました。

それによると、鳥取には世界最古のわらべ歌集「古今童謡」（県立博物館蔵）が伝わっており、その古今童謡には江戸・元禄時代に鳥取藩士・野間義学によって収集された約50曲のわらべ歌が収められているそうです。こんな歌です。

「お月さまなんぼ　十三七つ
七織り着せて　京の町に出いたれば　笄（こうがい）落とす　鼻紙落とす
笄　紺屋の拾う　鼻紙　花屋が拾う
泣けどもくれず　笑うてもくれず
なんぼ程な殿じゃ　油壷からひきだいたような　小男　小男」

会場には今に伝わるわらべ歌が流れ、それに合わせて来場者みんなで歌いながら、お手玉遊びを楽しみました。福田さんは「ひと昔前はどの家庭でも、子どもたちの手遊びとして親しまれてきたが、最近ではあまり見かけなくなった。楽しみながら、お手玉遊びを後世にも伝えていきましょう」と呼びかけました。

酒井さんととっとりのお手玉の会のみなさん

福田環さん

酒井董美さん

参加者のみなさんと一緒にお手玉遊び

おひなさまを飾ろう　　倉吉まちゼミ・人形のたいら

2019年11月20日

シニアバンクに団体登録している倉吉商工会議所の「まちゼミ」が12月2日まで開かれています。それぞれのお店が〝先生〟になって、お客様に専門知識やお得情報を伝えるセミナーです（原則無料）。ファンづくりや商店街の活性化が狙いです。今年は27店が参加し、「学ぶ」「つくる」「きれい」「食べる」「健康」の5テーマで34講座が予定されています。そのいくつかを紹介しましょう。

× × × × ×

打吹山のふもとの野島病院の隣、倉吉市西町の人形のたいらで「ひな人形の選び方・楽しみ方」と「おひなさまの飾り方リメイク術」講座がありました。講師は平真さんと平和子さん。

近年は家族が減り、部屋が少なくなり、畳の部屋がなくなってきました。孫の誕生などで贈った7段飾りのおひなさまが、押し入れにしまわれたままという家庭が少なくありません。それでは「おひなさまがかわいそうだ」「おじいさん、おばあさんの元気に育てよという思いを無にしてしまう」というわけで、講座の運びになりました。

和子さんによると、大切なのは毎年、おひなさまを飾ることです。最近はリビングや玄関、テレビ台の横など家具の上に飾る人も増えてきました。7段飾りすべてを飾るのは大変なので、スチール段の代わりに一枚板を用意して横長の3段飾りにする方法、殿と姫だけを飾る親王飾りなど、手持ちのおひなさまの組み換えで、インテリアとしても楽しめる方法を伝えました。参加者からは「これなら簡単に飾れます」「次の桃の節句には久しぶりに出して飾ってみます」などの声が上がっていました。

人形のたいらでは、おひなさまの修理サービスも行っており、「おひなさまの顔に傷がついているが、直せるか」「小道具の一部が壊れていて飾れない」という相談にも乗っています。「一人でも多くの方にひな祭りを楽しんでいただくのが当店の務め」と、よそで買った人形も快く修理に応じているそうです。

「桃の節句が過ぎたら、おひなさまをしまわないと、お嫁さんに行けなくなるよ」とよく聞きますが、真さんは「季節の節目節目をきちんと送ることや整理整頓の大切さを説いた教えです」と解説。「お節句の行事は子供たちの成長に良い影響をもたらし、良い思い出を残します。日本の素晴らしい文化を守り、伝えていきたいものです」と話していました。

おひなさまも修理できます

７段飾りを親王飾りに組み替えて家具の上に

７段飾りを３段に飾り直して、お客さんと「ハイ、ポーズ」（右が平和子さん）

「人形のたいら」２号館と「おもちゃと駄菓子の店」たいら

羽毛布団は天日干し　　倉吉まちゼミ・すいみんはうすＫｉｔａｙａ

2019年11月22日

倉吉郵便局から市営ラグビー場へ向かうマロニエ通り、寝具店「すいみんはうすKitaya」で倉吉まちゼミがあり、「羽毛ふとんを長持ちさせる方法」について講座がありました。

Kitayaは有限会社きたや寝具店（本社・倉吉市瀬崎町）の経営。3代目社長の政次康仁社長と奥さんのみどりさんの2人で切り盛りしています。同市北谷の出身で、屋号の「きたや」はそこからきています。市内では最も古い寝具店だそうです。政次社長は県内に2人しかいない羽毛ふとん診断士のひとりです。

日本人は保温性が高くて軽い羽毛ふとんが大好きです。「羽毛ふとん大国」といわれています。ただ、原料の羽毛は100%輸入に頼っています。高額商品でありながら、ふとんの中まで確認できないので、メーカー表示を信じて購入しています。量販店や通販が売り上げを伸ばすなか、リフォームできない粗悪品も出回り、問題になっています。

そこで羽毛ふとん診断士が誕生し、羽毛ふとんの扱い方やリフォームなどを指導しています。政次社長によると、羽毛ふとんは乾燥を好み、月に1～2回、天日干ししてほしいといいます。ふとんの側生地の色あせを防ぐため、カバーをかけて干すことを勧めています。ふとんを取り込む際は、軽く手で払う程度でよく、ふとんたたきは厳禁です。羽毛ふとんは製造過程でダニや雑菌の処理ができており、中から発生することはなく、外からも高密度に織られた生地で入れなくなっているそうです。

また、羽毛ふとんの圧縮袋での保管は避けてほしいといいます。羽毛ふとんは1～2年使うと、厚みが30%ほど減るそうで、さらに圧縮袋で空気を抜きすぎると、寿命を縮めてしまいます。収納スペースがなければ、ふとんを丸めてひもで縛っておくだけでよいそうです。

羽毛ふとんの大敵はヒトの汗です。フワフワの毛が湿気でダンゴ状態になり、羽毛ふとんの特性を奪ってしまいます。使用しておよそ10年経つと、リフォームが必要になってきます。羽毛専用工場で45度のお湯で毛を洗い、150度で乾燥させると、買ったときの状態に戻るそうです。その費用は3万円程度といいます。

では、羽毛ふとんの良しあしは、何が決め手になるのでしょう。ダック（アヒル）よりグース（ガチョウ）といわれるように羽毛の品種や産地などによって違いますが、羽毛量も判断基準になるそうです。Kitayaさんの場合は、羽毛量1．2kg～1．4kgで5万円程度といいます。羽毛40gもあれば、結構かさばる量です。受講生はそれを体感し、賢くなりました。

Kitaya のまちゼミ

羽毛ふとん診断士・政次康仁さん

「これだけで羽毛４０ｇ。２００ｇも違うとこの５倍になります」と、みどり夫人

すいみんハウス Kitaya

節分には巻き寿司をつくろう　　倉吉まちゼミ･和食四季の花　打吹天女

2019年11月24日

倉吉市の打吹山のふもと、複合施設･打吹回廊の和食レストラン「打吹天女」で得する町のゼミナール「巻き寿司づくり教室」があり、お母さんたちは「節分にはオリジナルの恵方巻きをつくります」と張り切っていました。

講師は料理長の今井学さん。板前歴は和食一筋30年余り。有馬温泉で修業し、三朝温泉の老舗旅館で長く料理長を務めてきました。節分には毎年、千本の巻き寿司をつくってきたそうです。

巻き寿司は「福を巻き込む」が由来。切らずに食べるのは「縁を切らない」ためだそうで、関西を中心に節分に「太巻き（巻き寿司）」を食べる習わしがあるそうです。これをヒントに大手コンビニが「丸かぶり寿司恵方巻き」として売り出したところ、恵方巻きが一気に全国に広まったといいます。

なぜ節分に巻き寿司？　そもそも節分とは季節の分かれ目です。立春･立夏･立秋･立冬の「前日」、いわば「大みそか」に当たります。なかでも立春は厳しい季節を乗り越えた年の始まりとあって、節分といえばいつしか立春の前日を指すようになりました。節分には厄払いの「豆まき」などが各地で行われています。

「福を巻き込む」巻き寿司。縁起の良い方向（恵方）に向かって、食べ終わるまで何もしゃべらず、切らずに食べきると、夢がかない、1年を無病息災で過ごせるといわれています。ちなみに2020年の恵方は西南西だそうです。

さて、巻き寿司づくり教室です。22人のお母さんたちが参加しました。聞けば、ほとんどの方がつくらないそうで、運動会や遠足はおにぎり、誕生会などは手巻き寿司、節分は恵方巻きを買って食べているそうで、新鮮で貴重な料理教室になりました。

今井料理長は巻きすの使い方、海苔の選び方、シャリの作り方などから始めました。「酢合わせは、御飯が柔らかめだとしゃもじをタテに、硬めだとしゃもじを寝かせて切り、人肌くらいまで冷ましましょう」とアドバイス。かんぴょう、高野豆腐、シイタケ、卵、三つ葉、おぼろ―などの具の味付けの仕方を説明しました。

いよいよ巻き寿司づくりです。海苔の真ん中より少し上にシャリを置き、シャリを広げた時に、上と両サイドにシャリの土手をつくり、具も海苔の真ん中よりも少し上に並べ、手前の海苔を奥のシャリの高いところに合わせるようにくっつけ、柔らかく四角に巻いていくのがコツだそうです。時間がたつと、四角の巻き寿司はしまって、ほどよく丸くなるから不思議です。土手をつくるのは、シャリを立てる工夫だそうです。

市内から参加したお母さんは「巻き寿司をつくったのは初めて。節分には家族と一緒に恵方巻きをつくって、楽しみます」と喜んでいました。

今井学料理長

「土手をつくって巻きます」料理長の手さばきに視線が集まります

「巻き寿司、初めて作りました！良い出来栄えでしょ」

作ったら、試食

不幸な歴史を繰り返すな　　小山富見男さん

2019年11月24日

境港市のしおさい会館で「平和のための戦争展」があり、新鳥取県史編さん委員の小山富見男さんが「鳥取県の満蒙開拓の歴史」について講演しました。約60人が聴講しました。

境港9条の会など6団体でつくる実行委員会（田中文也委員長）の主催。戦争の記憶を語り伝え、受け継ごうと毎年開いており、今年で6回目になります。境港の戦争にまつわる歴史を学習しながら、その成果を戦争展で発表しているもので、今年は境小学校や渡小学校の児童が境町の大半を焼失した「玉栄丸」爆破事件の調査を報告し、注目されました。

小山さんは鳥取敬愛高校の教員時代、平成14年から6年もの歳月をかけて鳥取県民の満州開拓・移住の実態調査を行い、中国東北部各地を訪ねるとともに、元開拓者や引き揚げ者などから聞き取りして、平成23年に鳥取県史ブックレット「満蒙開拓と鳥取県」をまとめています。

それによると、鳥取県民の海外移住は明治時代から始まり、弓浜部からの北米移住が最初でした。やがて国策でブラジルや満州への移住が進められました。多くの日本人が、農業で一旗揚げようと夢を抱いて渡ったといいます。鳥取県民の満州移住は昭和9年ごろから本格化し、開拓団で1020人ほど、青少年の開拓義勇軍で2000人弱が組織化され、農業訓練を受けたのち、それぞれ土地を与えられ、満州各地に定着していったそうです。

なかでも鳥取県の開拓義勇軍の組織化は特筆もので、人口に対する送出割合は日本一だったそうです。教育現場の役割が大きかったといえます。ただ、大陸に渡った多くの若者は、敗戦に伴う日本への引き揚げもままならず、地元住民やソ連軍からの襲撃に遭い、戦死したり、捕虜になったり、戦争孤児になるなど、悲惨な運命をたどりました。鳥取県からの開拓団のうち、引き揚げが確認できたのは450人ほどだったといいます。

義勇軍参加を勧めた教師の一人は終戦後、こう証言しています。

「時代の流れとか、為政者の責任だとかいうのは卑怯である。全く私の不明の致すところであった。万死に値するものだと深く反省している」（県史ブックレット「満蒙開拓と鳥取県」から）。

無事に帰還した鳥取県の義勇軍の人たちは、満州で亡くなった同志の霊を慰め、後世に伝えようと、湯梨浜町の東郷湖畔に「拓魂之碑」を建てました。ここには260人の御霊がまつられています。湯梨浜町の大伝寺や鳥取市の長田神社にも同じく慰霊碑が建っています。

小山さんは「満州開拓は若者だけでなく、多くの人の犠牲を伴った戦争の歴史です。不幸な歴史を繰り返さないためにも、後世に語り継いでいきましょう」と訴えていました。

小山富見男さん

地元の児童による平和学習の展示

鍬の柄を担いで渡満前に米子市内を行進する第４次満蒙開拓青少年義勇軍（「満蒙開拓と鳥取県」より）

東郷湖畔にある「拓魂之碑」（湯梨浜町藤津）

中井太一郎を大河ドラマに！　　北村隆雄さん

2019年11月26日

鳥取市の市民大学は市文化センターで郷土の歴史講座を開き、倉吉市小鴨地区振興協議会の北村隆雄さん（太一車研究会委員長）から鳥取県の大河ドラマ候補「近代稲作の父・中井太一郎」の物語を聞き、郷土の偉人について認識を新たにしました。

中井太一郎（1830～1913年）は倉吉市小鴨に生まれ、米の増産に生涯を捧げた人です。苗を等間隔に植える「正条植え」を実現するため、「田植え定規」をつくって普及に乗り出しました。54歳の時です。これによって日本に美しい田園風景が広がり、田植え機やコンバインが活躍するステージができました。

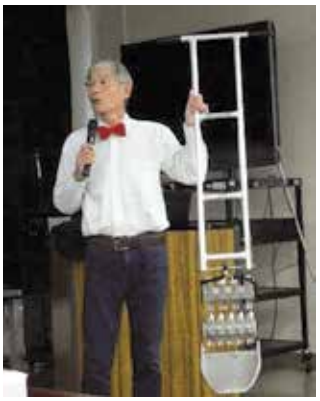
米づくりでつらいのは、田んぼの草取りです。夏の暑い盛り、泥の中をはい回る大変な作業です。明治25年、中井62歳の時。田んぼを耕しながら草取りもする中耕除草器「太一車」を開発（特許取得）し、米づくり農家を重労働から解放しました。いまでは農薬の普及などで役割を終えましたが、無農薬や減農薬の米づくりには欠かせず、米子市の農機具メーカーなどはアルミ製の軽量除草器を開発して生産販売を続けています。また、「太一車」は食糧増産に励むアフリカで人気で、JICA（国際協力機構）などが活用しています。

太一郎は米づくりの技法などをまとめた「大日本稲作要法」を出版し、その普及のため全国行脚して回りました。いまほど交通網が発達していない明治時代です。60～70歳代の時でした。このときの仲間・帝国農家結合が母体になって、いまのJAの前身組織・帝国一致協会が誕生しました。太一郎はJA生みの親のひとりです。

北村さんによると、太一郎7歳の時、天保の大飢饉（江戸時代）があり、たくさんの人が飢えで苦しみ死んでいくのを目の当たりにして食糧の増産・備蓄の必要性を痛感したといいます。この時の体験が太一郎を謙虚で挑戦心を忘れない、社会のためを貫く信念の人にしたといいます。

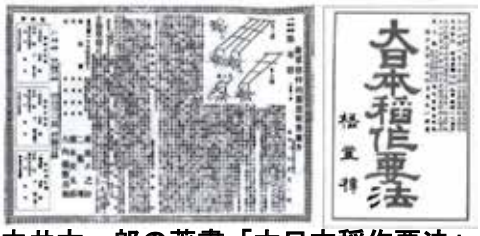
倉吉市小鴨地区では、地域の誇り・太一郎を顕彰する冊子、寸劇、紙芝居、講談、歌、創作餅などをつくり、地域挙げて、折に触れて上演しています。

「鳥取県を舞台に！歴史大河ドラマを推進する会」は、岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三とその妻美喜の「三愛のクニへ」▽童謡「赤とんぼ」の母・碧川かた物語▽比叡山や大山を再興した名僧豪円―に次いで、4本目の大河ドラマ候補に近代稲作の父・中井太一郎を県民投票で選んでいます。



北村隆雄さんと
現代の「太一車」

現代の「太一車」をチェックする
受講者のみなさん



中井太一郎の著書「大日本稲作要法」

中井太一郎の
パンフレット

どうする？　どうなる？　湖山池　　平家裕一さん

2019年11月27日

日本最大の湖が琵琶湖なら、日本一広い池は鳥取市の湖山池―。鳥取県が誇る湖山池の近未来を考えようと、湖山西公民館は県や市の環境担当者を招いてスーパーカレッジを開き、市民ができることを話し合いました。

企画したのは公民館長の平家裕一さん。スーパーカレッジは開かれた生涯学習の場です。この日は鳥取大学生なども加わり、20人が参加しました。

湖山池は周囲18㎞、面積約7㎢、平均水深2．8m。池と名のつくもののなかでは日本一の広さ、東京ドーム（4．7ha）の148倍です。ちなみに琵琶湖は約670㎢、中海は約85㎢、宍道湖は約79㎢です。

湖山池はかつて日本海の入り海でした。400年ほど前に砂丘にふさがれてできたそうです。池の周辺からは縄文・弥生・古墳時代の遺跡が多く見つかっています。古くから多くの人が暮らし、中世は池の東・天神山城を拠点に因幡の中心地でした。「湖山長者」伝説や全国でも例がない「石がま漁」などが伝えられています。

ただ、湖山池も富栄養化で汚濁が進みました。アオコが発生し、ヒシが大量に繁茂して舟の航路をふさぐなど環境悪化が問題化しました。平成22年の周辺住民の意識調査で、「湖山池は水が汚い」がトップになりました。そこで県や市は「恵み豊かで、親しみのもてる湖山池」にするため、平成24年から海水導入に踏み切りました。目標は東郷湖並みの汽水化です。いまも塩分濃度の調整など試行錯誤が続いています。

スーパーカレッジで県水環境保全課は住民による湖山池の五感チェックを提案しました。毎月、家族や友達で湖畔に出かけて、①水の透明度や景観をながめ②鳥の鳴き声などを聞き③潮の香りなどをかぎ④湖山池の魚介類を食べ⑤池に手や足をつけて―採点するというものです。すでに中海や東郷湖では取り組まれており、住民の環境意識が高まっているそうです。

市生活環境課はこのほど実施した湖山池周辺住民の意識調査を報告しました。それによると、湖山池は「美しい景観・景色」「憩いの場」という回答が最も多かったそうです。この10年で市民の湖山池のイメージが変わりました。アウトドアのイベントやジオパークなどの教育・観光への活用に期待が高まっているといいます。また、長く運休していた湖山池周遊の遊覧船も、令和2年春にはナチョラルガーデンに発着場を移して再開する予定だそうです。

参加者からは湖山池を周回する歩道、湖山池に立ち寄る二次交通が未整備なことや鳥取観光が相変わらず砂丘に偏っていることなどを指摘するとともに、湖山池美化の市民運動の必要性も挙がっていました。また、5百円玉大の湖山池シジミの普及、PRの声もありました。市民の出番です。

平家裕一さん

再開間近の湖山池遊覧船
（鳥取市提供）

湖山池のシジミは５００円玉の大きさ

湖山池・福井公園上空から
（鳥取県提供）

因幡の豪族・伊福部氏の末裔　　吉田幹男さん

2019年11月30日

鳥取県経済同友会（米原正明代表幹事）は鳥取市の県民ふれあい会館で「緊急地震速報と伊福部昭の音楽」をテーマにフォーラムを開き、因幡の古代豪族・伊福部氏の末裔たちが、あの「ジャジャジャジャン」というゴジラ映画やNHKの「ジャランジャラン」の緊急地震速報をつくったことなどを紹介しました。

フォーラムは同友会の地域学委員会（吉田幹男委員長）が企画したもので、「地域をよくするには、まず地域をよく知ることから」と、因幡万葉歴史館創立25年に合わせて古代因幡を支配した豪族・伊福部氏にスポットを当てました。

系図によると、伊福部氏は大己貴命（大国主命）がルーツで、第20代が伊福部臣の始祖になり、第26代が郡の長官に任じられ、第36代が因幡一ノ宮・宇倍神社の神主になったといいます。明治初めまで宇倍神社を管理し、北海道に移住しました。現在68代目です。

一説によると、伊福部一族は金属精錬などができる渡来人だったといいます。7～8世紀が絶頂期で、銅鉱などを朝廷に献上したり、娘の徳足比売が文武天皇に采女として仕えたりしています。彩色壁画で知られる梶山古墳は一族の陵墓という見方があります。大伴家持が因幡国守になったのは8世紀半ば。万葉集編集のかたわら、国造家・伊福部氏と因幡国の経営をしていたのでしょう。

67代目の伊福部昭さん（1914～2006年）は、日本を代表する作曲家です。独学で作曲家になり、東京音楽大学の学長を務めました。「優れた音楽は民族の特殊性を通過して初めて共通の人間性に到達する」が信条で、「シンフォニアタプカーラ（アイヌの立ち踊り）」や「ゴジラ音楽」などの代表曲をつくりました。とくに映画音楽は「日本誕生」「ヒロシマ」「ビルマの竪琴」など約300本残しました。

伊福部昭さんは因幡万葉歴史館竣工（1994年10月）に際し、家持ゆかりの和歌5首に曲をつけ、「因幡万葉の歌」として残しています。一族発祥の地への感謝でしょう。フォーラムでは岩美町の音楽デュオ「ポンカン」が美しい歌声とオカリナで演奏し、奥深い万葉音楽の世界を広げました。

フォーラムには現当主、68代目の伊福部達さん（工学博士、東京大学名誉教授）が招かれ、NHKの緊急地震速報がなぜ耳に残るかを解説しました。それによると、叔父・昭さんの「シンフォニアタプカーラ」第3楽章をヒントに、「急げ、でもあわてるな」というメッセージを込めて作ったといいます。NHKの調べで、このチャイムを聞いたイヌやネコが素早く家から逃げ出したことも分かったそうです。

「人間だけでなく、動物の脳の深部に訴える普遍的な音があることに気づいた」伊福部達さんは、潜在能力を生かす高齢社会システムづくりに挑戦しています。

吉田幹男さん

「因幡万葉の歌」を披露する
ポンカンの２人

因幡万葉歴史館の開館を祝う
伊福部昭さん（右）

伊福部歴代当主の墓地（宇倍神社）

面影山の北、大杭村にも一宮国造屋敷があった（江戸寛文時代の古地図から、国交省鳥取事務所所蔵）

情熱のバラが咲きました　　森田尾山さん･安部朱美さん･入江叔元さん･米子バラ会ほか

2019年12月1日

米子市の中心市街地再生に向けて、米子髙島屋の東館がまんがミュージアムやサウナなどを備えた複合施設「GOOD BLESS GARDEN」に生まれ変わりました。これを記念して米子髙島屋はシンボルフラワーのバラをテーマにしたイベントを開き、大勢の人でにぎわいました。

イベントを企画したのは書家の森田尾山さん（伯耆書院主宰）。県西部の芸術家でつくる「薔薇ばらの会」（木村和範会長）やバラの愛好者が集まる「米子バラ会」（小林徳成会長）はじめ、とっとり花回廊や米子花商協同組合、米子花卉生産者協議会などバラに縁のある8団体が集まり、「薔薇を語る会」を立ち上げました。

もともと米子髙島屋は、本館の美術サロンで20年前から「薔薇ばらの会」による企画展を開いてきましたが、文化催事が生産現場をもっと刺激するようにという思いで、「薔薇を語る会」が組織化されました。〝スーパー農商工連携〟といったところです。森田さんによると、バラは生産に手間がかかるうえに、消費も減っており、生産者が激減しているそうです。

イベントの柱はバラにちなんだ合同美術展とワークショップです。創作人形の安部朱美さん、日本画の入江淑元さん、ボルタニアアートのいわたさいこさん、洋画の木村和範さん、書の森田尾山さんらが出品したほか、とっとり花回廊や米子バラ会なども写真などを展示しました。ワークショップは日替わりで立体ちぎり絵、グラスアートづくりなどの体験があり、石原数也さんはかんなで削った木片でコースターづくりを指導しました。

美術展会場はバラがあふれ、さまざまな形で表現されたバラの展示に、買い物客は足をとめて見入っていました。森田さんは「バラの花言葉は“情熱”。これからも情熱をもってバラの魅力を伝えていきたい」と熱く語っていました。

森田尾山さんと森田さん作「La vie en rose」

薔薇ばら会の作品展示

米子バラ会の作品展示

竹内美佐子さんの指導でグラスアートづくりに取り組む参加者のみなさん

古典芸能を守ろう　　鳥取県能楽連合会

2019年12月1日

鳥取県能楽連合会（近藤光会長）は鳥取市の市文化ホールで観世・喜多・宝生流合同の能楽祭を開き、日ごろの精進の成果を発表するとともに、ワークショップなどで古典芸能をPRしました。

能楽は今から650年ほど前の室町時代、観阿弥、世阿弥の親子が形づくったとされ、歌曲や舞いや物語性を備えた古典芸能です。5流派があり、県内では観世・喜多・宝生の3流派が盛んです。かつて愛好者は合わせて300人を超えていたそうですが、今では高齢化などで90人になってしまったといいます。

能楽が盛り上がったのは江戸時代です。幕府が能楽を式楽（儀式用音楽）に採用すると、各藩が競って能役者などを抱え、武士のたしなみとして全国に広まっていったといいます。鳥取の初演は東照宮の神事能で、鳥取藩は喜多流を盛んにしました。とくに3代藩主・吉泰は能楽好きで、将軍家の3倍、800面もの能面を集めたというエピソードが伝わっています。

さて、能楽祭です。能面も能装束も資金がかかるので、素顔に羽織はかま、着物姿で進行しました。今年はそれぞれの流派の発表のほか、人気演目の「羽衣」を宝生流が謡、喜多流と観世流が舞いばやしでリレー上演しました。派手さはないものの、3派の結束を示しました。

数年前から人気を集めているのは、「チョットだけ能（の）ワークショップ」です。①謡をうたってみよう②仕舞をまってみよう③鼓をうってみよう④面をつけてみよう―3流派が分担して来場者に体験してもらうコーナーです。能楽を盛んにするには、まず県民に知ってもらうことからというわけです。今年はステージに上がる観客が少なかったものの、すり足での歩き方や面をつけた時の視野などの解説を聞き、観客は能楽の奥深さに驚いていました。

近藤会長は「小学6年生になると、歴史の時間で能楽が登場しますが、子どもたちに生の能楽を教えたいものです。いつでも出前授業をさせていただきます。気軽に声をかけてください」と話していました。

「羽衣」のリレー能

舞い方指導をする
喜多流の若川睦子さん

「松虫」を連吟する観世流のみなさん

「面をつけるとこれだけしか見えません」
と近藤会長

鼓の体験
（左が観世流・小泉裕子さん）

日本刀始祖のふるさとは？　　伯耆国たたら顕彰会ほか

2019年12月8日

刀に反りを入れ、日本刀の始まりをつくったといわれる伯耆国（鳥取県中・西部）の刀鍛冶集団・伯耆（大原）安綱とその一門はどこにいたのか―。そのゆかりの地を2回にわたってめぐるバスツアーが始まりました。初回のこの日は歴史ファンや刀剣女子など20人が参加して米子市と奥日野をめぐりました。最終回の15日は倉吉市や三朝町の県中部をめぐります。

日本の刀剣は古くからあり、両刃で直刀でした。それに独特の反りが入り、片刃になったのは平安時代末からといいます。丹波大江山の酒呑童子を退治した「童子切」が有名です。伯耆安綱作です。源氏の宝剣になり、国宝（東京国立博物館蔵）になっています。鬼を斬った「鬼切丸」も安綱の代表作で重要文化財になっています（京都・北野天満宮蔵）。一門がつくった太刀は武家社会で尊ばれ、神にささげられました。

安綱やその一門はどのような集団だったのでしょう。関係文献がほとんどなく、謎に包まれています。その伝承地が米子市日下、伯耆町八郷、日野町上菅、日南町下阿毘縁、倉吉市大原などにあり、伯耆国たたら顕彰会（田貝英雄会長）の企画で現地を訪ねることにしました。

米子市日下では石原慎吾さん（米子市社会福祉協議会事務局長）が安綱の息子とされる大原実森（真守）子孫の供養塔などを案内しました。その碑文や家系図のほかに、敷地内の発掘調査で鍛冶跡などが確認され、米子市は「伝承　日本刀発祥の地」という掲示板を設けたといいます。伯耆町八郷では中尾慶治郎さん（祐生出会いの館副館長）が巨石でつくった「大原古鍛冶発祥の地碑」を紹介し、「鍛冶集団を地域の誇りにしてきた証です」と解説していました。

日野町上菅では小谷博徳さん（日野町議会議長）が出迎え、JR上菅駅裏の戦国時代の山城・菅ノ城について語りました。それによると、城主の息子が安綱に作刀の極意を学ぶとともに、安綱の娘を嫁にして帰ってきます。いらい城下は刀づくりで繁盛し、仁徳のある奥方も花ノ御前と慕われました。城跡の近くには、夫妻をまつる大原神社が設けられ、没後千年余を経た今日も7月17日にはお祭りが続いているそうです。村を豊かにした刀づくり。村人たちは、いつまでも感謝の心を忘れていません。

良質な砂鉄に恵まれた日南町には、大原の地名が何カ所もあります。そのうち、ツアーは阿毘縁を訪ねました。段々の田んぼが広がる深埏地区には「百年ちょっと前、目の前はこんな風景だった！」という写真入りの大きな看板がありました。明治～大正時代の砂鉄採りの様子が説明されています。真砂土（風化花こう岩）の白い山を人力で崩し、かんな流しをしている写真です。伯耆国たたら顕彰会の杉原幹雄さんが「日南町にはかんな流しによって広大な農地ができました」と解説するとともに、安綱一門の屋敷跡伝承地やその山伏塚へ案内しました。

杉原幹雄さん（日南町阿毘縁）

伯耆安綱鍛刀伝承地碑が建つ伯耆町大原

山伏塚

伯耆安綱ゆかりの地めぐりのみなさん（米子市日下で）

大原刀匠夫妻をまつる神社（JR 上菅駅の裏山）

鳥取はひとつ　　稲垣晴雲さん

2019年12月10日

鳥取市の市民大学は市文化センターで郷土の歴史講座を開き、鳥取書道連盟副会長の稲垣晴雲さんが「日本の書展と郷土の書家たち」について話し、鳥取の書家たちは結束して若人の育成に励んでいることを伝えました。

稲垣さんは八頭高―鳥取大を経て、主に高校で書道を教えてきました。小学生のころから絵を描くのが好きで、書道は八頭高時代、バレーボール監督でもあった矢部祥園さんに鍛えられたそうです。

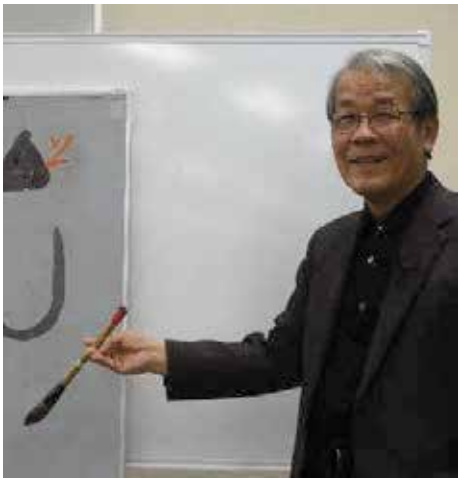
講座は漢字の成り立ち、文字の変遷から始まりました。漢字は今から3千年余り前、中国大陸でつくられたといわれます。亀の甲や獣骨に彫られた文字で、巫女が皇帝のために読み解いたものです。木簡、竹簡の登場で文字はヒトのものになりました。文字は秦の時代に統一されます。意思伝達の道具であると同時に、ながめることができるのが文字です。読み方や意味が分かれば、文字が装飾されていきました。「アルファベットにはない東洋人の発想の豊かさだ」と稲垣さんは言います。

秦の始皇帝が定めた文字は篆書（てんしょ）と呼ばれました。字体は長方形に左右対称、筆画は丸みを帯びています。やがて篆書を速く書く隷書がはやります。丸みを帯びた線は真っすぐになり、点やはらいなどの書き方が生まれました。今でも金融機関の看板や新聞の題字などに広く使われています。

中国の戦国時代、4～5世紀には楷書が登場します。一点一画がきちんとしている標準的な字体です。楷書を早書きしたのが行書です。王義之の「蘭亭序」が有名です。この楷書主流の書道に反発したのが、唐の顔真卿です。「形だけ追求すると書道にならない、自分に素直に」と主張し、書道に芸術性をもたらしたといいます。ちなみに、隷書を続け書きしたのが草書です。読みにくく実用性に欠けますが、芸術性が高いので、書の作品に多く見られます。日本では平安時代、一字一音を活用して楷書からカタカナ、草書からひらがなを作り出しました。

稲垣さんは書道展の歴史も紹介しました。それによると、日展に書が加わったのは昭和23年からで、それまでは書道は芸術ではないと締め出されていたそうです。県内でも同様で、昭和24年から県展が始まったものの、書が加わったのは2年後だったといいます。

これを反映して昭和初期の県内書家の作品はほとんどなくなっているといいます。県東部でいえば、桶川玲峰（丹比）、横川三隅（用瀬）、都宮彬聖（若桜）、大渕碧晴（日下部）、蔵光渓山（青谷）、谷口雲崖（河原）、矢部祥園（用呂）、金沢朴堂・田中大伯（いずれも大丸）―などの作品です。心当たりの方は稲垣さんへご連絡ください。



稲垣晴雲さん

王義之の「蘭亭序」の一部

顔真卿の
「建中告身帖」

とっとりの妖怪　　濵田英一さん

2019年12月14日

鳥取市の気高町総合支所で気高町歴史講座があり、鳥取県地域社会研究会顧問の濵田英一さんが、「鳥取県の妖怪と日本・世界の妖怪」について講演しました。約30人が聴講しました。

歴史講座は鳥取県や旧気高郡の歴史をテーマに4回あり、今回はその初回です。今後は「亀井茲矩の事績をたどる」、「探訪・地名の謎」、米子城・水木しげるロードの探訪を予定しています。

濵田さんは著書に「ふるさと鳥取の横顔」「ふるさと鳥取を読む」などがあり、ふるさと博士として知られ、鳥取市の高齢者大学「尚徳大学」などで講義を続けています。

この日は、世界各地の妖怪を紹介しました。それによると、世界には約1万、日本には740（全国妖怪事典）、鳥取県には50くらいの妖怪がいるそうです。世界の妖怪といえば、ドラキュラ（イギリス）や狼男（スペイン）などが有名ですが、ヨーロッパには働き者のノームなど、人間に喜ばれる小人の妖怪も多いそうです。

日本ではゲゲゲの鬼太郎や妖怪ウォッチなどで妖怪ブームが起こり、連れて口裂け女など古くからの妖怪も知られるようになりました。今でも時代を反映した妖怪が誕生しているそうで、高速道路で四つんばいになって車を追いかけてくる「ターボばあさん」も現れています。高速道路を運転するときは要注意です。

鳥取県に目を向けると、例えば大山には烏天狗がいます。天狗は全国的にもよく知られていますが、大天狗、烏天狗、木の葉天狗など鼻の高さや体の大きさによって分類されています。烏天狗は大きな翼をつけているのが特徴で、人間を連れ去るなどの伝説が残っているようです。

琴浦町別宮の転法輪寺には化け猫オフジの話が伝わっています。この寺で飼われている猫で、夜な夜な和尚の手ぬぐいをかぶって踊っていたそうですが、追い出されてしまいます。いつの日か鳥取の財産家の女性がなくなり、いつまでも天気が悪くて葬式もできないので、頼まれて和尚が出かけて拝むと、いい天気になり、お礼もたくさんもらったそうです。オフジの恩返しといったところです。こんな妖怪もいます。

濵田さんは「妖怪の歴史をみると、人間の歴史を反映していることが分かります。妖怪をみなさんの身近な存在として、もっと親しんでほしい」と呼びかけていました。

濵田英一さん

気高町歴史講座

大山カラス天狗像
（大山町仁王堂公園）

「大山さん」ありがとう　　岸本俊彦さん･遠藤甫人さん･佐藤夫雨子さん･由木みのるさん･中村襄介さん

2019年12月14日

大山俳句大賞の表彰式が米子市の日本海新聞西部本社であり、およそ千点の応募のなかから一般の部で野間田芳恵さん（琴浦町）、中学生以下の部で住山莉子さん（倉吉市）がそれぞれ大賞を受賞しました。大山俳句大賞は大山開山1300年を記念して昨年生まれたもので、日本海新聞や鳥取県社会福祉協議会などが共催しています。

今年は鳥取県をはじめ、全国31都府県から一般の部に750句、中学生以下の部に242句、合わせて992句が寄せられました。うち県内からは548句ありました。

審査はシニアバンクに登録する鳥取県俳句協会（岸本俊彦会長）の遠藤甫人副会長を選考委員長に佐藤夫雨子顧問、由木みのる顧問、中村襄介理事の4人で行いました。

大賞に選ばれたのは、一般の部で野間田さんの「霊山に響く法螺（ほら）貝山開く」、中学生以下の部は住山さん（上北条小学校1年）の「大山はすずしかったよ　うしもみた」です。野間田さんは山伏の法螺貝で始まる夏山開きの様子を詠い、住山さんは暑い日に大山に遊んだ思い出を素直に表現し、それぞれ高い評価を集めました。住山さんは準大賞も得て、ダブル受賞でした。

表彰式で選考委員長の遠藤さんは「俳句は料理と同じです。材料が大切です。その上に工夫も必要です。いずれの大賞句も臨場感があり、見事な構成でした。大山俳句2年目は応募句数も大幅に増え、レベルの高さもうかがえました。『大山さん』のおかげをいただいて、大山俳句がさらに発展するよう精進しましょう」と講評しました。

91歳の野間田さんは俳句歴20年。「これまで県中部の俳句大会で会長賞をもらったことはあるけれど、全国大会で大賞をいただいたのは初めて、うれしいです。大山に何度も通ってつくったのがよかったです」と受賞を喜んでいました。

準大賞は次のみなさんです。

【一般の部】「帰省子へ晴上りたる伯耆富士」（植垣規雄さん、鳥取市）▽「大山に雑魚寝の記憶登山宿」（田村鈴代さん、米子市）

【中学生以下の部】「大山できゃんぷしたいな　とうさんと」（住山莉子さん、倉吉市）▽「大山寺落ち着く空気小鳥来る」（山越歩実さん、埼玉県）

大山俳句大賞の受賞者のみなさんと大会関係者（前列左端が野間田さん、右端が住山さん）

「大賞受賞うれしいな」住山佳子さんと大山開山１３００年祭実行委員長の松村順史さん

選考委員長の遠藤甫人さん

「大山俳句大賞」選考会の様子

「大山さん」のおかげです　　鷲見寛幸さん

2019年12月14日

大山開山1300年祭にちなんで、3年間にわたって続いた大山講座（実行委員会・新日本海新聞社主催、鳥取県社会福祉協議会共催）が終わりました。その最終講座が米子市の新日本海新聞社西部本社であり、大山町教育長の鷲見寛幸さんが「大山の自然と恵み」、境港歴史研究会代表の根平雄一郎さんが「ナナカマドの実は赤かった～わたしの大山史考」について話しました。

大山講座は1300年祭〝プレ年〟の2017年1月から始まりました。語り部づくりを目的に大山の自然・歴史・文化・遊び・食などをテーマに毎年5講座、計15回開かれました。最終講座は次の1400年祭へ向けて、おさらいのために開かれたものです。それぞれ100人余りが聴講しました。

× × × ×

鷲見さんは独立峰・大山（1，729m）が見る位置によって姿かたちを変えることから説きました。西から見れば広々とすそ野を広げる「伯耆富士」や「出雲富士」になり、北や南はごつごつとした岩肌がそそり立ちます。北は日本海からの季節風、南は屋根をも飛ばす春一番が、氷水が染み込んだもろい安山岩をボロボロにします。山頂・剣ヶ峰までの縦走路も歩く幅がなくなり、通行禁止になってしまいました。もひとり神事が行われる第2峰・弥山（1709m）が頂上代わりになっています。

鷲見さんによると、日の出の時間は影大山が楽しめるといいます。夏は山頂のシルエットが100kmも離れた三瓶山まで届き、春や秋は米子市街地が影で覆われるそうです。そのシーンが志賀直哉の「暗夜行路」にも登場します。中国一の独立峰のおかげか、山陰は台風の直撃からしばしば守られてきた、そんな気がします。

大山は100万年ほど前から噴火を繰り返してきました。最後の噴火は約1万7千年前。約5万年前の大噴火の時は、火山灰が新潟や静岡にも降り積もりました。大山山麓では地味豊かなクロボク（黒土）農業が行われています。

大山は西日本最大のブナ林が自慢です。大山寺付近から6合目にかけて広がっています。水を含んでいるため、家具や材木には不向きですが、周囲2mのブナで年間約8tの保水力があるそうです。500mlのペットボトルなら1万6千本。そんなブナが何千本、何万本もあり、山麓の農地や米子・境港市民の水になっています。ミネラルも多く、海の生き物を育んでいます。大山町では素潜り漁が盛んです。

大山は神宿る山として、長く入山を遠ざけてきました。生物や昆虫や野鳥の宝庫で、ダイセンの名を冠する珍しい動植物も多くいます。山頂近くには日本最大規模のキャラボク群落があり、1936年に日本海側で最初の国立公園になりました。その山頂などで近年、ヒメボタルが確認されました。フラッシュのような黄色い光を発します。7月20日ごろが見頃といいます。鷲見さんは謎の多いヒメボタルの生態を追っています。

鷲見寛幸さん

大山北壁

南大山

伯耆富士（西側）

影大山

「大山さん」は永遠です　　根平雄一郎さん

2019年12月14日

根平雄一郎さんの演題は「ナナカマドの実は赤かった」です。大山講座初年度（2017年2月）と同じタイトルですが、その後の大山の歴史研究の成果が加わり、内容はボリュームアップしました。

根平さんの研究スタイルは現地主義です。歴史や伝承の現場に出向き、確かめ、考えることから始めます。大山研究のきっかけになったのが、「大山寺縁起絵巻」の牛の代かき絵図。百姓の求めに応じて、お地蔵さんが同時に牛引き、田楽、苗運びをこなしているもので、衆人を助ける地蔵信仰をよく物語っています。室町時代の作で、中学の歴史教科書に載っています。大学入試のセンター試験問題にもなりました。

この牛の代かき絵図の舞台は、下野国（栃木県）の岩船山高勝寺です。根平さんが訪ねたところ、高勝寺が関東の地蔵信仰のメッカになっており、「伝承は無視できない」と悟ったといいます。この後の「大山寺縁起絵巻」には、コメが減らないナナカマドの物語が続いていますが、大山寺の鐘つき堂のそばにはナナカマドの碑が建てられています。まさに絵巻通り、「ナナカマドの実は赤かった」です。

根平さんの高勝寺訪問は、琴浦町の生身地蔵の霊場・岩船地蔵の縁起解明につながります。大山寺の第4世座主・胤海（いんかい）が江戸時代、日光に出かけた際、高勝寺に立ち寄り、下野国を救済したのにちなむ話という見立てです。

話は変わって、大山で地蔵信仰を始めたのは金蓮上人です。根平さんは、その末裔探しも行い、玉造温泉の老舗旅館を突き止めました。その一族のひとりがタレントの長谷川博己さんだそうです。新年から始まるNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公・明智光秀役です。根平さんは「大山さんのおかげかも」と我がことのように喜んでいます。

大山の地蔵信仰は衆人を救うと同時に、牛馬の守り神です。阿弥陀堂のそばに墓がある基好上人が提唱しました。大山寺には近郷近在から牛馬詣が始まり、博労座で牛馬市が始まりました。明治時代には日本最大の牛馬市に発展しました。この物語が日本遺産に認定されました。鳥取県の和牛改良のルーツは、大山さんといえそうです。

大山信仰は山陽方面で活発です。根平さんは尾道市、笠岡市、瀬戸内市などを回り、死者の霊魂が集まる大山をまつる姿を確認してきました。遠隔地だからこそ盛んといいます。恐れ多いということで、大山を〝大仙〟さんと呼んでいるそうです。庄原市では牛馬や家内安全を願って「大山供養田植」（国指定重要無形民俗文化財）がにぎやかに続いています。長く、深い歴史に感謝が絶えません。

根平さんは「大山開山1300年祭は終わったが、大山研究を続け、その成果を後に続く人や若い人に伝え残していきます」と講座を締めくくりました。

根平雄一郎さん

琴浦町の岩船地蔵

基好上人の墓

牛馬市（昭和６年）
鳥取県のホームページから

塩原の大山供養田植

冬の夜にマンドリン　　アンサンブル済美

2019年12月14日

鳥取市の神戸地区公民館（中村晴通館長）で「かんど冬の祭典」があり、八頭町のアンサンブル済美（中嶋標代表）がゲスト出演し、イベントを盛り上げました。

神戸公民館は毎年、この時期にイルミネーションで装飾し、それに合わせて冬の祭典を開いています。子どもたちによるダンスやお母さんらの豚汁サービス、お楽しみ抽選会などがあり、子どもから大人まで、およそ150人で会場はいっぱいになりました。

ゲスト出演したアンサンブル済美は、マンドリンやギターなど弦楽器のグループです。福祉施設や音楽イベントなどで、童謡・唱歌、ポピュラーソングなど幅広く、演奏しています。

この夜は「きよしこの夜」「ジングルベル」などのクリスマスソングをはじめ、「川の流れのように」「君といつまでも」などの歌謡曲も織り交ぜながら、計6曲を披露しました。アンコール演奏では参加者が飛び入りで歌を披露するなど、大いに盛り上がりました。

中嶋代表は「マンドリン演奏は聞く機会が少ないと思いますが、私たちの演奏で少しでも気分良くなっていただければ、うれしいです」話していました。

アンサンブル済美のみなさん

盛り上がるかんど冬の祭典

参加者が飛び入りで歌声を披露！
盛り上がりました

子どもたちによるダンス「パプリカ」

安綱ゆかりの地・県中部編　　伯耆国たたら顕彰会ほか

2019年12月15日

日本刀の始祖とされる伯耆安綱とその一門のゆかりの地を訪ねるバスツアーの県中部編があり、農機具の稲扱き千歯や太一車などを生み出した県中部の鉄文化を学びました。20人が参加しました。

倉吉市立図書館で山脇幸人館長から三朝地域のたたら製鉄の歴史を聞き、安綱一門が生産拠点にしたという倉吉市大原を訪ね、倉吉博物館で全国に販路を広げた倉吉千歯や米づくりに生涯を捧げた中井太一郎を学び、たたら製鉄が盛んだったという旧関金町奥滝を歩きました。

県中部の製鉄・鍛冶遺跡は海岸部から山間部まで広範です。山陰道整備に伴って発掘調査が進んだせいです。浜や川や山の砂鉄を利用して、鉄づくりが盛んだったことがうかがえます。山地や農地の開発・開墾、水路やあぜ道の整備に鉄が欠かせないからです。今回は訪問しませんでしたが、旧大栄町には反射炉跡や砲台跡もあります。戊辰戦争などで活躍した鳥取藩の大砲はここでつくられました。高度な鉄づくりの技術がありました。

さて、県中部の鉄づくりの歴史です。山脇さんによると、中心だったのは天神川水系の上流、三朝町や旧関金町です。旧関金町の泰久寺や安歩地区で8世紀末～9世紀の鉄滓などが出ています。鉄山師の代表は穴鴨村（三朝町）の鉄屋安田茂右衛門家と湯関村（旧関金町）の久瀬（世）屋平兵衛家です。安田家は名和一族と姻戚関係がありました。名和一族とつながっていたのは奥日野の豪族・日野氏もそうです。湯関村の甚右衛門は海運を利用して北陸に鉄を売っていたという記録もあり、伯耆の鉄流通に名和一族が大いにかかわっていたことがうかがえます。

天神川流域の鉄づくりは制約を受けて長く続きませんでした。原因はかんな流しで下流域が埋まり、しばしば氾濫を起こし、米づくりを阻害したためです。なにしろ天神川は源流から海まで32kmしかありません。いつも急流状態です。ちなみに千代川は52km、日野川は77kmです。

県中部の鉄産業は素材生産というより、加工業が発達しました。なべ、釜、くぎをつくる鋳物師が活躍しました。農工具も発達し、奥日野の鋼を使った千歯や太一車をつくり、全国市場を席巻するとともに、県中部の農業技術や生産力を高めました。かつての倉吉が山陰を代表する工業都市になった原動力です。

天神川流域のトマトの里・倉吉市大原には、安綱とその一門が刀づくりに励んだ伝承があります。眞守屋敷や鉄山屋敷、たたら窪などの地名も残っています。裏山には7世紀後半に建てられた大原廃寺跡（国史跡）があります。ガイドした県文化財局長の中原斉さんは「この大原に安綱一門がいたとすれば、この山寺で修行していたことでしょう」と紹介していました。

山脇幸人さん

大原廃寺跡の塔心礎をガイドする
中原斉さん

倉吉千歯（倉吉博物館の関本明子学芸員から説明を聞くみなさん）

たたら場のシンボル・桂の古木のそばで
参加者は記念撮影（旧関金町奥滝）

古井喜実と矢部貞治　　内田克彦さん

2019年12月17日

鳥取市民大学の歴史講座が市文化センターであり、地域史研究家の内田克彦さんが「鳥取県人が日本国憲法を作った！？」と題して、県出身の政治家・古井喜実さんと学者の矢部貞治さん（いずれも故人）2人の活躍を説きました。

古井喜実（1903～1995年）は旧国中村（八頭町）生まれ。鳥取中学―三高―東京帝大を経て、内務官僚になります。茨城県や愛知県の知事を歴任し、内務次官に上り詰めたものの、敗戦。1952年から衆議院議員（通算27年間）に転じます。厚生・法務大臣を務め、生ワクチン輸入や日中国交正常化などで活躍しました。東京都名誉都民、八頭町名誉町民。

矢部貞治（1902～1967年）は旧美穂村向国安（鳥取市向国安）生まれ。鳥取中学―一高―東京帝大を経て、政治学者になります。近衛文麿のブレーン、拓殖大学総長、中曽根康弘の相談役などを務め、「矢部貞治日記」（読売新聞社刊）は日本の政治史研究に欠かせない資料として知られます。旧姓横山。

2人は中学時代の同級生です。恩師の林重浩校長から「矢部は政治家になれ、古井は学者になれ」と諭されていたそうですが、それぞれ真反対の道を歩きました。

2人はそれぞれの立場で、日本の敗戦―ポツダム宣言受諾を履行するため、大日本帝国憲法改正案づくりを始めます。古井は幣原内閣の憲法問題調査委員会の嘱託となり、松本蒸治大臣の憲法草案づくりを支えました。ただ、松本試案は保守的すぎるとしてGHQから拒否されてしまいます。古井は改正の目標に「政治の徹底的民主主義化を図ること」を掲げましたが、未完稿で終わりました。

矢部は敗戦の翌年、①平和国家の建設②人権の保障③民主国家の建設―などの建国綱領案を発表し、このなかで「民主集中の象徴者、民族文化の保持者として天皇制の維持」を打ち出して注目されました。結局、憲法改正案はGHQのリードで象徴天皇、国民主権、戦争放棄を盛り込んで作成されました。

新憲法は1946年11月3日に公布され、その半年後の5月3日から施行されました。いらい70年余り、新憲法は国民投票されることなく運用されてきました。新憲法制定10年を機に憲法調査会が発足し、長時間をかけて憲法の見直しがありました。その調査会で矢部は副会長、古井は運営委員として切り盛りしました。

回顧録によると、古井は「現行憲法の内容には優れたところがある。自由主義と民主主義の飛躍的・画期的な前進は、押しつけ憲法なればこそ実現を見た」、矢部も「私自身は改正不要論だ。防衛予算も年々可決されている。このことは立法権も行政権も自衛隊を合憲と認めて運用していることを意味する」と、それぞれ評価しています。内田さんは「古井と矢部、鳥取県人の2人が2度にわたって国の形づくりに尽くしたことを誇りにしたいものです」と話していました。

内田克彦さん

古井喜実

矢部貞治

「古井喜実と中国～日中国交正常化への道」（鹿雪瑩著）

矢部貞治日記

鳥取のビッグバンド　　クインビー・ジャズ・オーケストラ

2019年12月21日

鳥取のビッグバンド、クインビー・ジャズ・オーケストラの定期演奏会が鳥取市の県民ふれあい会館であり、およそ300人が多彩な管弦楽ハーモニーを楽しみました。

クインビー・ジャズ・オーケストラ（奥谷進代表）は1976年の結成。年1回の定期演奏会は43回目になります。吹奏楽を経験した社会人や大学生などが集まっています。現在、メンバーは21人、うち7人が女性です。60歳代は奥谷代表と県警音楽隊OBの霜田哲さんの2人。シニアもがんばっています。

定期演奏会のコンサートマスターは金山晃久さん。オープニングはアップテンポの「ウインドマシーン」。サックスのいしがいたかおさん、ピアノの井上響平さん、ドラムスの太田原基さんらが軽快に飛ばしました。

演奏曲目はラテン音楽の「アチャ」やジェームス・テイラーの名曲「ジェームス」など12曲。アンコールはクリスマスにちなんでナット・キング・コールのヒット曲「ザ・クリスマス・ソング」と「赤鼻のトナカイ」。ぬいぐるみも登場し、ひときわ大きな拍手で盛り上がりました。

奥谷代表は「43年も続いているバンドなのに、知名度不足の状態。鳥取にこんなバンドがあったのかとよく言われます。メンバーの都合がつけば、学校や公民館などにも出かけて演奏したい」と話していました。したがってメンバーはいつも募集中。練習会場は鳥取市浜坂のスタジオ・マイペース。希望者はのぞいてほしいそうです。連絡先は☎090－2297－1702（奥谷代表）。

クインビー・ジャズ・オーケストラ

クインビーの管弦楽グループ

澤田家の人びと　　高橋亮さん

2019年12月27日

米子文学同人の高橋亮（本名・石原亮）さんが岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三とその妻たちの評伝「澤田家の人びと」を出版しました。澤田兄弟の物語は鳥取県の歴史大河ドラマ候補に選ばれていますが、高橋さんは「澤田家の人びとをなぞれば、日本の近代史もよくわかる」と出版に踏み切りました。郷土学習や歴史教育への活用が期待されます。

高橋さんは澤田兄弟のドラマ化を目指す「三愛のクニへ」研究会（片山長生さん主宰）のメンバーです。国際連盟脱退に反対した節蔵、国際連合の初代大使になった廉三、その妻で戦争孤児救済に生涯を捧げた美喜。それぞれの評伝をもとに、関連資料を調べて「澤田家の人びと」にまとめました。B6判333ページ。

「86歳でも、やればできるもんです」と高橋さん。日本の近代史を調べ、書き進むうちに、「近代史を通して語ったものが少なく、しかも日本の政治が右翼テロでゆがんでいったことに気づいた」そうで、出版を決意したといいます。

さて、澤田兄弟が外交官になったのは明治末から大正初めです。日本があらゆる分野で西欧に追いつき、追い越せと励んでいたころです。日清・日露戦争に勝ち、第一次世界大戦も戦勝国側に加わったこともあって、だれもが列強国並みになったと錯覚します。しかし、国土が狭く、資源のない国です。これを克服するため、欧米にならって植民地獲得競争に参入します。おのずと欧米の既得権や野心とぶつかり、圧迫を受け、日本は国際連盟の常任理事国でありながら、脱退していきます。これに反対したのが節蔵です。高橋さんによると、日本の外交官でただ一人、おそらく当時の日本人でも、反対したのはただ一人だったのではないかといいます。

こうして日本は第二次世界大戦に追いやられ、原子爆弾の惨禍をこうむることになります。高橋さんは幕末から続いてきたテロ行為が政治をゆがめ、その恐怖が政権の中枢にある人たちの判断をゆがめ、「決意なき開戦」につながっていったと考えています。異論や対抗勢力を暴力で抹殺してしまうテロ。大衆迎合や無関心も、結果として暴走をもたらしました。

終戦までの日本は近代化を装いながら、女性には選挙権を認めず、土地所有は地主制度で、財閥系企業が産業資源を独占していました。政権は薩摩や長州の出身者が中枢を占め、軍部も政党もそれぞれ派閥をつくって複雑に結びつき、政権運営はめまぐるしく交代しました。

こんな政治・社会情勢に「澤田家の人びと」もほんろうされます。「その姿をなぞれば、日本や世界の近代史も見えてきます」と高橋さん。高校生の歴史副読本におススメです。

高橋亮さん

澤田家の人びと

大河ドラマ化が待たれる
「三愛のクニへ」のポスター